
君は天使

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は天使

【Nコード】

N1838I

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

主人公小野寺くるみ。恋も仕事も友達もすべてをいきなり失って、海で死のうとしているところを、ある青年に助けられた……。その青年が天使に見えた……。「今 このときを 愛してる」の圭介と瑞希の、愛息子爽太のお話です。二人の愛にはぐくまれて育った爽太は、どんな恋愛をするのでしょうか……。？
爽太とであった、くるみの人生はどう変わるのでしょうか？楽しみに。

プロローグ（前書き）

「今 このときを 愛してる」「愛する君へ」のシリーズものです。
この物語は、圭介と瑞希の息子の、爽太のお話です。二つの小説と
あわせてお楽しみください。

プロローグ

いきなり、天使に会った…って思った。

その笑顔に魅せられた。

だけど、

私の人生は、もう終わりってほど最悪だった。

すべてを憎み、すべてをうらみ…、

でも、私が1番嫌いだったのは自分。

私ね、

だれかにいつも、認めてもらいたくて、だれかに愛されたくて

いつも、心が空っぽで…。

人に優しくしてたのは、優しくされたかったから。

頑張っていたのは、認めてもらいたかったから。

愛されたくて、孤独が嫌で、ずっと、演技をしてた。

ずっと、仮面をかぶってた。

それに疲れて、仮面をはずして、自分自身もなくなってくつて

消したくつて、すべてを捨てたくて、

そんな時に、出逢ったんだ。

本当に、天使だって思ってたんだよ…。

1 天使との出会い

海…。波に、吸い込まれるように私は足を進めた。

もう、何もかもどうでもいいし、この世界すべてが嫌いだし、何よりも、自分のことがすべて嫌になった。

私なんか、生きていてもしょうがない。

私なんか、生まれてこなくても良かったんだ。

私が死んでも、誰か悲しむ人なんているんだろうか？

私はいつたい、誰かに愛されているんだろうか？

愛してくれていると思っていた人にも、昨日、別れを告げられた

…。

「ごめん、俺、梨香と付き合ってる」

「え？」

「…くるみは、俺がいなくても一人でやっていけるだろう？梨香には俺が必要なんだよ」

「いつから？」

「もう、3ヶ月になる」

「…梨香、何も言ってなかった」

「俺が言うからって言ったから。梨香は悪くないから」

「何それ…」

「責めるなら俺にしろよ。でも…」

「…何？」

「お前、俺のことそんなに好きじゃなかったんじゃないの？」

「え？」

「お前といても、お前のことよくわかんなかったし、俺のことをよく知らなかったろ？」

「…え？」

「2年も付き合ってたのに、全然わかんなかったよ」

「……」

「じゃ…」

いきなりの別れ。別れって言っても、稔も、梨香も同じ会社。明日もまた顔をあわせなくちゃならない。

ああ、そうだった。明日から私は、移動だった。

私が企画したプロジェクトが失敗した。みんなが口々に「だから、女は」って言った。そして、赤字をこうむったバツとして、私は営業から外され、庶務課に移動。

部署も変わるし、階も変わるし、会社で会うこともないかもしれない。

庶務課の課長、課長と言えば聞こえはいいけど、昔で言う窓際族。何もすることもない。

ああ、そうだった。課長といえば、聞こえはいい。私は「課長補佐」いてもいなくてもいいそんな役職…。

会社に入って、6年、今年で7年目。すごい頑張った。「どうせ女なんて」って言われたくなくて、成績もあげて、新しいプロジェクトのリーダーに抜擢されて、半年、すべてがうまくいっていた。だけど、取引先がいきなりの倒産…。信じられないことが起きた。稔は同期だ。私の補佐をしていていた。いつも、相談に乗ってくれて、励ましてくれた。

だけど、いつも私は、女だからって甘えるわけにはいかないとか、私のほうがリーダーだから、頑張らないとって肩肘張って、稔にも甘えず、頑張ってたんだ。

いきなりの移動が決まり、私は混乱した。頭は真っ白だった。

稔と会って、慰めて欲しかった。

プロジェクトを組む前に私は、プロポーズをされていて、新しいプロジェクトを成功するまで待つてって私は稔に言っていたから、稔と結婚して退職してしまおうかってそんなことも思ってた。

稔が食事に誘ってくれ、話があるって言われたとき、もしかしたら、結婚のことかって思ったりもした。ううん、すぐく期待もした。もう、会社にもいたくない、結婚に逃げようと思った。「だから女は」って言われてもいい。もう、こんな現実には嫌だって…。

そんな矢先に、別れ話をしてきた。稔にとっては私が、失敗して移動になることなんてどうでもいいことなんだ。それどころか、私は強いから大丈夫だろうって思ってたんだ。

私って、何…？鉄の女なの…？

愕然として、家に帰った。会社も辞めて、田舎に帰ろうと思って、母に電話をした。

「帰る場所なんてないわよ。お母さんね、再婚するの」

「え？」

「お父さんだって、再婚して幸せにやってる。お母さんだってね、幸せになりたいの。やっと、あんたも家から出て、ひとり立ちして、ようやくお母さん自由になれたんだから。あんたがいたら、再婚できないから、帰ってくるなんて言わないで、そっちで頑張って。あんたなら、頑張れるでしょ？」

「……」

電話を切って、私はその場にしゃがみこみ、何も考えられなかった。

私の居場所は、どこ…？

何もかもいつべんに失った。仕事、彼氏、親友、親…。

両親は私が中学生のころから、不仲だった。喧嘩ばかりをして、

高校のころはもう、家で口を聞くこともなかった。

父親には、不倫の相手がいて、時々、相手の家に泊まって帰らないこともあった。それでも、離婚せず、母が我慢していたのは、私がいだからだと、責められた。あんたさえいなかったら、私はいつでも自由になれたと…。

私が大学に行くと同時に、別居。私が、家を出て、東京で暮らすようになり、両親は離婚した。

私は私の収入だけで、やってきたし、母は、一人で働き、一人で生きていた。父は、不倫していた相手と再婚した。

離婚したあと私は、母に責められた。もっと早くに離婚していたら、もっと早くに人生をやりなおせたと…。

あんたが、いなかったらと何回言われてきただろう。

私は、会社を休んだ。それも、無断で…。そして、いきなり海を見なくなった。4月とはいえ、まだ肌寒く、風も強かった。

朝、8時過ぎ、2、3人のサーファーがいた。でも、帰るところだったらしい。ああ、平日だし、これからもししたら、仕事なのかな。

ぼくくつと江ノ島の海を見ていた。江ノ島だったのは、ただ単に、電車をずっと乗っていたら着いたからだ。

空にはとんびが飛んでいて、波は風が強くて荒かった。潮風に吹かれてみると、なんだか、波がこっちにおいでと言っているようで、私は波に向かって歩き出した。

波打ち際まで来て、靴が重たく感じて、靴を脱いだ。

今、もし、海にはいつて行ったとしても、誰かが悲しむことなんてないんじゃないかな。いや、稔と梨香は罪悪感に苦しむだろう。

会社の間も、苦しむかもしれないし、母も父も、自分を責めながら生きるのだろう。

みんなが、これから先、ずっと幸せになることもなく、ずっと、罪悪感で苦しめばいい。私一人が孤独で、悲しみ、苦しみ、死んでいくのではなく、私の死で、みんなが苦しめばいい…。そんなことを思っていた。

空が、どんどん暗くなった。雨が降り出してきた。海の水は冷たかった。スカートの裾が濡れて重たくなった。

波はさらに、大きくうねり、海の色がどんどん、灰色になる。ああ、なんだか、死神が、すぐそこまで来ているようだ…。

その時、いきなりスカートの裾が引つ張られた。進もうとしても動けなくなり、足元を見ると、真っ黒な犬が私のスカートの裾を、くわえていた。

真っ黒なその犬は、死の使いかと思ったが、後ろから、

「クロ！そのまんま、はなしちゃ駄目だぞ！」

と言う声とともに、走ってきた男の子を見て、私は真っ黒な犬が天使の使いかと思えた。走ってきたその子は、天使に見えた。

いきなり、空が明るくなり、雲と雲の間から太陽の光が差した。雨が弱くなり、波までが静まっていく。海の色も、空の色もだんだんと明るくなった。

「何やってんの？！死のうとしてた？」

その子に両腕を掴まれた。あつたかった。

「生きようと思っても、生きられない人もいるんだよ。自分から死を選択するなんて、何考えてんだよ！」

そう言つと、その子は私の手を掴んで、浜辺へとどんどん歩き出した。真っ黒な犬は、私たちの周りをぐるぐると回りながら、ワンワンと吼えていた。

石段のところに来て、その子が私を座らせた。冷たい雨と、冷たい海の水で私の体は冷え切り、ガタガタと震えた。

「寒い？このままじゃ冷え切っちゃうね。うちの店すぐそこだから、店であつたまつてよ」

「店……？」

「うちの母親がやつてるんだ」

その子に抱きかかえられ、私は歩き出した。その子のぬくもりがやけにあつたかかった。

色が白くて、綺麗な顔立ち。本当に天使かと思った。でも、人間の子なんだ。ちゃんと家もあるんだな……。

ぬくもりを感じながら、私は本当に死にたかったのか、それすらわからなくなっていた。

5、6分歩いただろうか。ちょっと路地に入ったところに、お店があつた。木のぬくもりを感じさせる、落ち着いた洋館のような一軒屋で、一階がカフェになっていた。

カフェの前には、ウッドデッキがあり、木がウッドデッキをぐるっと囲んでいた。店のドアの横には、「れいんどろっぷす」と平仮名で書かれている小さな看板が置いてあつた。

「れいんどろっぷす……？」

「雨の雫。俺の父さん、好きだったんだって。雨が降ったあとののはっぱについた雫。ああ、こんな感じ」

雨は上がっていて、お店のドアの横にある木の葉についている、雨の雫をその子は指で指した。

ドアを開けると、コーヒーのいい香りがしてきた。それから、カウンターのなかから優しい声。

「お帰り、爽太、クロ。雨に打たれなかった？大丈夫だった？」

そう言つて、カウンターから、その声の持ち主である優しい笑顔の女性が現れた。

「あら？どなた？」

私がいるのを知り、その人が聞いてきた。

「あ、名前聞いてないや。雨に打たれて寒そうだったから、店であったまっていかなかったって声かけたんだけど」

「ナンパ？」

「違うよ！」

女性からナンパかって聞かれて、その子は顔を赤くして、否定した。

「あら、大変。スカートもびつしよりね。春香のスカート持つてくるから、着替えたほうがいいわ。バスタオルもいるわね。ちょっと待ってて」

そう言つと、その人は、カウンターの奥にいき、そこから2階にあがったようだ。

「あれ、俺の母さん」

「そう…」

「あ、名前言つてなかったっけ。俺、えのもとそうた榎本爽太。今、21歳」

「え？21？」

「うん。見えない？」

「高校生かと思った」

「あ、やっぱり？幼く見えるみたいなんだよね…」

「……」

「あ、それで、春香っていうのが妹で、今19歳。料理の学校行つててさ、パティシエ目指してるんだ」

「……」

「で、えつと…。母さんがみずき瑞希つていって、今年で、あれ？54歳かな？あ、3月で55歳になったんだ。」

「え？もつと若いかと…」

「なんだよね…。40代に見えるでしょ？」

「……」

「それで、このわんこが、クロ。今、3歳かな？人間でいつたらいくつかな？」

「……」

「あ。真つ黒だから、クロ。こいつはラブラドルだけど、クロの1代目はボーダーコーリーでさ、こいつは3代目。なんか、うちに来る犬ってみんな黒いみたい」

「なんで、この子は、どうでもいいことをしゃべっているのだろう。」

「ああ、「この子」って呼ぶのはおかしいか……。もう、21歳なんだっけ。でも、私よりも、7歳も下なんだ。」

「スカート持ってきたわ。奥で着替える？あ、バスタオルも」

「すみません……」

お母さん、確か瑞希さんっていったかな。2階から下りてきて、スカートとバスタオルを渡してくれた。カウンターの奥に行くと、部屋があり、そこで、着替えをさせてもらった。

「お名前は？」

ドアの外から、瑞希さんが聞いてきた。

「小野寺くるみです」

「くるみさんね。何か飲む？ハーブティでも淹れましょうか？」

「……はい」

着替えをしてカフェに行くと、瑞希さんがハーブティをテーブルに置いていた。爽太君は、クロの体をタオルで念入りに拭いてあげていた。

「くるみさん、ここ座ってね。あ、スコーンでも持ってくるわね」

「すみません……」

ハーブティの置いてあるテーブルに、私はついた。

「くるみさんっていうの？可愛い名前だね」

爽太君がすごく人懐こい顔で、そう言ってきた。

「両親もしかして、ミスチルのファン？くるみって歌あったよね」
「……」

人懐こさが、鼻につく。昔からこういうタイプは嫌いだ。やけになれなれしくて、人の心にずかずか入り込むようなそんなタイプ。

「俺の両親もミスチル好きでさ。ね、母さん。特にHANABIは、思い出の歌なんだって」

「そう…。両親がミスチルが好きで、くるみってつけたの。だから、私はミスチルが大嫌い」

そう言つと、爽太君は黙った。ああ、うるさかった。ようやく黙つたって思った。

「いい思い出ないの？」

まだ、聞いてくる。ああ、かんに触る子だ。

「そうよ。私は両親から見捨てられたの。生まれてこないほうが良かったの」

「え？」

「あの二人とも大嫌い。だから、ミスチル也大嫌い。この名前也大嫌い」

私のことも大嫌いと言おうとしたけど、私のことを悲しげに見ているこの、「爽太」が憎らしく思えて、思い切り傷つけたくなった。「あんたのことも、嫌い。勝手に私を助けたり、こんなところに連れてきて、すごいおせっかい。私なんてアカの他人のことほっておいて欲しかったし、それに…。あんたの顔むかつく」

言ってみて、血の気が引いた。こんなことを人に言ったのは生まれて初めてだ。

人を傷つけないように何て言えばいいか、それだけを考えてものを言ってきた。いい人ぶって、大人ぶって生きてきたから。

爽太君の顔は、変わらず、悲しげに見えた。傷つけたはずの私のほうが、思いきり傷ついた。哀れむような目で見るのは、やめて欲

しい。

「はい、スコーン。それから、イチゴのジャム。お手製なの」

瑞希さんが、スコーンを持ってきてくれた。きつと、今の会話を聞いていたはずだが、何も二人とも言わなかった。

少し、ハーブティを飲んだ。すうつと、体にしみていくミントの香り。イチゴのジャムの匂いなのか、甘い香りがして、あつたかく、甘く、優しいその空間に私はいきなり、つぶされそうになった。

気を張ろうとして、姿勢を直した。でも、足元にクロという真っ黒な犬が擦り寄ってきて、そのあつたかさでまた、私の心がぐらつてした。

思わず、気が緩んだ。ボロ……。大粒の涙がテーブルに落ちた。

「あ！」

いけないって慌てて、泣くのを我慢したが、無理だった。ボロボロ……。涙がとめどなく流れた。

「嫌だ！」

抵抗した。

「泣きたくない……」

でも、涙は止まらなかった。

瑞希さんも、爽太君も黙っていた。瑞希さんは、カウンターの中に戻り、仕事を始めてた。爽太君は、黙ったまま、私の前の席に座って、クロをなでていた。

しばらくしてから、爽太君が静かに言った。

「俺のこと、嫌いって……」

「……」

「ちよつと、傷ついたかも……」

爽太君を見ると、下を向いていた。傷つけたのか……。いきなり、罪悪感が襲った。単なる八つ当たりだ。あまりにも天使のように優

しい瞳をしていた彼を、傷つけてやりたいつて思ったただけだ。

なんて酷い人間なんだろうか…。

そうだ…。こんな私は大嫌いだ。死んじゃえば良かったんだ。生まれてこなかったら良かったんだ。

涙はなかなか、止まらなかった。その後も私は、泣き続けてた。人前で泣いたことなんていつ以来だろう。稔の前でも泣いたことがないのに。

うつん、親の前でだってなかった。強がって、平気だって顔をしないで、私は泣かなかった。

泣きながら、スコーンを食べた。おなかをやたらと空いてきて、無性に食べたくなった。甘みの抑えたイチゴのジャムも、スコーンも、ハーブティもどれも美味しかった。

しばらくすると、涙が止まった。

「良かった…」

目の前にいた、爽太君が微笑んだ。天使の微笑だ。

あんなにひどいことを言って傷つけたのに、私が泣き止むのを見て喜ぶんだ…。なんだか、信じられない。なんなんだろう、この人の優しさや、あったかさや、純粹さや…。本当の天使なんだろうか？

「この店、まだ開店しないし、ゆっくりしてってね。私はちょっと、外を掃いたり掃除するけど」

「はい…」

「俺も手伝う」

「じゃ、テーブル拭いたり、テーブルセッティングしてて」

「うん」

爽太君はそう言つと、音楽をかけて、エプロンをして仕事を始めた。

音楽は、ジャズ。ピアノだけのジャズだった。爽太君は、楽しそうに嬉しそうに、そして、大事にテーブルを拭いたり、クロスをかけたりにしていた。

私の心がどんどん、癒されていくのがわかった。

テーブルに小さな花瓶を置き、可愛い花や葉っぱを瑞希さんがつけていった。

窓やドアも念入りに、爽太君は拭いていった。いつも、手伝っているんだろ。手順も手際もいいし、何よりも、この店をとてもしっかりしているように見えた。

カウンターの端に写真が置いてあった。ツーショットの写真、よく見ると、結婚式のようだ。真っ白のウェディングドレス姿の、若いころの瑞希さんと、その横には、爽太君そっくりの男の人、まだ若そうだ。白のタキシードに、なぜかタキシードには不釣り合いの帽子をかぶっていた。

私とその写真に見入っているのを爽太君が気づいて、

「それ、俺の両親の結婚式の写真だよ」

と、微笑んで言うと、写真たてをテーブルまで持ってきてくれた。

「帽子？」

「ああ、父さんの？ こんとき、髪の毛抜けてたみたいで」

「え？」

「癌の治療でさ。抗がん剤とか、放射線治療って髪の毛抜けちゃうみたいだね。これは母さんの手製の帽子だって言ってたよ。網目がばらばらで、汚いでしょってさ……。母さんこういうの、ぶきっちょで苦手らしいんだけど、当時父さんから頼まれて、作る羽目になったとか……」

瑞希さんは、外に出て、外側の窓ガラスを丁寧に拭いていた。

お父さん、癌で亡くなってるの？ とは、聞きずらかった。

爽太君は、両親から思い切り愛され、大事にされて育った、なんの苦労も知らない子だって、勝手に思い込んだ自分を恥ずかしく思った。

「このころには、まだ、俺いなかったけど、この2カ月後に俺、めでたく母さんのおなかに入ることに成功してさ」
と、爽太君は無邪気に笑った。

いきなり、海でのことを思い出した。そうだ。爽太君は叫んでた。
「生きたくても生きれない人もいるんだ」
って…。お父さんのことだったのかな。

ますます私は、あんたなんか嫌いつて言ったことを後悔した。
のほほんとした無邪気な顔の、爽太君に腹が立ってたのに、だんだんと、その優しい瞳や、あつたかい表情に癒されて、隣にいるのに、心地よさすら感じていた。

ピアノのジャズを聴きながら、私はこれからのことをふと、考えた。

「あの…」
外の窓拭きを終えて、カフェの中に入ってきた瑞希さんに、聞いてみた。

「この辺に、空いてる部屋ってありませんか？」

「部屋？」

「私、会社を辞めるんです。それで、引越しもしたくて」

「あら、だったら、うちにどうぞ。アパートが見つかるまでもいいし…。一部屋空いてるわよ」
「え？」

「前に、ここで働いてた人の部屋があるのよ。結婚したからもう、出ていったけど」

「じゃあ、そこに、住まわせてもらってもいいですか？」

「ええ。大歓迎。あ、会社も辞めるってことは、仕事は？なんなら、うちで働かない？」

「え？でも…」

「パートさんが、もうすぐ出産で辞めちゃうのよ。今日も検診でね、だから、朝から爽太に手伝ってもらってるの」

「じゃ、爽太君はここで、働いてるわけじゃないんですか？」

「俺はコンピューターの仕事してる。ウェブデザインの仕事でさ」

「…じゃあ、ここで働かせてください」

「はい、よろしくね。くるみさん」

いきなり来て、息子さんにあんなとんでもないことを言っただけで傷つけておいて、そんなこの何者かもわからない私を、置いてくれるなんて…。

だけど、なんの当てもなくて、行く場もなくて、私の居場所もなくなつて、仕事もしたくないし、何もかも失った私には、ここは、ちょうどいい場所かもしれないって思った。

「2〜3日中に来てもいいですか？荷物は今日中にまとめて、明日にでも送ります」

「ええ、こっちは大歓迎だけど…」

「仕事は、明日辞表を持って行きます。もう、早いうちに今までの私と、さよならしたいんです」

「いいわよ」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

私は、そのまま、スカートを借りて、自分のスカートを帰ることにした。

駅までは、爽太君が送ってくれた。

「くるみさん」

「え？」

「さつき、俺傷ついたって言ったけど、あれ、「冗談だから」

「え？」

「もう、「冗談言ってるのに、まじで受け取っちゃうから、笑えなくなつたよ。俺も母さんも」

「でも、私ひどいこと…」

「ああ、俺、能天気だし、むかつくってよく言われなれてるし、気にしないで」

「え？」

「母さんなんてさ、その能天気さ、お父さんにそっくりで、まじむかつくってよく言ってる」

「お父さんに、似てるものね。爽太君」

「そうなんだよね〜。あの写真、父さんが22歳のころの写真で、俺ももうすぐ22歳なんだよね。なんか、そっくりだってさ、そのころの父さんに。うり二つだって、ばあちゃんも言うよ」

「ばあちゃん？」

「あ、父さんのお母さん。よく店に来るんだ。お料理の先生をして、うちのカフェでも、月1で、教えてるんだよ。まだまだ、綺麗で、若くってさ」

「そうなの…」

「父さんと違うところは、父さんのほうが、パワフルっていうか…」

「俺のほうが、弱いっていうか、あ、ひ弱とか体のことじゃなくて、ま、いつか」

そう言つと、爽太君は、ぼりって頭を掻いた。

「親ばかりから、母さんはそんな能天気でも、弱くても、爽太はめちゃ可愛いとかって言うんだよね。それに、かっこいいだの、イケメンだの…。むかつくってのも、似てるから可愛すぎてむかつくん

だつてさ。なんつつか、信じられない親でしょ。ほんと…」

「…愛されてるんだね。そりゃそうか、忘れ形見みたいなもんだもんね、それも、そんなにお父さんに似てたら…」

そう言いかけたとき、駅に着いた。

「え？忘れ形見って、父さん生きてるけど…」

「お！爽太！なんでここにいの？」

いきなり、爽太君に声をかけてくる男の人がいた。

…あれ？今、なんて？生きてるって？

「お前店は…？てか、誰？もしかして彼女か…？」

「違うって！これから、うちの店で働くことになったくるみさん。

あ、くるみさん、これが父さん」

「ええ？」

確かに、爽太君そっくりで、あの写真の人を少し、老けさせた感じの人だけど…。癌って言ってなかった？

「くるみさん？はじめまして。よろしく」

その人は、にこってこれまた、人懐こい顔で微笑んだ。

「爽太、瑞希にさ、なんかあとで、差し入れ持たせて。また、俺、缶詰状態になるから」

「わかった。あ、俺が持つてこようか？」

「嫌だ。瑞希の顔が見たいの。俺は」

「わかったよ。で？今まで何？散歩？」

「そう、潮風感じて波見てた。ほとんど寝てないし、気分転換。あ！じゃ、くるみさんが働いてくれるってことは、お前仕事戻ってくる？」

「うん」

「ありがて〜〜〜。もう、1日でも早く戻ってくれよ。くるみさん、よろしくな。ああ、良かった」

「……」

「あ、俺、父さんの会社で働いてるの。人手不足で、大変なんだよ」
「そうなの…。じゃあ早めにお店に出れるようにします」

「ありがとう～～！！」

そう言つと、爽太君のお父さんは握手をしてきて、私の手をぶんぶんと振った。

爽太君をさらに、明るくさせ、パワフルにした感じ…。ああ、爽太君がお父さんのほうがパワフルって言うてたのがわかる。

「じゃ、くるみさん、またね！」

お店の住所や、電話番号はメモをもらってきた。私の携帯の番号やメルアドも書いてきた。

いきなりの人生の展開だった。

暗雲がどんどん晴れて、今は、晴天だった。空は真っ青で、真っ白な雲がぼかりと浮かんでいた。日の光に照らされた爽太君の笑顔が、まぶしかった。

ニコ…微笑んでみた。すると、爽太君は、思い切りの笑顔を返してくれた。

片瀬江ノ島駅で、小田急線に乗る。ここに来るまでは、人生最悪で、もう生きている価値もなく、すべてをうらみ、すべてを憎んでいた。

窓から、駅のほうを見た。そこにはもう、爽太君の姿はなかったけど、爽太君のまぶしくて、優しく可愛くて、明るい笑顔がまだ、輝いているような気がした。

やっぱり、天使だ。きつと、天使だ…。

優しいあたたかい気持ちに包まれて、私は電車にゆられ家に帰っていった。

2 れいんどろっぷす

その日のうちに私は、庶務課に電話して、課長に明日辞表を出しに行くと言った。突然のことで、課長は驚いてはいたが、なんとなく退社したい理由は察していたようだった。

実はその課長も、営業で失敗をして移動になり、もう10年以上もそこにいる。男の人というのは大変だ。

そんなことがあっても、家族のために働き続けなければならないのだから。でも、リストラされるよりは、まだましかもしれない…。

そう思うと私は、居場所がないと嘆いていたけど、自由といえ自由の身だ。自分の心配だけしていたらいいのだから。

母もやはり、そうはいかなかったんだな…。もし、離婚をしても私がいた。私を養わなくちゃならない。自由の身にはなれなかっただろうな。

私を捨てて、自由になるという選択もできただろう。でも、それはしなかった。母はいつも、私を責めてはいたけど、育ててくれたことには変わらない。感謝することなのかもしれないな…。

私は、その日のうちに、荷物を詰め始めた。

何枚ものスーツが、クローゼットにはあったが、すべてをゴミ袋に入れた。それから、たくさんのアクセサリや、ビジネス用の靴や、パンプスも袋に入れた。

たくさんの書類や、資料、本も全部束ねた。ゴミ袋の山になったが、すっきりした。

食器や、調理道具は少ないものだった。たいていが、外食で済ませていたし、家でもレトルトのものが多かったし…。

「私の今までの人生ってなんだったんだろう」

ごみ袋の中に埋もれて、切なくなつた。

最後に、アルバムを捨てるかどうかを迷つた。子供のころからの家族の写真は少なく、学生時代に友達と写した写真、同期で旅行に行つたときの写真、そして、稔との思い出の写真が、アルバムには貼つてあつた。

数少ない家族の写真だけを残し、思い切つて、ほかは捨てることにした。

ざつと見てみると、残つた私物は少なかった。

「いいかもしれない、これで。人生やり直すには、なんにもなくてもいいくらいだ」

粗大ごみは、すぐに手配をしたが、2週間後といわれた。まあ、いいや。早めにお店を手伝うことにして、この部屋を出て行くのは、2週間後にしよう。

それから、ぶらぶらと、6年過ごしたアパートの付近を散歩した。よく行くパン屋。スーパー。本屋。そして、稔としょっちゅう行つていた、居酒屋。

懐かしいような、でも、そんなに思い出深いものでもないような、不思議な感覚だ。

明日にでも、お別れしても、もう、痛くも痒くもないような、悲しくも寂しくもないようなそんな感覚は、多分、今日あれだけボロボロと泣いたからかもしれない。

家に会社を辞めることを言うかどうか迷つたが、なんだか、母親の声を聞くのが嫌で、連絡をするのをやめた。そのうちに、向こうから何か、連絡したくなつたらしてくるだろう。

家に帰り、パソコンでミスチルのHANABIを聞いてみた。

「へえ、素敵な歌」

爽太君のご両親の思い出の歌だつて言つてた。どんな出会いをし

て、どんな恋愛をして、どんな夫婦だったんだろう…。

爽太君みたいな天使が育った家庭って、どんななんだろうか？

そして、爽太君の天使の笑顔を思い出した。ああ、私あんなにひどいことを言ったのに、謝ってもいない。

翌日、辞表を持って、会社に行った。まず、庶務課に行き課長に辞表を渡した。そして、今までいた営業に行き、荷物をまとめた。

私の斜め前に、稔の席はある。私が荷物をかたづけていると、しばらく私のことを見て、何かを言いたそうにしているのがわかった。「お世話になりました」

と、私は部の人々に深々とお辞儀をして、荷物を持ち、その場を立ち去った。

廊下を出て、ロッカーへと向かっていると、後ろから稔が声をかけてきた。

「荷物、持とうか？」

「大丈夫、重くないし」

「こんなときでも、俺を頼らないんだな」

稔の言葉に私は、半分あきれた。あなたはもう、関係のない人間じゃないか。

「彼氏でもないのに、どうして、頼らなきゃならないの？」

「いや…、その…」

稔は、何も言えなくなっていた。

「昨日、庶務課に行ったら、無断欠勤だって言われて…」

「何しに来たの？」

「ちよっと、大丈夫が気になったものだから」

「じゃ、家が携帯に電話をくれたらよかったんじゃない？」

「ああ、でも、もう別れたし、それはちよっと…」

「稔って優柔不断ね。前から思ってた。別れたんなら、突き放せば

いい。途中半端な優しさはやめて」

「そうは言っても」

「梨香が気にするとは思わないの？私にかまってたら…」

「いや、だって梨香は、君にとって…」

「もう、友達じゃない。彼氏を取られてまで、友達でいられるほど私は、馬鹿じゃないし」

「でも…、梨香も、君の事、気にしてた」

「…昨日、今頃自殺でもしてるんじゃないかって思ったとか？」

「まさか！そこまで君は弱いと思ってないよ。ただ…」

「自殺しようとして海に行ってたわよ」

「え？」

「体半分まで入ってた」

「……」

稔の顔が青ざめた。でもすぐに、

「冗談だろ？」

と言ってきた。

「ほんとよ」

まだ、稔は、半信半疑の顔をしていた。

「もし、死んでたらどうした？」

「え？」

「それでも、梨香と付き合ってた？」

「……」

「それとも、罪悪感でいっぱいになった？」

「やめるよ。もう…」

稔の顔が引きつった。

「お前が死ぬなんて、そんなの信じられるかよ。いつだって強くて、弱いところなんて見せないお前が」

「そうよ。見せなかったわよ。見せれなかったわよ。いつでも……」

「でも、安心して。もう死ぬなんてことしないし、会社も今日で辞めるし……」

「え？辞めるって？田舎に帰るのか？」

「母親再婚するんだって。だから、帰る場所もないし……」

「じゃ、これからどうするんだ」

「住み込みでバイトをする。もう、決まってるの」

「住み込み？どこで？」

「海の近く」

「え？」

「昨日、死のうとしたら、天使が助けてくれた。その天使の家に住むことになった」

「いい加減にしてくれよ。なんだよ、からかってんの？こっちは本気で心配して……」

「じゃ、私が会社辞めたら、結婚してくれるの？養ってくれるの？」

「それは……」

「冗談よ。でも、天使の話は本当よ」

「……子供？」

「青年。天使のように、優しくて純粹で……」

それ以上、言うのはやめた。なんだか、稔に話すのがもつたいなような気もした。

「じゃ、総務に行って、手続きするから。梨香には会わないでおく。稔からよろしく言うておいて」

「……くるみ！」

「じゃね」

稔に軽くそう言って、私は重い荷物を持ち、どんどん廊下を歩いた。

総務の扉の前まで来て、胸にぶら下がっている、IDカードをかざすとドアが開いた。このIDカードともお別れか。

もう、私はこんなIDカードを持たなくなつて、なんでもない、どこの会社や部署も関係ない、そんなたんなる「小野寺くるみ」になつて、生きていくんだな。

IDカードを渡して、荷物を持って、会社を出た。外は晴れていて、暑いくらいだった。

「明日から、お店に出よう」

何がなんだかわからないが、いきなりやってきた新しい世界に、私は身を任せることにして、そのまま、家に帰った。

お店に電話して、荷物を宅急便で送りますと告げた。それから、明日からお店に出てもいいかを聞くと、瑞希さんは大喜びしてくれた。

出産間近のパートさんは、検診に行き、働くのも控えるように言われたらしい。ずっと、爽太君に手伝ってもらふことになりそうだったから、助かったわと、瑞希さんが言った。

お店に出たからといって、爽太君に会えるわけではないんだなつて、少し残念な気がしたが、あ、瑞希さんの家に住むということは、爽太君と住むということかつて、少し、ときどきもした。

あれ？おかしいな。爽太君は7歳も下だ。そんなまだ、21歳の青年と言つてもいいくらいの年齢の子にときどきするだなんて。

だけど、やっぱり心の奥で、何かを期待している…。

その日、ときどきしながら、私は、眠りについた。

ガタン、ガタン…。片瀬江ノ島までは、1時間以上もかかった。電車にゆられている間、また、不思議な感覚におそわれた。

昨日、なんであんなに、稔に攻撃的だったのかな、私。今までは、

あんなに攻撃的になったことってないのに。

喧嘩もなかった。いい子ぶって、喧嘩になりそうになると、私は、すぐに稔を許した。

心の中が、どんなに憎悪で燃え上がってたとしても、たとえば嫉妬してても、心配してても、憎らしくても、いつも、平静を装った。私は、そんなことで、ぐらつくような弱い女じゃないの…って。

何でかな…。親を見ていたからか…。

母はすぐに泣いた。喚いた。ヒスをおこした。父はなぐさめるわけでもなく、母が泣き喚くと家を出て行った。そして、何日か帰ってこなかった。それを見て、何で、母が泣くのがわからなかった。泣かないでいい子にしてたら、父は優しくしてくれる。私にはいつも、優しくかった。だから、私は父の前で、泣かなかったし、父が喜ぶようないい子にしていたんだ。そうすれば、父はそばにいてくれると思っていたから。

だから、泣き叫んで喚く母を、どっかで馬鹿にもしてた。あんな弱い女にはならないって、思ってた。

なんだったのかな？稔との2年間…。結局、私は、仮面をかぶって、接してきたんだ。稔が、私のことがわからないと言ったのも、うなずけるかもしれない。

ぼく…と、そんなことを考えていたら、終点に着いた。

真っ赤な竜宮所のような、駅に降り立つと、驚いたことに、改札の向こうに、にこにこ笑顔で私を出迎えている爽太君がいた。

「おはよ！くるみさん」

「おはよう。…なんで、時間わかったの？」

「あ、母さんに聞いたら、この時間に着くって言うってたから、まだ、道とか覚えてないでしょ？」

「ありがとう」

私は、爽太君のまぶしい笑顔に照れて、まっすぐに見れなかった。
「荷物持つよ」

爽太君は、荷物を持ってくれた。

「父さんがもう、喜んじゃって…。今日から俺、父さんの方の仕事
復帰できるからさ」

「大変な仕事なの？」

「ああ、今はね。何個かいつぺんに依頼が来てさ…。もう、父さん
って全部引き受けちゃうんだよね。困った人だよ」

「そう…。でも、爽太君、お父さんのことが好きなんでしょ？」

「うん。自分の親が好きって当たり前じゃん。…って。ごめん」

「え？」

「いや、今の失言。そうじゃない家庭もあるんだよね。うちが変わ
ってるんだよね、どっちかって言つと」

「え？」

「あ…。俺の友達でもさ、離婚した親もいるし、別居中とか、喧嘩
がたえないとかあるみたいでさ。我が家は本当に、不思議っていう
か、周りによく言われるんだよ。珍しいって」

「そう…」

「うん。両親、異常に仲が良過ぎて気持ち悪いってさ」

「変なの…。気持ち悪いって。仲がいいなら、それでいいのに…」

「だよな？だよな？」

安心したように、爽太君は笑った。

「でも、俺の両親、すげえきついこと一緒に乗り越えたみたいでさ」

「え？」

「あ、また、今度話すよ」

爽太君はそう言つと、いきなり、顔の表情を硬くした。何かなっ

て思っていたら、コンビニの前を通るとき、コンビニの中をちらつて見て、手を振って、笑っていた。

中をのぞくと、爽太君を見て、ほほえんで笑っている、かわいらしい子がいた。目がまん丸で、小柄で、ポニーテールにしていた。

「うわ…」

「え？」

「緊張した…」

「？知り合い？」

「う…」

「え？」

「か、彼女です」

「ええ？」

爽太君は真っ赤になった。

私はきつと、真っ青になった。それから、自分に言い聞かせた。

ああ、嘘だから、嘘だから…。爽太君にドキドキするだの、一緒に住めるのが嬉しいだの、そういうの全部全部嘘だから。そう…、ありえないから…。

そう自分で自分に言い聞かせ、それから私は、冷静さを取り戻そうと必死になった。でも、その後の爽太君の話がわからなくなり、笑顔があきらかにひきつった。

だけど、爽太君も彼女のことで舞い上がっていたのか、私の表情の変化に気づかなかったようだった。

お店に着くと、爽太君は荷物を置いて、
「じゃ！」

と言って、かけていった。お父さんの会社に向かうんだろう。

クロは、喜んで私の足元に来た。

「おはよう。よく来てくれたわ」。あ、荷物朝1番で届いているわよ。」

「すみません」

瑞希さんは、荷物を持って、部屋に案内してくれた。

「ここよ。前に住んでいた人が、男性で、ちょっと殺風景な部屋な
んだけど…」

「いえ、十分です」

「荷物、出したりする？まだ、お店のほうは大丈夫だから。そうね。
あと1時間したら、お店に来てくれるかしら？」

「はい」

「じゃあね」

荷物を出して、次々にタンスの引き出しに入れた。それから、ベ
ッドに座って、ため息をついた。

…そうだな。彼女がいたっておかしくないよね。

さっきの、爽太君の真っ赤になった表情を思い出して、胸が痛ん
だ。

「だから、嘘。これも嘘。好きでもなんでもないから」

もういっぺん、そう言って、自分の心にふたをした。

お店に出て、掃除や、開店の準備をした。11時になり、開店を
すると、ちらりほらりとお客さんがやってきた。

夏場はかなりの人手らしいが、オフシーズンでも、口コミや、た
まに雑誌にも取り上げられるらしくて、お客さんがいない日はない
んだそうだ。

瑞希さんは、につこりと微笑みながら、

「れいんどろっぷすにようこそ」

と、優しく言っていた。

その優しさは、どこからくるのだろうか？その優しさに触れ、何度
も足を運ぶお客さんもいるんだろうな。

昼、60代くらいの女性が、お店に来た。

「いらつしゃいませ」

と言うと、

「あら？あなたがくるみさん？」

と聞いてきた。少し、爽太君にも似ている気がする。

「あ、お義母さん」

「え？」

「手伝いに来たわよ」

「すみません、ちよくちよく来ていただいちゃって」

そう言うつと、その女性は、カウンターの奥に行き、キッチンにエプロンをかけながら、入っていった。

「爽太君のおばあちゃんか…」

それから、2時ころまで、満員だったが、2時を過ぎるころ、少し空いてきた。

「ごめんね、くるみさん。おなか空いたでしょ。ご飯にして」

カウンターの席に、私の分のお昼を用意してくれた。そして、瑞希さんも隣に座り、二人でご飯を食べた。

「あの…。さつき、爽太君の彼女、見ました」

「え？」

「コンビニの…」

「ああ。彼女っていうか、うっくん。友達っていうか…」

「え？」

「なんかね、あの二人は付き合ってるんだか、どうなんだか、わからないのよね」

「…え？」

「爽太、彼女って言うてた？」

「はい」

「うっくん。ま、向こうはどうも、かなり熱をあげてるみたいなんだけどね」

「でも、真っ赤になって、彼女だって言っていました」

「あら、本当？そう。じゃ、観念したのかしらね」

「観念って？」

「女の子とね、付き合うつてよくわからないとか言つて。あ、今までも彼女いたことあるのよ。でも、すぐに別れちゃうし」

「そうなんですか…」

「中学のとき、大好きだった人がいてね…。高校に入って付き合えるようになって、喜んでたらその子が、引越していつて、それっきり。どうも、引きずってるわね。信じられる？もう何年になるつていうのかしらね」

「でも、なんか、真っ赤になって手を振って、彼女って言つてて…」

「固まってるなかった？表情」

「あ。そういえば…」

「でしょ。かなり無理してるわね。ああ、長くは持たないわね」

「……。何で、別れちゃうんですか？」

「ああ、ふられるのよ。向こうが好きになって、告白してきて、付き合つてふられる」

「ふられる？」

「うーん。デートとかあまりしないし、電話もしないし、メールもしないし」

「え？」

「仕事もね、忙しいしね。なんか、女の子って面倒って言ってたわね」

「え？」

「あれは、本気で好きになる子が現れないと、無理ね」

「そうなんですか…」

私の心の中は、ほっとしているような、そんな女性に自分はないだろうって、がっくりしているような、変な気持ちだった。

でも、爽太君が大好きになる人ってどんな子なんだろう。今日、見た彼女は本当にかわいらしい子だったけどな。

3時ころになり、またお店は混んできたがそれも5時を過ぎるとぐつと減った。

5時半ころ、春香さんが学校から戻り、お店を手伝いだし、おばあちゃんも帰っていった。その代わり、パートの人が来て、キッチンに入って行き、今のうちと言って、瑞希さんが奥のリビングに休みに行った。

「さ、くるみさんも休んで」

「はい」

休んでいると、そこへ、爽太君のお父さんが帰ってきた。

「瑞希~~~~~」

と言うなり、瑞希さんに後ろから抱きついた。

「まだまだなの？仕事」

「うん。でも、爽太に残りやらせて、一服しに帰ってきた」

「大丈夫？あ、お風呂入る？」

「うん。入る。ご飯も食べたい」

「お店で食べる？」

「こっちで食べる」

それから私の方を見て、

「今日からお店手伝ってくれてるんだって？ありがとうね」

と、無邪気に笑った。本当に、仲がいい夫婦なんだな。

「くるみさん、悪いけど、あとで爽太にご飯届けてくれるかしら。きっと、事務所に缶詰になってると思うわ」

「え？はい……」

「多分、圭介は、お風呂でのご飯食べて、2〜3時間寝ちゃうと思

うし」

「圭介…って？」

「あ、うちのだんなよ」

「あ。はい」

そうか、名前で呼び合ってるんだ。圭介さんって言うんだ。

「瑞希……。シャンプーなかった……。取って……」

「は……。い」

バスルームの中から、大声がした。

「髪も洗って……」

「え……。？しょうがないな……」

え……。？なんて仲がいいんだろう。ああ、周りが珍しがるって言うてたけど本当だな。うちじゃありえないことだ。だって、私が高校のころには、会話さえなかったんだから。

しばらくすると、バスルームから二人でリビングに来て、ソファに座ると、瑞希さんが圭介さんの髪をドライヤーで乾かし始めた。

「……」

なんか、仲が良すぎて目のやり場に困ってしまった。

そういえば、瑞希さんは55歳だって爽太君が言ってたつけ。結婚したころ、圭介さんは22歳。えっと。22+21は、43歳。圭介さんは43歳。瑞希さんは55歳。え？12歳年上……？

そうは見えない……。瑞希さんの方が年が上かなって思ってたけど、せいぜい、3〜4歳上かなって……。

「あの……」

「え？」

瑞希さんが、振り返ってこっちを見た。

「瑞希さんの方が、年上ですよね？」

「あ、一回り瑞希の方が上だよ。でも、見えないでしょ？若いもん、

瑞希」

と、圭介さんの方が、答えた。

「ああ、はい。見えませんけど……」

まだ、圭介さんは、瑞希さんに髪を乾かしてもらっていた。

「その……」

「え？何？」

また、瑞希さんがこっちを向いた。

「抵抗はなかったんですか？12歳離れて……」

「抵抗って？」

二人して同時に聞いてきた。

「だから、その……。なんかギャップを感じたりとか……」
「ない」

圭介さんが、そうきっぱりと言った。

「じゃ、周りの反対とか」

「それは、あつたかな」

「その……、すごく仲がいいですよね」

「そう？」

圭介さんが、あっさりとそう答えた。

「うちの両親仲が悪くて、離婚もして……」

「そうなんだ」

「羨ましいです。爽太君」

「……」

二人して、目を見合わせていた。それから、ドライヤーを止めて、瑞希さんが話し出した。

「私の友人に、離婚した人がいて、その後、子供が成人してから結婚したの。結婚したのはほんの、つい最近のことよ」

「え？」

「でも、幸せそうだったわよ」

「ああ、それから、ほら、稲森さん、あ、今は楠木さんか」

「そうそう、離婚したあとに、お付き合いした人と再婚して、一人子供もいて、幸せそうよね」

「うちの両親も今は、両方とも再婚してます」

「じゃあ、よかったじゃない？」

「でも、私には、帰る場所がなくなって…」

「ええ？ここがあるじゃん。帰る場所がないから、ここにいてるんですよ？」

圭介さんが、そうひょうひょうと言ってきた。

「これも何かの縁だよ」

「縁？」

「そ、きつと、うまくいくようになってるから、みんながね、幸せになれるようになってるんだよ」

「みんなが？私は？」

「君もだよ。もちろんさ。君の両親も、再婚して幸せ。きつと、結婚して失敗して何か学んだ分、今度は大丈夫だよ。君もね。きつと、今までいろんな経験してきた分、もっと幸せになれるっていうか、いや、今でももう十分幸せでしょ？」

「…十分幸せって？」

何もわかってない癖につて、頭にきた。

「だって、こんなに素敵なお店に出会って、こんなに素敵な家族に出会っちゃってるんだよ？幸せじゃないなんて言わせないよ〜。俺」

そう言つと、圭介さんは、へらって笑った。

「あははは…」

隣で、瑞希さんが大笑いをした。なんか、私まで、おかしくなった。頭にきてたのに、それもどっかに吹っ飛んで、

「そうですね。本当だ〜」
って、大笑いをした。

お店から、春香さんが、
「はい、お父さん」

って、圭介さんの食事を運んできた。

「サンキュ〜」。春香〜」

と言って、圭介さんは、春香さんをぎゅって抱きしめると、

「うざい！」

と逃げられていた。

「う、うざい〜？」

あきらかに、がつくりした表情をして、肩を落としてから、

「いいよ。俺には、瑞希がいるもん」

と、すねてしまった。信じられない。えっと、43歳だよね？なんて子供みたいなんだ。

「春香、爽太の分も作ってもらって」

「あ、もうできてるよ〜」

カフェのほうから、聞こえてきた。

「はい」

春香さんが、お弁当を持ってきた。

「じゃ、悪いけど、くるみさん、お願いね。これ、会社の地図。駅の近くのビルなんだけどね」

「はい、わかりました」

圭介さんを見ると、まだしよげていた。

「ほら〜。圭介、あったかいうちに食べたら？私そろそろ、お店に戻るわよ？」

「瑞希〜」

と、今度は瑞希さんに、抱きついていた。

「ああ、徹夜続いているの？テンション変だよ」

そう言つと、圭介さんの背中をぽんぽんと瑞希さんは、たたいて慰めていた。

「もうすぐ終わる。そうしたら、うちのベッドで寝れる。ああ、やつぱ、事務所とつばらつてうちで仕事しようかな」

「他の社員さん、困るでしょ？」

「そっか……」

「もう少しなんでしょ？頑張つて」

「うん。頑張る。そうしたら、瑞希と寝れる……」

「うん……。でも、そういうことはなるべく、家族以外の人がいるところでは、言わないでね、恥ずかしいから」

「あ。ごめん。くるみさんいたんだっけ」

「私、すみません。すぐに、行きますから」

そう言つて、私は慌てて玄関から出た。

ああ、聞いているこっちが恥ずかしかった。顔から火が出そうになった。あれは、確かに。周りが驚くわ。

あんなに夫婦仲いい環境で育ったら、どんなになっちゃうんだろつか。いや、あれだから、爽太君は、天真爛漫で、天使みたいなのか？

それから私は地図を頼りに、爽太君のもとへと、お弁当を届けに行つた。

3 爽太君の彼女

地図を見て、すぐに事務所に着く事ができた。ドアを開けると、爽太君以外に、二人の若い男の人がパソコンに向かっていた。

部屋は1室。5個のデスクが並んでいるだけだった。

端っこには、女性が一人座っていた。まだ、若い感じの女性だった。20代半ばくらいかな。

「あの…」

入り口で、声をかけると、

「あ！くるみさん！」

と、爽太君が気づいて、ドアのところまで来てくれた。

「これ、瑞希さんから頼まれて…」

「ああ、サンキュー！」

お弁当を渡すと、爽太君は嬉しそうに受け取った。

女の人が、ちらつてこつちを見たのに気づき、

「じゃ、私はこれで…」

と、事務所を出ようとすると、

「あ。コーヒー飲みたいし、一緒に下に行くよ」

と、爽太君は、お弁当をデスクにおいて、一緒に部屋を出た。

ビルの2階にある事務所から、爽太君と一階におりた。爽太君は、すぐ近くのファーストフードの店に向かって行った。

「じゃ、私はこれで…」

「え？一緒にコーヒー飲まない？」

「でも、お店…」

「春香、店に出てる？」

「あ、うん…」

「じゃ、大丈夫だよ。最後の片づけを手伝わされるかもしれないか

ら、それまでゆっくりしたらいいよ」

「でも…」

「夜はそんなに混まないよ。ランチとティータイムが混む店だから」
「じゃあ、少しだけ休んでいこうかな…」

お店に入ると、爽太君がコーヒーを二つ頼んだ。

「あ、くるみさんは、席座ってて」

座って待っている、コーヒーを持ってきてくれた。

「れいんどろっぷすのコーヒーのほうが、美味しいけどね」

と、小声で爽太君はウインクをしながらそう言った。

「爽太君は、お店のことが好きなんだね」

「れいんどろっぷすのこと？」

「うん」

「う〜〜ん、そうだな〜〜。高校生のときから手伝っているし、なんか愛着はあるかな」

「ふ〜〜ん」

「あ！」

「え？」

いきなり、入り口のほうを見て、爽太君は立ち上がった。そっちの方を見てみると、爽太君の彼女がお店にはいつてきていた。

「今、仕事終わったの？」

「うん。ちょっとおなか空いたから、食べようかなって思ってた。爽太君は？」

「まだ、仕事あるけど、ちょっと休憩中」

「忙しいの？」

「うん」

彼女は私のほうを見た。

「あ、紹介するよ。今日からうちの店で働いてくれてる、小野寺く

るみさん」

爽太君が、彼女に私を紹介した。

「こんにちは……」

軽く笑って、軽く会釈を試みた。

「こんにちは」

その子も、笑って挨拶をした。かわいい笑顔だ。

「あ、彼女は、山村五月さん……」

爽太君はどうか、よそよそしかった。

「ここで食べていくんでしょう？ 私、もう帰るよ」

さすがに彼女がいるのに、一緒に悪いよなって思ってたそう言う
と、

「え？ 今来たばかりじゃん。コーヒー飲んでないし……」

と、爽太君が引き止めた。

「あ、じゃあ、持って帰る」

「いいよ！ ここで、飲んでけば？」

爽太君の顔が必死だったので、また席に座り、コーヒーをすす
た。熱い。でも、早くに飲んで出たほうがいいだろうなって思って、
熱いのも我慢した。

五月さんは、あまり私にかまうこともなく、爽太君に話をしてい
た。爽太君との共通の友達の話をしているようだった。私は横で、
黙ってコーヒーをすすっていた。

爽太君は、しばらく五月さんの話をじっと聞いていたが、いきな
り、

「あ。そうだ。この前言った、休みの日に映画に行く話、ごめん。
日曜も仕事することになりそう
と、言い出した。」

「ええ？」

「ごめん、今、すごく忙しくて」

「でも、私のためにシフトずらしてもらったんだよ」

「ごめん…」

「じゃあ、いつ？いつ休めるの？」

「うーん。しばらくは、仕事かな…」

「わかった…」

それだけ言うと、五月さんは鞆を持って、お店をさっさと出て行ってしまった。

「…いいの？」

爽太君に聞くと、

「何が？」

って、不思議そうな顔をした。

「五月さん、怒ってたんじゃないの？」

「うん」

「うん…って…」

「こういうとき、普通何て言って謝るのかな…？」

「え？」

「しつこく、日曜日に映画に行こうって言われてさ。仕事かもしひと段落ついてたら、行けるって言ったら、シフトも空けて、すっかり期待したみたいでさ…。でも、仕事が終わるかどうかはわからないよって言うておいたんだけど…」

「……」

「前にもあったんだよ。その時には、店の手伝いをしなくちゃならなくて、それも、まだ休めるかわからないよって、前もって言うてたんだよ」

「じゃ、全然デートできてないの？」

「うん。でも、仕事終わったら、ちょこっと、ここで一緒にご飯食べたりとか、海見に行ったりとかしてるよ」

「それだけじゃ、満足いかないんだね、きっと」

「そんなもん？」

「だって、五月さんいくつ？」

「19歳」

「じゃ、まだまだ、無理だよ。いろいろわかってって言っても
そう言つと、爽太君は、少し頭をうなだれた。」

「前もなかなか時間が取れなくて、俺、結局ふられたんだよね」

「そうなんだ…」

「は〜。こういう仕事してるから、しょうがないんだってわか
つてくれる子いたらな〜。でも、五月ちゃんは仕事場も家も近いか
ら、時々会えるし、大丈夫かなって思ってたんだけどな」

「…可愛い子だしね。ふられたくはないよね…」

私はこのとき、かまをかけた。なんて爽太君が答えるか、わざと
そんなことを言ってみたんだと思う。それで、爽太君が、五月さん
をどう思っているかわかる。

「…うん。可愛いよね。めちゃ…」

ああ、なんだ…。言わなきゃ良かった…。

「俺には、もったいないよ」

「え？」

「どう扱っていいか、どういう話をしていいかも、たまにわかん
ないんだよね」

「…え？」

「俺、相当、女の子慣れてないっていうか…。あ、父さんはさ、母
さんと出会う前、付き合ってた子何人かいたみたいでさ。俺に、お
前は不器用だつて言うんだよね」

「不器用？」

「う〜ん。話べただし、気が利かないし…。メールするのも電話
するのもつい忘れるっていうか…」

「うん？」

「面倒なんだよね〜」

そう言つと、爽太君はぼりつて頭をかいた。

「俺、どうしたらいいかな？」

「は？」

「なんかさ、アドバイスない？女性側から見て…」

「……面倒くさいなら、彼女をつくらなければいいんじゃないの？」

「え？……なるほど。そうだね」

「あ、五月さんのことが好きなら、別だけど…」

「う〜ん…」

爽太君は、悩みだした。

「好きの基準つて何かな？」

「は？」

「どのくらい好きなら、付き合うのかな？」

「ええ？どのくらいも何もないんじゃないの？好きは好きでしょ」

「う〜ん。だから、いい子だな、可愛いよなって思う子はいる。」

あ、五月ちゃんもそうだけど…」

「うん」

「でも、それつて、好きって言えるの？」

「恋してるの？」

「恋？」

「うん」

「う〜ん…」

また、爽太君は悩みだした。

「以前にも、好きになつた子いないの？」

「いたけど…」

「じゃ、わかるじゃない？」

「そっか…」

爽太君は、コーヒを飲んでから、深いため息をついた。

「その子、うんと可愛いとか、そういうんじゃないけど、なんか気がついたら、すごく気になる存在になって…」

「へえ…」

「引越しちゃったんだ。それっきり会ってない。でも、いまだに夢とか出てくるよ」

「ひきずつてるの？」

ああ、瑞希さんが言っていた、女の子だな。

「いや。もうなんとも思っていないと思うけど…」

「けど…？」

「わかんないや。その子みたいに、五月ちゃんのこととは思えていかな」

「そうなんだ…」

「ああ、こんなで付き合ってもよくないよね？」

「…わかんないな。私も…」

「ごめん。こんな話して…」

「いいよ。いつでも、相談に乗るって言っても、あまりいいアドバイスはできないけど。なにしろ私も、こっぴどくふられたばかりだし…」

「ああ！そうか。ごめん、そんな時にこんな話して！」

「いいよ」

爽太君は、コーヒを飲みほし、席を立った。

「ご飯届けてくれてありがとう。それじゃね。気をつけて」

「うん」

その店を出て、爽太君は会社に戻っていった。

私は心のどこかで、爽太君が別れてくれることを望んでるっていうのが、わかった。

そんな自分が醜く思えた。自分のことしか考えていないのだった。そして罪悪感で、心が沈みながら、れいんどろっぷすに帰った。

夜、お店のかたづけを手伝い終わり、瑞希さんが先にお風呂に入っ
てと言うので、入らせてもらった。それから、2階に上がり、ベ
ッドに横になった。

「ああ、疲れた…」

営業の仕事で、1日歩きっぱなしだったこともあるが、こういう
お客さん相手の仕事は初めてだし、慣れないことばかりで、すごく
疲れてしまった。

そして、私は、いつの間にか眠っていた。

朝、窓から朝日が入り込み、小鳥の声も聞こえてきた。

「…あ、朝！」

何時かって時計を見たら、7時だった。

「良かった。寝坊したかと思った…」

着替えて、下におりていくと、お店のほうからコーヒーの香りが
してきた。

「早い、瑞希さん、もうお店に出てる…」

顔を洗って、慌ててお店に出ると、カウンターに爽太君が座って、
トーストを食べていた。

「おはよう、くるみさん。早いね」

「おはよう。爽太君こそ、早いね」

「あ、俺の場合は、朝帰り。これ食べたなら寝るんだ」

「徹夜？」

「うん」

キッチンから、オムレツとサラダを持って、瑞希さんが現れた。
「おはよう、くるみさん。くるみさんの分の朝食も作るわね」

「あ、すみません。何か手伝います」

「じゃ、コーヒーを爽太の分と、くるみさんの分淹れてくれる？」
「はい」

爽太君の分のコーヒーも淹れて、爽太君の隣の席に着いた。

コーヒーを飲んでいると、瑞希さんがオムレツとサラダと、トーストを持ってきてくれた。

「爽太、圭介はまだ事務所？」

瑞希さんが、爽太君に聞くと、

「あ、事務所のソファで寝てたから、置いてきた」

と、コーヒーを飲みほして、のびをしながら、爽太君は言った。

「ええ？起こして家に帰してよ。もう、何日も事務所に泊まってるのよ」

「昨日、夕方帰ったでしょ？一回」

「だけど、ソファで寝るくらいなら家で寝てって」

「わかってるけど、家までたどり着けないくらい眠いんじゃないの？ああ、寝言で母さんの名前呼んでたよ。うっさいんだよね、あれ。瑞希、瑞希ってさ……」

「だったら、家に帰ったらいいのにねえ……。もう、しょうがないわよね……」

そう言っていると、また瑞希さんはキッチンに戻っていった。

しばらくすると、キッチンから瑞希さんは、お弁当箱を持って出てきた。

「瑞希さん、私ご飯を圭介に届けるから、その間ちょっと、お店の掃除とかしてもらってもいい？」

「はい」

「じゃ、よろしくね」

そう言っていると、瑞希さんはお店から出て行った。爽太君は、眠そうな目をこすりながら、

「何か手伝おうか？」

と聞いてきた。

「大丈夫よ。爽太君はもう寝て」

「うん…」

爽太君は、そう言いながらも、なかなかカウンターの席を離れなかった。私は、食べたものを片付け、掃除を始めた。

「爽太君のご両親、本当に仲がいいよね」

「うん…」

「前に、二人できついことを乗り越えたって…」

「ああ。ちよつと待ってて」

そう言っていると、爽太君は、カウンターの奥に入り、2階へと上がっていった。

床を掃き、テーブルやカウンターを拭いていると、爽太君が戻ってきた。

「これ、見てみて」

そう言っていると、何冊かのノートを私に、手渡してくれた。中を見ると、日記だった。木や、花、空、それから、若いころの瑞希さんの笑顔や、圭介さんの寝顔や…。

「これさ、俺がまだ母さんのお腹にいたころ、二人で毎日つけてた日記なんだって」

毎日、何があつたか、何に感動したかを細かく書いてあった。

「父さんが何に感動して、何を感じてたかを、俺に残しておきたかつたんだって」

「え？」

「それで、俺が大きくなったら、あなたのお父さんはこんな人でしたって、見せるために毎日日記をつけてたって母さんが言ってた」

「……」
日記には、赤ちゃんへというメッセージも、たくさん書かれてい

た。

「父さん、癌で助からないって言われてたらしい」

「…え？」

「余命3ヶ月って言われてから、結婚して一緒に暮らし始めて、母さんが妊娠して…」

「でも、今、すごく元気…」

「そ。奇跡が起きてさ。あるとき、がん細胞全部消えてなくなったって」

「ええ?!」

「びっくりでしょ？」

「……」

日記の中にも、「奇跡が起きた」と書いてあった。それから、圭介さんが、

「赤ちゃんに会える!こんな嬉しいことはない」

と、目に涙を浮かべて、Vサインをしている写真も貼ってあった。

「二人で、死を乗り越えちゃったんだよ」

「二人で？」

「父さんも母さんも、死を受け止めて、毎日をただ、ただ、楽しんで大事にして生きていたんだって。」

だから、いまだに、今を大事にして生きなさいって言う」

「今を？」

「命も、大事につてね」

「だから、私が海に入ってたときにも？」

「ああ、うん。びっくりしたよ。どんどん海の中は行っていくから、助けなきゃって…。クロの方が足速いから、クロに先に走らせて…」
「そうだったの…」

「あの二人が、異常に仲がいいのなんとなくうなずけるでしょ？」

「うん…」

「俺、二人のこと尊敬もしてる。すげえよな、死を二人で乗り越えちゃうなんてさ」

「……」

なんだか、聞いていて、恥ずかしくなった。私は、死を目前にしても、前向きに生きてきた二人と違って、自ら、生きることをやめようとしたのだ。たとえ、一瞬としても…。

「これ、部屋にもって行くけど、もし見たいときには、声かけてね」
「うん。ありがとう。貴重なものを見せてくれて。これ、宝物ですよ？」

「うん」

そう言つと、爽太君は、満面の笑みを浮かべた。

「じゃ、俺寝るね。おやすみ」

「おやすみなさい」

しばらく、ぼくくつてした。

「あ、いけない。掃除…」

雑巾を洗いに行き、この前爽太君がしていたように、窓ガラスを丁寧に拭いていった。すると、外から瑞希さんが戻ってくるのが見えた。

「おかえりなさい」

「ただいま。ありがとう、窓拭いていてくれたの？」

「はい」

「じゃ、私は外を掃いてこようかしら」

箒を持って、外を掃いている瑞希さんのことを窓から見ていた。

丁寧に丁寧に、葉っぱや砂をかき集めている。

瑞希さんのあの優しさや強さは、たくさんの悲しみを乗り越えてきたからなんだってわかった気がした。

愛する人が、もうすぐ死を迎えるなんて、私には想像もできなか

った。それどころか、この前私は、愛していた人に、酷いしうちをしてやろうと思っていたほどだ。

窓ガラスを拭きながら、涙がこぼれた。稔のことを思い出していた。稔は、私が稔のことを好きだったかもわからないって言うていたけど、私は稔を好きだったんだ。愛していたんだ。

愛していたのに、なんで、苦しめてやろうなんて思ったりしたんだろうか。

どんどん涙は溢れて、窓ガラスを拭けなくなっていた。

外からその様子を見た瑞希さんは、そのまま、外の掃除を続けていた。

外の掃除が終わり、瑞希さんが中に入ってきた。

「さて、テーブルセッティングでもしようかしら。手伝ってくれる？」

慌てて、涙を拭いて、

「はい」

と、瑞希さんのもとへと行った。

「クロスをかけていってほしいの。そのあと、花瓶に花をいけてくれる？」

「はい」

言われたとおりに、クロスをかけていくと、瑞希さんがそんな私にぼつりと言った。

「我慢はしないで、泣きたいときには泣いちゃったほうが楽なのよね」

「え？」

「ふふ…。私も泣きたいときには、泣くし…」

「泣きたいとき、あるんですか？」

「昔ね、そんなときもあったから」

「今は？」

「今？今はね〜。ないわね。あまり悲しいこと、苦しいことがないのよね。私ほんとうに、幸せだって思うわ」

「そうですね。素敵なだんなさんや、お子さんに恵まれていますもんね」

「そうね…」

花瓶に花をさしていくと、瑞希さんが、聞いてきた。

「昨日、爽太の彼女と会ったんだって？」

「え？」

「今朝、爽太が言ってたから」

「はい…。なんか、五月さん途中で怒って帰っちゃって」

「みたいね」

「爽太君、何か言っていましたか？」

「詳しくは聞いてないけど。怒らせちゃったって。で、くるみさんにいろいろと相談に乗ってもらったって」

「いえ、相談って何も私は…」

「ふふ。でも、爽太は、力強い味方ができたって思ってるみたいよ。お姉さんができたみたいな感じがしらね」

「お姉さん？」

「そう。なんか、嬉しそうに話してて…。ん？どうした？」

私は、ものすごくシヨックを受けていた。顔が硬直していくのがわかった。

「あ、なんでもないです…」

無理に笑顔を作ったが、瑞希さんがちょっと心配そうな顔で私を見た。

「他には、何をすればいいですか？」

「ああ。そうね。そろそろ、キッチンで下ごしらえでもしようかしら。くるみさんお料理は好き？」

「えっと、あまり…。でも、一人暮らしをしていたので、一応お料理はしてましたけど」

「そう、じゃ、大丈夫よ」

キッチンに二人で入り、野菜を洗ったり、切ったり、瑞希さんはスコーンを焼いたりした。

「くるみさん、兄弟は？」

「一人っ子です、私」

「じゃ、爽太のことは、弟みたいな感じがするかしら？」

「弟がいないから、よくわかりません。でも、爽太君は、出会ったとき、天使に見えました」

「天使？」

「はい。今も…。優しくて、天真爛漫で、天使みたいですね」

「あの子が？」

「はい。でも、わかりました。お二人の愛を、思い切り注ぎこまれて育ったんですね」

「私と圭介？」

「はい」

「ふふ…。それは逆だわ」

「え？逆って？」

「爽太の方がたくさんさんの愛を、注いでくれたの。だから、そうね。私たちにとっても天使だわね」

「……」

素敵なご両親だな…。羨ましく思えたけど、でも、こんな家族に出会えたことが嬉しくなった。

この世界には、こんなにも愛が溢れている家族や場所があるんだ。私の心がどんどんあつたかくなっていくのがわかる。

お姉さんでもいいかな。いや、やっぱり少し寂しいけど…。だけど、この愛溢れる家族に囲まれて過ごしていけるのは、嬉しいな…。

そんなことを思いながら、私は、しばらく甘いスコーンの香りの
中で、あったかさに酔いしれていた。

4 あたたかい家

「ただいま〜」

春香ちゃんが、クロを連れてお店のドアから入ってきた。

「あ、おかえり。ずいぶんとのんびりしていたのね。時間大丈夫なの？」

「うん。すぐに、出るよ。クロの足拭いてもらってもいい？」

「いいわよ。クロ！こっちにおいで」

「ワン！」

クロは嬉しそうに、瑞希さんのほうに来た。

「春香、気をつけて行ってらっしゃい」

「は〜い」

春香ちゃんは、カウンターの奥に入ってしまった。

「さ、クロ。足をしっかり拭いてから、家へ上がってちょうだい」
そう言っていると、瑞希さんは雑巾を持ってきて、クロの足を拭いてあげた。

「あ、そうそう。クロ。爽太部屋で寝てるわよ」

「ワン！」

クロは喜んで、カウンターの奥から2階へと上がっていった。

「さてと…。ああ。クロの足跡がついちゃった。拭かなくっちゃ」
そう言って、瑞希さんは床を拭き出した。

「春香ちゃん、これから学校ですか？」

「うん、そう。爽太が仕事の日は、春香がクロの散歩に行つてて。遅かったのは多分彼氏ね」

「彼氏？」

「サーファアの彼がいるのよ。朝からサーフィンしてる…。すぐ近くのサーフィンのショップで働いてる人なんだけどね」

「へえ…。彼氏いるんですか…」

「圭介はぶつぶつ言ってるけどねぇ。髪が金髪、ピアスもしてて、今25歳だったかしら」

「へえ…」

「でも25の若さでお店のオーナーなのよ。すごいじゃないねえ。ま、どんな彼氏でも圭介は文句いいそうだけどね」

「やっぱり、女の子のお父さんって、普通はそうなんですか？」
「え？」

「うちの場合は、そういうの何も言われなかったから…」

「そうなの？でも安心してたんじゃないの？くるみさんすっかりしてそうだし」

「ああ、はい…。特に父の前では、いい子でいました。だからなのかな？」

「いい子でいたの？」

「嫌われなくなかったから…」

「そう…」

瑞希さんは、そのあと何かを言いたそうだったけど、そのまま黙ってまた、キッチンに入ってしまった。

その日は、おばあちゃんはお手伝いに来なくて、ホールの方は全部私がかかれて、忙しかった。

2時を過ぎたころ、やっとお客さんが途切れて、休憩に入ることができた。

カウンターでお昼を食べていると、爽太君がお店に顔を出した。

「俺にも、何か作って」

「あら、起きたの？また事務所に行くの？」

「うん」

そう言つと、眠い目をこすりながら、カウンターに爽太君は座った。その横にクロもちょこんと寝転がった。

しばらくは、黙って爽太君は、私がお昼を食べているのを眺めていた。

「……。爽太君？」

「え？」

「あ、なんか、見ていられると食べずらいつていうか…」

「ああ、ごめん。ぼろってしちゃって…」

瑞希さんが、爽太君のご飯を持ってきた。

「いただきます！」

そう言つと、爽太君は、もくもくとご飯を食べだした。

「う、うまい…」

と、たまに目を細めながら。

「……」

美味しそうに食べるんだな〜。

ご飯を食べ終わり、瑞希さんはコーヒを淹れてくれた。それから、瑞希さんも、カウンターに座り、自分のご飯を食べだした。

「ああ〜。コーヒーうめ〜」

爽太君が、また目を細めてつぶやいた。

「くすくす…」

瑞希さんは、笑い出した。

「圭介にそっくりよね。ご飯を美味しそうに食べるところも、そういう表情も…」

「ええ？父さんに？」

「うん。22歳のころの圭介にそっくりよ」

「う〜ん。そうなんだ〜。でも、俺、あそこまで甘えん坊で寂しがりやじゃないよ」

「あははは。そうよね〜。そこは今も昔も変わらないわ」

「母さんが甘えさせてるんじゃないの？ま、しょうがないか。一回

りも上じゃさ」

「逆よく。甘えん坊の寂しがりやだから、これだけ年が上じゃなきゃ駄目だったのよ。うん」

「ああ。そう…」

「爽太もじゃない？」

「え？」

「仕事に夢中になると、彼女ほっばいちゃうし、あなたも、年上の甘えられるような女性がいいかもしれないわね」

「俺も？！でも、俺年上の人と付き合ったこともないよ。いつも年下か、タメか…」

「それで、駄目になってる」

「うーーーーーん」

爽太君は、ものすごく、難しい顔をした。

「年上の女性っていつても、そうそう周り…。ああ、いた。事務所の佐々木さん。25歳だっけ」

「4つ上か…。いいんじゃないの…？」

「ええ？まじ…？俺、ちょこつと苦手だよ。あの人…」

「あら、なんで？」

「うーーーーん…。なんか話にくい。俺、いつも気を使ってるんだよ。何ていうかさ、いろいろとうるさいんだよね。こう、常識人っていうの？たまに、父さんのことも影で、いろいろと言ってるよ」

「あら、なんて？」

「もつと、しっかりとしてくれなくちゃあとか…」

「あははは。25歳の人に言われてるのか…」

「笑い事なわけ？それ…。俺、話す言葉も選んじゃってるよ」

二人の横で、黙ってコーヒを飲んでいると、

「そういえば、ほら。ここにも年上の女性がいるじゃない。ね？くるみさん」

「え？」

瑞希さんがいきなり、私に話しかけてきて、びっくりしてしまっ
た。

「あ。くるみさんもそうか。あれ？でもくるみさんって今いくつ？」

「……。28歳」

「え？！ー！」

ものすごく、爽太君が驚いていた。

「？もつといってるかと思った？とか？」

「いや。逆……。もつと年近いかって思ってた。あ。俺、今まで思い
切りタメ口……」

「ううん。全然いいけど」

「7歳上か……」

と瑞希さんがつばやいた。

「そうです。7歳も上だし、とても、爽太君から見たら、恋愛の対
象には……」

「あら、でも、私と圭介はもつと離れているけどね」

「あ、そうでしたね。すみません。あの……」

「ふふ……。いいわよ。気にしないで」

「……」

爽太君は、まだ、驚いていたのか、黙っていた。そんなに年齢が
近いと、思っていたのだろうか？

コーヒーも飲み終えて、爽太君は、

「じゃ、事務所行ってくるね」

と、キッチンで洗い物をしている私と瑞希さんに、声をかけに来た。

「はい、いつてらっしゃい」

瑞希さんが、笑顔でそう言った。

爽太君は、少し頭を掻いて、

「あの…、くるみさん、俺、本当に今まで、なんか、すげえ失礼なこと言ってたかも…」

と、申し訳なさそうに言った。

「いいよ。いいってば。今までどおりで全然。気にしないで」

「…うん」

そう言つと、またにこつて笑つて、

「じゃ…」

と、カウンターの奥に入つていった。クロは、そのまま、お店に残つていた。爽太君が、会社に行くのをわかつているのかな。

キッチンでかたづけを終えると、二人でカウンターに座り、のんびりとした。

「ふふ…」

瑞希さんは、思い出し笑いなのか、いきなり笑い出した。

「…？」

「爽太、さっきの顔おかしかった」

「え？」

「くるみさんの年齢を、聞いたときよ」

「ああ…。いったいいくつだと、思っていたんでしょうね？」

「さあ、わからないけど。多分、爽太にとって、くるみさんは話しやすいんでしょうね」

「そうですか？」

「うん。あの子、誰とでも仲良くなれそうに見えて、意外と人見知りをするの。その変は私に似たのかしらね」

「そうなんですか？」

「天然のところがあるでしょ？そのまんま誰にでも、あのまんまで接しちゃうんだけど、中にはそういうのを嫌がったり、注意する人もいるから。そういう人の前では、自分を出せなくなって、なんかものすごく気を使うようになるみたいね」

「事務所の、女性がそうなんですか？」

「うん。結構ものをずばって言う人で…。圭介はそういうの、あまり関係なく接しちゃうんだけどね…」

「私も初め、思い切りひどいと言いました」

「ああ、あれね…。でも、本心じゃないでしょ？言っただあとに傷ついた顔、くるみさんの方がしてた。そういうのを感じ取るのも、爽快は天才とつか、直観力みたいなのがあるみたいよ」

「え？」

「くるみさんの方が辛いんだろうなって、きつと、直感で感じていたんじゃないのかしらね」

「…そうなんですか？」

「でも、意外と自分の気持ちに気づけない、間抜けなところもあるからね…」

「間抜け…って？」

「鈍感っていうのかしらね…」

「？」

「ま、いいけど…。そのうちに気づくかしらね」

「何にですか？」

「自分の気持ちによ」

「？」

瑞希さんは、それ以上は何も言わずに、またキッチンに入っていた。

カラン…。お客さんが入ってきたので、私も慌てて席を立ち、「いらつしゃいませ」

と笑顔で出迎えた。

5時半を過ぎて、パートさんと、春香ちゃんがお店に出て、私と瑞希さんは休憩にはいった。そのころにまた、圭介さんが戻ってきた。

て、ご飯を食べ出した。

「いつまで、忙しいのは続きそうなの？」

瑞希さんがコーヒーを持ってきて、圭介さんに聞いた。

「う〜ん。来週の水曜までにはなんとか。あ、水曜どこか行く？」

「家で、ゆつくりしたら？」

「うん。じゃ、海に散歩と、ランチのコースのデートはどう？」

「ふふ、クロも連れて？」

「うん」

クロは、それを圭介さんの横で聞き、尻尾を振った。

圭介さんが帰ってくると、クロはずっと、圭介さんのそばにいます。昨日もそういえば、横にいたっけな。圭介さんが部屋に行くと、一緒についていったし。

「くるみさん、うちの店、毎週水曜が定休日なのよ。くるみさんはどうする？」

「はい。一回アパートのほうに行きます。あまりちゃんと、掃除もできていなかったの…」

「あら、まだアパート引き払ってなかったの？」

「はい。まだ、大きな荷物も、そのままになって…」

「じゃ、引き払うときには、爽太でも手伝いに行かせたらいいよ」と、突然圭介さんが、そう言いだした。

「え？でも、悪いです。仕事も忙しいのに…」

「だけど、大きな荷物はどうするの？粗大ごみに出すの？」

「はい。もう手配はしています」

「じゃ、それを運んだりするの手伝う人がいなきゃ」

「でも…。デートする時間も取れないのに、そんなのにつき合わせちゃったら」

「デート？爽太が？」

「コンビニの五月ちゃん、付き合いだしたみたいよ」

と、瑞希さんが言うと、

「え？まじで？」

圭介さんは、初めてそのことを知ったのか、驚いていた。

「五月ちゃんか」。またふられるんじゃないの？」

「さあ、どうかしらね？」

「あいつはさ、年上のしつかりとした女性がいいんだよ」

「ふふ。圭介みたいね」

「え？俺？ああ…。そっか。うん。似てるかもな。仕事始めると、思い切りのめり込むところとか…。そういうのも、わかってくれて、心の広い人じゃないとな〜」

と、圭介さんは言ってから、

「瑞希みたいな…」

と付け加えていた。それから、少し耳が赤くなったような気がした。

二人の様子を見ていて、発見したことがある。瑞希さんはよく、じつと圭介さんのことを見つめている。話をしても、圭介さんが、ご飯を食べていても…。

いつも、甘えているのは圭介さんのほうだが、圭介さんのことを見ているときの瑞希さんの瞳は、とても、優しい目になる。爽太君を見るときも、そんな目をしているけど、圭介さんに対してはまた、ちよつと違う感じだ。

「爽太、ますます圭介に似てきたわよね」

「仕事にうちこむところとか？」

「そこもだけど、美味しそうにご飯食べるところとか、表情がそっくり」

「へえ、そう？あれ？それ見て瑞希、喜んでるの？」

「ふふ…。そうね。昔を思い出して、喜んでるかも」

「ふうん」

「なんか、懐かしいなって思っで。22歳のころの圭介みたいで…。

出会ったところを思い出しちゃった。」

瑞希さんが、にこにこしてそう言った。

「お二人の出会いって、どんな出会いだったんですか？」

これは、前から聞いてみたいことだった。

「俺の、完全なる一目惚れ。一気に恋に落ちた」

「え〜？そうだったんですか？」

「ちよつと圭介、恥ずかしいわよ」

「いいじゃん。別に本当のことだし」

「そうだけど…」

そうか…。圭介さんが先に、思いを膨らませていたのか…。

「じゃ、圭介さんの方から、瑞希さんにアプローチしたとか？それで、瑞希さんも圭介さんを？」

「ううん、違うの。私も初めて会ったときから、好きになっていたから…。同時進行よね？」

「そ。お互い好きあつてるのに、なかなか告白はしなかったっけ？」

「したわよ。私のほうから。飲んで泥酔していたから、忘れちゃったのよね？圭介」

「あ！それはさ〜…。ああ、あんまり思い出したくない過去かも

…」

「へえ〜。なんか、楽しそうですね」

「え？そんなでもないよ。けっこう最初は葛藤があったよ。だって、瑞希、俺の従兄弟と見合いして付き合ってたし」

「え？」

「でも、圭介のほうが好きだ〜って気づいて、別れちゃったんだけど…。ね？瑞希」

「なんか、話聞いてて、恥ずかしくなってくる…」

瑞希さんは、本当に顔を真っ赤にしていた。

「それから、俺ら、ずっとラブラブ」

「もう〜、圭介！恥ずかしいってば…」

「あはは！照れてる！」

圭介さんは、真っ赤になってる瑞希さんを見て笑った。

なんだか、ほほえましいな〜。本当に仲がいいんだな…。

「お二人みたいな恋愛がしたいな〜」

「え？」

二人同時に、聞いてきた。

「羨ましいです。理想の夫婦ですよね」

「そうかしら。爽太の友達は、気持ち悪いって言ってるらしいけど、仲良すぎて…」

「いいじゃないですか。仲がいいんですから。それも、お互い一目惚れ同士なんて、素敵ですね」

「現れるわよ。くるみさんにも…。もしかして、もう現れてて、自覚していないだけかもしれないし」

「え？」

どきつてした。爽太君を心のどつかで、意識しているのがばれたかなって…。

コーヒーも飲み終わった圭介さんが、

「さて、クロ。一緒に部屋に行つて、休む？」

と、クロの頭をなでると、クロが喜んで尻尾を振った。それから、クロを連れて、圭介さんは2階へと上がっていった。

「クロは圭介さんに、1番なついているんですね」

「なついているっていうか、圭介が犬っぽいからじゃない？」

「え？」

「犬みたいでしょ？なんだか…。尻尾振って喜んだりする…」

「あはは…。そういえば…」

瑞希さんに甘える圭介さんは、尻尾を振っている犬のようだ。

「本当に、アパートの荷物片付けたりするの、爽太にやらせたらいいわよ。くるみさんだったら爽太、喜んで手伝うと思うわ」

「はい。ありがとうございます」

それから、二人でしばらくテレビを観ながら、のんびりとしたリビングは、いつも心地がいい。ずっと一人暮らしをしていて、一人に慣れっこになっていたのに、誰かとただ、こうして一緒の空間にいるのが、こんなにも安らいで、心地がいいものだとは知らなかった。

自分の家でも、いつも部屋に閉じこもっていたし…。

あたたかい家って、こういう家なんだな…。私は、体全部でそれを感じていた。

5 罪悪感

水曜日になった。いつもと同じ時間に目が覚めて、下に下りていくと、お店のカウンターで春香ちゃんのご飯を食べていた。

「あ、おはようございます。早いですね」

「おはよう。春香ちゃんも早いよね。今日もクロの散歩？」

「いいえ、今日はお母さんか、お兄ちゃんが連れて行くと思うから」

「じゃあ、なんでこんな早くに？」

「コーヒー持って、海に行くんです。いつも…」

「あ、彼氏に持っていくの？」

「はい」

ちよつとはにかみながら、春香ちゃんはうなづいた。

「朝ごはん作りましょうか？」

「え？ いいよ。大丈夫。何かパンでも焼いて食べるし…」

「いいですよ。サンドイッチでも、作ります。あ、コーヒーは淹れてあるから、飲んでください」

「朝、いつも自分で作ってるの？」

「水曜日だけ。お母さん、水曜はゆっくり寝てるから」

「そうなんだ」

なんか、えらいな〜って思ってしまった。

「そのうち、パテシエになったら、お店に私のケーキを置いてもらおうと思って…」

「へえ。そうなんだ」

「お料理をするのも、好きなんですけど、ケーキって人を幸せにするじゃないですか」

「うん、そうだね。ケーキを食べただけで、幸せ〜って言うてる時あるよね」

「そう！それなんです。うちのお店でも、ケーキを出すとみんな、すごく幸せそうな顔をするから、それを見ているのが好きで…。美味しいケーキを作ったら、幸せになる人がたくさんになるんだろうなって、小学生のころ思っちゃって…。単純なんですけどね」

「うっん、素敵。素敵な夢だね…」

「でも、今は私が楽しいからしてます。どんなケーキを作ろうかって考えてるとき、めちゃくちゃ楽しいんですよね」

「ああ、自分が楽しんでいるのが、何よりも1番だね。それ、わかる気がするな」

「本当ですか？嬉しいな、そう言ってもらえると…」

春香ちゃんは、すごく嬉しそうな顔をして、サンドイッチを持ってきてくれた。

「今は、うちの店のケーキ、近くのケーキ屋さんのを持ってきてもらって…。お母さんも早くにパティシエになって、うちに春香特製のケーキを置きたいわって、言ってくれてるんです」

「そうなんだ。瑞希さんはケーキを作らないの？」

「スコーンや、パンケーキくらいかな」

「あ、スコーンも美味しいよね。それから、ジャムも…」

「はい。美味しいですよ。スコーンはうちの店の売りだから」

「春香ちゃんも、れいんどろっぷすが好きなんだね」

「はい。好きです。居心地いいですよ。だから、お休みの日もつい、お店で勉強したり、ケーキを作ってみたり…」

「爽太君も好きだって言ってたな。いいね。そんな場所が自分のうちなんて…」

「そうですよね」

にこって微笑んでから、春香ちゃんは、ポットにコーヒーを入れ替え、

「じゃ、海に行ってきます」

と、外に出て行つた。

サンドイッチを食べてみると、とても美味しかった。

「ああ、なんか、いいな〜」

春香ちゃんの話聞いてて、ますますこの家族を好きになつて
いる自分に気づいた。

キッチンで片づけをして、自分のものを洗濯していたら、瑞希さ
んが起きてきた。

「おはよう。早いね。ゆっくりしててよかったのに…」

「おはようございます。なんか、目が覚めちゃって…」

「そうなの？あ、春香は？」

「海に行つてます」

「早朝デートか〜。あら、洗濯していたの？言ってくれたら、一
緒に洗つて干しとくのにな」

「いえ、そんな悪いですから…」

と、申し訳なくてそう断つたけど、

「いいのよ〜。前に住んでた人なんて、ばんばん洗濯物出してた
わよ」

と瑞希さんが、笑つてそう言ってくれた。

「じゃあ、一緒にみなさんの洗濯します。瑞希さん忙しそうだし、
洗濯くらい私にさせてください」

「そう…？じゃ、お願いしようかしら。でも爽太のパンツは私が洗
わないと、爽太に怒られそうだわ」

「え？」

「それとも、爽太に自分で洗わせようかしらね」

そう笑つて言つと、瑞希さんはお店のキッチンへと向かいながら、
聞いてきた。

「あ…。くるみさん、朝ごはんは？」

「春香ちゃんが作ってくれました。サンドイッチ、美味しかったで

す」

「あら、そうなの？」

洗濯物ができたので、2階に行き、ルーフバルコニーに干していった。少し曇っていて、風もあった。潮の匂いがして、海を思い出した。まだ、この店で働くようになってから、海は行ってないな。そのまま、バルコニーでぼくぼくっしていると、爽太君が部屋から出てきた。

「あ、おはよう。早いね。休みの日なのに…」

「爽太君も早いね」

「ああ、うん…。なんか、急にデートすることになって…」

「え？」

顔が引きつるのを、ばれないように笑顔を作り、

「五月ちゃんとか？良かったね」

と言うと、爽太君は頭を掻いて、

「うーん。微妙…」

と、笑っているような、困っているような、そんな複雑な顔をした。「なんで？嬉しくないの？」

「うーん、あまり…。だから、微妙…。嬉しいっていうより、緊張する」

「なんで？」

「だって、何をどう話していいのやら…。いつも、なんか俺、緊張しちゃうんだよね。あ、デートってそんなもんかな？」

「初めのうちはね。多分…」

「ああ、そっか。そういうもんか…」

頭が寝癖だらけで、おおあくびをする爽太君は可愛かった。パジャマ姿も、やけに可愛い…。

「デート、どこ行こうかな〜」

とつぶやきながら、爽太君は下におりていった。

やばいな…。五月ちゃんめちゃくちや羨ましい。

私は、早々と支度をして、アパートに行くことにした。そのままそこにいたら、もやもやと嫉妬する自分を見る羽目になりそうで…。

電車で1時間以上ゆられて、アパートに着いた。ドアを開けると少しむつとした。埃っぽさもあった。私はすぐに窓を開け、掃除を始めた。

玄関を掃こうかと思っ て行ってみると、メモが落ちていた。さつき、ドアを開けた時には気づかなかった。多分、ドアの隙間から入れたのだろう。

メモには、懐かしい稔の字が並んでいた。

不思議だ…。稔と別れたのはつい最近のことなのに、すごく懐かしさを感じた。もう、何ヶ月も、何年も会っていないような気がする。

メモには、

「仕事の帰りに寄った。まだ、アパートは引き払ってないんだね？電話をしてもつながらないから、直接アパートに来てみたよ。また、仕事帰りに寄るよ。稔」

と、書いてあった。いったい、何の用件があったのかは、書いていなかった。

「はあ…」

ため息が出た。また、夜に来られても、私はいないだろう。もう会う気もないし…。

アパートの掃除を終えてから、近くのお店をぶらついた。ついこの前まで住んでいた町。懐かしかった。

よく一人で入っていたカフェに入った。そこで、お昼を食べた。

ぼくって、コーヒーを飲みながら遠くを見つめた。今ごろ、爽太君は、五月ちゃんとデートなんだな…。そのことを思い出し、頭をふって、忘れようとした。

「そんなに好きじゃなかったら、別れちゃえばいいのに…」
と、また私は思っている…。そんな自分が嫌になる。

なんの用事もないので、そのまま電車に乗り、江ノ島に戻ることにした。

お店に戻ると、誰もいなかった。合鍵を作って渡してくれていた
ので、その鍵で家に入った。

しゅん…。家の中が静まり返っていた。

「なんか、不思議…」

誰もいない家…。いつも誰かが必ずいるから、変に静かで、すごく寂しくなった。

リビングに腰を下ろして、テレビをつける。急に静かな中に、テレビからの音楽が流れ出し、それが返ってむなしく感じられた。

「は……。なんか、寂しい…」

休みの日って寂しいな…。なんだか、やっぱり私は家族のようで家族じゃないんだ…。なんて思い知らされているような気もしてきた。そう思ったら、涙が出た。

「あれ？おかしいな…。こんなことで泣いてる…」

どうにも、涙が止まらなくなり、声をあげて泣き出してしまった。

「何泣いてるの？」

いきなり背後から、声がしてびっくりした。

「え？爽太君？なんているの？」

「なんでって。その…。それより、なんで泣いてるの？嫌なことでもあったの？」

「うっん。何も…。ちょっと寂しくなっただけ…」

「そっか…」

爽太君はそう言うと、私の横に座り、私の顔を覗き込み、
「くるみさんでも、寂しくて泣いちゃうことあるんだ」
と、優しい目をして私に言った。

私は急いで、涙をふき、

「爽太君、デートだったんじゃないの？」
と聞いた。

「うん…。そうなんだけど…」

「……………？どうしたの？何かあった…？」

「…別れた」

「え?!」

驚いた…。と同時に、罪悪感に襲われた。別れちゃえばいいのに
って思ったことに、ものすごい罪悪感を覚え、血の気も引いた。

「なんで?ふ、ふられちゃった?」

「うっん。俺のほうから、別れ話をしたんだ…」

「え?なんで?」

「うっん。なんか、今日一緒にご飯とか食べててさ、やっぱり、
違うよなって…」

「違うって?」

「うっん。可愛いとは思ってるけど、好きとは違う。なのに付き合
ってるのって、五月ちゃんに失礼じゃん」

「……………」

「そのうちに、好きになれるかなって、ちょっと思ってたんだけど
…。それ、今は好きじゃないってことだしさ…」

「そっか…」

なんて言っていていいか、わからなかった。

別れたら、私はどつかで喜ぶかもしれない…。なんて思っていたが、実際は全然だった。喜べるはずがなく、落ち込んでいる爽太君になんて声をかけようかとか、別れたらいいと思っていた自分を、自分で責めていた。

「ほっぺ、赤い？俺…」

「え？」

「ひっぱたかれちゃって…」

「ええ?!」

「ビンタ、生まれて初めてだよ。強烈だね」

「そ、そうなの？たたかれちゃったの？」

すごい。そんなことしそうな子に見えたけどな…。

「でも、すつきりした。なんかこれだけ痛い思いしないと、申し訳なさが残るよね」

「え？」

「なんていうか、罪悪感っていうの？」

「……」

「くるみさん、ごめんね」

「え？何が？」

「あれこれ、相談に乗ってくれてたのに、もう別れちゃったよ、俺

……」

「……」

ああ…、罪悪感がどつと、押し寄せてくる。私もひっぱたかれたら、すつきりするだろうか。

「あ、謝るのは私かも…」

「え？」

「ひっぱたいてもいいよ…」

「え？なんで?!」

「だって、いろいろと相談に乗ってたふりして、心の底では別れた

らいいって思ってたから……」

「……？俺と五月ちゃんか？」

「そう……。ごめん。私も思い切り罪悪感……。ビンタしてくれたら、すつきりするかな？」

「え？ビンタ？なんで？」

「だって、酷いこと思ってたから……」

「あ……。あははは……」

「え？」

いきなり笑う？なんで……？

「それで、ビンタって、おかしいよ。っていうか全然悪くないし、くるみさん」

「え？」

「そうだよね。だって、くるみさんは別れたばかりだし……。それでもう、人の幸せを喜べって言われても、無理な話だよ。もし逆の立場だったら、俺も心の底ではそう思うよ、きっと」

「……」

ああ、微妙にずれている。私は嫉妬をしていたのに……。爽太君の彼女というだけで、やきもちを妬いていたのに……。羨ましくて、爽太君とデートできるなんていいなって……。

だけど、本当の理由は言えなかった。言っちゃいけないって、私の気持ちを封じ込めた。

「はあ……。しばらくはいいや……俺」

「え？」

「なんか、力抜けた。彼女とかって疲れるし、一人身でいいです、俺……」

「……」

「仕事もあるしさ……。多分、そのうち、父さんたちみたいな出会いがあるかもしれないし」

「…うん。そうだね。私も、しばらくは彼氏、いらなかな…」
「え？そうなの？」

「うん。瑞希さんと圭介さんみたいに、いつきに恋に落ちる…。そういう相手にきつと、会えるよね。それまでは、いいや…」

「じゃ、一人身同士ってことで、よろしく」

爽太君は、そう言うつと、にこって微笑んだ。

「？何がよろしく？」

「あはは。なんか、わかんないけど…。今日みたいに、寂しくて泣きそうになった時とか、俺呼び出していいよ。当分彼女できないだろうし、休みの日は暇もてあますだろうし」

「…うん。ありがとう」

「ってことで、これからどうする？暇なものどおし」

「え？」

「海行く？父さんたちもいるかも…って邪魔するなって言われそうだな。あ、ゲーセンでも行く？」

「ゲーセン？」

「水族館でもいいけど…。まだ、この時間ならのんびりと見れるかな」

「うん」

それから、とぼとぼと歩いて、爽太君と江ノ島の水族館に行った。

「ここ、初めて来た！」

と喜ぶと、

「ほんと？俺、しょっちゅう来てたよ」

と爽太君も、嬉しそうにそう言った。

「そうなの？」

「うん。父さんや母さんとも、春香ともよく来てた。俺、めっちゃイルカ好きでさ！」

そう言うつと、イルカの水槽に、どんどん爽太君は進んでいった。

「お！綺麗に今日も泳いでるね」
爽太君、イルカが好きなのか…。

「子供のころから見に来てたし、飼育員にもなりたかったんだよね。実は…」

「そうなの？」

「イルカのショーで、イルカと一緒に泳いだりしてるじゃん。あれ、いいな〜って思ってたよ」

「でも、ならなかったの？」

「うん。父さんの仕事のバイト、高校のころからやってて…。楽しくて、そのまま父さんの会社に入っちゃった」

「へえ、そうだったの…」

「でも、イルカと一緒に泳ぐのは夢だな。それも、野生のイルカがいいな」

「いいね。素敵…」

爽太君の目がきらきら輝いて、ひきこまれそうになった。

「あとね、俺、好きなのはくらげ」

「くらげ？」

「面白いくらげがいっぱいいるんだよ。見に行こう！」

「うん」

ドキッとした。爽太君は、私の手をひいて、走り出した。爽太君の手は、意外と大きくて、あったかくて…。手をすっぽりと包みこまれて、胸が思わず高鳴ってしまった。

くらげの水槽の前に行くと、

「あ、ごめん…」

とつないでいる手を、爽太君が、ほどいた。

「無意識に手、つないでた…」

「う…、うん」

なんだか、顔が赤くなっているような気がして、顔をあげられず、うつむいたまま答えたが、どうやら、爽太君はそんなのおかしいなしで、くらげの説明をしだした。

「これこれ、いろんな色があつて、けっこう可愛いでしょ？あ、こちのは、光るんだよ。ほら！」

また、爽太君は、目を輝かせた。その表情を見ているほうが、私には嬉しかった。

ぐるりと館内を回って、一緒にアイスを食べて、それから水族館を出た。

水族館から浜辺へと移動して、しばらく海を眺めた。

「海つて、気持ちいいよね」

爽太君は、目を細めてそう言った。

「父さんから、面白い話を聞いたことがあつて…」

「面白い話？」

「俺が母さんのおなかにいたころ、父さんの夢に、色白で真っ黒な髪の子が、出てきたんだって」

「……」

「で、その子、いっぱい遊ぼうね、パパって言ったらいいんだよね」

「それって、爽太君…？」

「うん。そうみたい。一歳の俺、その夢の子にそっくりだったって」

「…」

「へえ…。なんか、不思議な夢」

「でさ。そのころ、父さんは癌で、もうすぐ死ぬって時だったらしいんだけど、夢のその子といるんなこととして遊ぶ空想を、していたらしくって…」

「うん」

「それ、全部叶ったって言ってたよ。だから、俺が奇跡を起こした

「んだって言うんだよね」

「爽太君が？」

「そ。俺のおかげで、がん細胞が消えたって…。いや、そう言われ
ても、身に覚えはないんだけどさ。母さんなんて、神様が遣してく
れた天使だとか言ってた時があつて。つてか、俺人間だし…」

「でも、二人にとつては、天使なんだよ。きっと、今でも…」
「ええ？なんか変なの」

「そうかな。私にも天使だけどな…」

「誰が？」

「爽太君だよ」

「え?!なんで?!」

「私のこと助けてくれた時、天使に見えたもの」

「ええええ?だから…。俺、頭にわつかもなければ、羽もはえて
いないって…」

「あはは。そうだけど。でも、羽も見えた気がするよ」

「錯覚。やばいよ、それ。まじ、他の人には話さないでね」

「うん…」

「天使か…」

石段に腰を下ろし、爽太君がつぶやいた。

「俺が天使なら、くるみさんは何かな…」

「堕天使?悪魔?」

と、冗談を言つと、黙つて、爽太君はこつちを見て、

「女神」

と、真面目な顔でそう言つた。

「はあ……?」

「人魚…。う……ん。やつぱ、天使?」

「なんか…、馬鹿にしてる?」

「してないよ」

「どう考えても、女神はないよ」

「うゝん。でも、一緒にいて、こんなに安らぐ人っていないんだよね。だから…」

安らぐの…？私？

「じゃ、毛布？こたつ。ストーブ…」

「えゝゝゝ？私暖房器具なの？」

「あはは…。だって、一緒にいてあったかいから…。あ。暖炉に火鉢、焚き火つてのもありかな」

「もうゝゝゝ！ひどいなゝゝ」

「あははは…」

爽太君は、目を細めて笑った。笑うと目が細くなって、たれ目になる。そこが可愛いんだなって改めて思う。

家に戻ると、瑞希さんと圭介さんは、もう帰っていた。

「あれ？なんで二人で帰って来たの？お前デートは？」

と、圭介さんが不思議そうに聞くと、

「別れちゃいましたゝゝゝ！」

と、爽太君は、おちゃらけて言った。

「えゝゝゝゝ？！もう？！」

圭介さんが驚いていた。

「あら、早かったのね。この前よりも続かなかったわね」

瑞希さんは意外と冷静だった。

「予感的中…」

ぼそつて圭介さんが、そう言うと、

「え？そんな予感してたの？」

と、爽太君が、驚いていた。

「ま、本当の相手が現れるから、そのうちにな…。だから、焦るこ

「とはないよ」

圭介さんは、爽太君の背中をぽんぽんとたたいて、慰めていた。

「うん。焦ってないよ。しばらくは、一人身でいいやって思ってたところ」

「そうね。そのうちに、あ、この人が俺の求めてた人だった。って気づくことがあると思うし…」

瑞希さんがそう言うと、

「気づく？ああ、出会って？」

と、爽太君は瑞希さんに聞いた。

「出会っているかもしれないけど、気づいてないかもしれないし…ね」

瑞希さんは、微笑みながらそう言った。

「え？何それ？」

爽太君は、目をまんまるくした。

「いいのいいの。気にしないで。さて、夕飯の準備をしようかしらね。あ、くるみさん、手伝ってもらってもいい？」

「はい…」

キッチンに向かう時、ちらりと爽太君を見ると、まだ、爽太君は首をかしげて、考えていた。

瑞希さんは、何が言いたかったのだろう…？

6 爽太君の誕生日

爽太君と圭介さんは、しばらく仕事が落ち着いていたのか、夜早めに帰り、ご飯を食べ、家でちゃんと寝るといふ、普通の生活をしていた。

爽太君が、早めに起きた日には、一緒にクロの散歩に海まで行つた。ついこの間ここで、死のうとしたなんて信じられない。穏やかな海が広がっていて、それは私の心も同様だった。

爽太君の隣にいることも、れいんどろっぷすで働いていることも、全部が穏やかで、幸せだった。

「爽太君やみんなと、こうやっていられるだけでもいいかな……」
そんなことを感じながら、毎日を過ごしていた。

粗大ごみも、いろんな片付けも、爽太君が2回も手伝いに来てくれて、すんなりとは運んだ。

そして、いよいよアパートを引き払おうと、日曜にまた、爽太君が車を出してくれたのだが、アパートを出たところで、ばったりと、稔に会ってしまった。

「くるみ！」

「稔……？」

「何回か来たんだよ。メモも入れておいた。なんで連絡よこさないんだよ」

「……？」

なんで、連絡しなくちゃいけないのか、こっちが聞きたい。

「何か用？」

と、無表情にそう言つと、稔は爽太君のほうをじろつとにらんでから、

「連絡先、何も聞いてない」

と、少し不機嫌そうに聞いてきた。

「なんで、連絡先を教えなくちゃならないの？」

「そりゃ、いきなり携帯はつながらないし、アパートにはずっといないしで、心配するだろう」

「会社辞める日に、言っただじゃない。住み込みでバイトしてるって」

「…なんの？」

「なんのって、カフェでバイトしてるの」

「変なところじゃないんだろうな？」

「何が言いたいなの？」

「あいつも心配してる」

「あいつって…、梨香？」

「そうだよ。相当自分を責めて、別れようって俺にも言ってる。く
るみの人生、狂わせたんじゃないかって…」

「……。そんなこと言われても…。私が悪いわけじゃないよね？」

「そりゃ、俺らのほうが悪かったけど、でも、こんなにいきなり忽然といなくなったら、誰だって心配するだろう？」

「もう、彼女でもないし…、友達でもないのに…」

「くるみ。俺はいいよ。憎まれるようなことしたよ。でもあいつは、何も悪くない」

「……」

胸が苦しくなった。私はぎゅって唇をかんだ。そうしないと泣きそうだったからだ。

なんで私が責められるのか。でも、稔と梨香を憎み、思い切り苦しめてやろうと思ったのは事実。そのバチが当たったと言うのか。苦しませようとして、自分に跳ね返ってきたのか。

「あんた、おかしいんじゃないの？」

いきなり、爽太君は冷ややかな声で、稔に言った。

「え？」

稔は、誰かも知らない相手に言われたからか、腹を立てたようだ。

「お前誰だよ？部外者だろ？黙ってるよ」

「部外者じゃねえよ。くるみさんの家族みたいなもんだから」

爽太君はがんとして、譲らなかった。

「家族……？」

「あのさ、さつきから聞いてると、なんでくるみさんが悪者になってるのが、わかんねえ。あんた、くるみさんがどんなに苦しんだとか、わかってんの？」

「わかってるよ！くるみのことは1番」

「わかってないよ！わかってたら、別れたりしねえよ。ちゃんとそばについてやってるよ」

爽太君は、ものすごい怖い顔でまくしたてた。こんな爽太君は、初めて見た。

「なんで、お前に言われなくちゃならないんだ？何が家族だ。こっちのほうで、くるみとは長い付き合いで……」

「時間なんか関係ないよ。あのさあ、死のうって思うくらい苦しい思いしてるって、気づけなかったんだろ？」

「……」

稔の表情が変わった。

「恋人だったんだろ？なのに気づけなかったんだろ？てんで、くるみさんのことわかってなかったんだろ？」

「じゃ、お前はわかってるっていいのか」

「あんたよりはね」

「何がわかってるって言うんだよ」

「今、くるみさんがすんげえ辛い思いしてるのも、わかってるよ！あんたに責められて、泣きそうになってるのも我慢して。そんなの

もわかんねえの？なんで今になっても、くるみさんのこと責めるんだよ？あんたとその梨香さんって人が、別れようがくつつこうが、あんたたちの問題じゃん。それをなんで、まだくるみさんのせいにしてんの？」

稔は、黙ってしまった。でも、相当怒っているのか、こぶしが震えていた。

「爽太君…。いいよ。そんなに怒らないで…」

「でも…」

「いいの。本当にいいの…」

私は、爽太君がそこまで私のために、怒ってくれることが嬉しかったし、私の今の苦しみを、爽太君がわかってくれていることも嬉しかった。

爽太君の腕をぎゅってつかんだ。ぼろって大粒の涙が出た。悲しさや悔しさや、苦しみの涙じゃない。なんだろう…。きつと、嬉しくてだ。

その涙を見て、稔は慌てていた。稔の前では、本当に泣いたことがないから。

「……。くるみ…」

稔は何か言いたそうにしたけど、どうやら、言葉にならなかったようだ。黙って、そのまま稔は後ろを向いて、その場を立ち去った。

爽太君と私は、車に乗った。爽太君は何も言わずに車を発進させた。

しばらく走らせてから、

「ごめん。俺よけいなこと言っただけかな」

と、ぽつりとつぶやいた。

「ううん。嬉しかったよ。ありがとう」

にこって微笑んでそう言うと、爽太君も安心して、にこって微笑

んだ。

「私が、泣くの我慢してるのわかったの？」

「わかるよ、そりゃ…」

「そうなんだ…」

「え？普通わかるでしょ？」

「稔はいつも、わからなかったよ」

「すんげえ鈍感な人だよ。さっきも思ったけど」

「…そうだね。でも、男の人って、みんなそういうものだって思ってた」

「え？」

「父もそうだったし…」

「そうなの？」

「うん」

あ、そっか。瑞希さんが爽太君は、勘が鋭いって言ってたっけ。それでかな…。

「爽太君…」

「ん？」

「爽太君が怒ってるの見たの、初めて」

「あ…、やつちゃったよね、俺…。いつもあまり切れないんだけど、一回ぶちって切れるとあんなっちゃう。気をつけてるんだけどさ」

「でも…、かつこよかったし、頼もしかったよ」

「まじで？」

「うん」

「ほんと？俺、相当なおせっかいしたかもって、反省してたんだけど…」

「本当に、嬉しかったよ。嬉しくて泣いちゃったもん」

「あ…、あれ嬉し涙だったの？」

「うん」

「そうなんだ…」

「うん」

「……」

それきり爽太君は、何も言わずに、車を走らせた。

車内には、爽太君がかけた音楽が流れていた。ミスチルの歌だ。途中で「くるみ」が流れてきて、それを聞いて、また、なぜだか泣きそうになった。

あんなふうに、誰かが私のために怒ってくれたこと、初めてかもしれない…。

黙って、爽太君のあたたかい空気を感じ、江ノ島に帰ってきた。

ゴールドンウィーク、お店は忙しかった。

逆に圭介さんと、爽太君は暇そうだった。カレンダーどおりに休みもとり、爽太君は何回か、れいんどろっぷすの手伝いにも入っていた。

圭介さんかというと、家でのだんびりしたり、友達に会いに行ったり、お兄さんのところに行ったりしていたようだ。

忙しい連休を終え、落ち着いてきた週の火曜日の夜、瑞希さんはケーキを焼きだした。

「明日のれいんどろっぷすの定休日、夜、爽太と春香の誕生日パーティーするのよ」

「え？明日？」

「爽太の誕生日は、5月12日、春香が4月28日。春香には悪いんだけど、ゴールドンウィークに突入しちゃうと忙しくて、ついゴールドンウィーク明けてからの、パーティになっちゃうのよね」

「そうなんですか…。あ、じゃ、何かプレゼント…」

「そんなに気を使わないで。お祝いと一緒にするだけでも、喜ぶと思うし」

「でも…。明日の夜からですよ。私昼間、買い物に行ってもいいですか？」

「ええ」

「じゃ、藤沢にでも行ってきます」

「明日はね…。春香、彼氏も呼んだらしくて…。ああ、圭介が見ものだわ」

「え？」

「ふふふ…」

瑞希さんは、意味深な笑いをした。

「誕生日に、彼氏や彼女を呼ぶの、初めてだし。あ、そういえば、爽太、誕生日の時って彼女いないのよね…」

「今回もですね」

「ねえ。寂しいっていうか…。ま、しょうがないか」

「買い物帰ったら、お手伝いしますね。あ、藤沢で何か買うものあったら、言ってください」

「ありがと。そうね…。天井からリボンでもぶら下げるか、くす玉つていうのも、いいかしらね。あ、でもそういうのは、圭介が買つてきそうだね。お祭りや、パーティ、大好きなのよね」

「へえ…。なんかそんな感じしますよね」

「くるみさんの誕生日はいつ？」

「8月30日です」

「あら…。圭介も8月生まれよ。じゃ、一緒にパーティできるわね。8月にやりましょうね、盛大に」

「はい。ありがとうございます」

「あ！面白いものがあるのよ。リビングの本棚に…。待っててね」
そう言うと、瑞希さんはいったん、リビングにあがり、またすぐに戻ってきた。

「誕生日大全。だいぶ前に買ったんだけどね。えっと、8月30日……」

瑞希さんは、分厚い本をめくりだした。

「あった。表情豊かで勤勉。愛情深い」

「え？当たってないかも……」

「そう？」

「あの、見せてもらってもいいですか？」

「はい、どうぞ」

読んでみると、ああ、「隠された自己」は当たってる……。『家族愛に縁がない傾向が強いので、愛情表現が苦手です』まさに、これ……。

「当たってますね、やっぱり……」

「そう？」

「あ！？」

「どうしたの？」

「いえ……。爽太君、5月12日生まれだよなって思ってた……」

「うん。そうだけど、相性占いのところに爽太の誕生日があった？」

「はい」

「あら！ソウルメイト?!」

「……」

「私と圭介もなのよね」

「え？そうなんですか？」

「圭介は8月7日生まれ、私は3月27日生まれ。ソウルメイトなのよね……」

「へ……」

「そう、爽太とソウルメイトなんだ……」

「……。ソウルメイトって、なんですか？」

「さあ？その辺は私にもよくわからないけど……。何かしらね？」

「はあ…」

瑞希さんはまた、キッチンに行き、片付けしだした。私もあとから続き、キッチンの片付けを手伝った。

「ソウルメイトってよくわからないけど、でも、そういうの関係なしにしても、人と人の出会いって奇跡だと思わない？」

「え？」

「出会いで人生が変わったり、ここで会わなかったら、私の人生まったく違ってた…みたいないな」

「はい。そうですね。私も、海で爽太君に出会わなかったら、ここにはいなかったし…」

「っていうか、この世にもいなかったかもしれない。」

「出会いって大切だから、お店で会うお客さんもね、大事なのよね。一期一会というしね」

「はい…」

瑞希さんの言ってることが、心にしみていくような気がした。

翌日、私は春香ちゃんと爽太君のプレゼントを買いに行った。

春香ちゃんには、可愛いエプロン。これをつけて、ケーキを焼いて欲しいなって思ってた。そして、爽太君へのプレゼントは、どれにするか迷いに迷った。

「服の趣味わからないし、何が欲しいかもわからないし…」

悩んで、悩んで、悩んだあげく、ガラスで出来たイルカの置物を見つけ、それを買った。

イルカ、好きだって言ってたし、部屋に飾ってもらおう。あ、そういうえば、爽太君の部屋、入ったことないな〜。

春香ちゃんの部屋なら、ときどき春香ちゃんが、お化粧を教えると言つので、教えてみたり、二人で洋服を買いに行った日に、ファッションショーをしてみたりするので、入ったことがあるんだけど

…。

二人のプレゼントを持って、私はれいんどろっぷずに帰り、瑞希さんの手伝いをした。

途中から、爽太君のおばあちゃんが来て、お料理を手伝っていた。そのおばあちゃんはどうやら、圭介さんのお母さんで、瑞希さんのご両親もプレゼントを持ってやってきて、いろいろと準備を手伝い始めた。

そのうちに、瑞希さんの弟さんとその奥さん、それに二人のお子さん、つまり爽太君の従兄弟もやってきた。爽太君や、春香ちゃんより年下で、まだ、高校生だと言っていた。

それから、圭介さんの弟さんも奥さんと一緒に来た。その間に生まれた子は、まだ、小学生らしい。

親戚一同が集まった…という感じた。すごいな。みんなして誕生日祝いにつけちゃうなんて。

「何かっていうと、パーティ好きで集まる連中なのよ。私の兄や、圭介のお兄さんは、仕事で来れないけどね。後の二人は、暇なのよね、きつと」

そう瑞希さんが、キッチンでこっそりと教えてくれた。

今日の主役である、春香ちゃんが帰ってきて、1時間ほどして、圭介さんと一緒に、爽太君も帰ってきた。みんな揃ったところで、「爽太、春香ちゃん、お誕生日おめでとう！」

という、圭介さんのお父さんの一声で、みんな乾杯をした。

「おめでとう〜！」

みんなは、口々にそう言って、爽太君と春香ちゃんに、プレゼントを渡しにいった。私も、春香ちゃんにプレゼントを渡した。

「ありがとう〜」

と、春香ちゃんはいつもの、明るい笑顔で、受け取った。

それから、一つずつ丁寧にプレゼントを開けていった。爽太君もプレゼントを開けていた。

私は少し恥ずかしくて、あとで、プレゼントをこっそりあげようか、それとも、今のほうがいいか、迷っていた。

だが、開けたプレゼントにみんなが反応をし、喜んだりからかったりしているのを見て、やっぱりあとであげることにしようと、爽太君にあげるプレゼントを、自分のエプロンのポケットにしまった。みんなで、わいわいと話をしたり、食べたり飲んだりして、そのうちに、

「じゃ、そろそろ帰るね。今日はごちそうさま、瑞希さん」と帰っていった。

「さ、後片付けしましょうか」

瑞希さんはそう言うと、片付けを始めた。瑞希さんのお母さんはその場に残り、片付けを手伝っていて、お父さんは、圭介さんとまだ、れいんどろっぶすのカウンターで話し込んでいた。

春香ちゃんの彼氏は、結局来ていなかったが、

「遅くなって、あ、終わっちゃった？」

と、みんなが引き上げてから、ひよっこりと顔を出した。どうやら、自分の店を閉めてから、来たようだ。

「あら、いらつしやい。ちよつとまだ、食べるもの残ってるし、ケーキもとつてあるの。食べてって」

と、瑞希さんは一つのテーブルの上を片づけ、そこに並べた。

「誕生日おめでとう、春香」

と、茶髪で、耳のかたほうにピアスをあけた、真っ黒に日焼けした春香ちゃんの彼氏が、春香ちゃんにプレゼントを渡していた。

「ありがとう」

春香ちゃんは、それを受け取り、嬉しそうに開けていた。

それをカウンターの席から見ていた圭介さんは、複雑そうな顔をしていた。

「俺も、なんか手伝おうか？」

爽太君は、どうやら、手持ち無沙汰なのか、キッチンに来てそう言った。

「あら、主役なんだからいいのよ。奥で休んでいたら？」

「うん。じゃ、そうする……」

爽太君は、リビングに上がっていった。

片付けが終わり、

「くるみさん、お疲れ様。もう休んで」

と、瑞希さんは言ってから、

「お母さんもありがとうね」

と、瑞希さんのお母さんにお礼を言った。

「じゃ、帰るわね。お父さん、帰るわよ」

「ああ、じゃ、圭介君、瑞希、またな。それと、爽太！うちにも遊びに来いよ。春香ちゃんもな」

と、瑞希さんのお父さんは優しく笑って言った。

「おじいちゃん、おばあちゃん、今日はサンキュー」

「おじいちゃん、おばあちゃん、今度遊びに行くね」

爽太君と、春香ちゃんは二人を見送りながら、そう言った。

瑞希さんのご両親が帰って行き、れいんどろっぷすには、春香ちゃんの彼氏だけが残っていた。

「さてと……。俺、先に風呂に入ってもいいかな？」

圭介さんが、誰ともなくそう聞くと、

「いいわよ」

と、瑞希さんが答えた。

「春香、お母さんたちもう、リビングで休むから、あとはよろしく

ね」

瑞希さんは、春香ちゃんと彼氏だけお店に残し、リビングへと上がっていった。私と爽太君も、あとからついていった。

爽太君は、

「今日はサンキュー」

と、瑞希さんに言ってから、プレゼントを全部抱えて、2階へと上がっていった。

「私も、部屋に行つて、休んでいいですか？」

「もちろんよ。お疲れ様。ゆっくり休んで」

「はい」

2階へ上がり、エプロンを取り、エプロンのポケットの中のプレゼントを持って、爽太君の部屋のドアをノックした。

「はい？」

爽太君が、中から返事をした。

「くるみです。あの、今いいかな、ちょっと……」

ガチャ……。ドアを開けて、爽太君が、

「いいよ。何？」

と聞いてきた。

「これ……。さつき、渡しそびれちゃて。プレゼント……」

「え？」

「お誕生日おめでとう」

爽太君は、少し目を丸くしてから、

「あ、ありがとう」

と、プレゼントを受け取った。

「開けてもいい？」

「うん……」

「あ、ここじゃなんだし、中に入つて」

「え？」

爽太君はそう言うと、部屋の中に入っていった。私も、ちょっと躊躇したものの、爽太君のあとに続いて、ドキドキしながら中に入った。

爽太君の部屋は、濃いブルーで統一されていて、鯨やイルカの写真のポスターが貼ってあった。それから、何枚かの海の写真。なんだか、部屋全体が海のイメージ…。まるで、海の中にいるかのような、そんな部屋だった。

「わ、イルカ？」

爽太君は、私があげたプレゼントを開けていた。

「あ…。うん。イルカ、好きだって前に言ってたから」
「ありがとう。大事にする」

爽太君は、そう言っただけで微笑んだ。私は、なんだか、照れくさくなつた。

「海、好きなんだね。たくさん海の写真が貼ってあるし…」

「うん」

「海のDVDもあるんだ」

「うん」

爽太君は、うんと言わなかった。ベッドに座ったまま、こっちを見ている。

「えつと…。じゃ、私そろそろ部屋に戻るね」

「え？もう？」

「うん…。疲れてるでしょ？」

「ううん」

「でも…。悪いから…」

「何が？」

「何がって、長居したら…」

「なんで？」

「なんでって…」

「なんだか、爽太君は目がとろんとしていた。」

「酔ってる？ けっこうお酒飲んだの？」

「俺？」

「うん」

「そうでもないけど」

「そうかな…。あ、じゃ、本当にもう戻るね。おやすみ」

「もうちょっと、いてよ」

「……」

「なんだか爽太君は、いつもと違う雰囲気だ。」

「これ、ほんとありがとう」

「まだ爽太君は、イルカの置物をにぎっていた。」

「あ、うん」

「そんなに気に入ってくれたのかな。」

「嬉しいや」

「そう？」

「そんなにイルカが好きなのかな。」

「……」

「爽太君は、また無言になり、黙ってこっちを見ていた。」

「あの…」

「部屋の真ん中で立ちすくみ、どうしようかと思っていると、」

「なんか、DVDでも観る？ このへんの海のやつ、すげえ綺麗だよ」と爽太君が、言ってきた。

「あ、うん」

「爽太君はDVDをセットして、テレビをつけた。それから、またベッドに座った。」

「あ、ここに座って」

「爽太君は、自分の座っている場所の横に手をおいた。」

「……」

そうは言われても、抵抗がある。はい、わかりましたと、横に座るのがすごく恥ずかしい。

私は、爽太君が手を置いた辺りにいき、床に腰を下ろした。

「あれ？そこ？なんで？」

爽太君が、聞いてきた。

「あ、こっちのほうか、ほら…、ベッドによっかかれて楽になって…」

思いきりこじつけの、理由を言った。すると、

「あ、それもそうだね」

と、爽太君も床に座った。それも、私のすぐ横に…。ああ…、それが恥ずかしいから、横に座るのを避けたのにな…。

でも、私が恥ずかしがっているのをおかまいなしに、爽太君は、DVDの説明をしだした。どこの海の映像かとか、魚の名前を教えてください。

私は、そんなのちっとも耳に入らなかった。すぐ横にいる爽太君になんだか、ときどきしてて…。

こんなのは、初めてだ。ああ、きっと、なんか爽太君の雰囲気が違うっているからだ。

しばらくは、あれこれとしゃべっていた爽太君は、気がつくとも黙り込み、また私の顔をずっと見ていた。

「何…？なんか、私の顔、変？」

「うん。別に…」

言葉が少なくて、黙ってただ見ている。ああ、きっと相当酔っているんだ。膝を抱え、膝に頭を寄せ、私の顔を黙って見ている。

「あの…、どうしたの？なんか、いつもと違うよ」

「俺？」

「うん」

「別に……」

やっぱり、変だ。

「俺さあ……」

「うん……」

「……。変なんだよね」

「うん、だから、変だって……」

「いや、今じゃなくって……。最近の話」

「うん……?」

「変なんだよ。何がどう変かって言えないんだけど……」

「?」

「やっぱり、変なんだよね……」

「???」

さっぱり、わからなかった。何がどう変か説明してくれなきゃ、わからない。

「あ~~~~~~~~。変だ!」

いきなり、爽太君は、大きな声を出した。

「び、びつくりした……」

「ごめん」

「何が、どう、変……?相談に乗るけど……?」

「相談……乗ってくれるの?」

「うん」

「じゃ、聞いてもらおうかな……」

「うん」

爽太君は、またしばらく黙り込んだ。でも、私の顔でなく、どこか宙を見つめていた。

「あのさ……。くるみさん、経験ある?」

「え?どんな?」

「う〜〜ん。説明難しいけど。」「う、もやもやっして…」
「？」

「知らない間に、考えてて…」

「？」

「気になってて…」

「??」

「……。一晚寝れなかったりして…」

「??」

「でさ…」

「うん」

「幸せと、そうじゃないのと、交互にやってくる」
「????」

「わかる？」

「ごめん、わかんない…」

「やっぱり？」

「うん…」

「は〜〜〜〜」

「？仕事のことか悩んでる？」

「いや…。仕事うちこんで、忘れようとしてる」

「？」

「なんだろうな。なんでかな。ずっと、おんなじ顔ばっか、何度も頭の中で再生されてる…」

「顔？誰の？」

「……。それは言えないけど…」

「女の子…とか？」

「……」

一瞬、爽太君の顔が赤くなった。

「あ…。そっか。すごく気になる子がいる…とか？ああ、もやもや

つてして、一晚その子のこと考えると寝れなくなつて。頭の中からその子の顔が、離れない…のかな？」

「ああ。それ…。その通りです…」

「それって…」

なんか、見る見るうちに赤くなつていく爽太君の顔を見て、逆に私の顔から血の気が引くのを感じながらも、私は言つてしまつていた。

「恋、じゃないの？」

「ええ?!」

爽太君は、ものすごく驚いていた。

「え? そんなに驚かなくても…。だって、それ、誰が聞いたつて…」
「恋?」

「うん…」

「それは、やっぱりその人のことを、俺は好きだつてことだよね?」
「……。うん…」

うんとは言いたくなかつた。馬鹿だな、私…。こんな話を聞くお姉さんか、相談役になつてゐるなんて。

「……。わかつた…」

「うん…」

「あ…。誰とか、聞かないでね。まだ、俺の中でぐちゃぐちゃしてて…」

「聞かないよ…」

聞きたくないし…。

「俺の中で、その…、なんか葛藤つていうか。そんな馬鹿なつていうか、そんなのありかよつていうか…」

「そんなに驚くことだったの?」

「うん。多分…。その…」

「そうなんだ…」

誰だろう…。ああ、聞きたくないのに、気になるなんて…。でも、一番に浮かぶのは五月ちゃんだ。別れたのに、五月ちゃんの顔が浮かぶとか…。それは、驚くことだろうな、衝撃的なことだろうな…。

「やっぱ、もう少し俺、自分の気持ち整頓する…」

「？」

「でも…、やっぱり、聞いてて恋だと思う？」

「うん、多分…」

「そう…」

「うん…」

爽太君は、しばらく膝に顔をうずめていた。それから、

「片思いだ…」

と突然、ぼそってつぶやいた。

「え？」

「完全な…」

「そうなの？」

「どこをどうやって見ても、絶対に」

「なんで？わからないよ…」

「わかるよ。俺。そういうの鋭いっていつか…」

「……。直感？」

「うん」

「そっか…。でも、わからないよ、人の気持ちって変わるし。これから変わるかも…」

「それ、慰めてる？励ましてる？どっち？」

「え？えっと…」

「やっぱ、叶わない恋になりそう…」

「でも…、でもね。わからないってば。あー！」

「え?!」

「まさか、人妻？」

「ち、違うよ!」

「じゃあ、可能性ゼロじゃないよ。きつと」
と言いながら、自分はどうなんだって自分に聞いた。

爽太君が好きなくせに、こんなことを言ってる自分。これって、いい人でいたいから?それとも、なんなんだろう…。私が好きだなんて言ったら、困らせるから?もう、こんな関係もなくなっちゃうから?

「はあ…」

爽太君の口からもれたため息の音に、一瞬びっくりした。だって、私の口からもれたのかと思えたから。

「恋ってさ、本当に人を好きになるって、辛いことなんだな…」

爽太君は、ぼそってそう言った。

「でも、わからないよ。楽しいことになるかもしれないし…」

「もしかすると、お先真っ暗、ふられるかもしれないよね。こっぴどく…」

「それは…。その…、わからないけど…」

「そういう可能性もあるでしょ?っていうか、そっちの可能性のほうが大だよ」

「そんなに、爽太君から見ても、無理そうな相手なの?」

「うん」

「…誰?」

「聞かないでって言ったよね?!」

「うん。ごめん。聞かない!」

爽太君の顔が、本当に引きつったので、慌てて謝った。馬鹿だ。私。聞いてどうするつもり…?

「……。イルカ、ありがとう」

「え?うん」

「これ、どこに置こうかな。事務所のデスクが1番いる時間長いから、そこに置こうかな」

「うん…」

「ありがとう。これ見て、仕事頑張るよ」

「うん」

「それから、くるみさんのことも思い出し…」

「うん…?」

途中で爽太君は、固まってしまった。

「あ、やっぱ…」

「え?」

「なんでもない」

「?」

しばらくまた、爽太君は、頭をかかえてしまった。どうしたんだろ。本当に悩んでいるのか…。

「……。あのさ。今、言ってたことも、忘れてね」

「え?」

「なんか、酔ってる、やっぱり俺。すごい恥ずかしいこと言ってると思うし…」

「……」

「それに、すごい変なこと聞いてると思うし、それに、馬鹿なことしてると思うし…」

「……?」

「あ…。すんげえ馬鹿なことしてるんだよね。俺…」

「え?なんで?」

「もう、聞かないでくれる?俺、落ち込んできたや…」

「うん。ごめん」

「……」

「私、戻るね。おやすみなさい」

「うん。おやすみなさい」

爽太君は、少し顔を上げて、そう言った。
爽太君の部屋を出て、深いため息をつき、自分の部屋に戻った。

「馬鹿なのは私だよ、爽太君…」

いつまで、お姉さん続けるのだろうか。もしかして、一生…？
どんよりした気持ちで、お風呂に入った。それでも、どんよりとした気持ちは変わらないまま…。そのまま、部屋に戻り、ベッドに横になって、どんよりとしたまま、私は眠りについた。

7 爽太君の恋

翌日、朝、いつもの時間に目が覚め、一階に行くと、もう春香ちゃんのご飯を食べ終わり、コーヒーを持って海に行く準備をしていた。クロもついて行くようだった。

瑞希さんが朝ごはんを作ってくれて、それをカウンターで食べていると、爽太君が起きてきた。

「あ、おはよう」

にこって微笑むと、爽太君は少し、顔をひきつらせて、

「おはよ…」

と小さく、笑って言った。昨日の恋の相談事を、気にしているのかな？

爽太君はめずらしく、新聞をカウンターで読み出した。いつもは新聞なんて読まないのにな。

爽太君のご飯を瑞希さんが持つてくると、ようやく新聞をたたみ、ご飯を無心に食べた。そして、コーヒーを飲むと、早々と席を立ち、リビングのほうに行ってしまった。

「あら？爽太。今日は早くに出るの？」

「ああ。うん」

爽太君は、リビングからそう答えて、2階へと上がって行ってしまった。

その日の夜、7時過ぎになって圭介さんが、戻ってきて夕飯を食べた。

「最近仕事、あまり忙しくないのね。この時間にご飯食べに帰れるなんて…」

瑞希さんは、お茶を淹れながら圭介さんに聞いていた。

「うん。5月はあんまり、仕事入らなかったな」

「そうなの？あ、でも今日、爽太は？一緒じゃないの？」

「ああ。あいつね…。今日は何回もミスをしてて、やり直してばかり。徹夜にでもなるんじゃないの？」

「あら、めずらしくない？」

「体の具合でも悪いのかって聞いたら、元気だって言うし…。でも、たまにぼくってしてるし、ため息ばかりつくし…」

「え？そうなんですか？」

思わず、それを聞いて、私は口をはさんでしまった。

「くるみさん、もしかして何か聞いてる？」

「いえ…。何も…」

「相談ごととか、乗ったりしてるんじゃないの？よく…」

「ええ…。あ、でも、私は何も…」

ああ、なんて私は嘘をつくのがへたなのか…。

「5月病か？いきなりやる気がうせたか？」

圭介さんが、そう言うとき、

「しばらく、様子見て見ましようよ。ね？」

と、瑞希さんが微笑んだ。

私は、爽太君が恋をしてて、そうなっているんです…と本当のことを言っただけがいいのか、迷ったが、でも、爽太君は多分、誰にも知られたくないかもしれないし、言うのはやめようって思った。

それにしても、仕事は没頭して、忘れるようにしてると言っていたのにな…。仕事も手につかないほどに、その子のことを思っているのかな…。

…って、そんなことを考えては、またさらに落ち込んでいる私がいる。つくづく馬鹿だよな…。「相談にのるよ」なんて言わなきゃ良かった。

その日の夜、爽太君は帰ってこなかった。瑞希さんはお弁当を作

り、事務所まで届けに行つてあげていた。

事務所から帰ると、瑞希さんはリビングでテレビを観ていた圭介さんに、

「あれは、重症ね」

と告げていた。

「え？」

「かなり重症よ。相当へこんでるわね」

「仕事をミスしたからか？俺、そんなに怒ったりしてないよ」

「そうじゃなくて…」

「じゃ、何？」

圭介さんは、不思議そうに聞いた。瑞希さんは、少しだけトーンを落として、

「爽太、完全な、恋わずらいだわ」

と言った。

「え〜〜？！…！」

圭介さんは、大声をあげた。

「し〜〜。お店にお客さん居るのよ」

「あ、悪い！」

圭介さんは、両手を合わせて謝って、それから、

「でも、誰に？」

と、小声で聞いた。

「相手は知らないけど、ため息ばかりついてて…。いきなり訳わかんないこと聞いて来るし…」

「なんて？」

「恋つてさ、楽しいもんじゃないの？だって…」

「……」

圭介さんはしばらく、口を開けて放心状態になってから、
「爽太が？そんなこと？」

と聞いていた。瑞希さんは思い切り、顔を縦に振って、
「うん！」

と答えていた。

「でも、五月ちゃんとは別れたよね？じゃ、誰？」

「さあ？」

瑞希さんは、顔を横に振った。

「くるみさん、聞してる？」

圭介さんが、私に聞いてきた。

「いいえ……」

私も、顔を横に振った。

「私の勘が当たっていたら……」

といきなり、瑞希さんは言い出した。

「え？」

思わず私は、圭介さんと一緒に身を乗り出していた。

「やっと、気づけたってところかしら？」

「は？」

思わず、圭介さんと一緒に、私は顔をしかめた。瑞希さんはどうやら、何かを勘づいているようだった。でも、私と圭介さんには、さっぱりわからなかった。

「誰？誰？」

圭介さんは、興味津々。

「圭介も、爽太見てたら気づくわよ。わかりやすいから」

「え？」

圭介さんは、ちょっと考え込んでから、

「ふ……ん」

と何か、納得している様子だった。なんなんだろう？

翌朝、起きてれいんどろっぷすに行くと、爽太君がいた。

「おはよう。朝帰り？」

と、聞くと、

「うん」

とだけ言つて、さつさと2階に上がってしまった。

「…？」

どこことなく、様子が変な気がするが、疲れているのだろうと、あまり気にはとめなかった。

しばらくして、圭介さんが起きてきて、朝ごはんを食べだし、カラン…。いきなり、れいんどろっぷすのドアが開いた。

「あ…」

五月ちゃんが、そこには立っていた。

「すみません…。あの…」

「爽太なら、部屋にいるよ。呼んで来る？」

と圭介さんが、聞いた。キッチンの中にいた、瑞希さんも顔を出した。

「いえ、いいです。爽太君の誕生日のプレゼント持ってきただけなので…。これ、爽太君に渡してください」

と、五月ちゃんは、圭介さんにプレゼントを渡して、すぐにれいんどろっぷすを後にした。

「え？ちよつと？」

圭介さんは、少し戸惑っていた。

「圭介、今、渡してきたら？」

と瑞希さんに言われ、圭介さんは、2階へと上がっていった。

「あら…、まあ…」

瑞希さんは、少し困ったような表情を見せた。

「五月ちゃんは、爽太をあきらめられなかったのかしらね？」

「……」

複雑だ。もし、もしも、爽太君が好きなのが五月ちゃんだったら…？

もんもんとする気持ちを、どうにか追い払おうと、私は必死でれいんどろつぷすの掃除をした。頭をからっぽにし、何も考えないようにして…。

2時。お客さんが途絶え、瑞希さんとお昼を食べていた。そこに爽太君が来て、

「母さん、俺にも…」

と、ちよつと元気ない声で言った。

「はい、待ってて。今作るわね」

キッチンに、瑞希さんは入っていった。爽太君は、私の横に座ると、おもむろに、

「は〜〜」

と、ため息をついた。

「…大丈夫？」

と聞くと、

「え？何が？」

と聞いてきた。

「なんか、疲れてるみたい…」

「ああ。よく寝れなくて…」

「でも、もう事務所に行くの？」

「うん。次の仕事にとりかからなきゃ…」

「そう…」

瑞希さんが、爽太君のご飯を運んできて、話し出した。

「そういえば、今朝、五月ちゃんが…」

「ああ、父さんから、もらった。」

「そう…。誕生日、覚えてたんだね。五月ちゃん」

「うん…」

「なんだったの？中身」

瑞希さんがそう聞くと、

「さあ？開けてないから…」

と、無表情で、爽太君は答えた。

「あら？まだ？」

「いや、開けないし、返すつもりだし…」

「なんで？」

瑞希さんが、不思議そうに聞いた。

「え？だって、もう別れたのに、もらうの変じゃない？」

「五月ちゃんは、別れたくないんじゃないの？」

「え？」

爽太君が、驚いた顔をした。

「だって、まだ好きだから、プレゼント持ってきたんでしょ？」

「だからこそ、受け取れないじゃん」

「うん。そうね」

「は〜」

爽太君は、また、ため息をついて、

「あれで、終わったって思ったのにな。ビンタまでされたのに…」
と、つぶやいた。

「あら、ビンタ？痛そう〜。私だって爽太にビンタしたことないのに」

「あ…」

爽太君は、しまったって顔をしていた。

爽太君は、それから黙々とご飯を食べ、コーヒを飲んで、さつさと事務所に戻って行った。

「悩みすぎね…」

「え？」

「当たって砕けたらいいのにね」

「…何にですか？」

「恋よ」

「爽太君の…ですよね？」

「そうよ。他に誰がいるの？」

「いえ…」

私に、当たって砕けろとも言ってるのかと思い、思わず聞きなおしてしまっていた。

当たって砕けろか…。もう、私にはそんな勇気、ないな…。

その日の夜も、爽太君は戻ってこなかった。

「ね、お弁当、届けにいつてもらっていい？」

瑞希さんが、聞いてきた。

「はい。持つて行きます」

私は、爽太君のお弁当を受け取り、事務所に行った。事務所のドアを開けると、ひっそりとしていて、部屋全体が暗い中、一箇所だけ明るかった。

部屋には、爽太君以外、誰もいなくて、爽太君のパソコンだけが、明かりを灯していた。

「爽太君…」

ドアの辺りで声をかけたが、まったく気づかない様子。少し近づいていき、

「爽太君。お弁当持ってきた」

と言うと、爽太君は、すぐくびつくりして、

「あ！ああ…」

と、目を真ん丸くして、こっちを向いた。

「ごめん、いつ来たの？全然わからなかった」

「今だよ。一人なの？爽太君」

「うん。みんなもう、帰ったよ。最近仕事も、落ち着いてるから」
「そうなんだ」

「お弁当届けに来てくれたの？ありがとう」

「うん…」

お弁当を、爽太君は、デスクに置いた。そのデスクには、ガラスのイルカがちょこんと乗っかっていた。

「あ、イルカ、ここに置いてくれたの？」
と聞くと、

「うん」

と、爽太君は、目を細めてうなづいた。なんだか、元気がないよう
に見えて、

「どうしたの？元氣ないね」

と聞くと、

「寝不足だからかな？」

と、また力なく笑って答えた。

「大丈夫なの？相当、悩んじゃってるの？」

「え？」

「なんか、最近様子おかしいから」

「ああ…。うん…」

爽太君はそう言つと、黙り込んだ。私は、爽太君の隣の席に座つ
て、

「あの…、変なこと聞いてもいい？」

と、勇気を出して聞いてみた。

「え？」

「爽太君の好きな人…、五月ちゃん？」

「…違うよ。なんで？」

「あ…。なんとなく、もしかしてって思ってた…」

「違うよ。五月ちゃんとは、別れたし…。あ、プレゼントも今日、お店に行って、返してきた」

「え？」

「コンビニ終わる時間聞いて、さっきさ…。店から出てきた五月ちゃんに」

「五月ちゃん、どうした？」

「別に…。何も言わずに、さっさとそのまま、帰っていったよ」
「そう…」

爽太君は、手にガラスのイル力を持って、ころがしながら、

「なんで五月ちゃんだって思ったの？」

と、もう一度聞いてきた。

「なんとなくだよ。ただ、もしそうなら、五月ちゃんまだ、爽太君のこと好きみたいだったから、爽太君、悩む必要ないかなって思ってた…」

「そっか…」

「ごめん。勝手にそんなこと思って…」

「うっん…」

爽太君は、自分の手に乗せたイル力を見ながら、

「あのさあ…」

と話し出した。

「もし、もしだよ。もし、五月ちゃんだったとして、それで、また、五月ちゃんと付き合いだしたとしたら、喜んでくれてた？」

「え？私が？」

「うん…」

「そりゃ…。どうかな？」

「…どうって？」

「うーん、だって、この前まで一人身どおし、仲良くやろうって
言ってたでしょ？私だけ一人身じゃ、寂しいし…。ずるいって思う
かも…」

「ああ。そっか。そうだよな。そんなこと俺、言ってたよね」

「あ、忘れてたの？」

「うん。ごめん」

「そうか…。忘れてたか…」

「なんか、忘れられてたことに、がっくりした。やっぱり、私はそ
の程度の存在なのかな。」

「でも、五月ちゃんじゃないよ」

「……」

「なんだか、何も答えられなかった。相手が五月ちゃんだろぅが、
誰だろぅが、同じだ。」

「じゃあさ、じゃあもし、俺が…」

「ごめん！」

「思わず、私は謝っていた。」

「え？」

「もう、駄目だ…」

「え？何が？」

「私、聞き役駄目みたい。相談に乗るよなんて言っておきながら、
ごめんね。なんだか、ちょっと辛いかも…」

「え？」

「爽太君の顔がみるみるうちに、申し訳なさそうな、そんな顔にな
っていった。」

「ごめん、俺のほうこそ…。なんか、俺の相談事ばっかして…」

「ううん。ううん…。。」

「涙が出そうになったが、必死でこらえた。」

「俺、そういえば、くるみさんの悩みとか、そういうの聞いたこと

ないね」

「え？」

「今まで、そつとしておいたほうがいいのかなんて思って、聞かなかった。ほら、あまり聞かれても嫌がるかなって思ってたさ。でも、もし何か辛いことがあったら、話してくれてもいいよ。あ、言いたくなかったら、無理して言わなくてもいいし…」

「うん。ありがとう…」

「あの…、稔って人のことも、もし、俺でよければ、いろいろと話してくれて…」

「稔は…。稔とはもう終わってるし…」

「もう、辛いなの？」

「……。うん…」

「…稔って人が言ってた、梨香さんって？」

「私の親友だったの」

「え？」

「会社で、1番仲よくて、いろんな相談に乗ってくれてた。稔の話もしてた。プロポーズされたことも…」

「それで？」

「3ヶ月前から、稔は梨香と付き合いだしたって…。だから、別れてくれたって…」

「何それ？じゃ、親友の彼氏、取っちゃったの？その人」

「…彼も親友も、それに仕事もいっぺんに失って、稔も梨香も、憎んだよ。もし私が死んだら、二人は、罪悪感を一生背負いながら、生きるのかって…。そして、苦しめばいいってそう思った」

「……」

「ひどいでしょ？ひどい女だね。私…」

「え？なんで？ひどいのは、梨香って人でしょ？くるみさんは何も悪くないよ」

「…そんなことない。だって、もしかしたら、梨香はずっと、稔が好きだったかもしれない。でも、ずっとそれを隠して、私の相談を聞いていたのかもしれない。それって、辛いことだよ…」

「でも、そうだとしたら、騙してきた事になるんじゃないの？」

「言えなかったのかもしれない。ずっと…」

「でも、付き合いたしたんでしょ？稔と梨香って人」

「……」

ポタ…。涙が出た。

「あ、ごめん。俺、なんか思い出させてるね、辛いこと…」

「ううん。違うの…」

ポタポタ涙が、止まらなくなった。

「梨香ね、優しい子なの。それを1番知ってたのに…。私、私だけが苦しんでって、梨香を恨んだ」

「……」

「爽太君の恋の相談、聞いてて辛い思いをしたみたいに、梨香も、ずっと苦しんでいたかもしれないのに。もしかしたら、私よりもずっと…」

「え？」

「稔だって、悪いわけじゃないの。稔が私をわからなかったんじゃないって、私がずっと素の私を見せなかったの。強がって、絶対に泣かなかったし。それに、私はいつでも、自分のことばかりで、稔のことなんて、全然考えてなかった」

「……」

「ひどいのは、私のほうだよ…」

ポロポロ涙が落ちて、顔をあげることもできなかった。

「……」

爽太君は、何も言わなかった。

「私ね…、母にずっと、あんななんて、生まれてこなければ良かったの…、言われて育ったの…」

「…え？」

私は、なんでこんな話まで、爽太君にしているのだろう。でも聞いて欲しくて、私はそのまま続けていた。

「私がいたから、母は離婚ができなかったの。父には不倫の相手がいって、それを知っていながらも、別れられなかったのは、私のせいだって…。私さえいなければ、幸せになれたって…」

「……」

爽太君が、息を飲み込んだのがわかった。

「父は私には優しくかった。ううん…。私がいい子にしていたら、優しくかった。一回だけ反抗したら、すごく怒って、お前もかって怒鳴られて…。私、嫌われるのが怖くて、ずっといい子でいた」

「……」

爽太君は黙って、息をひそめて聞いていた。

「誰にも愛されてなかったんだ。ずっと…。だから、私自分自身も生まれてこなかったらよかったって思ってた。自分が大嫌いで、ずっと、大嫌いで…」

「……。俺」

爽太君が、口を開いた。

「ごめん。えらそうに、稔って人に、くるみさんのことわかってるなんて言って…。俺も、全然わかってなかったよね」

爽太君はそう言うと、じっと私の顔を見て、

「俺は、ずっと両親の愛を思い切り感じて、生きてきた。だから、くるみさんの思いは、多分わかってあげられない」

と真剣な顔で、話し出した。

「え？」

「でも、うちの親も、俺や春香も、くるみさんに愛を注ぐことは出来る…」

「……」
「生まれてこないほうがいい命なんて、この世にないよ」

「……」

「どんな命も尊いつて思う。それに…」

「うん…」

「生まれてきてくれなきゃ、こうやって出会えなかったし」

「……」

目頭が熱くなった。ぎゅって目をつむって、下をまた向いた。

「俺、くるみさんの両親には感謝だな」

「なんで？」

思わず、顔を上げた。そのとたん、我慢してた涙が、こぼれ落ちた。それを見て爽太君は、そっと、涙をふいてくれながら、

「だって、生んでくれなきゃ、こうやって会えてないから…」
と微笑んだ。

「……」

どうしよう…。思い切り声をあげて、泣きたいくらいだ。

「なんだかな…。俺の悩みなんてすんげえ、ちっぽけだったや」と、爽太君は、笑った。

「だってさ、好きな人がいる、会えてる、それだけで、本当は幸せなことなんだよね。そりゃ、相手が俺を思ってくれたら、もっと嬉しいけど…。でも、いいや、もう」

「え？」

「いいや。いてくれるだけでも、いいや…」

「……」

爽太君が、あまりにも無邪気にそう言って、微笑むので、私もなぜだか、一緒に微笑んでしまった。

「そうだね…」

そうつぶやくと、また、爽太君は笑った。

「あ…。俺の相談聞いてて、辛かったんでしょ？ごめん。もっと早くに気づけばよかった」

「うん…」

「俺も、俺のことしか考えてないよね。ごめん」

「いいよ。だって相談に乗るって言い出したのは、私のほうだし…」

「無理しないでよね」

「え？」

「俺の前では、無理しないで。素のままで全然オツケーだから」

「…うん。でもね、爽太君の前では、強がってみせたりしてないよ。稔とは全然違うの。なんでかわからないけど、一緒にいて素でいられて、楽なの…」

「そう？俺もそうだな…。くるみさんといても緊張しないし。素でいられる」

「…不思議だね？」

「うん」

爽太君は、すっかりさつきまでの、暗い表情から抜けだした様子で、明るく優しく微笑んでいた。

「あ、なんかいきなりお腹、すいてきた。弁当食べてもいい？」

「お茶淹れようか？」

「うん。ありがとう」

給湯室に行き、ポットにお湯を入れ、戻ってきてお茶を淹れた。

爽太君は、ばくばくとお弁当を食べていた。

「くるみさんは、もう食べたの？」

「うん。もう食べたよ。あ、そろそろ帰って、お店の片付け手伝わなくちゃ」

「あ、もうそんな時間？」

「うん。じゃあ、仕事頑張ってね」

爽太君を励ますつもりが、逆に私が救われていた。爽太君の、
「生んでくれなきゃ、会えてなかった」

という言葉を、お店までの帰り道、私は反復していた。

会えてよかったって、思ってくれてるんだ。それが、例えば、家族のようなものだとしても…。それだけでも、幸せだ。

「好きな人に会えてる、それだけで幸せなことだよ」

うん、本当に。私は爽太君と出会えて、毎日会えてる…。それだけもう、幸せだ。

爽太君がくれた言葉を、一つずつ大事にかみしめながら、私は歩いていた。

そして、初めて、そう、生まれて初めて、私は親に感謝をした。

「生んでくれて、ありがとう」

生まれなかったら、会えなかったから。大好きな人に…。

ありがとうって思っただけで、私の心は愛でいっぱいになって、あつたかくって、嬉しくて、幸せで、満たされていた。

8 昔の彼女

翌朝は、雨が降っていた。

散歩にいけず、うらめしそうにクロが、外を眺めていた。その横を傘を持ち、春香ちゃんは出かけていった。

「あれ？雨でも行くんですか？」

「雨でも彼は、サーフィンするみたいよ。ちょっと波があつていいんじゃないの？今日は風も強いしね」

「傘さして、見に行くんですか？」

「そう。健気でしょ」

驚いた。本当に春香ちゃんは、彼氏のことが好きなんだな。

「付き合つてどのくらいなんですか？」

「まだ、3ヶ月とか、そんなもんよ。あの子が想いをよせて、よく朝通つてたみたい。クロを連れてね。それで、向こうが付き合おうかつて言ってくれたようで」

「へへ。なんか、青春してますね！」

「ねえ。ドラマか、漫画みたいよね」

そんな話をしながら、二人で開店の準備をしていた。

8時ころに、圭介さんが起きて来て、すぐそのあとに爽太君も起きだしてきた。

「瑞希」。朝ごはん」

「ああ、はい。今準備するわね」

そう言つと、瑞希さんはさつさと二人の朝ごはんを作つた。

圭介さんと爽太君は、二人してカウンターに座り、朝ごはんをもくもくと食べた。

「うめ」。！」

と、嬉しそうに言つたのは、爽太君だった。

「あれ？お前調子戻った？」

圭介さんが、爽太君に聞いた。

「え？何が？」

「なんか、変だったじゃん。元気もなかったし、飯食ってもだんまりだったし」

「ああ。うん。もうすっきりしたよ」

「へえ…。そう」

圭介さんはそう言っていると、ちよこつと爽太君の顔をのぞいてから、またご飯を食べだした。

「良かったわね、調子戻って」

と、瑞希さんも爽太君の顔を覗き込み、コーヒーをカウンターに置いた。

「いつも元気なだけを取りえの爽太が、元気ないと、こっちが調子狂っちゃうし」

「ええ？何それ。元気だけが取りえってひどくない？」

「あはは…。いいじゃない。それが何より1番でしょ？」

「うゝゝん。そうだけどさ。なんか他にもあるでしょ？」

「そうね…。イケメン？」

瑞希さんがまた、爽太君の顔を覗き込み、そう言っていると、

「げ。やめてよ。親に言われても嬉しくないし…」

と、爽太君は思い切り、嫌そうな顔をした。

「あらゝゝ。悪かったわね。じゃ、くるみさんに言ってもらえたら喜んじゃうの？」

「え？」

いきなり、私の名前が出たので、テーブルセッティングをしながら、私はうるたえてしまった。

「……」

爽太君は、何も言わずにご飯を食べていたが、
「くるみさんに、そういうこと言われることもないし、そういうの
ないし…」

と小声で、つぶやくように言った。

「まあね。くるみさんにも好みがあるだろうしね」

と、圭介さんが隣で言うと、

「そつえば、くるみさんの好みの男性って聞いたことないわ」
と、また、瑞希さんが私にふってきた。

「え？私ですか？」

焦って、顔がひきつった。もくもくと食べていた爽太君は、食べるのをやめて、振り返りこっちを向いた。

「えつと…。好みって言っても、あまりないかな」

「まあ、そういうものよね。好きになった人が、好みの男性って感じよね」

瑞希さんはそう言うのと、キッチンに入っていた。私も後に続いて、二人して下ごしらえを始めた。

圭介さんと爽太君は、食事を終え、リビングのほうへ入っていった。

「爽太、本当にすっきりした表情になってたわね」

瑞希さんが、二人がいなくなってから、そう言った。

「そうですね。元気出たみたいで良かったです」

「何かいいことがあったのかしら。例えば、好きな人に告白が出来たとか…。もしかして、両思いになれたとか…」

「…さあ？」

「昨日は事務所でどうだった？お弁当届けた時…」

「あ、途中から元気になってました」

「じゃ、もしかして…」

「…はい？」

「元気になれたのは、くるみさんのおかげ？」

「いいえ。違います。私のほうが逆に、話を聞いてもらって、いろいろと励まされて…。そうしたら、なんか、爽太君、自分の悩みなんでちつぽけだったって、元気になっちゃって…」

「へえ…」

「だから、私は何もしてないんです」

「そう…」

「はい…」

しばらく黙って、二人でスコーンを焼いたり、ジャムを作ったりしていたが、どうしても気になることがあり、聞いてみた。

「もしかして、瑞希さんは爽太君の好きな人、誰だか気づいているんですか？」

「どうして？」

「なんだか、そんな気がして」

「ふふ…。当たり前」

「え？ やっぱり？ でも、爽太君から聞いたわけではないんですよ？」

「うん。でも、まるわかりだから」

「五月ちゃん…、じゃないですよ」

「違うわよ。だって、プレゼントも受け取らなかったじゃない」

「はい…。返してきたって言っていました」

「好きじゃないのに付き合ってるって、見ててわかってたわよ」

「そうだったんですか？」

「そりゃ、そうよ。だって、いくら忙しくたって、好きな子だったら、少しでも会いたいな、声聞きたいな、せめて、メールしたいなって思わない？ 普通」

「はい。思います」

「でしょ？それに、好きな子なら、緊張はするかもしれないけど、でもね。デートだったら嬉しくて早くから起きて、準備したりとか、前の日からそわそわするとか…。それか、会えたら嬉しいからなるべく長めに一緒にいたいとか、そうなると思わない？」

「はい。そうなりますよね。特に付き合いはじめなら…」

「でしょ？それにね。好きな人っていうのは、無意識に目で追っちやったりとか、気になっちゃったりするでしょ？」

「ああ、はい。します」

「それとかね、相手が何に興味があるのかとか、そういうのも知ってたかったり…。なるべく一緒にいたいなって思うから、忙しくても時間とっちゃったり…」

「ああ、はい」

「好きな相手見ているときには、目が、こうなんていうの？ハート型になるっていうの？他の人を見るのとは、明らかに違ってたり…。相手の笑顔が見れただけで、嬉しかったり…」

「はい」

「相手が落ち込んでたり、悲しんでたら、すごく気になったり、心配したり…」

「はい」

「するでしょ？」

「はい、します」

「そういうのがね、爽太は、五月ちゃんにまったくなかったのよね」
「はあ…。ああ、そういえば、そうかな？」

「でね、私が見てたらある人には、そんな感じになっていたから…」
「え？」

「爽太の目が、ハートになってたり、いつも目で追ってたり、やけにその人という嬉しそうだったり、長い時間一緒にいられるよう

にしていたり…」

「へえ…。そうなんですか？」

「うん。忙しくて疲れてても、きちんとその人の用事には付き合ってたたり、っていうか、一緒にいられるのが、嬉しかったんでしょ
うね」

「……」

聞いていて、胸がちくちくしてきた。誰だかはわからない。私の知らない人かもしれない。でも、そういう人がいるんだな。

ちよつと、落ち込んで、私はうなだれてしまったが、あ、いけない…、瑞希さん勘がいいからばれちゃうって思って、必死で笑顔を作った。

それから、興味のあるふりをして、聞いてみた。

「私でも、爽太君見てたらわかりますか？その、爽太君が誰を好きか…」

「うん…。わかるんじゃない？」

「そうなんだ。私が見ても、わかつちゃうんですね。爽太君、そんなに顔に出ちゃうんですね」

「あら？わからなかった？例えば、五月ちゃんという、爽太、嬉しそうに見えた？」

「えつと…。なんかいつも、顔がひきつってました」

「でしょ？」

「あ…。そうか。好きなら、もっと嬉しそうにしますね」

「そう。ご飯がうまいって言うてるあの、無邪気な顔みたいに…。
顔に出るのよ」

「そうか…」

「落ち込んでるのも、一目瞭然だったでしょ？」

「あ、そういえば」

「ふふ…。ちょっと、注意深く見ていたら？誰を爽太が見てるのか、嬉しそうかとか、一緒にいたがるか、わかるから。多分、圭介でさえ、気づいてる」

「え？」

「ああ、そうそう。そんなに一緒にいるわけじゃない、春香まで気づいてた」

「ええ？」

「そうか。私が無頓着だったのか。あれ？でも、誰…？誰か、そんな女性、爽太君の周りにいたかな。お客さんかな…？」

11時になり、お店をあけたが、雨だったせいか、全然お客さんは来なかった。瑞希さんは、キッチンにいて、鼻歌を歌いながら、シンクの周りや、キッチンの道具を綺麗にしていた。

私は、いつもお客さんが来てもいいように、ホールにいた。私の足元には、クロがちょこんと座っていた。

「クロも知ってるの？爽太君の好きな人」

「く〜ん」

クロが顔をかしげた。

窓の外を見ると、雨の中、赤い傘をさした人が、一人こっちに向かっていった。

「あ、お客さんだ」

「カラン…。ドアを開け、お客さんが入ってきた。」

「いらっしやいませ」

「あ…。こんにちは。あの…」

「はい？」

「爽太さんは、今、いますか？」

赤い傘を傘たてに入れ、ハンカチでスカートを拭きながら、その人が聞いてきた。背が高く、すらっとしていて、黒いストレートの

髪を、横で一つに束ねていた。

「爽太君は、事務所の方だと思います」

「事務所？」

「駅からすぐのところにある…」

「いらつしゃいませ」

キッチンから、瑞希さんが顔を出してきた。

「あ、こんにちは、ご無沙汰してます」

「え？」

「私、爽太君と同じ中学だった、桂木です」

「ああ！桂木さん？」

「はい」

その人は、嬉しそうに笑った。

「今、就職活動をしに、東京に来てて…。親戚の家に、泊まらせてもらっています。今日は面接も何もないから、しばらくぶりに爽太君に会えたらなって思って、江ノ島まで来たんです」

「そうだったの？爽太、今、仕事なの。待って、携帯に電話してみるわ。お昼抜けられそうなら、こっちに来てもらいましょう」

「すみません。平日だし、大学に行ってるかとも思ってたんですけど…。もう、就職してたんですね」

「うん。うちのだんなの会社よ。すぐそこだから」

「すみません」

「いいの、いいの。そこ座ってて。あ、くるみさん、コーヒーでも淹れてあげてくれる？」

「あ、はい」

瑞希さんは携帯で、爽太君に電話をかけていた。

桂木さん…。もしかして、爽太君が好きだった人なのかな？そん

なことで、頭がいつぱいになりながら、コーヒーを淹れていて、思わずこぼしてしまった。

手に熱いコーヒーがかかったが、我慢して慌てて拭いた。それから、綺麗なお皿にカップを置き換えてから、桂木さんに、コーヒーを出した。

「あ、すみません。いただきます」

桂木さんは、丁寧に頭を下げてそう言った。

「あ！爽太！あなた、ちょっと店に帰って来れない？」

瑞希さんが、電話で話し出した。爽太君が、電話に出たようだ。

「あのね、ほら。中学で一緒だった桂木さん。そうそう。名古屋に引っ越した…。今来てるのよ。お店に」

「え……？」

ものすごい大声を出したようで、携帯からもろに爽太君の声が聞こえてきた。一瞬、瑞希さんは携帯を耳から離して、それから、
「あ？戻れる？じゃ、どうせだから、お昼一緒に店で食べたらず」と聞いていた。

どうやら、爽太君は、お店に戻ってくるようだった。電話を切ると、瑞希さんは桂木さんに、話しかけた。

「爽太、すぐに来るって。ちょっと待っててね。あ、なにがいいかしら、お昼ご飯。日替わりのランチでもいい？」

「はい」

桂木さんは言葉は少ないが、すぐくはきはきとものを言う人で、聞いていて気持ち良かった。

それに姿勢もよく、座っていても背筋がぴんとしていた。顔立ちも凛としていて、五月ちゃんとはまったく違った雰囲気の人だった。

10分も立たないうちに、爽太君はお店に来た。相当慌てて来たのか、スーツの半分は濡れてたし、ズボンの裾もびっしょりだった。

「あ…！」

爽太君は、桂木さんを見て、ただ、一言そう言った。

「爽太君、久しぶり」

桂木さんは席を立ち、爽太君を懐かしそうに見た。

「ひ、久しぶり…。こっちに帰ってきたの？」

「うん。就職活動で来たの。東京のほうに就職しようと思ってて、
「そうなんだ。じゃ、今はどっかこっちの方に泊まってるの？」

「親戚が横浜にいて、そこに泊まってるの」

「…そっか。え？いつまで？」

「あと、3日…」

「ほら、爽太、立ってないで、座ったら？あなたもランチでいいわ
ね？」

「あ、うん」

爽太君は、上着を椅子にかけて、桂木さんの前の席に座った。私
が、水を持っていくと、爽太君は、おもむろに私の顔を見て、

「あ…。桂木さんっていつて、あの…」

と、説明をしようとしていた。でも、私はそれをさえぎって、
「パンとライス、どちらにしますか？」

と、桂木さんに聞いた。

「ライスでお願いします」

と、桂木さんは答えた。

「爽太君は？」

と聞くと、爽太君は、

「俺も…」

とぼそって答えた。なんだか、バツが悪そうな顔をしながら。

「大盛り？」

と聞くと、顔を上げて私の顔を見ながら、

「うん。大盛り」

と、少し笑って言った。

私はキッチンに行き、瑞希さんの手伝いをした。二人の会話を聞きたくなくて、あまりホールのほうには、行かないようにした。

クロは、嬉しそうにずっと、爽太君の足元にいて、尻尾を振っていた。

キッチンでは、ハンバーグを焼く音や、私が野菜を洗う音がして、ホールでの声はあまり、聞こえてこなかった。そんな中、瑞希さんが私に言ってきた。

「前に言ってた、彼女よ」

「え？」

「付き合って、転校しちゃって、それっきりになった…。長いこと引きずってた女の子」

「あ、やっぱり、そうですね」

あ、やばい。声が沈んだし、表情も暗くなったかもしれない。

「東京のほうに勤めることになったら、また、会えるようになるんじゃないですか？」

冷静なふりをして、つとめて明るくそう言っていると、瑞希さんは、

「うーん。どうなのかしらね」

と、口元に笑みを浮かべながら、そう答えた。そして、

「桂木さんは、会いに来ちゃうくらいだから、まだ、思ってたのかな？ 爽太のこと」

と、つけ加えた。

「さて、完成。持っていてくれる？」

「はい」

トレイに乗せ、二人の席に運んだ。その時にも、極力二人の会話は聞かないようにした。

「お待たせしました」

と言って、さつさとお皿を並べ、さつさとキッチンに戻った。

でも、キッチンでの音が何もしなくなると、ホールでの会話が聞こえてきてしまう。

「スーツ着てると、本当に社会人だね。爽太君」

「え？そう？」

「うん、なんだか、間違えちゃった。背も伸びたね」

「桂木さんも、背、高くなった？」

「私？そうかな。ヒールはいてるからかも」

「あ、そうか…」

キッチンから瑞希さんは、カウンターに移り、私も横に座るように言って、二人でコーヒーを飲んだ。他のお客さんは誰も、なかなか来なかった。

カウンターに來ると、いやおうなしに、二人の会話が耳に入る。

「この辺は、変わらないね。全然」

「うん…」

「あとで、みんなに会う予定なの」

「みんな？」

「中3のときの仲良かった子。久しぶりなの、みんなに会うの」

「ああ。そっか…。俺もあまり会ってないよ。たまに、駅の近くでばったり会うくらいで」

「そうなの？」

「うん…」

「先生とか、どうしてるかな」

「もう、中学の先生、みんな入れ代わって、知ってる先生なんているかどうかわからないよ」

「そうなの？寂しいね。あ、クラス会はしてるでしょ？はがき来るんだけど、さすがに来れなくて…」

「俺も、けっこう仕事忙しい時と重なって行けてないよ」

「そうなんだ…。仕事忙しいんだ」

「あ、忙しい時にはね。今はそうでもないから大丈夫」

爽太君が、すごく気を使っているのがわかった。言葉も選んでいるようだし、いつもみたいな声のトーンでもない。それに、いつもなら、食べている時には、

「うめ〜!」

って喜んで、もくもくと食べてるし…。こんなに話をしながら食べることは、めずらしい。

隣で、どうやら、二人の会話を瑞希さんも聞いているようで、何も話をしてこなかった。

「もし、東京のほうに、就職できたら、しばらくは親戚の家においてもらう予定なんだ」

「親戚って、横浜の?」

「うん。だから、江ノ島も来やすいかも…」

「そうだね…」

「あの…」

「え?」

「爽太君って…」

「うん…」

「こんなこと聞いて、驚かないでね」

「うん。何?」

「彼女とか…今いる?」

「え?!」

どうやら、予想していない質問だったようだ。爽太君は、声を裏返していた。それを聞いた瑞希さんは横で、ふき出すのをこらえていた。

「あ…、うん。今はいない」

「そうなの？いないの？」

「うん。別れたばかりで…」

「え？そうなの？」

「うん。えっと…。なんていうか、俺、仕事忙しくてデートとか全然できなくて、それで…」

「そんなに忙しいの？」

「忙しい時にはね。いつもじゃないんだけど…。たまたま、この前までは忙しくて」

瑞希さんは横で、私の方を見て、目でやって笑った。爽太君のしどろもどろになってる様子が、面白かったんだろうか。

「じゃ、なかなか私がこっちに来て、会えないかな？」

「え？」

また、爽太君は、驚いていた。どう見ても、桂木さんは、爽太君のことを、まだ想っているとした見えない。それは、爽太君も気づいたんじゃないだろうか。でも、いちいち反応が大きくて、爽太君はどうも、困っているようにも感じられた。

「桂木さん…。桂木さんは、彼氏名古屋にいないの？」

「うん。いないよ」

「大学に、いなかったの？」

「いたけど…。もう別れたし。私は東京に行くって決めてたし」

「そうなんだ」

「それに…」

「え？」

「なんだか、ずっと爽太君のことが、忘れられなかったから」
「……え？」

爽太君の、今度の「え？」はかなり、低い声だった。

「彼女いないなら、また、付き合えないかな？私たち…」

「でも、もう何年も立ってて、俺も変わっちゃってるし…。付き合っても嫌になるかもよ」

と言う爽太君の言葉に、瑞希さんはあちゃーって顔をした。

「そうかな。話してても、変わってないって思うよ」

桂木さんが、そう言うのと、爽太君は黙りこんでしまった。

カラン…。お客さんが入ってきた。

「いらっしやいませ」

瑞希さんは立ち上がり、キッチンに向かった。

「いらっしやいませ。こちらの席にどうぞ」

と、私もお客さんに声をかけ、爽太君たちの話を聞くのは、やめに
して仕事をしだした。

水運び、注文を聞き、キッチンに行く。

その間も、時々視線の中に、爽太君の顔がはいってきたが、爽太君は、ずっと笑いもせず、ちょっと緊張した様子で桂木さんの話を聞いているようだった。

他にもお客さんが入ってきて、忙しくなり、私はもう完璧に爽太君たちを意識している場合ではなくなった。

それから、20分もたっただろうか。爽太君と桂木さんは、立ち上がった。

「あの、ご馳走様でした。おいくらですか？」

と、桂木さんは私に聞いてきた。

「あ、いいよ。俺のおごり」

と爽太君が言くと、

「いいよ、悪いよ」

と桂木さんが、お財布を出した。

「いいのよ。本当に桂木さん。今回は遠くから来てくれたんだもの。爽太のおごりで。また、就職決まってこっちに来たら、お店に寄ってね」

そう瑞希さんが言うと、桂木さんは少し顔を、曇らせて、

「今日はいきなり来て、すみませんでした。ご馳走様でした。それじゃ…」

と、丁寧にお辞儀をした。

「あ！爽太、駅まで送ってあげたら？」

と、瑞希さんが慌てて言うと、

「いえ、いいんです。私これから、友達と会う約束もしてるし」と、桂木さんは断って、

「じゃ、爽太君、元気でね。それと、うまくいくといいね」

と微笑み、お店を出て行った。

「うまくいくと…って、何が？」

瑞希さんが爽太君に、聞くと、

「なんでもないよ。それよか、ちよつとリビングで休んでから戻ると、カウンターの奥に行ってしまった。

その後、ぼつりぼつりとお客さんが来て、私も瑞希さんも会話をすることもなく仕事をし、やっと落ち着いたのは、2時過ぎだった。

「あ、お昼にしましょう」

カウンターに座り、二人でご飯を食べた。

「あれは、断ったのね…」

「はい？」

「ほら、付き合ってたって言われてたじゃない。それも、うまくいくといいねってことは、多分、俺には好きな人がいて…とか、片思いで…とか、告白もしてなくて…とかそんなことを爽太は、言ったんじゃないかしらね」

「するどいですね」

「あら、でも、そうとしか考えられない？」

「そうですね…」

「きちんと、そういうことを言わないと、桂木さんだってあきらめつかないじゃない？ちゃんと断れてよかったわよ。今まであれで、断りきれず、付き合っていたから。優柔不断が玉にキズなのよね、あの子は…」

「はあ…」

「でも、今までは、特に好きな子がいたわけでもないし、だから、付き合ってもいいかなって思っちゃったのかしらね」

「でも、あの桂木さんのことが、好きでひきずっていたんじゃない？」
「でも、今は違う。他に特別な人が、できたってことじゃないかしらね」

「本当に好きな人が…？」

「そうそう。やっとこ。やっとでもないか。あの年で現れたなら、早いほうかな。私なんて32まで現れなかったし」

「え？そうだったんですか？」

「そうよ。付き合ってた人はいたけど、すごい好きになった人って、圭介だけだもの」

「ええ？そうなんだ」

「あれ？くるみさんはいたの？」

「はい…。結婚も考えてた人が…。でも、仕事のほう選んじやいましてけど、その時には」

「そうだったの…。今は？その人とは？」

「もう終わりました。すっかり…」

「そう…」

「ご飯を食べ終わり、少し休んでいると、また、ちらりほらりとお客様が来た。どうやら、雨もやんだようだった。」

9 爽太君の相談相手

その日の夜、圭介さんは7時ころ家に帰り、ご飯を食べていたが、爽太君は一緒に戻ってこなかった。

「爽太は、また残業？」

「いや、あと1時間もしたら帰ってくるんじゃない？」

圭介さんは、そう言っていたが、1時間しても帰ってこなかった。

9時半過ぎ、お店の片付けも終わり、

「先にお風呂入って、くるみさん」

と瑞希さんに言われて、お風呂に入った。

お風呂からあがると、リビングで爽太君が、夕飯をもくもくと食べていたところだった。

「あ、お帰り。お疲れ様」

と言うと、爽太君は、少しだけ顔を上げて、

「ただいま……」

と答えた。そしてまた、もくもくとご飯を食べだした。

「爽太、食べ終わったら食器片付けておいて。お母さん、お風呂に入ってくるわ」

瑞希さんが、着替えを持って、リビングに来てそう言った。

「うん」

「あ、私が片付けておきます」

「あら、悪いわね。そうしてくれる？」

と言うと、瑞希さんはバスルームに行った。

「コーヒーでも淹れる？」

と聞くと、

「うーん、すぐに寝たいからいいや」

と、爽太君は答えた。リビングではテレビがついていたが、爽太君

は、まったく観ていなかった。

「圭介さんは？」

「部屋に行ったから、寝たか、パソコンしてるか……」

「そう。じゃ、クロも一緒に行ったのかな？」

「うん、ついていった」

お茶を飲むと、爽太君は、

「あ~~~~~。腹いっぱいになった！」

と、満足そうに言った。

「ああ、そうだ。ね、くるみさん。今度の水曜の夜、ご飯でも食べに行かない？」

「え？」

「俺、明日あたりから、けっこう暇になりそうだから、水曜、定時に上がれそうなんだ。そんなことそうそうないし」

「定時って何時なの？」

「5時半だよ。うちの会社、9時始まりで、5時半に終わるんだ」

「知らなかった……」

「はは……。ほとんど、不規則だったしね」

「いいよ。私も何もないし……」

「ほんと？じゃ、車出すからどっか、ドライブがてら、夕飯食べに行こうよ。どこがいいかな。何が食べたい？」

「なんでもいいよ。爽太君の食べたいもので」

爽太君は、どこがいいか、嬉しそうにわくわくした感じで、考え出した。

「ドライブ好き？」

と聞くと、

「え？うん。何で？」

と聞いてきた。

「だって、嬉しそうだから」

「そう？そうかな…」

と、言いつつも、やっぱり嬉しそうだ。

「じゃ、どこがいいか、決めとくね」

「うん」

「さて、母さんが出たら、俺も風呂はいつて寝ようかな」

「そうだよな。早くに寝れるときには、寝たほうがいいよ。うん」
「うん」

でも、爽太君は、なかなかその場を離れなかった。私は、爽太君の食べた食器を運んで、キッチンで洗い出した。すると、横に爽太君が来て、

「手伝うよ」

と言ってきた。

「え？大丈夫だよ。休んでて」

「うん」

と言いながらも、爽太君はその場を離れずにいた。

「今日の、あの子」

私は、思わずそう口走り、あ、何を聞き出そうとしてるんだと、途中で止めたが、

「桂木さんのこと？」

と、爽太君の方が、桂木さんの名前を出してきた。

「え…うん。名古屋から来たって…。わざわざ爽太君に会いに来たんだね」

「うん…」

「爽太君が、前に言ってた、好きだったっていう子でしょ？」

「え？うん」

「変わってた？変わってなかった？」

「全然、変わってなかったよ」

「そうなの？五月ちゃんとはまったく、違うタイプだったね」

「え？そう？」

「うん。ああいう子がタイプ？」

「いや。別に…」

爽太君は、言葉数がやけに少ない。あまり桂木さんのことは、話したくないのかもしれない。

私は、黙って食器を拭いて片付けた。

「カウンターで聞いてた？」

と、いきなり爽太君が、聞いてきた。

「え？何を？」

「俺らが、話してた内容」

「あ…。途中までね。ごめんね。聞くつもりはなかったんだけど…」

「うん…」

なんだか、ばつが悪い、そんな感じた。まるで、盗み聞きでもしていたかのような…。

「なんか、驚いちゃって、俺…」

「え？何に？」

「うん…。桂木さんが、まだ俺のことと思ってたこと…」

「……」

「転校してすぐには、メールのやりとりもしてたんだ。それが、いきなりこなくなっただけさ」

「向こうから？」

「うん…。だから、もう駄目になったと思って、俺もメールしなくなっただけさ」

「そうだったんだ」

爽太君とリビングに戻った。そして床に座り、爽太君は話を続け

た。

「会いに来てくれるとは、思ってもみなかったな」

「嬉しかった？」

「え？」

「会えて、嬉しかった？」

「うん。でも、緊張した」

「そうなんだ」

「うん。俺ってもしかして、つくづく女の人が苦手なのかなって思った」

「え？」

「だって、あんなに緊張したり、何話していいかわかんなくなったりしたらさ、やっぱりそう思うよ」

「誰に対しても？」

「うん。五月ちゃんでも、桂木さんでも、会社の人もそうだし」

「そう」

あれ？じゃ、瑞希さんの言う、爽太君の好きな人って？

「桂木さんと付き合ってたときは、もっとドキドキしてたんだけど、そいうのもなかったし」

「ふうん」

「……」

爽太君は、黙ってこっちを見ていた。私も、爽太君の顔を見て、

「あれ？でも、私も女なんですけど……」

と言ってみた。

「え？」

「私といても、緊張している様子ないね」

「うん」

「そう。あ、家族みたいなものだからかな？」

「うん、そうかな……」

「お姉さんみたいなの、そんな感じ？」
「……」

爽太君は、何も言わなかった。

お風呂から上がってきた瑞希さんが、

「爽太、お風呂いいわよ」
と言ってきた。

「あ、うん」

爽太君は2階に上がり、着替えを持って下りてきて、バスルームに向かった。

「じゃ、おやすみなさい。くるみさん」

瑞希さんはそう言うのと、2階へと上がっていった。

私は、なんとなく自分の部屋に行く気になれず、そのままリビングで、テレビを観ていた。

「家族みたいなものか……」

爽太君にとって、私は唯一話しやすい女性なのかな。喜ぶことなのかどうなのか、考え込んでしまった。

しばらくぼろろとテレビを観ていると、爽太君がお風呂から上がってきた。

「あれ？まだ起きてた？」

「うん。なんか寝れそうになくて……」

「そう……。あ、ビールでも飲む？」

「え？」

「俺も、なんか飲みたいし……」

「寝たかったんじゃないの？」

「うん。でも、ビール1本飲んだほうが、寝れそうだし」

「うん。いいよ。付き合うよ」

爽太君は、キッチンに行き、缶ビールを2本持って来た。

プシュって開けてから、ビールを美味しそうに爽太君は飲んだ。
なんでも美味しそうに、飲むものだな…。私も、缶を開けて飲んだ。
「なんか、つまみでも食べる？」

「うん。こんな時間に食べたら太るし、いいや」

「え？ 痩せてるじゃん。気にすることないよ、全然」

「それが、そうでもないのよ。最近、ちよつとずつ増えちゃって…。
ここのご飯が美味しいからかな」

「そう？ 全然気にすることないのに。春香の方が、ぱつつんぱつつ
んしてる」

「春香ちゃんは、若いからよ」

「そうかな？」

「うん。肌も綺麗だし」

「くるみさんも、綺麗じゃん。今、すっぴんでしょ？」

「え？ うん」

そうだった。すっぴんだった。忘れてた。それに、パジャマだし
…。でも、一緒に暮らしているんだから、そんなこと気にしてい
られない。

「くるみさんさ、化粧とると、幼くなるね」

「え？ そう？」

「うん。ちよつと雰囲気変わる」

「そうかな…」

なんか、恥ずかしいな。

「一緒に暮らしている特権。そうそうすっぴん見れないよね？」

「うん。こんなパジャマ姿だって」

「そうか。そうだよな」

「本当にもう、家族みたいなもんかもね」

「うん」

爽太君はそう言つと、にこつて嬉しそうに笑つた。

「あ、このあとにやる番組、観たことある？」

「うん。ない。この時間部屋に行つてること多いし」

「面白いんだよ。たまに、会社に泊まりこむ時、観てたりするんだ」

「会社にテレビあるの？」

「うん、小さいのが」

「へえ…」

しばらく二人で、テレビを観て、大笑いをしたりしていた。すると2階から、春香ちゃんが下りてきた。

「あ、ごめん春香。うるさかった？」

爽太君が聞くと、

「うん。のどが渴いただけ。私も部屋で観てたよ、これ」

と、春香ちゃんはそう答えた。

「え？じゃ、ここで観たらいいのに…」

「いいよ」。なんか、邪魔しちゃうし」

「え？何が？」

私と爽太君の二人が、同時に聞くと、

「なんか、二人いい感じだからさ。水飲んだらすぐに2階に行くから、私」

春香ちゃんはそう言つと、水を飲み、さつさと2階に上がつていった。

「な、何言つてるんだろうな、あいつ…」

「うん。いいのにね。一緒に観て…」

「うん。ほんとに…」

そう言つて、爽太君は、しばらく黙り込んだ。

その番組が終わり、テレビを消して、2階に二人で上がると、

「じゃ、おやすみなさい」

と、爽太君がにっこりと笑つた。

「おやすみ」

私も笑ってそう言ってから、部屋に入った。

ほろ酔い気分で、ベッドに横になり、すぐに私はうとうとした。
だが、5分もたたないうちに、気持ちが悪くなった。

「あれ？ たった1本で酔ったかな？」

しばらく、体を横に向けていたが、そのうちに気持ちの悪さもおさまってきて、私はいつのまにか、眠っていた。

翌朝、少しまた、気持ちが悪かった。

「お酒、弱くなったのかな。それとも、たまたまかな」

私は、顔を洗って気持ちが悪いのを、吹っ切ろうとした。

「おはよう」

一階に行くと、瑞希さんがさわやかに、挨拶をしてきたので、私も極力笑顔を作り、

「おはようございます」

と挨拶をした。

7時半になり、爽太君が起きてきた。

「おはよう。あ、今日はいい天気だ」

お店にいたクロが、尻尾を振った。

「あれ？ 今日はお散歩行ってないの？ クロ」

爽太君が、クロにそう聞くと、

「今日はどうかやら、朝のデートないみたいよ。春香起きてこないから。彼氏サーフィンしない日なんじゃないの？」

と、瑞希さんが答えていた。

「そうなの？ じゃ、クロ、俺と散歩行くか？」

「ワン！」

クロは、嬉しそうに尻尾をぐるぐると振った。

「くるみさんも行かない？」

爽太君に誘われた。

「でも、お店……」

「ああ、大丈夫よ。多分もうすぐしたら、春香が起きてくるから、ちよつと手伝ってもらっちゃうわ。行つてらっしゃいよ。気持ちよさそうよ」

瑞希さんにそう言ってもらい、行くことにした。

「はい。じゃ、行つてきます」

私は、まだ気持ちの悪いのがおさまらず、外の新鮮な空気を吸つたら、よくなりそうな気がしていた。

クロを連れて、爽太君は、嬉しそうに歩いていた。

「クロと散歩、好き？」

と聞くと、

「え？なんで？」

と、聞いてきた。

「嬉しそうだから」

「あ、そう？うん。久々だからかな」

浜辺につくと、クロは走り出した。爽太君も、クロを追っかけて走っていた。私は、石段に腰掛け、潮風に当たっていた。

「は……、気持ちいい……」

さつきまでの、気持ち悪さが消え、すっかり気分がよくなってきた。

爽太君も、私の横に来て座った。

「暑くなってきたね。さすがに5月も半ばを過ぎるとさ」

「うん」

「来月には、海、解禁だ。早速、泳ぎに来ない？」

「え……？」

「あれ？泳げないとか？」

「泳げるけど…。水着になるのが嫌だな」

「なんで？いいじゃん。」

「それに、焼きたくないし…」

「ああ。色白いもんね」

「うん。爽太君は、よく泳ぎに来るの？」

「来るよ。夏は、けっこう真っ黒に焼けるよ。すぐに白くなっちゃうけど」

「へえ。そうなの？」

「俺、色が白いの嫌なんだよね。なんか、ひ弱な感じしない？」

「ううん。全然。羨ましいくらいだよ」

「なんで？くるみさんだって、色白いじゃん」

「これは焼かないようにしてるから。焼いたらすぐ真っ黒になって、なかなか消えないよ」

「えー？羨ましい。俺も、母さんに似たら、そうだったのに、父さんに似て、色白なんだよね」

「ふうん」

「春香は、すぐに焼けるから…。もうすでに黒いし」

「あ、そうだよな。そういえば、春香ちゃんはサーフィンしないの？」

「しないね。一回チャレンジしてたけど、どうやら向いてなかったみたい」

「そうなんだ」

「クロ！いい加減、こっち来て休みな！」

ずっと浜辺を、走り回っているクロに、爽太君は呼びかけた。すると、

「ワンワン」

とクロは、爽太君のほうにかけてきた。そして、その後ろからもう

1匹、クロそっくりな犬がかけてきた。

「クロちゃん？爽太君？」

「あれ？由樹さん？リリー？」

黒いラブドールと、綺麗な女性が爽太君の方に来た。

「久しぶり！」

爽太君は、すごく嬉しそうに笑った。

なんだ…？こんなに嬉しそうにする相手が、いるんじゃない…。

そこで、私ははっと気がついた。もしか、爽太君が、好きな人ってこの人？

そうだ。瑞希さんが、爽太君の好きな相手なら、爽太君の表情とか、誰を見てるかとか、誰と一緒にいたがってるかを観ていたらわかるって、言っていたっけ。この人かな…？

「リリー~~~~！！めっちゃ久しぶり~~~~！」

爽太君は、目を細め、すごく嬉しそうにリリーって犬に抱きついてた。その横で、クロも、

「ワンワン」

と嬉しそうに、尻尾を振って、走り回っていた。リリーはそのあと、クロのほうに来て、2匹はすごく仲むつましく、くんくんと鼻をくっつけあったり、擦り寄ったりしていた。もしか、恋人どおし？

「あ、リリーっていつてね、クロのお母さんなんだ」

不思議そうに見ていた私に、爽太君がそう言った。

「え？」

そうか…。

「由樹さん、こっちに帰ってるの？」

「そうよ。だんなが2ヶ月も海外に出張だから」

「だんな…？」

「そうなんだ。じゃ、実家に？」

「うん。爽太君、変わらないわね。あ、この方は？彼女？」

「ち、違うつて！うちの店で働いてるくるみさん！」

「あら、そうなの？てつきり彼女かと思っちゃった。こんにちは。初めまして」

「あ、はじめまして」

「由樹さん、言つとくけど、くるみさんの方が由樹さんより、年上だよ」

「え？そうなの？爽太君とそんなに変わらないのかって思っちゃった」

由樹さんって人は、なんだか、明るくてちよつと雰囲気、爽太君に似ている気がした。

「クロ、嬉しいだろ？久々お母さんに会えたんだもん」

「リリーも、喜んでるわ」

「店来たら？母さんも喜ぶよ」

「うん。行こうかなって思ってたところなの。でも、まだ開店してないでしょ？」

「開店する前の方が話せるし、一緒に行こうよ。あ、でも俺、これから会社行かなきゃならないけど……」

「そうよね。平日なのに、なんでいるのかって思ったわ。会社行く前に散歩来てたんだ」

「うん。天気いいしさ」

「瑞希さん、元気？春香ちゃんや圭介さんは？」

「元気だよ。みんな変わってないよ」

なんだか、爽太君は嬉しそうだった。私はやっぱり、心のどこかで、なんだ、緊張しない人もいるんじゃないって思っていた。

「ただいま！母さん！由樹さんだよ。それにリリーも！」

ドアを開けると同時に、爽太君は叫んだ。

「あら~~~~！由樹ちゃん！久しぶり。リリーも久しぶりじゃない！」
「お久しぶりです~~~~！きゃ~~~~、瑞希さん変わってない~~~~」
ものすごくテンション高く、由樹さんはそう言つと、瑞希さんに思い切りハグをしていた。

「由樹さん、前にうちの店でバイトしてたんだ」
爽太君は小声で、そう私に教えてくれた。

「え？そうなの？」

「うん。で、うちで働いてるコックと結婚したの」

「え？」

「あ、今のくるみさんの部屋に住んでいた人と。今4つ星レストランで働いてて、多分、その関係で海外に行ってるんじゃないかな」
「へ~~~~。すごい！」

「俺、会社行ってくるけど、また、こっちにいる間に遊びに来るでしょ？」

爽太君は、由樹さんのほうに行くと、そう聞いた。

「うん。爽太君に会いに来るわよ」

「じゃ、その時にまたね」

そう言つと、爽太君は、2階へと上がっていった。

私は、クロの足を拭いてあげて、それから、開店の準備の手伝いをした。

瑞希さんは、しばらく由樹さんと話しこんでいて、それから、
「あ、ごめんね、由樹ちゃん。そろそろ準備しなくちゃ。また、ゆつくり遊びに来て。あ、水曜日にどう？ご飯うちに食べに来ない？夜がいいかしらね。春香も爽太もいると思うし」
と、由樹さんに言った。

水曜の夜といったら、爽太君とドライブに行く約束をした日だ。

「いいんですか？じゃ、リリー連れてお邪魔します」

「ご両親によろしくね」

「はい！」

由樹さんは、リリーを連れて、去っていった。

「ああ、3年ぶりだね。それにしても、クロ、お母さんのこと、覚えてたの？」

と、瑞希さんはクロのことをなでながら聞いた。クロは嬉しそうに尻尾を振った。

「ここで、バイトしてた人なんですか？」

「そうなのよ。3年前に結婚して、千葉のディズニーランドの近くに引っ越しちゃって」

「爽太君が、すごく嬉しそうでした」

「ああ、なついてたからね」

「なつく…？」

「お姉さんみたいにね。爽太がまだ、中学生のときから、うちでバイトしてたから。えっと、爽太より4歳年上かな」

「……。そうなんですか…」

私は、ちょっと声のトーンが低くなってしまった。

「気になる？」

「え？いいえ！別に」

「本当にお姉さんみたいに思ってたのよ。そのころ、爽太、桂木さんのことが好きで、相談に乗ってもらったり」

「今の私みたいに…？」

「うーん、そうね。そうかな？」

やっぱりショックだった。爽太君の理解者は、私一人のつもりでいたし…。

なんとなく私は、由樹さんって人の存在を気にしながら、何日間か過ごしていた。

そして、水曜の夜に爽太君とドライブに行けることを、すごく楽しみにしていた自分に気がつき、行けないことを、がっかりしている自分に気がつき…。

その何日間は、すっきりとしない、もやもやした気持ちのまま、過ぎていった。

10 ドライブ

水曜になり、朝、瑞希さんは起きてきた爽太君に、朝食を持って行きながら、

「今日の夜、由樹ちゃんにご飯食べに来るから。圭介とちょっと早めに帰れない？」

と聞いていた。

「え？今日？」

「うん。春香も大丈夫って言ってたわ」

「あ…、でも、俺、先約がある」

「え？誰？友だち？」

「いや、くるみさんと…」

「あら、そうなの？」

「私だったら、別に…。爽太君いよ。由樹さんとは、久しぶりに会ったんでしょ？」

「うん、でも…」

爽太君は、ちよつと困った表情をした。

「いいの、いいの。そういうことなら、まだしばらくは由樹ちゃん、こっちにいますよだし」

瑞希さんが、爽太君にそう言つと、

「うん。ごめん、悪いけど。由樹さんにもまた、海に犬連れて、散歩一緒に行こうって言うておいて」

爽太君は、そう言つて、ご飯を食べだした。

「爽太君、私本当に…」

「いいの、いいの。先に約束してたなら、いいのよ。くるみさん」

「でも、家族揃っていたほうが…」

「いいのよ。爽太は、くるみさんと約束してたんだものね？」

「うん」

爽太君は、ご飯を食べながら答えた。

瑞希さん、なんだか、気を使ってくれたんじゃないかな。爽太君も、気を使ってくれたんじゃないかな。本当にいいのかな。頭の中がぐるぐるした。

「どこに行く予定なの？」

と、瑞希さんがコーヒーを淹れながら、爽太君に聞いた。

「え？ああ、夜のこと？」

「うん、そう。ご飯食べに行くんでしょ？」

「うん。車だそうかと思ってるけど、どこがいいかな。ちよつと鎌倉の方まで行こうかな」

「そうね、厨子とか、葉山の方はどう？」

「ああ、いいね。海沿いのレストランもいいよね」

「ラ・マール茶屋とかいいんじゃない？でも、予約いるかもよ」

「あゝ、そつか。じゃ、ちよつとネットで調べてみようかな」

「え？そんな、大げさなところじゃなくても、私…」

「俺が行きたいだけだから…。くるみさん、悪いけど付き合ってよ」
「うん。いいけど…」

なんだか、どんどん申し訳ないような気がしてきたが、でも、心の奥底では、喜んでいる。由樹さんよりも私を選んでくれたこと、私と行くレストランをすごく、あれこれ悩んでいてくれることに。

「ほんじゃ、行ってきます。あ！定時には上がれるから。ちゃんと支度して待っててね。くるみさん」

「うん。…え？支度？」

「そ、ディナーの支度」

「え？ディナー…？」

「あら、いいわね。ずいぶんとおしゃれなところに、連れて行ってもらえそうじゃない？」

「母さんは、父さんで行って。もう家族で行く年じゃないよ、俺」
「はいはい」

爽太君は、リビングの方に行った。

「家族でね、1年に1〜2回おしゃれして、ドライブがてら、ご飯食べに行ってたのよ。おしゃれなお店にね。そういうところに行くと、うちのお店に出すメニューとかもアレンジできたり、いろいろと参考になることもあるし…」

「そうなんですか」

「なんだか、張り切ってたわね、あの子。デートに行く前みたいに」
「え？そうですか？」

「ふふ…。くるみさん、おしゃれしてた方がいわよ。けっこういいお店に、連れてってくれそうよ」

「…はい」

デートって言葉に、少し私は浮かれました。もちろん、爽太君は、そんなつもりはないだろうけど。

夏のワンピースに、カーディガンを羽おり、お化粧もちょっと念入りにして、私はリビングで待っていた。

瑞希さんと春香ちゃんは、お店のほうで夕飯の準備をしていて、5時半を過ぎたころ、圭介さんが帰ってきて、そのあとに、お店のほうに由樹さんが現れた。

「こんにちは〜！ああ！春香ちゃん！」

由樹さんと春香ちゃんは、再会を喜び、そこに圭介さんも参加して、みんなでわいわいとおしゃべりを始めていた。

「あれ？爽太君は？仕事ですか？」

由樹さんが聞いた。

「ああ、爽太は帰ってきて、車を駐車場から出しに行ってる。なんか、ご飯食べに行くって言ってたけど」
と、圭介さんが言うのと、

「くるみさんとね、デートなのよ」
と、瑞希さんが言った。

慌ててリビングから、デートじゃないですと言いたかったが、由樹さんがすごく大きい声で、

「じゃ、やっぱり彼女なんじゃない!」

と叫んで、周りのみんなを驚かせた。

「ち、違うんです…」

と言ったが、みんなのわいわいする声で、その声は消されてしまった。

「なんか、この前海で見たときに、ぴんときたんですよ〜、私」と、由樹さんが言い出す。

「あら、勘がいいのね」

瑞希さんまでが、言い出す。

「それで、あれか、爽太、今日ずっとそわそわしてたのか」

圭介さんまでが言い出す…。リビングに私がいるのを、みんな気づいていないのか?

「ただいま!あれ?くるみさんは?」

爽太君は、お店のドアから入ってきた。

「くるみさん?部屋かしら?」

瑞希さんが、そう言つと、

「リビングにいたよ」

と、圭介さんが言った。

「爽太君!デートだった?」

由樹さんが、いきなり爽太君にそう言つと、

「え?デート?俺が?」

爽太君の慌てている声がした。私はリビングからカウンターの方まで行つたが、出るに出られない感じになっていた。

「やっぱり、彼女なんでしょ？いい雰囲気だったものね」

「え？俺とくるみさんのこと？」

爽太君は、また慌てていた。

「ち、違うつてば…」

「あ、くるみさん、爽太来たわよ」

瑞希さんが私に気がつき、そう言った。

「あ、はい…」

お店のほうに歩いていくと、爽太君は、真っ赤になっていた。

「じゃ、ごめん、由樹さん。今度ゆつくりね…」

「はい、いつてらっしゃい。楽しんできてね！」

と由樹さんは、爽太君を送り出した。私は、そのあとに続いた。

お店を出ると、爽太君は、

「あゝゝ。お店から入らなきゃ良かった。でも、こっち側に車止めちゃったから」

と、ちよつと、頭を掻きながらそう言った。

「なんか、由樹さん、思い切り勘違いしてたよね」

「うん…」

「ちゃんと、違うつて言ったほうが、やっぱりいいよね？」

「うん…。でも、違うつて言っても、聞きそうにないな」

車に乗り込み、爽太君はそう言った。

「えつと…。鎌倉の方にあるお店、予約したんだ。そこでいいかな？海の近くにある店でさ」

「うん、いいよ」

爽太君は、車を発進させた。音楽をかけて、それから、

「なんか、夜のドライブ也不错かも」

と笑った。

爽太君は、音楽にあわせて鼻歌を歌ったり、いろいろと話してくれたり、とにかく楽しそうだった。

「なんか、楽しそうだね」

「え？」

「運転するの好きだよ。いつも楽しそう」

「ああ、うん。好きかも」

爽太君は、最近とても機嫌がいいというか、元気というか、いつも楽しそうだ。

「仕事、順調？」

「うん。そんなに忙しくないし」

「なんか、充実してるの？」

「なんで？」

「いつも楽しそうだから」

「あはは…。脳天気なやつみたいだね、俺って」

「ごめん、そういうわけじゃなくて…。最近いつも笑ってて、嬉しそうにしてるから。何かいいことあったのかなって」

「いいこと？」

「うん。それか、充実している毎日なのかなって」

「そう？そう見える？俺」

「うん。見えるよ。いつも楽しそう。海の散歩もそうだったし」

「そう？それは多分、くるみさんというからじゃない？」

「え？私と？」

「うん。会社じゃ、しかめっつらして仕事してるらしいよ、俺」

「え？そうなの？」

「まあ、最近はまだ忙しくないから、いらいらはしてないみたいだけだね」

「ふうん…」

また、爽太君は、流れるメロディにあわせて、鼻歌を歌った。だんだんと日が落ちてきて、対向車線の車のライトが明るく見えるよ

うになり、少し雰囲気も変わってきた。

私は、少し考えていた。爽太君が言ったことを。

「くるみさんというからじゃない？」

私というから楽しいのか…。私として、嬉しいのかな？そんなことを思ったら、急に照れくさくなり、そのまま爽太君の顔を見れなくなり、外の景色を眺めていた。

「爽太が、誰といたがっているか…」

ふと、瑞希さんの言葉を思い出した。

疲れている時にも時間を空けて、その人に合わせたり…。一緒にいられるのが嬉しいんじゃない？

…そんなことも、言ってたっけ。

好きな人といわれたら嬉しいし、もっと一緒にいたいって思うじゃない？

…ああ、瑞希さん、そんな事も言ってた。そうだ。そのとおりだ。爽太君と一緒にいられる時間が長ければ長いほど嬉しいし、今日だって嬉しくて仕方がなかった。洋服を選ぶのも、待ってる間も、嬉しくて、どきどきしていた。

好きな相手なら、本当に一緒にいられるのは、嬉しい…。

けど、爽太君の私といわれるから、楽しいって言うのは、好きだからなのか、それとも、ただ単に、楽だからなのか…、そんなことをあれこれ、考えていた。

お店に着き、駐車場に車を止めた。それから、お店に入ると、
「予約した榎本です」

と、爽太君がお店の人に告げていた。

テーブルに案内された。海の見える、窓際の席だった。

「わ…。なんか、ロマンチックだね」

思わず、私はそう言っていた。

「気に入ってくれた？」

爽太君が、小さな声で聞いてきた。

「うん。素敵なお店」

「良かった。ここ、ご飯も美味しいよ」

メニューを見て、これが美味しい、これもお勧めと、爽太君が、あれこれ教えてくれた。注文は全部、爽太君にお任せした。

私は素直に驚いていた。女の子慣れしていない爽太君が、こんなにスマートにエスコートしていることに。

「よく、来るの？」

「うん、何回か家族で来たよ」

「そうなんだ」

「父さんが良く言ってた。デートするなら、ここに女の子連れて来たらいいってさ」

「え？ いいの？ 私で…。もつと他に誘いたい人いたでしょ？」

「え？」

「だって、デートするならって…。やっぱり好きな人と来たほうが良かったんじゃないの？」

思わず、私はそんなことを言っていた。

「……。うん。いいんだ。くるみさん連れてきたかったし…」

「……」

今のどついう意味かな…。いろんなことをまた、私は考えてしまっていた。

例えば、ただ単にいいお店だから連れてきたかったとか…。それとも、好きな人っていうのが、私のこととか…。いやいや、それはありえないでしょ？ それは、私のうぬぼれでしょ？

「お酒、なにか飲む？」

「爽太君は？」

「飲めないよ。車だもん」

「そうだよな。ごめん。じゃ、私もいいよ」

「いいの？」

「うん」

前菜から運ばれてきた。どれも美味しかった。

「爽太君は、舌が肥えてるよね。瑞希さんも、おばあちゃんもお料理上手だし。こういうお店も来ているし」

「うん。でも、基本なんでも美味しく食べれるから」

爽太君は、やっぱり、いつものように美味しそうに嬉しそうに食べていた。それから、窓から見える海を見て、それから私の顔を見て嬉しそうに笑った。

「どうしたの？」

「うん……。なんか、すごく嬉しいなって思ってた」

爽太君の笑顔は、すごく無邪気で、こっちまで笑顔になるくらいだった。

それから、爽太君と、出てくる料理を十分に味わい、最後にはデザートとコーヒーをまた、十分に味わい、そしてお店を出た。

「ちょっと車に乗る前に、その辺、ぶらつかない？」

爽太君が、そう言った。

「うん、いいよ。気持ちいいもんね」

少し、ひんやりする潮風が吹いていた。

「寒くない？」

爽太君が、優しくそう聞いてくれた。

「大丈夫」

爽太君は、私と歩く速さをそろえてくれた。ゆっくりと海沿いの道を歩く。

「カップルに見えるかな？」

爽太君は、そんなことをいきなり言い出した。

「え？」

「カップル以外の何者でもないか…。海見ながら夜に、二人で歩いていたらさ」

「普通はね…」

「こういうデートはしたことある？あるよね？やっぱり」

「ないよ。初めて」

「うそ！」

「ほんとに。だって、稔とは、東京近辺でデートしてたし。ドライブもあまりしなかったし」

「そうなんだ！」

「素敵だね。こんなデート…」

「…そう？」

「うん。ロマンチックだよ。女性ならこのデートだけで、いちころだわ」

「え？！本当に？」

「うん。もう、これならきつと、爽太君のさ…」

爽太君の好きな人も、いちころで、好きになってくれるよと言おうとしたが、爽太君はまったく、私の言ってることを無視して、

「くるみさん、喜んでくれたの？」

と嬉しそうに、聞いてきた。

「え？私？うん。もちろん」

「本当に？」

「うん。本当に」

「良かった」

満足そうに爽太君は、微笑んだ。…あれ？

「え？爽太君」

私を喜ばせても、しょうがないんじゃない？。って言いたかったが、また、もしかして爽太君は、私を好きなんじゃないのかって気にな

つてきて、何も言えなくなった。

いやいや、それは私のうぬばれ…だよな？

「爽太君…」

「え？何？」

爽太君は、少しびっくりして、振り返った。爽太君と目が合い、そらせなくなった。じっと思わず見ていると、爽太君の方が視線をはずして、

「さつき、いちころって言ってたじゃん。あれさ、例えば、弟とかそんな風にしか見えない人も、男の人って意識しちゃうってことかな？」

と、聞いてきた。

「は？」

「いや、だからさ…。例えばね。今までは何とも思ってたような相手でも、意識するようになるってことかなって…」

「…え？」

「だからさ。好きになっちゃったりするのになって…」

「…誰が、誰を？」

「例えばだって…。例えば、くるみさんが別に好きでもなかった人のこと、こういうデートしたら、気持ちが変わったりするのかなって…」

「わかんない。どうかな…」

「え？！でも、さつき…」

「え？さつき？ああ、いちころって言ってたあれ？」

「うん」

「あれは…。ごめん。なんか、変なこと言っちゃった。私…」

「そ、そうなの？冗談？」

「そうじゃなくて。えっと…。だから、きつとね。こんなデートで

も、まったく好きでもない人とだと、なんとも思わないかもしれないし、好きな人となら、すごく嬉しくて、ロマンチックで、もっと好きになっちゃうかもしれないって…」

「ってことは、こんなデートしたから、好きになるわけじゃないってこと？」

「わからないよ。好きになっちゃう人もいるかもしれないし…。それは、わかんない」

「あ、そう…」

ちよつと、爽太君の声が沈んだ。

それから海を見て、しばらく爽太君は、黙っていた。その横顔を見ていると、なんだか、あまりにも寂しそうで、胸がぎゅってなった。

「爽太君…」

「え？」

「そんなに寂しそうな顔しないで」

「え？俺、そんな顔してた？」

「うん」

「あ…。ごめん、ちよこつと落ち込んでたかも」

「爽太君は、顔に出やすいんだね」

「え？」

「嬉しい時には、すごく嬉しそうだし、落ち込むとすごく落ち込んだじゃうし」

「ごめん」

「ううん、謝らなくてもいいけど…。なんか、見てて、胸がぎゅってなっちゃった」

「え？」

爽太君は、どうしたらいいかわからないような表情をした。

「どうしたら、また、嬉しい顔になる？」

と聞くと、さらに、爽太君は、顔を固まらせた。

「どうしたらって言われても。えっと…。ごめん。ちゃんと気持ち切り替えるから、待ってて…」

爽太君は、どうやら自分が落ち込んでいるのを、申し訳ないと思っただよう。

「ね。浜辺の方に行こうよ」

私は、爽太君の手をとって、砂浜を歩き出した。

そのまま、爽太君の顔を見ず、海の方だけ向いて歩いていると、爽太君もそのまんま、私についてきていた。

「夜の海って真っ暗で、怖いって前は思ってたけど、爽太君という和平気みたい」

と言ってから振り向くと、爽太君は、半分嬉しそうな、半分困っているような顔つきをしていた。

「爽太君？」

どうやってたら、爽太君は喜ぶんだろう？顔を覗き込むと、

「あ…。俺、もう落ち込んでいないから、大丈夫」

と、爽太君は慌てて、そう言った。

「ほんとに？でも、顔がなんか、こわばって見えるけど」

「えっと、それは緊張してるから…」

「え？なんで？！私とだったら、平気って…」

ショックだった。

なんで、緊張しちゃうのか。さっきまで、嬉しそうに楽しそうにしていたじゃないか。やっぱり、私といたからでなく、ただ単にドライブが楽しかったり、ご飯が美味しかっただけ？

「うん。そうなんだけど…。手…」

「え？」

私は、まだ爽太君の手を握っていた。

「ごめん」

手を振り解き、慌てて謝った。でも、前に水族館に行った時には、爽太君の方が手をつないできたよね。それも、あまり意識してない感じだったよね。

「ちょ…、ちよつとさ…。ごめん。俺、意識し過ぎてる…」

「え？」

「夜の海だし。誰もいないし。二人きりだし…」

「うん…」

「…さつき、くるみさん言ってたみたいにさ。こういうシチュエーションだと、好きな人いたらもつと、好きになるっていうか、意識しちゃうっていうか…、それ…」

「？」

「あ…」

爽太君は、口を押さえたが、

「ああ、もういつか…。ばればれだよね？」

と、つぶやいた。

「え？」

「だからさ、俺の気持ちなんて、ばればれだよね？」

「え？」

「とつくに、わかってるよね？もう」

「……」

それは、やっぱり、私を好きだったこと？って言葉にならなかった。

しばらく黙って、爽太君を見ると、

「いいんだ…。くるみさん、無理して俺に答えようとしなくても…。俺のことなんとも思っていないなら、それはそれでいいし…。好きでもない人とこういうシチュエーションでいても、別に何も思わない」

ならそれはそれでさ…。うん。俺が勝手に一緒に、来たかっただけだし。くるみさんとこんなデートしたかっただけだし。うん…。だから気にしないで」

「……」

私、頭がパニくってる！多分、呆けたまま、爽太君を見る。

「あ、そんなに困らないで。ほんと、いいんだ…。こうやっているだけで、幸せだし。多くは望まないし…」

「……」

まだ真っ白だ。何も言葉が浮かばない。それ、私の幻聴じゃないよね？

「あ。えっと…」

爽太君は、言葉を失っているようだった。何を言っているのか、わからない様子。私はまだ、頭が真っ白だ。ただただ、爽太君の顔を見ていた。

「くるみ…さん？」

あまりにも、ずっと私が黙って、爽太君を見ているので、爽太君は困っているようだった。

「あ…」

私はなんとか、声を出した。それから、なんて言おうか、必死に頭を回転させた。

「あのね…」

爽太君は、私が話し出したら、顔をこわばらせた。私が爽太君をふるとでも思っているのか。それでも、なんだか、覚悟を決めたような、そんな顔つきをしていた。

「……」

その顔を見てて、そんな表情も愛しく思えた。そういえば、私、嬉しそうに楽しそうにしている爽太君が好きだけど、こんな表情でも、どんな表情でも愛しいと思うのは同じだな…。

「私の幻聴じゃなければ、あの…。爽太君が好きな人って、もしかして…」

「くるみさんだよ」

爽太君は、半ば観念したっていう感じで、そう言った。

「で、でもね…」

「う…」

う？爽太君の顔はますます、固まっていた。

「私に、恋の相談してたよね…？」

「うん…」

「好きな人に、普通、恋の相談ってしないよね？」

「……。だから、その…。俺もなんでくるみさんのこと好きなのに、その好きな人に相談してるんだろうつて思ってた…」

「……」

「でも、俺、相談じゃなくて、きっと、くるみさんが俺のことどう思ってるか、確かめようとしてたのかもしれない」

「え？」

「ずるいよね…。ごめん」

「……」

爽太君の顔を見ながら黙っていると、ますます爽太君の顔は、暗くなっていた。

「ごめん。なんか、もしかして俺、嫌われるくらいのことしてるかな？」

「…え？」

「くるみさんに、好きになってもらうどころか、こんなずるいことしてて、逆に嫌われちゃったかな。好きになってもらえないのはしょうがないとしても、俺、嫌われるのは、かなりきついかも…」

「……」

何でそんな…、暗いほうに…って、ああ、そうか。私が黙ってるからだ。

「ごめん！」

思わず、謝ると、

「う…。やっぱり？」

と、爽太君は、顔を引きつらせた。

「そうじゃなくて、ごめんっていうのは、そうじゃなくて…」

どんだん私は、爽太君を追い詰めてるのがわかって、慌ててしまった。

「あ、落ち込まないで！私も、私もだから」

「え？何が？」

「だから、私だって、ずっと爽太君が好きだったから…」

「…え？」

今度は、爽太君の顔が呆けてしまった。

「え？それ、俺が落ち込んでるから、気を使って…とか？」

「違うよ。違うの…。だって、まさか、恋の相談もちかけてる私のことを、好きだなんて思わないし」

「…え？」

「だから、私、爽太君の恋の話聞くの、辛いつて言ったでしょ？」

「うん…。あれ？あれってそういう意味？」

「うん…」

「……」

今度は口を開けたまま、爽太君は、固まった。

「本当に？」

「うん」

「俺のこと、弟くらいにしか思っていないんじゃないの？」

「弟だなんて思ったこともないよ」

「でも、家族みたいなもんだって…」

「初めから、男の人として見てたよ」

「ま、まじで？」

「うん」

「……」

まだ、爽太君は、信じられない様子で、目を真ん丸くして固まっていた。

「俺、絶対に絶対に、片思いで、どうにもならないって思ってた。それで、いつとき、まじで悩んで…」

「うん」

「…いつから？」

「多分、会ったときから…。爽太君は？」

「俺？俺は、いつからかな…。気づいた時には、くるみさんのことしか、考えられなくなっていたから…」

「……」

爽太君から、信じられないような言葉が出て、思わず私は涙が出そうになった。

「でも、全然、俺、気づけなかった。くるみさんも俺のこと好きだった…」

「……。隠してたから、気づかれないように」

「なんで？」

「だって、私も、片思いだと思ってたし…。ずっとずっと、密かに思ってるだけでいいって思ってたし…」

「な、なんで？」

「なんでって…。だって、もしばれて、今までみたいに、そばにいることすらできなくなったら、嫌だったから…」

「ほんと？まじで？そんなことも思ってたの？」

「うん…」

「え？じゃ、俺と一緒にいられて、嬉しかったってこと？」

「うん…」

「俺と一緒にいたかったってこと？」

「うん…」

「まじで？」

「うん…」

「……」

爽太君は、少し喜びの表情が戻ってきた。それから、しばらく何かをかみしめているような表情をした。

そして、いきなり、抱きついてきた。

「え？爽太君？！」

いきなりでびっくりしていると、爽太君は、ぱっと私の体をはなしてから、

「…すごい、嬉しい！俺…」

と、目を細めて笑った。

しばらく二人で、照れあっていた。そして、どちらからともなく手をつなぎ、黙ってお店の駐車場の方に、歩き出した。

「あのさ…」

「え？」

「なんでもない…」

爽太君は、また黙った。

「あのさ…」

「え？」

「ううん…」

また、爽太君は、黙った。

駐車場に着くと、助手席のドアを開けてくれて、私が乗ると、爽

太君は運転席に乗り込み、エンジンをかけた。

しばらく爽太君は、ハンドルを握り、フロントガラスの方を、じっと見ていた。それから、私の方を黙って見た。爽太君の表情は、なんだか信じられないといった感じにも見えたとし、喜びをかみしめているようにも見えた。

「俺、初めてだ。好きな人が出来て、すごく嬉しくて、それも、好きな人に好きだって言われて、こんなに嬉しいの……」
と、また目を細めて言った。

「ありがとう……」

私が、お礼を言つと、

「え？なんで？俺の方こそ、ありがとうだよ？」
と、聞き返してきた。

「ううん。私のほうこそ……。好きになってくれて、本当に嬉しい……」

「……。うわ……」

うわ……。爽太君は、うわって言ったまま、顔を下に向けた。それからしばらくして、すごく照れた顔をしながらこっちを向いて、

「俺も……。好きになってくれて、ありがとう」
と、そう真っ赤になりながら言った。

それから車を発進させた。しばらくは、黙ったまま、何も音楽もかけずに走った。

しばらくすると、

「ああ、父さんや、母さんになんて言おうかな。それとも、しばらく黙っていいのかな」

と、爽太君はぽつりと言った。

「……そうだね。どうしようか。なんか言つのも、恥ずかしいね」

「うん、ばれるまで、内緒にしておく？」

「すぐにばれそうな気もするけど。瑞希さん勘がいいし……」

「だよ。でも、すぐにばれるならそれでもいいや……。向こうが気

づくまで、黙っていようよ。なんて言っていいかもわからないし」「うん」

爽太君と秘密を持てたのが、少し嬉しいのと、でも、瑞希さんたちには隠し事をする後ろめたさが入り混じっていた。

それから、ドライブを楽しみながら私たちは、れいんどろっぷすに帰っていった。

11 恋人…？

お店の前に着くと、れいんどろっぷすの明かりは消えていた。もう、由樹さんは帰ったのかな。

「ただいま」

駐車場に車を止め、二人で家に入った。

「おかえりなさい」

瑞希さんが元気よく、出迎えてくれた。リビングでは、圭介さんがテレビを観ている。

「由樹さん、もう帰っちゃった？」

「うん。30分前くらいかな。あ、なにか飲む？コーヒーでも淹れる？」

「いいよ、いいよ。もうお腹いっぱいだし…。ね？」

と、爽太君は、私のほうを向いて言った。

「うん」

とにつこり微笑むと、圭介さんが、

「いいな。美味しいものたらふく食べてきたんだ」とそう言った。

「母さんに行けばいいじゃん。二人で…」

「そうだな。じゃ、来週の水曜は、俺と瑞希でデートだな。お前邪魔するなよ」

「しないよ。なんで邪魔なんか…」

と爽太君は、ぶつくさ言って、上着を脱ぎリビングに座った。

「おさき〜」

と春香ちゃんが、お風呂からあがってきた。

「圭介、お風呂入っちゃって。あとがつかえてるし」と、瑞希さんが言くと、

「うん、じゃ、一緒に入ろうよ」

と、瑞希さんに言った。

「え?!」

思い切り、私が驚くと、

「え?何?」

と、逆に圭介さんに、驚かれた。

「いえ…。ちよつとびっくりして。うちじゃありえないことで」

「あゝ。この二人はね、よく一緒にお風呂も入っちゃうから、気にしないで」

と春香ちゃんはその言つと、2階に上がっていった。

瑞希さんと圭介さんは二人で、お風呂に入りに行き、私と爽太君だけがリビングに残った。

「仲いいよね」

「うん。やつぱり、普通一緒に、風呂入ったりしないもんなの?」

「え?わからないけど…。うちの親も普通じゃなかったし」

「そうなの?」

「うん。家庭内別居状態。私が高校生のころには、一切口もきかなかったから」

「辛いね、それ。くるみさんが1番…」

「だから部屋にこもるか、友達の家に行っちゃったり、あ、塾とか、嬉しかったな。家に帰らないですむから…」

「塾が?」

「わざと、遅くまでやってる塾に行ってたよ」

「そっか…」

爽太君は、少し暗い表情をしたが、すぐに明るくなり、
「そのうち俺らも…」

と言ってから何か、照れていた。

「？俺らも？」

「なんでもない。」

爽太君は、頭をぼりって掻いて、
「着替えてくるね」

と言つて、2階へ上がつていった。

瑞希さんと圭介さんがお風呂からあがつてきて、私がお風呂に入り、出てから2階に行き、

「爽太君、お風呂いいよ」

と声をかけた。でも何も返事がなく、そうつとドアを開けると、ベッドで爽太君は、すやすや寝ていた。

疲れちゃったのかな。そつとベッドの横まで行き、寝顔を見た。

なんだかとても、気持ちよさそうに寝ている。寝顔がめっちゃくちゃ可愛くて、そのまましばらく見つめていた。

「おやすみ…」

小さな声でささやいて、私はそつと爽太君のおでこにキスをした。それから、部屋をまたそつと出て、ドアをそつと閉めた。

自分の部屋に戻り、ふうつてため息をつきながら、今日あった出来事を思い出した。なんだか、まだ信じられない。爽太君も、私を好きでいてくれたこと…。

いつからかな？ああ。そつか…。爽太君が、なにやら悩みだした時からか。恋煩いだつて瑞希さんが言つてたけど、あれ、私のことだったのか…。ちよつと、自分でそんなことを思いながら、にやついてしまった。

「さ、もう寝よう！」

私は、にやついたほつぺをパンパンとたたき、ベッドに潜り込んだ。壁をへだてたすぐ横に、爽太君がいて、今夢の中なんだなつて思いながら。

「二人には内緒にしておこうね」

爽太君が、そう言っていたので、今までと同じように私は、爽太君と接した。爽太君も、まったく今までと変わらなかった。普通に会話をして、爽太君は会社に行く。夜戻ると、普通に夕飯を食べ、そのままお風呂に入り、部屋に行く。

あまり二人きりになることもなかったし、二人だけで過ごす時間も、話をする時間もなかった。

こんなじゃ、いくら勘のいい瑞希さんでも、まさか二人が付き合ってるなんて思わないだろうな。あれ？そもそも、こういう状態を「付き合う」と言うのだろうか？

メールをするわけでもない。というか、メアドさえ、知らない。そりゃそうだ。一緒に住んでるし、会おうと思えば、すぐに会える。とはいえ、逆に家族もいるから、二人きりで会おうとしても、なかなか会えない。

ただ、私の中では大きな変化があった。例えば、爽太君が朝起きて来て、おはようとカウンターに座る。ご飯を食べている姿を見ても、幸せで胸が躍る。

美味しいコーヒーを淹れてあげたいと思うようになり、瑞希さんがいつもコーヒーの豆を挽き、コーヒーを淹れていたが、それを習って私がやるようになった。

前から、みんなの洗濯は私がしていたが、

「アイロンもかけます」

と爽太君や圭介さんのYシャツのアイロンがけも、しようとした。

でも、くるみさんに、

「圭介のは、私がするわ。部屋で圭介のYシャツのアイロンかけているところを見るのが、圭介好きみたいなのよね。変わってるでしょ？」

と言って、私に爽太君のYシャツだけを渡してくれた。

「爽太のは、お願いね」

「はい」

アイロンをかけて、爽太君の部屋のドアのフックにかけておく。それは、瑞希さんもいつも、していたことだった。

翌朝、爽太君は、そのYシャツを着て、下りてきた。

いつもYシャツとズボンをはいて、ネクタイだけは出る寸前にするか、暑い日には、ネクタイすらポケットにいれて、上着も手で持つて出ることが多い。

すぐ近くの事務所だから、普段着でいいんじゃないかとも思ったが、どうやら、時々スーツ姿のお客さんが来るようで、一応スーツだけは着ていくようだった。

「おはよ…」

眠そうな顔をして、カウンターに座った。朝ごはんを瑞希さんが、爽太君に持っていき、

「今日のコーヒーも、くるみさんが淹れてくれたものよ」

と、爽太君に言っていた。その横で、コーヒーを淹れて、私が爽太君のもとに持って行った。

「あ、ありがとう」

爽太君は、眠そうな声でそう言った。

「ああ、それからね、爽太。洗濯もほとんどくるみさんがしてくれてるけど」

「あ。うん、知ってる。いつもありがとう…」

「昨日から、アイロンもかけてくれてるの」

「え？」

「それ、今着ているあなたのYシャツ、くるみさんがアイロンかけてくれたものだからね」

「これ？」

爽太君が、自分の着ているＹシャツを見た。

「そう。圭介のは私がしてるけど」

「あ、そうなんだ…。ありがと…」

「なんだか、瑞希さんにありがとを、言わされてるみたいだなって思いながら、」

「いいよ。だって、瑞希さん忙しそうだし…」

「と言うと、」

「そんなことないわよ。本当は爽太に、自分のシャツくらいアイロンかけさせたいくらいなんだけど」

と、瑞希さんは言った。

「え？俺が？自分で？」

「そうよ。もし一人暮らししてたら、それくらいしてもおかしくないわよ」

「あ、そうか…。えっと、自分でしたほうがいいかな？」

「いいよ。全然、私だったら、夜暇だし…」

「実は、爽太君のＹシャツにアイロンをかけられるのが、嬉しかったんだ。なんだか、すごく幸せな気持ちになりながら、していたから…。」

「感謝しなさいよね…。普通はね、奥さんくらいしかこんなことしてくれないわよ」

「そう瑞希さんに言われて、爽太君は、真っ赤になった。」

「そつだよ…。ありがと…」

「奥さん…。その響きに私も真っ赤になりそうになったが、必死で冷静にふるまった。」

その日の夜も、洗濯物を取り込み、私は誰もいないリビングで、爽太君のＹシャツにアイロンをかけていた。

春香ちゃんと瑞希さんはお店に出ていて、圭介さんと爽太君は、また忙しくなったのか、残業をしているようだった。

私は、Yシャツをまず広げてから、ぼけて眺めた。それから、丁寧にアイロンをかけ、またぼけて眺める。

そのYシャツからは、洗剤の香りしかしてこないのだが、なんだか爽太君の匂いとか、ぬくもりまで感じられるようで、ぎゅって抱きしめてみたりしていた。そしてまた、くしゃくしゃになり、

「あ…」

と、私はYシャツにアイロンをかけなおしていた。

なんだか視線を感じて、私は顔を上げた。すると、リビングのドアのところに瑞希さんが立っていて、一部始終を見られていたようだった。

「あ…。お店は？」

「うん。お客さん今日は早めに帰ったから。春香が今、キッチンにいるんだけど…」

「あ、私も手伝いますね」

「いいの、アイロンかけてて。私も少し休むから」

「すみません、気づかなくて。春香ちゃん一人で大変じゃないですか？パートさん帰っちゃったんですね？」

「うん。春香がお客さん早く帰ったし、ちよつとケーキを作りたいって、まだキッチン使ってるから、キッチン片付けるのは、1時間くらいしてからになるかな」

「そうなんですか」

「たまにね、あの子ケーキを作ってるのよ。試作品段階だけど。明日試食してって、頼まれると思うわ。たいてい、うまくできるけど、たまに失敗をすることもあるから、まずい時には、きちんと言っておいてね。そっちのほうで、あの子のためになるし」

「はい」

私はまた目線を下げて、アイロンをかけたした。

「……。くるみさんって……」

アイロンをかけている姿を眺めながら、瑞希さんが言ってきた。

「可愛いわよね」

「え?!」

いきなりそんなことを言われて、びつくりした。

「私も、そんな時があったな〜」。圭介のYシャツにアイロンかけるの、けっこう嬉しくて」

「あ……」

やばい……。さっきの知られてたんだもんね。もう、私が爽太君を好きなの、ばれてるよね。

「今も圭介のYシャツ、アイロンかけてるけど、横で圭介がいつもべらべらしゃべってきて、集中してアイロンもかけられない」

「そ、そうなんですか……」

恥ずかしくて、穴があったら、入りたいくらいの心境だったが、どうにかこうにか、顔を無表情にしようと、必死になった。

「こういう姿を、本人に見せたいわ。多分、爽太、ぐっときちゃうわね。あ、隠しビデオ撮るんだったな」

「や、やめてください、そんなの……」

「ふふ……。冗談よ」

駄目だ、冷静になれない。真っ赤になるし、汗は出るし……。

「子どもの肌着や洋服にも私、ほおずりしたっけな」

「え?」

「今じゃないけど、そうね、小学生くらいまではしてたわ。爽太のシャツや、パンツにまで」

「え?そうなんですか?!」

「もう、可愛くて可愛くて。くるみさんも子供が出来たら、わかる

わよ」

「へえ……」

私の母は、そんなのしていたことがなかったな。

「今は、好きな人のＹシャツが、愛しくなっちゃってるんだと思うけどね」

「え?!」

また、瑞希さんは心臓が飛び出るようなことを言うので、本当に私は汗だくだくになってしまった。

「くすくす…。さてと。圭介と爽太、そろそろ帰るかな。ご飯作っておこうかしらね」

瑞希さんはそう言っていると、キッチンに戻っていった。

瑞希さんは私が、爽太君を好きなを見破ってた。っていうか、私たちが付き合ってるのをもう、知っているかのようなだった。

「隠していたつもりだったけど、まるわかりだったのかな…」

なんだか、必死で二人で今までどおりに接しようとしていたのが、馬鹿らしく感じた。

Ｙシャツにアイロンをかけ終えたところ、圭介さんと爽太君は、帰ってきた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

圭介さんは、

「瑞希……。俺風呂先にはいつてくる。なんか汗かいてて、気持ち悪いや」

と、お店にいる瑞希さんに言ってから、バスルームに向かった。爽太君は、上着をぼんとほおりだして、

「疲れた…」

とネクタイをはずしながら、座った。

「あ、それ、俺のYシャツ？」

「うん」

「アイロンかけてくれてた？」

「うん」

「サンキュー。でも、アイロンかけてるところが、見たかったな」

「え？なんで？」

「なんとなく…。なんか、そういうの見てるの、新婚みたいじゃない？」

「し、新婚？？？」

「つていうか、夫婦みたい」

爽太君が、そんなことを言うから真っ赤になってしまった。

「奥さんくらいしかそんなことしないって、母さん言ってたけど、ほんとそうだよ。そう思ったら、ちょっと、嬉しくなっちゃってへへ…。これ、着てるだけで今日は、どきどきしてたや」

爽太君は、少し照れくさそうに笑った。

「はい、爽太」

瑞希さんが、夕飯を持ってきた。

「あ、サンキュー。あれ？なんか甘い匂いしない？」

「春香が、ケーキを作ってる最中」

「そっか。うまくできるといいね。たまに失敗作食わされるからなあ…」

「ふふ…。でも、あなたの場合、そういうのでも、うまいって食べちゃうから、春香、勘違いしちゃうのよね」

「そうなんですか？」

「そうよ。圭介もうまいって食べるから…。私くらいしつかりと、ちゃんと味をみてあげないと、春香、上達しないじゃない？」

「そうですね」

「だって、まずいとは言いにくいし、一生懸命作ったって思うといい……」

「くすくす……。あなたも圭介も、ほんと似てるわね。奥さんが作った料理は、何が何でも美味しいって言って食べるんじゃない？」

「俺？」

「まあ、あなたの奥さんになる人は、幸せものかもね」

「俺の？」

「そ。圭介もそうだけど、家庭を大事にするし、子煩悩だしね」

「爽太君、子供好きなの？」

「私が聞くと、瑞希さんが、

「もう、だいつ好きなのよ。赤ちゃんとか見ると、可愛い可愛いってうるさいし、春香の面倒も本当によく見てたわね」

「だって、可愛いじゃん」

「ぼそって爽太君は言った。

「へえ……。なんだか意外」

「え？なんで？意外？」

「爽太君が、私に不思議そうに聞いてきた。

「あまり、小さい子と接してるの見たことなかったから、わからなかった」

「まだまだ、くるみさんから見たら、爽太の方が子供みたいなものだものね……」

「瑞希さんがそう言うのと、ご飯を食べたそうとしていた爽太君が、

「ええ？なんだよ。俺子供？」

と少し、口を尖らせて怒った。

「あはは……。そういうところまで、似てる。」

「父さんに？でも、父さんよりか、大人でしょ？」

「くす……。22歳のころの圭介に、そっくりよ」

そう笑うと瑞希さんは、トレイを持って、お店のほうへと行って

しまった。

「ちえ〜」

爽太君は、少しふてくされた顔をしていたが、ご飯を食べだすといつもどおり、美味しそうな顔をした。

それにしても、奥さんになる人は幸せなのか…。自分の子供のことをそんな風に言えるってすごいな。

ご飯を美味しそうに食べている爽太君を見ながら、爽太君の奥さんっていいなって思っていると、

「そっか。父さんは俺の年でもう、結婚してたんだもん。なんか信じられないよな」

と爽太君は、ぼそって言った。そうだよ…。22歳で、結婚はまだまだ考えられないよね。

私の、爽太君の奥さんっていいな…という思いが空中にふわふわと浮かび、まるでシャボン玉がちゃんと割れるように、消えていった。

ご飯を食べ終えたころ、圭介さんがお風呂から上がり、爽太君と入れ代わりでご飯を食べだし、爽太君の方が、お風呂に入りに入った。私は、お店に片付けの手伝いをしにいった。

夜11時過ぎ、お風呂からあがり、自分の部屋で音楽を聴きながら、マニキュアを塗り、足の爪にもペティキュアを塗っていた。

トントン…。ドアをノックして、

「くるみさん、もう寝た？」

と爽太君の声がした。

「まだ起きてるよ。でもごめん、今動けないから、爽太君、ドア開けていいよ」

「え？うん…」

ちよつと不思議に思ったのか、爽太君は、そつとドアを開けた。

「ペティキュア、塗りだしちゃってごめんね。しばらく動けないんだ。歩くだけで、隣の指にくっついちゃうの」

「ああ…。足のマニキュア？」

「うん。そろそろ、サンダルはいたりするから」

「へえ…」

爽太君は、私の座ってる横に座って、

「塗るの見ててもいい？」

と、聞いてきた。

「うん、いいけど…」

すぐ隣に座ったので、ちょっと緊張した。

「あ、はみ出しちゃった」

「大変なんだね。それ。器用じゃないとできないね」

「そんなことないよ」

しばらく黙って集中して塗っていると、爽太君もしばらく黙って、じっと見ていた。

塗り終わり、爽太君に聞いた。

「何か用だったの？」

「うん。今日帰りがけ、カンチュウハイとか、梅酒とか買ってきたから一緒に飲もうかと思ってさ」

「そっか…。でも、ごめんね。なんか最近、お酒に弱くなったみたいで、やめとく」

「弱くなった？」

「うん、この前もちょっと、気持ち悪くなったから」

「そうなんだ」

「うん」

「じゃ、俺も今日はやめとこう」

そう言つと爽太君は、私の部屋をくるりと見回して、

「この部屋、模様替えしたんだ」

と聞いてきた。

「うん。瑞希さんとカーテンや、カーペット買いにいたり、ベッドカバーも変えたんだ」

「そうだよ。前はモノトーンだったよね。梅さんの趣味だったから」

「梅さん？」

「あ、前に住んでた、由樹さんのだんなさん。梅田さんっていうんだ。だから梅さん」

「ふうん」

「カーテンもベッドカバーも、グリーンなんだね。好きな色？」

「うん。アパートもそうだったんだ。なんか緑って落ち着くから好き」

「そうだね。落ち着くよね、この部屋。春香の部屋なんて、ピンクでよくあんな部屋で寝れるよなって思うよ」

「爽太君の部屋は、青だね。海にいるみたいだって思ったよ」

「あ、うん。海をイメージしてるしさ」

「海、好きだね」

「うん。いろんな海見に行きたいんだよね」

「いいね、それ…」

「でしょ？金ためて、いろんなところに潜りに行きたい」

「爽太君の夢？」

「うん。そう」

「いいな、夢があるっていいね」

「くるみさんの夢は？」

「ないのよ、昔から。現実主義で、ちゃんと生活していけたら、それでって感じで」

「そうなんだ。でも、それが1番大事なんじゃないの？」

「私の場合は、親があんなだったから、一人でも生きていけるようになるってというのが、目標だったんだ」

「一人で？」

「うん。たとえ結婚しても、いつ別れても大丈夫なように」

「なんか、寂しくない？それ…」

「うん。でも、お母さん見てたら、そんな考え方になっちゃった」

「そっか。じゃ、あまり結婚願望ないほう？」

「前はね。でも今は、圭介さんと瑞希さん見てたら、仲のいい夫婦いいなってると思う」

「……」

爽太君は、何も答えなかった。それから、しばらく黙っていたが、
「もう爪乾いた？」

と聞いてきた。

「うん、乾いたよ。なんで？」

「じゃ、触っても大丈夫？」

「え？」

「押し倒しちゃっても、大丈夫？」

「え?!」

「……。冗談だよ」

本気で、焦ってしまった。いきなりそんなことを言うから…。

「ここで押し倒すのは、絶対無理だな。いつ誰が、入ってくるかわからないし」

「……」

すると、いきなり、ドアをノックすると同時にドアが開き、

「くるみさん、マニキュア貸して！」

と、春香ちゃんが入ってきた。

「ね？」

と爽太君は、小声で言った。

「あれ？何してんの？お兄ちゃん。ちょっと、くるみさんの部屋に勝手にあがりこんじゃ駄目じゃないよ！」

「勝手にじゃないよ。ちゃんと了承得たうえで、入ってるし…。お前の方がよっぽど、勝手にドア開けたりしてるじゃん」

「ノックしたもの」

「ノックして、返事待ってから開けるもんなの！これじゃ、くるみさん全然プライベートないじゃん」

「お兄ちゃんこそ！男の人が、女性の部屋に入りこんだらいけないでしょ。お母さんに言いつけるからね」

「なんだ？そりゃ。お前ほんと、ガキ」

「うるさい！早く出てって！」

「出てけって、お前の部屋じゃないじゃん」

「いいから！くるみさんというんな話があるの！」

そう言いながら、春香ちゃんは爽太君の背中を押して、爽太君を追い出してしまった。

「まったく、油断もすきもない。くるみさん駄目だよ、部屋にあげちゃー！」

春香ちゃんはまだ、憤慨していたが、

「マニキュア、どんな色がいいの？」

と聞くと、すぐに切り替え、

「あ！あのね。ブルーとか持ってる？」

と、嬉しそうに聞いてきた。

「あるよ」

「見せて〜。足に塗りたいの。あ！くるみさんも、ペティキュア塗ったの？可愛い！」

春香ちゃんは、年の割にはしっかりしていると思うが、やっぱり

こういうところは、まだ10代だなんて思う。

それから、マニキュアを塗ってあげたり、恋の話をしたりして、1時間くらい盛り上がった。春香ちゃんは私を慕ってくれてて、可愛い妹が出来たみたいで、私は嬉しかった。

翌朝、お店に出ると、春香ちゃんにご飯を食べ終わったところで、「あ！おはよう、くるみさん。今ね、お母さんに、くるみさんの部屋に、鍵をかけたほうがいいって話をしたところなの」と、私に向かって言ってきた。

「鍵？」

「うん。だって、お兄ちゃんがまた、入りこんだら大変だし」

「いや、入りこんだわけじゃなくて、ちゃんと断ってから入ってきたし…」

「でもさ〜、やっぱり一つ屋根の下に、若い男性がいたら嫌でしょ？私だったら嫌だな。鍵かけて入らないようにするよ」

「いや、爽太君、勝手に入ることはしないと思うけど…」

困ってしまったと、瑞希さんが、

「でも、そうよね。プライベートの時間もあるだろうし、鍵があつたほうがいいわよね。日曜に圭介につけておいてもらおうよ、頼んでみるわ」

と言い出した。

「え？いいです。そんな…」

「爽太でも、やってくれるかもしれないわね。爽太の方が、けっこう器用だから、爽太に頼みましょう」

「え？え？でも…」

爽太君を阻止するためなのに、爽太君、するかな？

「お兄ちゃんしないよ。怒るんじゃないの？」

あ、春香ちゃんも、そう思うんだ…。

「海にはまだ、行かないの？春香」

瑞希さんは、春香ちゃんの質問には答えず、そう言った。

「あ、そうだった。じゃ、行って来るね」

慌てて、春香ちゃんはポットを持って、お店を出て行った。

「大丈夫。爽太、してくれるわよ」

瑞希さんは、笑顔でそう言ったけど、爽太君、怒り出したりしな
いかな…。

7時半になり、爽太君が、起きてきた。

「おはよう〜」

あ、眠そうだ…。

「爽太、頼みがあるんだけど。今度の日曜日、日曜大工してくれな
い？」

瑞希さんは早速、爽太君に持ちかけた。

「え？何作ればいいの？」

「くるみさんの部屋に、鍵をつけてもらいたいの」

「鍵?!」

「春香の提案。くるみさんもプライベートがあるんだから、鍵をつ
けてあげたらって」

「春香〜？あ、昨日の一件が原因か」

「どうしたの？何かあったの？」

瑞希さんが、爽太君に聞いた。

「いや、なんでもない。でも、あいつが1番勝手にくるみさんの部
屋に、入りこんでると思うけど…」

「でしょ？だから、鍵をつけたほうがいいかなって私も思って…。

春香には言わなかったけどね」

と瑞希さんは、そう言った。

「え？」

爽太君は、きょとんとした。

「さ、爽太の朝ごはん作ってくるわ。じゃ、日曜お願いね。」
瑞希さんは爽太君の返事も聞かず、キッチンに入ってしまった。

「爽太君。いいよ、私は別に」

小声でそう言うと、

「鍵か。そうすると、もう勝手に、春香とか入って来れないってことか」

と、ぶつぶつ言い出した。

「それって…、ラッキー…？」

「え？」

「いや、なんでもない。あ、鍵、つけるよ。日曜に絶対つけるから。うん」

と、爽太君は、ニコニコ顔になった。

あ、そつか…。昨日みたいに、爽太君が部屋に来てて、誰かが勝手にドアを開けることが、なくなるわけか…。

え…？それを考えたら、ちょっと顔が赤くなってしまった。

瑞希さんもしや、春香ちゃんが勝手にドアを開けるのを阻止するために、鍵をつけてくれると言い出したんだろうか。

やっぱり、私と爽太君が、両思いなんだってことも、知ってるんだろうな。

「爽太君。なんか、瑞希さん私たちのこと、気づいているかも…」

「ばれてるってこと？」

「うん。私の気持ちはもう、ばれてるし」

「俺の気持ちも、とくにばれてるよ」

「じゃ、やっぱり…」

二人で、小声で話をしていたら、ご飯を瑞希さんが持ってきて、慌てて私は爽太君から離れた。

でも、もしばれてるとしても、いったい、どんな態度をとってい

いものか…。

日曜になり、爽太君は早々と車で出かけて行き、鍵を買って帰ってきた。それから、私の部屋のドアに鍵をつけた。

「ありがとう」

と言うと、爽太君はにやって笑って、

「これでもう、邪魔されないですむね」

と言った。あ、やっぱりそういうことを考えているんだな…。爽太君。

と、春香ちゃんは、その日の夜、リビングでみんながくつろいでいると、

「お兄ちゃん、偉いじゃない、ちゃんと鍵をつけてあげるなんてさ。お兄ちゃんならダダこねて、そんなのしないって言うかと思っただ」

と、爽太君に言っていた。

「あのね、俺、父さんじゃないし」

と爽太君が言っていると、隣でテレビを観ていた圭介さんが、

「俺だって、そのくらい頼まれたらしますよ」

と、口を挟んだ。それから、

「でもな、春香。お前ちよつと、ずれてるな」

と圭介さんに言われて、春香ちゃんは首をかしげた。

「何が？」

「わかんないなら、いいけどさ」

圭介さんは、それ以上何も言わなかった。

お風呂から出ていた圭介さんはビールを飲んでいた。あとからお風呂に入った爽太君も、一緒にビールを飲みだした。

しばらく、二人でなにやら仕事の話をしていたが、そのうち、瑞

希さんがお風呂から出てくると、

「瑞希も、ビール飲まない？」

と言って、圭介さんは瑞希さんと飲みだした。

私がお風呂からあがると、もう爽太君はリビングにいないくて、瑞希さんと圭介さんが二人で仲むつましく、テレビを観ていた。

「おやすみなさい」

と言って、2階へ上がろうとすると、

「あ、くるみさんは、ビール飲まない？」

と、瑞希さんに聞かれたが、

「はい、いいです」

と断った。

それから、2階へ行き、自分の部屋に入った。

「さて…」

鍵をつけてもらったが、いつ鍵をしめたらいいものか。こういうのは、いつでも閉めてた方がいいのかな…。

悩んでいると、ドアをノックして、爽太君が声をかけてきた。

「くるみさん？いる？」

「うん」

ドアを開けると、少し顔を赤らめている爽太君が、立っていた。ちよっと酔っているのかもしれない。

「どう？鍵、ちゃんとかけられた？」

「あ、まだ…。いつかけるものか、考えちゃって…」

私がそう言うと、爽太君は部屋の中に入ってきて、鍵を閉めた。

「いつでもかけてたら？あ、良かった。ちゃんとかかるね。開かないよね」

少しガチャガチャと、ドアを開くかどうかを、爽太君は確かめていた。

「うん。爽太君、簡単につけちゃってたね。ほんと、器用なんだね」
「え？だって、このくらい簡単じゃん」

「そう…？」

爽太君は、私の方も見ずに、部屋の真ん中まで入ってきて、ベツドにすんと座ってしまった。

「なんか、酔ったかも…」

「うん、顔赤いもんね。そんなに飲んだの？」

「ビール一缶と、缶チューハイ一缶と…。そんなくらいけど。あ。俺、酒臭い？」

「そんなに臭くないと思うけど」

「ほんと？大丈夫？」

「うん」

私は、立ったまま爽太君と、話をしていた。なんだが、隣に座るのも気が引けて…。でも、爽太君はおかまいなしに、話を続けていた。

なんだ…。気にしすぎかな…。意識しすぎているかな…。そう思つて、爽太君の横に座った。

爽太君と、いろんな行つてみたい国の話や、今まで観て感動した映画の話や、好きな歌、好きな歌手、そんな話をあれこれした。

「なんか、やつとあれだよ。俺ら付き合ってるんだなって思えてきたよ。なんか、今まで二人で話もできなかったし…」

「うん、そうだね」

爽太君も、同じようなことを感じていたんだな。

ふと、爽太君は話をやめて、私の方をじつと見た。しばらく目があつたが、私はちよつと恥ずかしくなり、目をそらした。そして、話を続けた。

「休みの曜日もあわないから、どこかに行くにもなかなかね…。あ、

一緒の家に住んでるんだから、そんなの贅沢かな」

爽太君の返事はなかった。あれ？って思ってた横を見ると、なんだから眠そうな目をしている。

「眠そうだよ。もう、寝たら？」

と聞くと、そのまま、私のベッドに横になり、

「うん」

と、爽太君が言った。

12 愛しい人

「違う、違う。ここじゃなくて、自分の部屋で…」

「朝まで、ここにこうしていたいな」

「爽太君は、すっかりベッドに大の字になってしまった。」

「え？駄目だよ。そういうわけには、さすがにさ…」

「でも、鍵かけてるし、ばれないよ」

「ばれるばれないの問題じゃなくて…」

「おやすみ…」

「え？」

「爽太君は、そのまま目をつむって、本当に寝そうになっていた。」

「寝ないで、起きて！本当に酔ってる？あ、じゃ、私が爽太君の部屋で寝ちやおうかな」

と、冗談を言っても、目を開けない。

「え？寝ちやった？まさか…」

「すう…って、寝息までする。」

「どうしよう…。引きずって部屋に、連れて行くわけにもいかないし、このまま横で寝るわけにもいかないし…。やっぱり私が爽太君の部屋で、寝るしかないのかな…。」

「ちよつと、途方にくれていると、いきなり、爽太君が腕を掴んだ。」

「え？」

「そのまま、ぐいって引っ張られた。」

「起きてるの？」

「爽太君は、目を開けた。」

「あ。起きてるんじゃない！もう～～！」

手を振りほどいて、たたくふりをする、その手をまた掴まれ、そのまま、押し倒されてしまった。

「え？ちよつと、待って……」

でも、爽太君は、全然私の話を聞こうともしない。

「爽太君？」

両手を掴まれたが、少し私が足をじたばたすると、

「くるみさん、俺のこと本当に好き？」

と、聞いてきた。

「も、もちろん……」

と答えると、

「俺も」

と爽太君は言つて、キスをしてきた。

わ~~~~~~~~っ！ええ？確かに、確かにね、爽太君のことは好きだけど……。

頭は真っ白だ。爽太君、酔ってるから？ええ？いきなり鍵がついたとはいえ、同じ階に瑞希さんたちも、春香ちゃんだっているんだよ？

両手を掴んだ手は力強いし、足をいくらじたばたさせても、全然、爽太君はどこうともしないし、全体重を乗せているんじゃないかってほど、重いし……。だから、私は体を動かすことすらできないし……。何度も爽太君にキスをされ、ああ、もう観念するしかないかもと覚悟を決めた。でもせめてこの、こうこうとついている、部屋の電気だけでもどうにか消してもらおうと思い、

「爽太君、電気……」

と言ってみた。でも、爽太君は、まったく動く様子がない。

「電気、消してほしいんだけど……」

もう一度言ってみたが、やっぱり動きそつにもないし、何も言わず首筋や耳にキスをしてくる。

「爽太君…」

爽太君は、顔を上げ私の目を見て、黙っている。

「あの…、ね…?」

「ああ、電気?」

やつとこ、爽太君はそう答えた。でも、動かない。

「うん、電気…」

「……。くるみさん、じゃ、いいの…?」

「え?!」

「電気消してもいいの?そしたら俺、このまんまくるみさんのこと抱いちゃうよ?」

「……」

何を今さら……。嫌だっけ言ったらやめてくれるの?すごく返事に困ってしまうと、

「あ、すごく困ってる?」

と、私の顔を見てそう言った。

「うん」

と言うと、少し爽太君は笑って、

「ごめん」

と言って、体を起こした。

「ちょっと、酔っ払ってました。部屋、戻るね」

爽太君にそう言われ、私は力が抜けた。えええ?私の決心はなんだっただ。電気を消してと言うのだって、恥ずかしかったのに!ベッドから降りようとしている爽太君の背中を、べちってたたいた。

「いて…。え?何?」

爽太君は、びっくりして振り返った。

「……」

私はいつたい、どんな表情をしていたのかわからないが、爽太君が私の顔を見て、目を丸くした。

私は多分、爽太君をにらんだつもりだった。私のこと困らせて、憎らしいって思っていたから。

でも、爽太君の反応が、なんだか違っていて、
「え？」

と、固まっていた。

「ちょ…。くるみさん、そんな目で見られたら、部屋に戻れないよ、俺…」

「え？」

そんな目？…どんな目？

「あ…。えっと…。俺、どうしたらいいのかな」
「…え？」

爽太君は、本当に困っている様子だった。私はいつたいどんな目で、爽太君を見ちゃったんだろうか。

爽太君は、ベッドに座ったまま黙り込み、それから、

「やっぱり、電気消す…？」

と聞いてきた。

「え？」

「あ、やっぱり、部屋戻ったほうがいいかな？」

「……」

じらされてるのかな、これ。もしかしてわざと私の反応を見ているんだろうか。

爽太君は、そのまま何も言わずに私の顔を見ていた。私がなんて言うかを、待っているようだった。

「部屋に、戻れば？」

と言ってみたが、爽太君がまた、背中を向けてベッドから降りよう

とすると、私の手が勝手に、爽太君の腕を掴んでいた。

「くるみさん、その手どけてくれないと、俺、戻れないんだけど…」
爽太君はベッドに座り、そう言ってきた。

「うん。わかってるけど…」

腕を掴んだまま、離せないでいる。

「……。俺に、いて欲しいってこと？」
「……」

私は黙ったまま、腕を掴んでいた。すると、爽太君は、私の手を強引に掴んで離し、ベッドから降りた。

「あ…」

なんだか、拒否をされたみたいで、心がずんと沈んでいった。ちやんとこのまま、ここにいてって素直に言えば良かったかな…。

爽太君は、ドアのそばに行き、電気のスイッチを切った。

いきなり部屋は暗くなったが、外の電灯からの明かりが入ってきていて、真っ暗にはなかった。

「俺、もう部屋に戻ってって言われても、戻らないからね。でも、引き止めたのは、くるみさんだからね」

外の明かりで、うつすら見える爽太君の表情は、すごく優しくかった。触れる手もあったかくて、優しくかった。

シングルベッドに二人で寝るのは、とっても窮屈だったけど、でも、私は爽太君の胸に顔をうずめながら、朝まで一緒にいた。爽太君の寝息が髪にかかり、くすぐったかった。

爽太君は、熟睡していたけど、私は何度も目が覚めた。目が覚めでは、爽太君の顔を見たり、寝息を聞いたり、爽太君のぬくもりを感じたりした。

爽太君の寝顔は、すごく愛しかったし、爽太君のぬくもりは、すごく優しくかった。

「変なの…」

稔のアパートにも泊まったり、稔も泊まりに来たりしていたが、こんなにぬくもりにあつたかさを感じたり、寝顔が愛しいって思ったことってないな…。

爽太君は結局、朝まで熟睡をして、朝5時になり、私はそつと爽太君の腕の中から抜け出して、服を着た。

それからそつと部屋を出て、シャワーを浴びた。一階にはまだ誰もいなくて、物音をなるべく立てないように気をつかった。

本当は、体中に爽太君のぬくもりが残ってて、そのままでいたかった。でも、なんだか、瑞希さんや圭介さんに会うのに気が引けて、シャワーを浴びた。特に瑞希さん、勘が鋭いし、私から爽太君の匂いでもしちゃうんじゃないかって、そんなことまで思ったから。

それから、またそつと部屋に戻り、カーテンを開けた。日が差し込んできて、その光で爽太君は目が覚めたようだ。

「あ、おはよ…」

静かにそう言うと、爽太君は、少しぼくってしてから、

「あ！」

と、いきなり体を起こして、

「くるみさんの部屋だったんだ」

と慌てて、ベッドを抜け出した。

「やべ、俺の部屋に戻るよ。今何時？」

「もうすぐ6時」

「春香も、母さんも起きちゃうね。じゃあ…戻るね、俺」

「うん。またあとでね」

爽太君は、軽く私のほっぺにキスをして、静かに自分の部屋に戻っていった。

爽太君が今の今まで寝ていたベッドに、横になった。まだ、爽太君のぬくもりも、爽太君の匂いもした。

「は〜、愛しいな。大好きだな」

昨日、すごく優しく抱きしめてくれたことを思い出しながら、私はつぶやいた。

でも、今日は自分の表情や目つきに気をつけなくっちゃって、ベッドから起き出し、化粧をして、顔をぱんぱんとたたいた。

特に、爽太君を見る目…。絶対今までと違っちゃうかもしれない。そういうのを、悟られないようにしないと…。

そんなことを思うと、なんだか、一階におりて瑞希さんに会うのが、怖いような、ときどきするような、変な緊張感がただよっていた。

13 素直に

7時になり、気を引き締めて、一階に下りた。春香ちゃんと、瑞希さんがお店にいた。ク口も春香ちゃんの足元をつろつろしていた。

「あ、おはよう」

瑞希さんが明るく、挨拶をしてきた。

「おはようございます」

私は、わざと明るく、挨拶をした。でも、ちょっとわざとらしくったかな……。だけど、そんな瑞希さんは、まったく気にしていない様子だった。

「くるみさん、昨日のケーキ、試食してくれる？」

春香ちゃんがお皿にケーキをのせて、運んできた。

「コーヒーも淹れたから」

コーヒーもマグカップに注いでくれた。

「わあ。美味しそう。いただきます」

食べてみると、やわらかく、甘みを抑えたスポンジケーキに甘いホイップクリームがのっついていて、とても美味しかった。

「これ、紅茶の味…かな？」

「そうなの！アールグレイ」

「うん、美味しい！」

そう言つと、春香ちゃんはすごく喜んでいた。

「ちょっとだけミントもいれたんだ。ミントティーっぽくしてみたんだけど、どう？」

「うん。ミントの味はあまりしないかな」

「そうか……」

「でも、このままでも美味しいよ」

「そう？これでもいける？」

「うん」

「じゃ、私コーヒーとケーキ、櫛に持っていくね」

「はい、いつてらっしゃい」

春香ちゃんは、コーヒーポットとバスケットを持って、クロとお店から出て行った。

「櫛っていうのが、彼氏の名前ですか？」

「そ、櫛君。こんな朝っぱらから、ケーキを食べさせられて、かわいそうね」

「え？」

「でも、櫛君もいい子でね、美味しいって食べてくれるみたいよ」

「へえ…。そうなんですか」

「どうも見てると、櫛君は春香のこと相当好きみたいよね」

「え？」

「もともとは、春香のほうが好きになったみたいだけど、たまにお店に来たり、二人でいるところ見てると、櫛君、嬉しそうなのよね」。櫛君から見たら、6歳もしたでしょ？10代の女の子なんて子供に見えるんじゃないかなって思ったんだけどね」

「へ〜…」

そうなんだ。春香ちゃん、愛されちゃってるんだ。うん、でも健気だし、可愛いし、慕ってくれたら嬉しいよね。

「ケーキ、美味しかったですね」

「あ、ごめんね。朝から甘いもの食べさせちゃって」

「いいえ。私好きですから、全然大丈夫です。あ、でも太っちゃうかな」

「ええ？痩せてるから大丈夫よ、心配しなくても」

「そうですか？でもこの店きてから私、体重増えちゃったんですよ」

「うそ〜。じゃ、今までいったい何キロだったの？相当痩せてたんじゃないの？」

「そうですね…。今までが、痩せすぎてたのかな。忙しかったし…」
「そうよ。今で全然大丈夫よ」

そう言つと、瑞希さんは、お店の準備にとりかかった。

8時ころ、圭介さんが下りてきた。

「あら、爽太は？」

「え？まだ起きてこない？」

「うん。最近は7時半には下りて来てたのにね」

「あゝ、仕事忙しくないし、のんびり寝てるんじゃないの？」

爽太君、2度寝しちゃったかも…。

圭介さんが、ご飯を食べだし、瑞希さんはコーヒーを淹れてあげ、二人でカウンターに座り話をしていた。なんだか、いづらくなつて私は、外の掃き掃除をはじめた。

掃除が終わり、お店に戻ると、圭介さんはもう、カウンターから姿を消していて、爽太君は、まだ起きて来ていないようだった。

9時近くになり、どたばたと走ってくる音が聞こえた。

「やべーーーー！寝坊した」

爽太君が、くしゃくしゃの頭で、まだボタンも閉めていないYシャツをひっかけ、お店に出てきた。

「母さん、ご飯！超特急で作って！」

「できてるわよ。ハムエッグ。すっかり冷めてるけどね。トーストだけ焼くわね」

「ごめん！」

爽太君は、そう言つとYシャツのボタンを閉め、シャツの裾をズボンに押し込んだ。

Yシャツの下は何も着ていないのか…。素肌をもろに見てしまい、みように私は照れてしまった。

う…。多分、昨日の爽太君の肌のぬくもりとか、思い出しちゃったんだろうな。でも、瑞希さんの視線が気になり、私は後ろを向い

てコーヒーの準備をした。

「すごい寝坊じゃない。圭介もう、会社に行っちゃったわよ」

「まじ？あ、ほんとだ。もう、9時になる…。やべ…」

「仕事忙しくないの？」

「う…ん、今はあまり…。でも暇でもないけど。あれ？今日何曜
日？」

「火曜日」

「ガガガ…ン！朝一ですることがあったんだ…！佐々木さんに
怒られる！」

「なんで佐々木さん？」

「事務の方の仕事で、佐々木さんに頼まれてた…」

「佐々木さんの仕事じゃないの？事務つて…」

「本来はね。でも、佐々木さんも忙しかったりするから、俺がたま
に手伝つてて」

「そうなの？大変ね。1番ペーパーだもんね、爽太は」

「そうなんだよね。佐々木さんに実は、こき使われてるの、俺」

「あははは。大変だ」

「笑い事じゃないよ。まじ、怖いんだよ。男の人より怖いんだから」

私は爽太君と瑞希さんの会話を、聞きながらコーヒーを淹れ、爽
太君に持つて行った。

「はい、コーヒー」

「あ…。ありがとう」

爽太君は、すぐくさやかに笑った。つて、さわやかすぎるでし
よう…。もっと、照れたりするかと思っただけだな…。

「その、佐々木さんって人、昔の私みたいですね」

「え？」

瑞希さんと爽太君が同時に聞いてきた。

「私も、男の人に負けないよう、頑張ってきたから」

「そうだったの？前はなんの仕事してたの？くるみさん」

瑞希さんが聞いてきた。

「営業です。ばりばり営業マンしてました。あ、営業ウーマンかな」

「へえ〜。見えないわね」

「そうですか？」

「でも、佐々木さんはちょっと違うよ」

爽太君が、朝食をたいらげてから、そう言った。

「佐々木さんは、男性に負けないようにしているんじゃないんだ。

自分より弱い立場か上の立場かで、変わるんだよね。だから、父さんの前では、態度違うよ。取引先の社長の前じゃ、すごく可愛くふるまってるし」

「あら、そうなの？へ〜」

瑞希さんが、興味深そうに聞いていた。

「じゃ、あなたのことは、ずいぶんと見下しているとか？」

「みたい…」

「年下だからかしらね？」

「そうみたい…」

「そんな人もいるってことよ。そうかと思えば、自分よりもずっと年下の人にドキドキしちゃって、恋しちゃう人もいるし」

ドキ…！私は、多分それを聞いて真っ赤になったと思う。でも、目の前の爽太君のほうが、慌てたらしく、コーヒーをふき出していた。

「ごほ…。あつ…。何？いきなり…。そういうこと平気で言うかな。くるみさんの前で…」

爽太君も真っ赤になっていた。

「くるみさん？違う違う！私のことよ。何を勘違いしてるの。 1 2

も年下の圭介を見て、ドキドキしたりしてたから。くるみさんのことじゃないわよ。や〜〜ね〜」

瑞希さんはそう言ってから、しばらく笑っていた。

「あ！やべ〜〜。9時過ぎてるし！行かなくちゃ！」

爽太君は、真っ赤になりながらも、時計を見て慌てていた。

「爽太、待つて。あなた着替えなさい」

「え？なんで？あ！コーヒー！」

「そうよ、今ふき出したとき、Ｙシャツにかかったのよ」

「Ｙシャツ！」

「今、持つてくるから、脱いで待つてなさいね」

そう言つと、瑞希さんは2階にすつとんでいった。すごい速さで…。

爽太君は、Ｙシャツを脱いでカウンターに置いた。

「……」

どうも、上だけとはいえ、裸の爽太君を見るのが恥ずかしい…。

「俺つて、相当馬鹿かも…」

と爽太君が、ぽつりと言った。

「いや、やつぱり母さんのほうが、アホだよね。あのタイミングであんなこと言うかな…」

と、私の方を見てそう言った。

「え？」

「あ、やつぱり、動揺した俺のほうがアホかな」と頭をぽりつて掻いた。

爽太君の顔を見ていたが、どうも上半身に目がいつてしまい、私は目をそらした。

「ほら、爽太、Ｙシャツ。はい！」

瑞希さんが2階からＹシャツを持つてきて、爽太君に渡した。

「サンキュー」

そう言つと、爽太君は、ボタンを閉めながら、リビングのほうに
行つた。

「髪もばさばさよ!」

と瑞希さんが言つと、

「ああ、会社で髪の毛とかす」

と言つて、鞆を持って上着を持って、玄関から飛び出して行つたよ
うだ。

「あゝ、まったく…。いつまでも子供なんだから」

コーヒーのシミのついたYシャツを手に取り、瑞希さんは、

「これ、すぐに洗わないとね…。ちよつと、お店の準備してくれ
る? 洗つてきちゃうわ」

と言つて、カウンターの奥に行きかけ、

「くるみさん、あきれないでね、爽太のこと」

と私に、言つた。

「は?」

「まだまだ、子供だから…」

「いえ、そんな…。あきれることはないです。私…」

「そう? ならいいんだけど…」

瑞希さんは、そう言つと、バスルームに向かつた。

いきなり、何を言い出すかと思つた。そりゃ、まだまだ子供もつ
ばいなつて思うことはあるけど、そんな爽太君ですら、大好きなの
にな。

無邪気な爽太君にも、胸が高鳴つてる自分がいて…。相当変なん
じゃないかって自分でも思うけど、瑞希さんの、12歳も下の圭介
さんにドキドキしていたつてことを聞き、内心ほつとしていたんだ。
それにしても、なんだか、バタバタしていたから、今日爽太君と
どう接しようかとか、爽太君と話す時は、気をつけなくちゃとか、
そんないろいろな心配がふつとんでいった。

そして、いつもどおりにお店は開店し、いつもどおりの1日が始まっていた。

夜、洗濯物をたたんだり、アイロンをかけたりしていると、圭介さんと爽太君が帰ってきた。

「そう落ち込むなよ、爽太」

と圭介さんは、リビングに来るなり、爽太君の背中をぼんぽんとたたいて、慰めていた。

「何かあったの？」

瑞希さんが、リビングにご飯を運びながら聞いてきた。

「やっぱり、めっちゃ、怒られました」

爽太君が、声を低めにそう答えた。

「え？」

瑞希さんが聞くと、今度は圭介さんが返事をした。

「佐々木さんだよ。怒ったっていうよりなんていうの、八つ当たりじゃない？あれ…」

「八つ当たり？」

爽太君が、圭介さんにそう聞くと、

「お前、人が良すぎるんだよね。自分の仕事が忙しくても、佐々木さんの仕事手伝ってるんだろ？」

と圭介さんは、爽太君に向かって話し出した。

「う〜〜ん。だって、そうしないと、佐々木さんの仕事、定時に終わらないみたいで…」

「で、お前が残業するはめになる」

「う〜〜ん。でも、残業っていつでも、俺家も近いし、特に帰ってからすることないし」

「佐々木さんも、江ノ島に住んでるし、帰ってからすることないと思うけどね」

「え？でも、デートがあるからって、この前言ってたよ」

「ああ。別れたみたいだね。で、特に最近荒れてて、お前に八つ当たりしてて…」

「え？別れたの?!」

「あ、知らなかった?」

圭介さんは、夕飯が揃ったので、いただきますと手をあわせた。爽太君も、圭介さんのあとから続いて、いただきますと言つと、しばらくは黙って二人で食べていた。

「圭介はどうして、別れたこと知ってたの?」

と瑞希さんが聞いた。

「俺は、森に聞いたんだよ」

「森さん?ああ、爽太よりも、3歳上の社員だっけ」

「佐々木さんと同じくらいの年だし、なんか、ふられたからって、飲むのをつき合わされらしいよ。翌日、大変だったって森が言ってたよ」

「へ〜。知らなかった、俺」

「お前、まったく佐々木さん眼中にないもんね。あ!あれだ!お前がおかしかったころだ。お前は恋煩いしてるし、佐々木さんは荒れてたしで、俺が大変だったんだよ」

「俺?恋煩いつて?え?何それ?」

「ええっ?何ってお前…。いつとき、ぼ〜ってしてるわ、仕事間違えるわで、おかしかった時あったろ?」

「……。ああ!あんどき!」

「そうそう。あんどき。お前が、くるみさんしか眼中にないとき、横で佐々木さんは荒れていた」

「…ええっ?!」

「知らなかったろう?佐々木さんが二日酔いで、会社に来てたとか」
「っていうか、父さん知ってたんだ。俺がくるみさん…」

「知ってたよ。何言ってるの？まじ、まるわかりだよ」

「ぶぶっ…」

いきなり、瑞希さんが二人の会話を聞いて、ふき出した。私は横で聞いてて、いったいどんなリアクションをとっていいのか、悩んでしまった。

「あ~~~~。何それ…。それで、俺に八つ当たり？」

「だって、お前、くるみさんとデートする日、すんごいうきうきで俺に何度も、あそこのお店はどうかとか、そうだ、パソコンで調べてみようとか、くるみさん喜んでくれるかなんて言って、それも全部佐々木さん聞いてて、すんごい顔でにらんでて…」

「え？」

「あ~~~~、ほらね。お前、全然わかってなかった」

「……」

「そういうの見てたから、ますますお前のことが、気に入らないんじゃないの？ふられてる人の横で、デートするの喜んでたらさ〜」

「…父さん、だったら、言ってくれる？そういうこと」

「だって、お前、すごく嬉しそうにしてたから、その喜びを半減しちゃ、悪いかかって…」

「……」

爽太君は、黙ってまた、もくもくとご飯を食べだした。

デートって、あのドライブの日だね。そうか、会社でそんなに爽太君、楽しみにしていたんだ。

「爽太って、勘が鋭いようで、抜けてるわね。やっぱり…」
瑞希さんはそう言ってから、

「それと、素直よね、顔に全部出ると、付け加えた。」

今日は、相当佐々木さんのことで、しよげているらしい。顔がず

つと沈んでいた。本当に、顔に出やすいよね…。

爽太君は、大きなため息をすると、

「ごちそうさま」

と言つて、2階へ上がっていった。

「あゝゝゝ、へこんでるなゝゝ」

圭介さんが、そう言った。

「圭介とああいうところは、似てないわね」

と瑞希さんが、笑つて言った。

「ああいうところ？」

圭介さんが聞くと、

「そ。圭介は、ほら、辛い時でも、落ち込んでる時でも、明るく元気にふるまっちゃうでしょ？」

と瑞希さんが答えた。

「ああ。そういえば…。あ、でも、瑞希の前では、素でいるけど、俺」

「でも、他の人の前だと、まだ明るくしちゃう癖が出る」

「まあね…」

「爽太は、けっこう誰の前でも、顔に出やすいわね。正直者というか、素直というか…」

「そうだよな。くるみさんも、爽太、わかりやすい？」

「え？」

いきなり、圭介さんにふられて、びつくりした。

「あ…。はい。そうですね。私、どっちかっていうと平気なふりしちゃうから、素直で羨ましいです」

あの無邪気なところも、素直なところも、本当に羨ましい。でも、きっとそんなところに、私は惹かれてるんだ。

「しばらくへこむと、立ち直れないときもあるのよ、爽太つて。悪いけどくるみさん、様子見てきてもらえるかな？私、ちょっとお店

の方の手伝いしてくるから」

瑞希さんにそう言われて、私は2階に行った。

トントン…。返事がない。トントン…。もう一回、ドアをたたき、

「爽太君？」

と呼んでみた。

「くるみさん？」

ガチャ…。いきなりドアが開いた。

「ごめん、母さんかと思って…」

「瑞希さんはお店に出てるよ」

「そっか。あ、部屋入って」

爽太君に言われて、そのまま、部屋に入った。爽太君はまだ、ス
ーツのパンツにYシャツ姿だった。

「テレビ観てたの？あ、DVD？」

「うん、海をやつ見ながらぼーっとしてた」

「そうとう、へこんでる？」

「うーん。ちょっとね…」

「原因は、佐々木さんって人？」

「うーん。それもあるけど」

「他にもあるの？」

「うん。父さんとかには、言っていないけどさ」

「何？どうしたの？仕事のこと？」

「いや…」

口数が少ない。もしかして話したくないのかな。

あれ…？まさか、私のこと？昨日のことで、なんか落ち込んでる
…、とか？

「あ…。うーん。くるみさんに話すことじゃないような気がする」

「え？私のことで、何か悩んでるとか？」

「いや、そうじゃなくて。うーん」

爽太君は、ベッドに座り込み、しばらくうなだれていたが、
「五月ちゃんのこと」

と、ぼつりと下を向いたまま、言った。

「え？」

ドキッとした。五月ちゃんのことでは何を悩んでいるのか？

しばらく、黙っていたけど、爽太君は意を決したのか話し出した。
「昼くらいに、五月ちゃんから電話があつてさ…。今、出てこれない
かって言うから、昼ごはん買うついでに会ったんだけど…」

「うん…」

少し、先を聞くのが怖い気もする。よりが戻っちゃったとか、そんな展開になったりしないよね？

顔が引きつった。でも、ばれないように平静なふりをした。

「俺、別れ話した時に、五月ちゃんのことを好きかどうかわからな
いから、別れてほしいって言ったんだ。それ、本当のことだったし

…」

「うん…」

「で、そんなとき好きな人ができたのかって聞かれたから、それはな
いって言ったんだよね。あ、そんなときはまだ、くるみさんのことが
好きだって自覚してなかったところで…」

「うん…」

「で…、好きな人がいないのなら、友達でもいいから付き合ってっ
て、今日、言われて…」

「う…、うん…」

「でも、もう好きな人がいるし、その人と付き合ってるしって言っ
たら、相当驚かれてさ」

「……」

「はあ…」

爽太君は、ため息をついた。

「誰だか知りたいらしくて、問い詰められちゃったわけ」

「うん…。それで？」

「あんまりしつこいから、くるみさんの名前を出したら、なんかさ

…」

「うん…」

「なんか、納得してくれないんだよね」

「え？」

「う〜〜ん。なんでかな？そんな嘘ついてもばれるって言われて

…。俺、本当のこと言ってるのにな」

「それで？」

「あ。それだけ」

「…それだけ？」

「うん…。そのあとは、その…。くるみさんは何も心配なくていいし」

「？」

「あ〜〜〜。駄目か…」

「え？何？どうしたの？」

「う〜〜〜ん」

爽太君は、頭をぼりつて掻いた。

「正直に言つとね。くるみさんに会わせろって言っただよね。会ってどうするのかって聞いたんだけど。どうも、会ったら付き合ってるかどうかかわかるとかなんとか…」

それで悩んでたの…？

「いいよとも言えないし、そんなことする必要ないって言ったんだけど。今日は俺そのまま会社に戻ったんだけど…。多分、店来ると思うよ」

「え？五月ちゃんが？」

「うん…。下手すりゃ、明日朝一とかで、多分俺がいる時間帯に…」

「…なんで？」

「なんでかな…。納得したいらしいんだけど。いったい、何を考
えてるのかな？」

しばらく、二人で考え込んでしまった。でも、もちろん答えは出
ない。もう、会いに来たなら、会いにきたで、迎えうつしかないよ
うだ。って、なんで迎えうたなきやいけないのか…。

でも、なんだか聞いてて、私が悪者にでもなったかのような。五
月ちゃんから爽太君を、取っちゃったかのような…。

ふと、自分と稔と、梨香のことが頭をよぎった。ああ、五月ちゃ
んの立場だったんだ、私…。

私も、二人が付き合ってるのを知って、納得いかなかった。そう
そう、「はい、そうですか」なんて思えなかった。それどころか、
死んで二人を苦しませようなんて、今の五月ちゃんよりずっと卑劣
なこと考えてた。

「わかった。爽太君。明日もし、五月ちゃんが来ても、大丈夫だか
ら」

「え？」

「心配しないで」

「でもさ…」

「大丈夫」

自分と重なって見える五月ちゃん。でも、五月ちゃんの方が、よ
っぽど自分に正直に行動しているって思えた。

「ごめん。俺がはつきりしてないからだよね。優柔不断なんだって
自分でも思っよ」

「え？」

「今日、佐々木さんにもがつんと言われた。優柔不断で、優しさを履き違えてる。男らしくない最低な男」

「ええ?! そんなこと言われたの?」

「言われた…。そこまで言う? って後ろで、父さんが目を丸くしてた。一応俺の息子なんだけどって言ったら、佐々木さんも、すみませんでしたって謝ったけどさ」

「なんか、私のほうがショック…」

「え? なんで?」

「なんとなく…。そこまで言わなくてもっていうか、私、爽太君が優柔不断とも思わないし、男らしくないって思ったこともないよ。逆にいろんな面で助けてもらって、年下だっと思えないほどだもの。私がすごく、頼りにしちゃってるのかもしれないけど…」

「そうなの? ほんとに?」

「うん」

「すんげえ、幼い子供とかって思っていない?」

「ないよ。全然」

「…良かった。ほっとした、それ聞いて」

「え? なんで?」

「ちよつとね…。朝も2度寝して、寝坊するわ、コーヒーふき出すわ、母さんに言われたことで動揺するわ…。俺って情けないって、思ってたんだよね。くるみさんから見たら、俺、子供だよなって…」

「ええ? そんなこと思っていないよ。子供っぽいところも、あるなって思ったりもするけど、でも全然…」

「あ。やっぱ、思うことあるんだ…」

「え? でも…」

「朝もコーヒーふき出したあと、なんかくるみさん、避けてるっていうか、目を合わせないっていうか、もしかあきれてるのかなって思ってた…」

「え~~~~~?！」

えらい思い違いだ。私は、昨日の夜のことと恥ずかしかったり、瑞希さんにばれないよう、わざと冷静なふりをしてたのに…。

「違うよ、爽太君。私、なんか勝手にドキドキしてただけだから」

「何に? っていうか…、何で?」

「何でって、だって…。だって…」

私は多分、真っ赤になっただけだと思う。顔がものすごく、熱かった。

「え? 何で? 今もしかして、照れてるの?」

「う…、うん」

「……。何で?」

爽太君は、本当にわからない様子で、目を丸くしながら私に聞いてくる。いったい、私が本当のことを言ったら、どうするんだろう。照れる? あきれる? 引かれる? 嫌がる?

しばらく、私は黙ったままうつむいていたが、爽太君のまっすぐにこつちを見ている視線に、負けてしまった。

「白状するとね」

「うん…」

爽太君は、興味津々だが、ちょっと緊張もしている。

「昨日の夜のこと、瑞希さんに悟られないようにって、わざと冷静にしてたの…」

「え? ああ…。それと?」

「コーヒーのしみつけて、Yシャツ脱いだでしょう?」

「う…、うん。なんか、Yシャツよごしたりして、俺、子供みたいだよな」

爽太君は、苦笑いをした。

「そうじゃなくて…。その…。爽太君の上半身、裸なのを見て、妙

に照れちゃったの。だから、爽太君を見れなくなっ…」

「え?!」

爽太君は、一瞬たじろいでいた。それから、ちょこつと体を引き気味にした。あ…。やっぱり引いてる…?それから、

「…え?」

とまた、爽太君は、聞いてきた。

「ああ、やっぱり言わなければ良かった。今の忘れて…」

そう言ってから、私はしばらく下を向いていた。どんな顔をしていいかも、わからなくなっただから。

「そっか。なんだ」

爽太君は、ちょっとほっとしているような、口ぶりだった。

「……」

爽太君までが黙ってしまった。しばらく二人で黙っていたが、爽太君が話し出した。

「俺、ちよつとあれかも…」

「え?何?」

ドキッとして、顔を上げた。

「くるみさんのこと、誤解してたっていうか…」

「え?どんなふうにな?」

「その…。7歳上だし、付き合ってた人いるし、もっと男の人慣れしてるのかなって」

「え?!何?それ?」

「あ、ごめん!ほんと、ごめん!」

「お、男の人慣れしてるって…、どういうこと?」

「だから、えつと。男の人の裸とか見慣れてるのかなとか、昨日の夜のことそんなに意識してないのかなとか…。それで俺がやたらと、意識したらますます子供っぽいかなとか…」

「……」

ああ、それで、今朝、あんなにもさわやかな笑顔で挨拶してきた？平気なふりをしたとか？

「あ、あのね…。稔と付き合ってるのとは、また違うの」

「え？」

「全然違うの…。やたらと爽太君のことは、意識しちゃうし、ドキドキしちゃうし。まぶしいやら、愛しいやら、稔にはそういうの、なかったんだよね」

「え?!」

爽太君の目が、また真ん丸くなった。あ、私、何を正直にべらべら、話しちゃってるんだろう。

「あ、今のも、忘れて。は、恥ずかしいから…」

「え?なんで?忘れないよ!こんな嬉しいこと忘れるわけないじゃん」

そう言っ、爽太君は、少しにやけそうになるのを、こらえているようだった。

「なんだ、そっか。そうなんだ。俺だけじゃなかったんだ」

「何が？」

「いや、ドキドキしたりするのとか、すごい意識してるのとか…。ほんとは隣にいただけでも、心臓ばくばくしたりするし」

「そうなの？」

「するよ、そりゃ…。今だって、意識しまくり。でも、そうそう手を出したりしたら、嫌われるかなとか、うつとおしいかなとか、疎まれるかなとか、そんなことも同時に考えてるから、頭ン中ぐるぐる…」

「……」

知らなかった。それは全然、気づかなかった。

「あ、こんなことばらしていいのかな、俺。やばいよね？」

「うつん…」

しばらく、二人してベッドに姿勢よく座り、まん前を向き、お互い顔を合わせられなかった。

「昨日も、その…。たった2本だったけど、酒の力借りちゃったし」先に爽太君が、沈黙をやぶった。

「え？」

私は思わず、爽太君の顔を見た。爽太君は、まっすぐ前を向いたままだった。

「ごめん。酒臭かったよね、俺。なんか、疲れてたからか、やけに酔っちゃってて。そのまま朝まで、爆睡してたよね？俺、その、いびきとかかいてなかった…？」

「大丈夫、すやすや寝てたよ」

「もしかして、くるみさん、寝れなかったとか？狭かったし…」

「寝れたよ。でも、たまに目が覚めてた」

「え？ほんと？」

「うん。それで、爽太君の顔を見てたり、寝息聞いてた」

「え？まじで？うわ！照れる…」

爽太君は、みるみる真っ赤になった。すんごい可愛い。

「なんか、すげえ顔で寝てなかった？俺」

「ううん。可愛い寝顔だったよ」

「か…可愛い？って、ガキみたいってこと？」

「違う、違う。えっと、なんて言ったらいいのかな…。か、可愛いっていうか、愛しいっていうか…」

また、爽太君は、こっちを見たまま、目を丸くした。そうとう、驚いているようだ。それから、ますます顔を真っ赤にした。

「あ…。なんか、駄目だ。そういう言葉に俺、慣れていないっていうか…。あ、母さんとか父さんになら、耳にたこできるくらい言われてたけど…。女性から言われたのは初めてだ」

「そうなの？」

「うん…。わ…。やつべ…。俺、真っ赤だよ。もしかして、耳まで赤い？すごい顔が熱いんだけど…」

「うん。真っ赤だよ」

「ああ…。やつぱり？」

そう言つと、爽太君はしばらく、うつむいてしまった。それからぼそつと、

「でも、ちよつと安心した」

とつぶやいた。

「え？何が？」

「俺、あきれられてるかなって思つて…。その…。あ、なんか1番へこんでたのは、それが原因だったかも」

「やだな…。そんなこと全然ないのに。あ、そつか。私がそつけない態度とつたからか。ごめんね」

「ううん、こつちこそ…。その、勝手にあれこれ悩んじゃつて…」

「ちゃんと、言わないと駄目なんだね」

「え？何を？」

「自分の心の中を、素直にきちんと言わないと…。爽太君を、知らない間に傷つけちゃうんだね」

そう言つと、爽太君は目を細めた。それから、私を優しく見つめた。

「俺、まじでくるみさんのこと、すげえ好きになつてる」

そう言つと、爽太君はそつと、キスをしてきた。すごく優しいキスだった。

それから、その優しい空気に酔いしれていたかったが、時計を何気に見たら、9時を過ぎてて、

「あ、いけない。お店の片付け手伝わなくっちゃーご、ごめん。爽太君」

と、私は慌てて、爽太君の部屋を出た。

一階に急いで下りていったが、お店に出る寸前で、呼吸を整え、ほっぺをばんぱんとたたいてから、出て行った。

「すみません、手伝います」

と言うと、瑞希さんが聞いてきた。

「爽太、どうだった？へこんでた？」

「はい。あ、でも、多分もう大丈夫」

「そう？良かった。くるみさんと話したら、元気出るかなって思ったのよね」

「そうなんですか？」

私は、照れてしまったが、なるべく冷静にそう返事をした。

「ふふ…。だって、最近悩みがあるたびに、くるみさんに話を聞いてもらって元気になってるから」

瑞希さんはそう言って、笑いながらどんどん、片付けをしていた。

さすが、瑞希さんは、爽太君のことがわかってるな…。なんか、もう全部見透かされているんじゃないかって、そんな気もしてきた。

それにしても、あんなに素直に自分の心のうちを、人に見せたことではないな…。爽太君にだと、素直になっている自分がいて、本当に驚く。

爽太君の悩み事を聞いているというよりも、私がいつも元気になっている気もしちゃう。不思議だな…。

きつと、爽太君といると、素直になれるからかな…。

14 私の心の鏡

翌朝、いつもと同じ時間にお店に行った。春香ちゃんがコーヒーポットを持って、ちょうど海に行こうとしていた。

「おはよう」

「あ、おはようございます。サンドイッチ、多めに作ってあるから良かったら食べてくださいね。それじゃ！」

そう言って、春香ちゃんはクロと一緒に、元気よくお店を出て行った。

水曜日は瑞希さんはいつも、7時半過ぎに起きてくる。爽太君が朝ごはんを食べるのにあわせて起きるようだ。でも、今朝は爽太君は、早めに起きてきた。

「おはよう、くるみさん。早いね」

「うん、水曜もいつもと同じ時間に、目が覚めるから。あ、春香ちゃん、サンドイッチを作ってくれてるよ。食べる？」

「うん」

「じゃ、コーヒー淹れるね」

「ありがとう」

爽太君は、サンドイッチを食べながらも、携帯を見たり、時計を気にしていた。多分、五月ちゃんが来るんじゃないかと、気にしていたんだろう。

7時半に瑞希さんが、お店に出てきた。

「あら、爽太、早くない？」

「うん。目が覚めちゃって。あ、朝ごはんなら、春香が作ったサンドイッチ食べてるから」

「あら、そうなの。まあ、ずいぶんたくさん作ったのね、春香は…。これなら、圭介の分も大丈夫そう。私も食べようかな」

瑞希さんもカウンターに座り、サンドイッチを食べだした。私は、瑞希さんの分のコーヒーも淹れて、二人に持っていった。

8時を過ぎて、圭介さんもカウンターに来て、サンドイッチを食べ出した。瑞希さんが圭介さんにコーヒーを淹れ、二人でしばらく話をしていた。

爽太君は、まだカウンターに座り、新聞を読んでいた。いや、読んでいるというより、ぼくくつと眺めている感じで、時々時計に目をやっていた。私はキッチンの中で、洗い物をしていた。

しばらくすると、お店のドアが開く音がした。

「あ！」

爽太君の声がした。瑞希さんがすぐに、

「あら、五月ちゃん？」

と、不思議そうに言った。

ああ…。やっぱり来たんだ…。

なんとなく覚悟をしていたものの、五月ちゃんがなんのために来たのかもいまいわからず、私は少し動揺した。

爽太君をキッチンからそつと見ると、直立不動になっていた。

「あの…、くるみさんっていますか？」

五月ちゃんは怖い声で、瑞希さんにそう聞いた。

「くるみさん？ええ。キッチンのほうに…」

瑞希さんがそう答えた。

出て行くかどうか迷ったが、観念して私が出て行くと、五月ちゃんは、

「ちょっと爽太君と、お店の外に来て貰ってもいいですか？」と聞いてきた。

「え？はい…」

五月ちゃんは、先に外に出た。爽太君は、

「くるみさんはいいよ、ここにいてよ」

と言ったが、

「大丈夫」

と私は言つて、爽太君と一緒に外に出ようとした。

その時後ろから、圭介さんが爽太君に、

「おい、爽太。なんで五月ちゃんが来たんだ？」

と、小声で聞いてきた。

「あ、うん。あとでね」

爽太君は、圭介さんにそう言つと、私の背中に手を回して、ドアを開けて外に出た。

後ろを見ると、窓ガラスから、圭介さんのきよとした顔と、瑞希さんの優しいまなざしの顔が見えた。二人の顔を見て、ちよつと私は安心した。

「五月ちゃん…」

と、爽太君が声をかけると、怖い顔をした五月ちゃんが、

「くるみさんつて、最近お店で働きだしたんだよね？爽太君」
と聞いてきた。

「うん。そうだけど」

「爽太君の家で、一緒に住んでるんでしょ？」

「…うん」

まだ、爽太君は私の背中に手を回したままだった。それを五月ちゃんは睨むように見てから、

「くるみさん、爽太君と付き合ってるつて、本当ですか？」
と聞いてきた。

「うわ…。なんだか、おじけづく…。」

「はい…」

「くるみさんのほうが、ずっと年上ですよね？」

「7歳上だけど…」

「私が爽太君と、付き合ってるの知ってましたよね？」

「う、うん…」

「じゃ、なんで？」

五月ちゃんの目が、真っ赤になった。泣くのをこらえてるように見えた。

「五月ちゃん、くるみさんのこと責めるの間違ってるよ」

爽太君が、少し私の前に出てそう言った。私をかばおうとしているのがわかった。

…いきなり、五月ちゃんが私に見えた。私の前にいる爽太君が、稔に見えた。そして、私が梨香だ…。

「爽太君は、黙っててよ。私はくるみさんに話しているの」

…稔は黙っててよ。私は梨香に話しているの。

「くるみさんは関係ないって！」

…梨香は、関係ないって！

「なんで？どうして？くるみさんいなかったら、私たち別れてないでしょ？」

…なんで？どうして？梨香がいなかったら、私たち別れてないでしょ？

「くるみさんが、爽太君のこと、とったんじゃない？！」

…梨香が、稔のこと、とったんじゃない？！

「違うって。くるみさんがいてもいなくても、五月ちゃんとは別れることになったよ」

…違うって。梨香がいてもいなくても、くるみとは別れることになったよ。

すべてが、だぶっている…。

五月ちゃんは、私の心そのものだ。私が稔や梨香に言いたかったけど、言えなかったことだ。全部、心の中に閉まったことだ。

五月ちゃんは、爽太君の体を押しのけ、私の前に来た。そして、
「爽太君のこと、本当に好きなんですか？私はずっとずっと、爽太君のこと、好きだったんです。途中からひよっと現れて、爽太君がっさらって絶対、私許せません」
とすごく怖い顔をして言った。

…愕然とした。私を睨む五月ちゃんの姿が、私の梨香や稔を憎んだ心を、そのまま映し出しているようで…。

胸が痛んだ。苦しくなった。私も稔と梨香をまだ許せていない。まだ、憎んでる。五月ちゃんのように…。

五月ちゃんの顔を、私は見れなくなった。

「五月ちゃん」

爽太君が、私と五月ちゃんの間に入ろうとしたけど、五月ちゃん
はもっと、私に近づき、

「爽太君を返してよ！」

と叫んだ。その言葉も全部、私の心の声のような気がして、私は耳をふさいだ。

『稔を返してよ！』

何度その言葉を、梨香に言いたかっただろう。でも言えなかった。

あまりにも、胸が苦しくて、私はぼろぼろ泣き出してしまい、

「ごめんなさい…」

と謝っていた。

「それ、返してくれるってこと？とった事を謝ってるの？」

五月ちゃんが、きつい口調で聞いてきた。

「いい加減にしろよ！五月ちゃん、怒るよ、俺」

爽太君が五月ちゃんの腕を掴んで、私から遠ざけようとした。

「ねえ！なんで謝ったの？」

それでも、まだ五月ちゃんは、私に聞いてきた。

私は、涙が止まらなくなっていた。でも、ひたすら謝っていた。五月ちゃんにじゃない。憎んでいた稔と、梨香に…。

なんで、憎んでいたんだろう。なんで、恨んだりしたんだろう。稔も梨香も悪くないのに、全然悪くないのに。

私が、梨香の立場に立ってみてわかった。爽太君が、稔の立場に立ってわかった。

アパートの前で、会ったときの稔…。本当に梨香が好きなんだ。梨香のために、私に会いにきたんだ。ちゃんと、逃げずに。

私だけが逃げていた。私の苦しい心にも、向き合おうとしないで。誰とも、向き合おうとしないで。

ぼろぼろ涙は止まらなかった。私はまるで、子供のように声を出して、泣き出してしまった。

「ご、ごめんなさい…」

ずっと、仕事のことで悩んでいる私を、励ましてくれてた稔のことを思い出した。ずっと、私の話を真剣に聞いてくれてた、梨香のことを思い出した。

私は、二人とも大好きだった。

…大好きだったのに。なのに、なんで二人を憎んだりしたんだろう。

私が、声を出して泣いているので、五月ちゃんは何も言えなくなっていた。爽太君は、ものすごく心配して、

「くるみさん…？」

と、私の顔を覗き込んだ。それから、優しく私を抱きしめた。

私は、爽太君の背中に腕を回して泣いた。背中シャツをぎゅって掴んで、わんわん泣いた。

「大丈夫？くるみさん、大丈夫？」

と爽太君は、私の背中をさすりながら聞いていた。

「なんで、あなたがそんなに泣くのかな？泣きたいのはこっちなのに」
五月ちゃんが、私に言った。

「ひ…、ひつく…。ご、ごめんなさい…」

私は、しゃくりあげながら、五月ちゃんにまた、謝った。そして、
「で、でも私、爽太君が本当に好きだよ。すごく大事で、愛しくて、
爽太君がいなかったらきつと、生きていなかったよ」
と、そうつぶやいた。

「え？」

五月ちゃんの顔つきが、変わった。

「爽太君の存在は大きい。私、爽太君から離れられないよ…」
そう言ってから、私は爽太君の胸に顔をうずめた。そしてまた、
泣いていた。

なんで、泣いていたのかもわからない…。わからないけど、泣いていた。

爽太君はしばらく、私を抱きしめていて、それから、
「ごめん、五月ちゃん。俺がもつと、はつきりと言わなきゃいけない
かったよね。俺も、くるみさんが好きなんだ。五月ちゃんに対して
は、恋愛感情持てなかった。ごめん」
と五月ちゃんに向かって、謝った。

「……」

五月ちゃんは、しばらく黙っていた。でも、
「くるみさんが、爽太君のこと本気ってわかったから、もういい」
とそう小さな声で言ってから、その場を去っていった。

私は、なかなか泣き止むことが出来ず、しばらくそのまま、爽太
君の胸に顔をうずめていた。

「くるみさん、大丈夫？」

爽太君がまた、優しく聞いてきた。私は、爽太君の胸から顔をあげた。

「あ、ごめん。私、爽太君のＹシャツよごした」

私の涙や、化粧がくっついてしまった。

「ああ、いいよ。着替えるから」

「ごめんね……」

「いいって……。それよりも、泣き止んだ？」

「うん……」

ようやく落ち着いた私をまだ、爽太君は優しく抱きしめていた。

「五月ちゃんが、私に見えた」

「え？」

「私の鏡みたいだった」

「どういうこと？」

「稔と梨香を恨んで責めてた、私に見えたの……」

「……」

爽太君は、黙りこんだ。

「私ね……、ようやく気づいたの。いろんな気持ちを全部押し殺して、自分の中に閉まっていたけど、何も言わなくても、ずっと、二人を苦しめてたんだね」

「え？」

「五月ちゃんは、きちんと自分の感情を出してた。気持ちをはずきりと言ってた」

「うん……」

「その方が相手を傷つけるように見えるけど、でも、黙って心の中でずっと憎んでいるほうが、傷つけるんだね」

「……」

私は、黙っている爽太君の腕の中から離れて、爽太君を見つめた。

「梨香の立場に立ってみて、わかった」

「え？」

「梨香も苦しんでるし、傷ついてる。自分を責めたりしてると思う。私は、何も言わないで来ちゃった。梨香が苦しもうとそんな関係ないって、梨香をほっというて江ノ島に来ちゃった」

「うん……」

「梨香はまだ、苦しんでるかもしれない。私を苦しめたって、私の人生狂わせたって、そう思い込んでるかもしれない。もしかしたら、ずっとキズを心に負ったまま、これから先、生きることになるかもしれない」

「うん……」

爽太君は、優しくうなづきながら聞いていてくれた。

「私、それでもいい、ううん。思い切りずっと、苦しめばいいなんて思ってたの。でも違う。そんなのいいわけない。だって……」

私の目からまた、涙が溢れ出た。

「だってね、私、梨香が好きだったの。稔のことだって好きだったの。好きだった人を、苦しめたままでもいいわけないよね？」

ぼろぼろ涙が出てきた。爽太君は、そっと涙をふいてくれた。

「くるみさんが、そう思うなら……」

爽太君の目は、とっても優しくかった。

「うん……。苦しめたままに、しておきたくないよ」

「そうだね。このままじゃ、くるみさんも苦しいよね」

「え？」

「きつとね、稔さんや梨香さんを憎んでいたくるみさんが、1番傷ついていたと思うよ」

「……私が？」

「うん」

爽太君の声も、まなざしも優しくかった。あつたかくって、また私

は涙が出た。

「泣けてよかったね。すっきりしたでしょ？」

と爽太君は、優しくほほえんだ。

「うん……」

爽太君は、視線を私の後ろに移した。私も振り返ると、お店の窓から、私と爽太君を見ている圭介さんと、瑞希さんが見えた。

「父さんと、母さんも心配してたんだろうな……」

「うん……」

私は、爽太君の優しさやあつたかさと、圭介さんと瑞希さんの優しいまなざしを感じながら、幸せをかみしめた。

「今の私は、すごく幸せだから、だから、ちゃんと稔や梨香にそれを伝えたい。そうしたら、二人も安心するよね？」

「うん。そうだね」

爽太君はそう言うと、私の背中に手を回して、お店の方へと歩き出した。

お店に入ると、瑞希さんが、

「コーヒーでも淹れましょうか。あ、くるみさんは、ミントティーの方がいいかしらね」

と、カウンターの中へと入っていった。

「一件落着？」

と圭介さんが、爽太君に聞いた。

「うん……」

爽太君はそう言うと、時計を見てから、

「あ、そろそろ行かないと。俺、その前に着替えてくるね」と、2階に上がっていった。

圭介さんも時計を見て、リビングの方に入っていった。

「ミントティー淹れたわよ。ここに座って飲んで」

と、カウンターに瑞希さんが、ミントティーを置いてくれた。

「はい」

私は涙を拭いてから椅子に腰掛け、ミントティーを飲んだ。すつとしてあたたかくって、胸の中にミントの香りが広がっていく。

「いろいろ人生起きるけど、そうやって絆は深まっていくのかもね」と瑞希さんは言くと、カウンターの奥に入ってしまった。

一部始終を見ていたのかもしれない。でも、詳しく聞かないで、そつとおいてくれる。それが、瑞希さんの優しさなんだって、いつも感じる。

そして、瑞希さんはいつでも、爽太君のことを信じている。それが伝わってくる。

私は日曜日、午前中お店を休ませてもらうよう、瑞希さんをお願いした。

「いいわよ。春香が手伝ってくれると思うし…。午前中だけでいいの?」

「はい。用が済んだら、すぐに戻ってきますから」

「そう…。一人で出かけるの?」

「はい」

本当は、爽太君についてきてもらいたかった。でも、そこまで甘えるわけにはいかないだろうな。

私は、お店の掃除とか、家の掃除をその日、瑞希さんと一緒にした。それから、お昼と一緒に、海に見えるレストランに食べに行った。

海が見渡せる席に案内され、二人で席に着き、その日のランチのメニューを注文した。

「ここ、たまに圭介と来るのよ」

と、瑞希さんは、笑って言った。

「いいですね。いつまでも、二人でデートして…。羨ましいです」

「あら、そう？でも、この前、爽太とデートしてたじゃない」

「え？はい、そうですけど…」

私は少し、照れてしまった。

「ね、日曜も爽太と行ってきたら？爽太なら、喜んでついていくわよ」

「でも…。私、元彼に会いに行くんです」

「え？そうなの？」

「はい。それから、親友だった人にも会いに…」

「親友だった？過去形なの？」

「あ…。はい…。いえ…」

そうか…。過去形にしたのは、私だ。勝手に関係を終わらせたんだ。

「元彼、私の親友と付き合い出したんです。それで、別れることになって」

「あら…。三角関係だったの？」

「はい。でも、私全然気づかなくて。仕事ばかりしていたから」

「そう…」

「それで、今日、五月ちゃん見てて思ったんです。私は元彼と親友のことを恨んだけど、でも、二人ともけして悪くなかったんだって。誰も、悪くないんですよね」

「うーん。そうね。その親友があなたから、悪意で彼を奪ったりしてなかったらね」

「そんなことしません。そんなことができる子じゃないです」

「そう…」

瑞希さんは静かに、そう微笑んで言った。

「そんなことができる子じゃないって知ってたのに、私、恨んだんですよね」

「自分のことを責めてるの？くるみさん」

「いえ…。そういうわけじゃ…」

「二人を恨まないと、苦しかったんじゃないの？親友だった人、彼だった人を憎まないとやっていけないくらい、辛い思いをしちゃったんじゃないの？」

「……」

私は、何も言えなかった。瑞希さんは、優しい口調だったけど、目が真剣だった。

「二人を憎んだ自分を、責めたりしないでいいのよ。それだけ傷ついてたんだから。そしてきつとね、爽太に会って、ようやく二人のことを許せるくらいまで、心が回復したのよ」

「え？」

「だからね、いいの。過去のあなたのことを、今のあなたが裁いたりしなくてもいいの」

「……」

私の目から思わず、涙が出ていた。

「大丈夫。誰だって、苦しかったら誰かを憎もうとしたりするわよ。そんな自分がいてもいいのよ」

「はい…」

「でも、やっと苦しみから、抜け出せたのかもね」

「はい。爽太君や、瑞希さんのおかげです」

「え？違うわよ。くるみさんの力で、回復したのよ。誰でもね、ほら、怪我をしたら自分で治そうとするじゃない？治癒力があるでしょ？心だっただけだと思うわ。ただ、治癒力をアップしたのは、爽太の存在だったかもしれないけどね」

「ものすごく大きいです。爽太君の存在は」

「…そう？」

瑞希さんは、また、優しく微笑んだ。

「はい。あつたかくつて、優しくつて…。どんどん私は素直になれるんです。そのたびに、泣いたり、溜め込んでいた感情を出せて、それできつと、心が軽くなるんですね」

「あなたも、心を開いているのよ。爽太に。お互いが心を開いているんだと思うわよ。爽太だって、くるみさんといると、自然体っていうか、とても穏やかだし」

「お互いが？」

「うゝん。なんだろうね？私も圭介と出逢つて、なんだったのかわつて思つけど、なんか、運命みたいなものかしらね？出逢うべきして出逢つた相手…」

「…え？」

「年月なんか関係ない。そんなの関係なしに、相手の存在が大きくなって、とても大事になつて…。不思議よねゝゝ。そういう風に思える相手に、めぐり逢えるつて。奇跡とも思えるわ」

「そうですね…」

「ふふ…。でも、やっぱり決められてたつていうか、出逢うようになつていた。必然だつたつて思ふのよね、私」

「……」

私は、瑞希さんの言葉を聞いてて、ときどきした。そんな人に私はめぐり逢えていたんだ。感動で胸がいっぱいになつていた。

「だからこそ、大切にしたい相手だわよね。ひとときも、無駄に出来ない…」

「はい…」

「今を大事に生きたいつて、思つちゃうわよねゝゝ。それに、そんな人にめぐり逢えたことに、感謝しちゃうわよねゝゝ」

瑞希さんは、すごく嬉しそうに話を続けた。

「でね。最近思ふのよね。それは圭介だけじゃないつて。爽太だつ

てそう。私の子供に生まれたのも必然。春香もよ。そしてくるみさんとの出逢いもね」

「え？」

「そして、今日の前にいるくるみさんが、私は愛しいんだわ」

「え?!」

「ふふ…。なんかね、娘とも違う、うまく言えないけど、こうやって出逢えて本当に良かったって思えるのよね」

私は、また目頭が熱くなり、涙が出そうになった。思わず、鞆の中からハンカチを出して、目頭を押さえた。

「あ、泣きそう？私、泣かせちゃったかしら？でも我慢しないで、泣いちゃっていいわよ」

と言ってから、瑞希さんは笑っていた。私も、思わず笑ってしまったが、一緒に涙も出てきて、泣いているんだか、笑っているんだかわからなくなっていた。

海はとても穏やかで、気持ち良かった。瑞希さんと二人で食べた、お昼ごはんも美味しかった。

心が、どんどん安らいでいくのを感じた。どんどん悲しい思いも、苦しい思いも、浄化されていくような気がしてならなかった。

15 大好きな人たち

日曜の朝、7時に起きて朝食を取り、お店の手伝いを始めていると、爽太君が起きてきた。

「あれ？爽太君、早いね。今日休みでしょ？」

「うん。でも、くるみさんと一緒に出かけようと思ってさ」

「え？…でも私」

「母さんに聞いたよ。稔さんと梨香さんに会いに行くんでしょ？」

「うん」

「俺も一緒に行くよ」

「え？大丈夫だよ、私一人で…」

「俺、一緒だと迷惑？」

「そうじゃなくって…。そこまで甘えられない」

「何それ？あはは…。変なの。俺がついていきたいんだけど、迷惑？」

もう1度爽太君は、聞いてきた。

「ううん。迷惑じゃない…」

本当は心強い。

「じゃ、一緒に行くよ。母さん！朝ごはん用意してくれる？」

「はいはい。今、持って行くわね」

瑞希さんがキッチンから、返事をした。私は、爽太君のコーヒーを淹れた。

コーヒーのいい香りが、お店中に広まった。私は爽太君の後姿を、テーブルセッティングをしながら眺めた。なんだか、すごく緊張していたのが、ほぐれていく気がした。

水曜の夜には、稔に電話を入れておいた。稔は私からの電話で、相当驚いていたようだ。

日曜の午前中、稔と梨香に会いたいと言うと、梨香にも伝えておくと言われた。時間と待ち合わせ場所を決め、電話を切った。

稔に電話をするのは、勇気がいった。だけど、どうしても会わないといけない気がしていた。

「何時に待ち合わせ？」

爽太君は、朝食を済ませると聞いてきた。

「10時半に、新百合ヶ丘の改札で待ち合わせてる」

「新百合ヶ丘？」

「稔がそこに住んでるの」

「ああ、そうなんだ」

「9時くらいに出ようかな…。それまでは、お店の準備をしようかと思って…」

「春香は？」

「海に行ってるよ」

「そっか…。じゃ、俺も手伝うよ」

「うん」

爽太君は外に出て、慣れた手つきで掃除を始めた。私はお店の中の掃除をした。

それから、窓ガラスを拭き始めると、外から爽太君も、窓ガラスを拭き出した。私と同じ場所を、まったく同じ格好で拭く。

どうやら、わざとまねをしているらしい。なんだか、見てておかしくなって、笑ってしまった。爽太君も、窓ガラスの向こう側で、あははって笑っていた。その笑顔がすごく可愛かった。

爽太君のまぶしい笑顔に、私は何度、救われただろうか…。

9時になり、二人でお店を出た。瑞希さんと春香ちゃんと、まだ眠気眼の圭介さんが、
「いってらっしゃい」

と、見送ってくれた。

爽太君は、私の横ですつとさわやかな笑顔で、話をしていた。私の緊張を、ほぐしてくれようとしているんだろうな。きっと、窓ガラスを拭いていた時もそうだったんだ。

私は、爽太君の笑顔を見て、笑い声を聞いて、まったく緊張も感じることなく新百合ヶ丘まで、行くことが出来た。

「ちょっと早かったかな」

時計を見て、爽太君が言った。でも、改札を出ると、もうすでに稔も梨香も私たちのことを待っていた。

いや、私たちっていうのは適切じゃないな。爽太君と一緒にいくことは、稔も梨香も知らなかったから。二人とも私が、爽太君と一緒になので、「え？」って表情をしていた。

梨香には、久しぶりに会う。なんだか痩せたような気がする。それにひきかえ、多分私は太っただろうな。

「早かったんだね…」

と私が稔に言くと、稔も、

「くるみも、待ち合わせの時間より早かったんだな」

と言った。それから、爽太君の方を見て、

「君も、一緒に来たんだ」

と、無表情でそう言った。

「どうも。この前は…」

爽太君も、無表情でそう答えた。

梨香は、どこを見るともなく、うつむき加減で黙っていた。私も、何を話しかけたらいいかわからず、梨香には何も、言わなかった。

4人で、間をあげながら歩き出した。

「静かなところがいいだろ？ホテルのラウンジでいい？」

稔が聞いてきた。

「え？うん」

私はそう答えたが、やっぱり梨香は黙って、みんなよりも一步後ろを歩いていった。

私は、なんとなく爽太君の近くに寄った。稔とは距離を開け、梨香が稔のそばに来れるようにしたが、梨香は、ずっと後ろを歩いていった。

ホテルのラウンジで、店員さんに席を案内され、私は爽太君の隣にさっさと座った。爽太君の前に、稔が座るのかと思ったら、私の前に座ってきた。

「…あのさ、なんだっけ？君、名前」

稔が爽太君に聞くと、

「榎本爽太…ですけど」

爽太君は、つつけんどんに答えた。

「くるみと一緒に住んでるって、家族みたいなものだって言ってたよね？」

「はい」

「今、君いくつ？学生でしょ？」

「22歳です。もう働いています」

「ふうん…。で、なんで今日一緒に来たの？」

稔はものすごく、ふてぶてしい態度だった。あきらかに爽太君のことを、邪魔扱いしている。

「爽太君がいてくれないと、私が緊張するから」と、思わず爽太君が、答える前に私が口をはさんだ。

「それに、爽太君も私のこれから話すことに、関係してるし」

そう言つと、稔は私の方をいぶかしげに見た。梨香もずっと、うつむいていたが、顔を上げた。そして、私の顔を見てから、爽太君の顔も見た。

「話って…？俺がこの前、くるみに梨香に会ってくれて頼んだから、来たんじゃないの？」

「違う…」

「じゃ、何のために俺たちを呼んだわけ？」

稔は、とげとげしくそう言った。稔の顔は、無表情から怖い表情へと変わっていた。私が梨香を責めたりすることを、怪訝しているように見えた。

「話しておきたいことがあって来たの…。ちゃんと、話しておかないといけないと思ったから」

そう言つと、ますます稔の表情は固まった。梨香はまた、うつむいた。梨香の手元を見るとずっと両手を組んでて、その手は少し震えているようにも見えた。

コーヒーが4つ運ばれてきて、私は少しコーヒーを飲んでため息をついた。手に汗がにじむ。ひざの上に両手を置くと、そつと爽太君が、私の手をにぎってきた。すごく優しく…。

ずっと気持ちだが、落ち着いていくのがわかる。爽太君の顔を見ないでも、すごく優しく私のことを、包み込んでくれているのだろうなっていうのがわかる。

息を大きく吸って、私は話を始めた。

「私…、もう稔にも梨香にも、会わないつもりでいたの。会う必要もないし、私がどこにいるのかも教える必要もないって…」

もう一回私は、息を吸って続けた。

「でも、会わないでいたら、もしかして稔のことと梨香のことも、苦しめたままなんじゃないかと思って…」

「え？」

稔の表情が変わった。

「私、二人が付き合ってるって聞いて、すごくショックだった。稔に別れてくれて言われて、何を言ってもいいかもわからなかった。ただ、二人を憎んだ。私が苦しいように、二人も苦しめばいいって思った」

梨香の手が思い切り震えた。うつむいてはいるが、唇をぎゅって噛んでいるのもわかった。

「だけど・・・」

言葉に詰まってしまうと、爽太君が握っている手に力を入れた。

爽太君の顔を見ると、大丈夫って目で言ってるのがわかる。

「私…、稔のことも大好きだったし、梨香のことも大好きだったの…」

そう言っていると、梨香は顔を上げた。すごく驚いている。それは、稔もだった。

「だから、そんな大好きだった人を、苦しめたままにいるのが、耐えられなくなったの…」

「くるみ…」

その時初めて、梨香は口を開いた。

「私、今、幸せなの。爽太君や爽太君の家族に出会って…。みんなあったかくて、優しくて、すごく幸せなの。でもね、私だけ幸せになつたら、いけないんじゃないかって思ってた…」

「……」

二人して、私と爽太君を交互に見た。

「梨香…。もし、私の人生を狂わせたって思っているとしたら、そんなことないから。自分を責めたり、幸せになるのを止めたりしなくてもいいから。苦しまなくてもいいから…」

そう私が言っていると、梨香の目から大粒の涙がこぼれた。

「くるみ、それを言いに来たのか？」

稔は、目を丸くしてそう聞いてきた。

「うん…」

「なんでそんなに、変わったんだ？この前会った時には、すごく攻撃的で…」

「ごめん。あの時には、まだ、二人のこと憎んでたから」

「……」

二人とも、黙って私を見ていた。

「本当に、幸せなの？」

梨香が聞いてきた。

「うん」

「彼がいてくれるから？その…、爽太君って言ったつけ？くるみと付き合ってるの？」

梨香がおそろおそろ聞いてきた。

「はい」

爽太君は、まっすぐ梨香の方を見て、はっきりと答えた。

「くるみ…、さっき、私のこと大好きだったって」

「うん。ごめんね。梨香はいつでも、悩みを聞いてくれたり、そばにいて励ましてくれてた。仕事のことで、稔の事でも。なのに私は、そんな梨香の優しさに、気づくことも出来てなかった。いつも自分のことばかりで…」

「くるみ…」

梨香の目はうるんでいた。

「梨香はずっと、稔のことが好きだったんじゃないの？」

「……」

梨香は、黙ったままうなづいた。

「じゃ、私が稔との話をするたび、苦しかったんじゃないの？」

「苦しかったけど…。どうしようもないことだからって思ってた」

「梨香…」

稔が、梨香の顔を切なそうに見た。

「梨香の想いに、稔が気がついたの？」

「いや。くるみのことで悩んでいるのを、梨香が相談に乗ってくれているうちに、梨香という時間が増えてって、それで……」

「私のことで悩んでいたの？」

「プロポーズした時には、すぐにでも受けてくれるって思っていたから。プロジェクトを成功させたらって言われて、俺よりも仕事の方が優先なのか、俺はその程度の存在なのかって、すごく悩んだ」
「でも、そんなこと一言も……」

「言えないだろ？毎日毎日、仕事で残業して、働きづめのお前にそんなこと……。何よりも、仕事が大事なのかって思っていたよ」
「……」

心が痛かった。確かにあのころ、私は稔のことよりも仕事のこと
で、頭がいっぱいだった。

「ごめん。気づけなかった、私……」

「くるみ、ごめんね……。私ずっと、言わなくちゃって思ってた。でも言えなかった。稔と別れるのも、くるみを失うのも怖かったの。ずるかったの、私……。くるみが会社を辞めて、いきなり姿を消しちゃって、くるみを苦しめたのは私で、その私が稔と付き合ってたといわけないって思ってた。ずっと、くるみにちゃんと謝らなくちゃって思ってた……」

梨香は、そう言うと、ぼろぼろと泣き出した。梨香のそんな気持ち、私はわかっていた。きっと自分を責め、苦しんで……。なんとなくわかっていた。

「でも、梨香が悪いわけじゃないし、稔が悪いわけでもないし……」
そう言うと、また二人は私の顔を、驚いた表情で見た。

「いろいろあったけど、でも、そのおかげで私は、爽太君にも会

えたし……」

そう言つと、爽太君が私の方を見た。爽太君の目を見ると、すごく優しい目をしていた。

「だから、もう稔も梨香も苦しまないで……、幸せになってください。私は大丈夫だから」

「くるみ、お前、本当に変わったな」

「え？」

「そんな優しい表情することなかったのに。本当に今、幸せなんだな……」

「うん」

とても穏やかな気持ちで、私は稔のことが出来るようになった。それに、梨香のことも。

「くるみ、ありがとう……。会いにきてくれて、ありがとう」

梨香はそう言つと、ハンカチで涙を拭いた。

コーヒーを飲み終え、私と爽太君は、お店を先に出た。

稔と、梨香がこれから先、どうするのかは二人が決めることだ。

爽太君はそつと、私の手をにぎつて、

「良かったね。二人ともわかってくれたみたいで……」

と優しい目で、そう言つた。

「うん。会つて良かった。爽太君もついてきてくれてありがとう。

私、爽太君が横にいてくれたから、落ち着くことが出来たよ」

「そう？良かった。俺、ちょっと稔さんが挑戦的だったから、頭きてただけど、どうにか冷静になれてよかったよ。くるみさんが、先に俺がなんでついてきたのかを、説明してくれたからさ」

「……爽太君の手、あつたかいね」

「え？」

私と爽太君は、手をつないだまま、歩いていた。

「さつきも、手をにぎっていてくれたでしょ？すごく落ち着いたんだ」

「……」

爽太君は、何も言わず、またつないだ手にぎゅって力を入れた。

「さて、帰りますか？」

爽太君は、にっこりと微笑みながら聞いてきた。

「うん」

私も、爽太君に向かって、にこって笑って応えた。

お店に戻ると、お客さんが満席。それに外の椅子にも、何人が座って待っていた。店内は、瑞希さんと春香ちゃんだけで、すごく忙しそうにしていた。

「すみません、手伝います」

私は急いで、エプロンをした。

「俺、ホールに出るから、くるみさんキッチンに入って」

爽太君もエプロンをして、さっさとホールに行き、空いたお皿を片付け始めた。

私は、キッチンに入り、たまっていた食器を洗い始めた。

「くるみさん、スープをカップにいれてくれる？」

「あ、はい」

コンソメスープのなべの蓋を開けると同時に、ものすごく変な匂いがした。

「え？」

思わず鼻を押さえた。

「これ、なんですか？」

「いつものコンソメスープよ」

「……?!」

なんで、変な匂いがするかわからなかったが、どうにも気持ち

悪くなり、

「すみません。ちょっとトイレ…」

と、急いでキッチンを出た。

「爽太君、ごめん、キッチンの方手伝って。私、少しトイレ行ってもいい？」

「あ、いいよ」

爽太君に小声で言い、急いでトイレに行った。

吐き気がする。でも、吐けない。すごく胸の辺りがもやもやするが、吐こうとしても何も出てこない。

ああ、ずっと何も食べていないからだろうか？

洗面所で口をゆすぎ、お店に出た。爽太君がキッチンの手伝いをしているので、私はホールの手伝いに回った。

ホールでは、そんなに匂いが気になることもなく、どうにか、お客様が途切れるまで、頑張ることが出来た。

「さ、くるみさん、春香、爽太、ご飯食べてちょうだい」

2時半を過ぎて、瑞希さんがカウンターにどんどん、3人分のご飯を用意した。

「あの、私、ちょっと食欲なくて…。瑞希さん、食べてください」

「え？大丈夫？そういえば、さっき、顔色悪かったわね」

「はい、ちょっとリビングで休めば、大丈夫だと思います」

リビングに上がらせてもらい、私はテーブルに顔をうつぶせた。

しばらくして、爽太君が、リビングに来た。

「大丈夫？今日ので、緊張しちゃったのかな？」

「うん、そうかも…。自分で思ってた以上に、緊張してたのかも…」

「少し部屋で横になつたら？お店なら俺いるし、大丈夫だから」

「うん。そうしてくる。ごめんね」

私は、爽太君の言葉に甘えて、自分の部屋に行った。

なんだか、むかむかする。でも、吐けない。すごく嫌な感じがずっと続いていた。

夜、お店の片付けの手伝いをした。それから、軽く瑞希さんが作ってくれた、サンドイッチを食べた。そしてお風呂に入り、さつさと私は寝ることにした。

16 妊娠

翌朝、一階に下りて朝食を食べ、お店の手伝いを始めた。昨日よりはずいぶんと楽になっていた。

爽太君がお店に来ると、

「くるみさん、具合どう？」

と、心配そうに聞いてきた。

「うん、もう大丈夫」

にこつて微笑むと、爽太君も微笑み返してくれた。

9時過ぎ、キッチンのほうで、下ごしらえを手伝っていると、また、スープの匂いで気持ちが悪くなった。

「あの…。すみません。外の空気吸ってきます」

そう言つて、外に出て深呼吸をした。それから、外を掃いたり、窓を拭いたりしていた。

11時、開店してからは、ホールにいたので、そんなに気持ちが悪くならなかったが、たまにキッチンに行くと、また、胸がむかむかした。

でも、その日は1日乗り切ることが出来た。

夜になり、ご飯を食べても、なんとなくむかむかするので、早めにお風呂に入り、休ませてもらった。

トントん…。ドアをノックする音がして、爽太君の声がした。

「くるみさん、もう寝た？」

「ううん。まだ」

そう言つて、ドアを開けた。

「また、具合悪くなつたの？大丈夫？」

「うん。なんか風邪かな？胃にきちゃつたのかも…」

「そっか…。無理しないでね。今、そんなに仕事忙しくないし、言

つてくれたら、お店の手伝いに来れるからさ」

「うん、ありがとう」

「じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

爽太君は、そつとキスをしてくれて、自分の部屋に入っていた。ボタン…。ドアを閉めた。今はそんなに気持ちが悪くはないが、なんとなく胸だか胃の辺りがもやもやとしていた。

翌日、キッチンでの手伝いはなるべくしないようにして、お店の準備をしていたが、ホールにいても、キッチンから漂うコンソメスープや、ご飯の炊ける匂いで気持ちが悪くなった。慌てて、すみません、ちょっとトイレ」

と、トイレに駆け込み、私は朝食べたものを全部吐いてしまった。それだけでも、気持ちの悪いのがおさまらず、胃液まで吐いた。

トイレを出て、洗面所で口をゆすいでいると、瑞希さんが来て、大丈夫？」

と、心配そうに聞いてきた。

「あ、すみません。なんだか、すごく気持ちが悪くなって」

「匂いでかしら？」

「はい…。スープや、ご飯の炊ける匂いで…」

「今日は休んで。お義母さんにお店来れるか、聞いてみるから」

「はい。すみません」

私は、そのまま2階に上がって、ベッドに横になった。どうしちやっただらう…。胸焼けのような、気持ちの悪さがまだ残っている。

しばらくすると、瑞希さんが部屋に来た。

「くるみさん、ちょっといい？」

「はい」

ドアを開けると、瑞希さんは部屋に入ってきた。

「お義母さん、来れるって言うから、ゆっくり休んでね」

「はい。ありがとうございます」

「それと…。ちょっと聞きにくいことなんだけどね」

「はい…」

「くるみさん、最近生理あった？」

「え？」

「私、爽太の時はそうでもなかったんだけど、春香の時、ちょっとわりがあつて。似たような症状だったものだから」

「つわり…?!」

ああ…。そういえば、れいんどろっぷですで働くようになってから、まだ一回も生理がない。

今までも、忙しかったり、ストレスで生理が遅れることはちよくちよくあったので、あまり気にしていなかったが、もう2ヶ月ないんだ…。

「これ、妊娠検査薬。春香が男の人と付き合うようになってから、念のために買っておいたものなんだけど…。使ってみて」

「え？」

「もし違ってたなら、それはそれでいいんだけど…」

「……」

妊娠検査薬と書かれてある長細い箱を、手渡された。

「爽太と付き合ってるのは知ってたし、もう大人なんだし、そういうこともあるかもしれないって、思ってもいたんだけどね」

瑞希さんは、優しいまなざしでそう言った。

「……」

私は、何も言えなかった。どうしよう。瑞希さんはきっと、爽太君の赤ちゃんだって思ってる。

でも、爽太君とセックスをしたのは、つい1週間前のことだ。たった、1週間でつわりがくるわけがない。

うつん…。妊娠しているかどうかだって、わからないくらいじゃないのか？

瑞希さんと部屋を一緒に出た。私はトイレに向かい、瑞希さんは一階に下りていった。

「どうしよう…。どう考えても、稔の子だ。もし、妊娠してたら、どうしたらいいんだろう…」

妊娠検査薬を持ったまま、しばらく私はトイレの前で立ち尽くしていた。

このまま、その場を逃げ去りたかった。でも、そんなことはできないこともわかっていた。

トイレに入り、妊娠検査薬を使った。説明書を見ると、赤紫のラインが出たら、陽性だと書いてあった。

「どうか、何も反応しませんように！」

祈る気持ちで、数分間トイレの中で待った。

目をぎゅってつむり、なかなか結果を見ることが出来ずにいたが、そつと目を開けて、妊娠検査薬を見てみた。

「……！！」

ラインがくつきりと鮮やかに出ていた。

「妊娠してる…」

落胆と、ショックと、もうどうしていいかもわからず、トイレから出ることも出来なかった。

トントン…。

「くるみさん？」

瑞希さんが2階に上がってきて、トイレをノックしてきた。

「大丈夫？気持ち悪いの？」

なかなか出てこないの、心配しているようだった。

「はい。大丈夫です…」

どうにか、そう言っていると私は、妊娠検査薬を持って、トイレを出た。

「どうだった？」

瑞希さんが聞いてきた。隠すわけにも、ごまかすわけにもいかない。

「…陽性でした」

私は検査薬を、瑞希さんに見せた。

「あ…。本当だわ」

検査薬を見て、瑞希さんはしばらく黙ってうつむいていたが、優しく微笑んで顔を上げ、

「おめでとう」

と言ってくれた。私は、真っ青だったと思う。そのままその場に、座り込みそうにもなった。おめでとうと言われ、なんて言い返せばいいのか。

「あの…」

どうにか、口を開き、

「まだ、爽太君には言わないでください」

とだけ、瑞希さんに言った。

「え？どうして？」

「ちゃんと産婦人科に行つて、はっきりしてから、私から言います」

「そうね。きちんと診断してもらったほうがいいわね」

「はい…」

行けば、今何ヶ月かがわかる。そして、爽太君の子じゃないこともはっきりとわかってしまう。

でも、今、この状態でもし、爽太君に言ったとしても、きっと、爽太君にはわかる。稔の子だってきつと…。

「明日、お店休みだし、産婦人科に行かない？私もついていくわ」

「いえ、一人でも平気です。」

「駄目よ。このへんに病院ないのよ。電車に乗っていくことになる

わ。また、具合が悪くなったら一人じゃ大変でしょ？たまには、人に甘えてもいいのよ。ね？」

「……。はい」

「さ、今日は部屋で休んでて」

「はい……」

私は、自分の部屋に入り鍵を閉めた。

一人で病院に行くと言ったのは、甘えないようにしたわけじゃない。瑞希さんにばれてしまうからだ。

でも、どっちにしても、すぐに瑞希さんにはばれてしまうんだろう。今、何ヶ月目で、予定日はいつだって聞かれたら、すぐにわかる。

ベッドに横になった。頭がくらくらした。なんで、今、稔の子を妊娠してしまったのか。これが、数ヶ月前なら、私は稔と結婚しただろう。

なんで今さら、稔の子なのか……。

ドン！私は自分のお腹を、激しくたたいた。このまま、お腹にいる生命が、消えてなくなってしまうばいいと願った。

今すぐ、まだ、爽太君に知られる前に……。どうか……！！

私は、お腹が痛くなるまで、何回もたたいた。だんだん憎しみも出てきた。

どうして？！やっと幸せになれるって思ったのに……。

なんで、邪魔をするの？

どうして、妊娠なんかしたの？

なんで、やってきたの？

私はうつぶせて泣いた。もう、どうしていいかもわからなかった。産んだほうがいいのか、おろした方がいいのか。産むとしたら、ここにはいられない。爽太君とも関係のない子を、ここで育てるわけ

にもいけない。

だからといって、稔に赤ちゃんが出来たことを言えるわけがない。梨香と稔を引き裂くことなんてできない。

どうしたらいいの…？

もし、ここを出て、赤ちゃんを産んでも、私はずっとこの子を憎むかもしれない。

「あんななんか、産まなきゃ良かった。あんなさえいなければ、幸せになれるのに」

母の言葉を思い出した。その時の母の表情まで…。胸が苦しくなった。そんなことを私は言いたくない。母と同じ思いもしたくない！

苦しい…。胸が張り裂けるようだ。爽太君のあの笑顔を見られなくなることも、爽太君のそばにいられないことも、考えただけで、こんなにも苦しい。

「大好きなのに」

爽太君の笑顔が浮かんでは消える。

「すごく、すごく、大好きなのに」

私は、枕に顔をうずめて泣いた。涙は止まらなかった。

トントン…。

「くるみさん？」

ノックの音と、瑞希さんの声で、私は目が覚めた。知らない間に泣きながら、寝ていたようだった。

「お昼、持ってきたんだけど、食べられるかな？トマトのサンドイッチと、ハムのサンドイッチ」

「すみません。気持ちが悪くて、食べられないです」

どうにか、ドアに向かって私は返事をした。

「わかったわ。もし食べられそうになったら、下に来て。リビングのテーブルに置いておくわね」

「はい…」

気持ちは悪くなかったが、食欲はまったくなかった。

時計を見ると、2時半だった。私はベッドから起きだし、鏡を見た。目が腫れて、真っ赤だった。

「ああ、すごい顔だ……」

その日は、とうとう夜遅くまで、私は部屋に閉じこもっていた。

夜12時を過ぎてから、お風呂に入りに一階にいった。もう、圭介さんも瑞希さんも春香ちゃんも、寝ているようだったが、リビングにはまだ爽太君がいて、テレビを観ていた。

「あ……。くるみさん、大丈夫？」

爽太君が、心配そうに聞いてきた。

「母さんから、くるみさん部屋で寝てるから、起こしたりしないようにって言われて……。今日ずっと、部屋で休んでたんだって？」

「うん……」

もしかすると、私が下に来るのをずっと待っていたんだろうか。

「何も食べてないの？大丈夫なの？」

「うん。食欲なくて……。お風呂入ってくる。じゃあね。おやすみなさい」

そう言つて、私はさっさとバスルームに向かった。だが、爽太君は、私のあとを追ってきた。

「風呂？大丈夫なの？熱とかはないの？」

「大丈夫」

「病院は行った？」

「ううん」

「あ……。じゃ、明日俺、休み取るから、病院一緒に……」

「大丈夫だから！」

私は、爽太君の言葉をさえぎってそう言つと、バスルームのドアを開け、中に入った。

爽太君は、何もそれ以上は言わなかった。そして、その場を立ち去ったようだ。

「ああ…。傷つけたかも…」

爽太君の優しさが辛くって、きつく言ってしまった。でも、爽太君の顔を見るのさえ、辛かった。

お風呂から上がり、リビングのドアの前で、私は立ち止った。リビングから2階への階段がつながっているので、どうしてもリビングを通らないとならない。

爽太君に会うのが、辛い。もし何か話しかけられても、また冷たくしてしまうかもしれない。こわごわ、ドアを開けると、もうリビングには誰もいなかった。

2階に上がり、自分の部屋に入った。もう、何も考えなくなかった。明日が来るのすら怖くて、これが夢だったらと思いつながら眠りについていた。

翌日、爽太君とは顔をあわせづらくて、わざと遅くにお店に出た。瑞希さんが、カウンターで雑誌を読みながら、コーヒーを飲んでいた。きっと私が起きてくるのを、待っていたんだろう。

クロが私に気がつき、くうんとないて、近づいてきた。それで、瑞希さんも私がいることに気がついたようだ。

「具合はどう？」

「はい、昨日よりいいです」

「そう…。ご飯は？パンなら食べれる？」

「いえ、出かけるのに何か食べたなら、途中で気持ちが悪くなりそうです…」

「じゃ、フルーツは？酸っぱいものとかどう？」

「それなら…」

グレープフルーツを食べ、少しお店で休んで出かける用意をした。

瑞希さんはその間に、洗濯物を干し終え、一階に下りてきた。

「さ、行きましようか。クロ、お留守番頼んだわよ」
にこって微笑んで、瑞希さんがそう言った。

憂鬱だった。朝起きたとき、昨日のことが夢だったんじゃないかって思いたかった。でも、現実だった。

電車に乗っている間も、緊張で気持ちが悪くなるどころじゃなかった。

病院に着くと、瑞希さんと一緒に受付に行った。待合室には、たくさん妊婦さんが座っていた。それを横目で見て、ため息が出た。小さな子を連れている人、今にも産まれそうなくらいお腹が大きい人。旦那さんと一緒の人。でも、どの人も幸せそうに見えてしまう。

ますます、暗くなりながら、私は待合室のすみで、瑞希さんと呼ばれるのを待った。

頭の中は、爽太君にどう言ったらいいのか、そればかり浮かんだ。爽太君のがっかりする顔、爽太君の驚いた顔、爽太君の辛そうな顔、爽太君の悲しそうな顔。浮かんでくるのは、そんな爽太君の顔ばかりだ。

私はだんだんと、気持ちが悪くなっていった。むかむかして今にも吐きそうだったし、頭はくらくらしてガンガンに痛かった。

真っ青な顔の私に気がつき、瑞希さんが心配して聞いてきた。

「大丈夫？トイレに行く？」

「はい……」

瑞希さんに支えられ、トイレに行った。朝のグレープフルーツしか吐くものがないのに、なかなか気持ちが悪いのがおさまらず、また胃液まで吐いた。

トイレを出ると、瑞希さんが心配そうに待っていた。

「なんだか、足元もふらついてる。大丈夫？」

「はい…」

なんとか、瑞希さんに支えられ、待合室の椅子に腰掛けた。それから、しばらくして名前を呼ばれたが、立っただけで立ちくらみもした。

「ついていくわね」

瑞希さんが私を、支えてくれた。

呼ばれた診察室に入ると、先生と看護師さんがいた。最近の症状を話すと、診察台に上がってくださいと言われた。

瑞希さんは、診察室のはじで待っていた。

「お母様ですか？どうぞ椅子に座ってください」

瑞希さんは看護師さんにそう言われ、

「はい。すみません」

と言っていた。自分がお母さんだと間違われたことは、否定しなかった。

診察台から下りて、診察室の方へと出て行った。

先生の前の椅子に腰掛けるよう、看護師さんに言われた。瑞希さんは、後ろのほうに座っていた。

ああ…、ここに瑞希さんがいたら、全部聞かれてしまう。診察室までついてきてくれても、すぐに待合室に出てしまっただろうって、私は思っていた。

どうしよう…。瑞希さんに知られてしまう。そんなことばかりが、頭の中でぐるぐる回り、先生の話もよく聞こえなかった。

「おめでとうございます。今、3ヶ月目にはいったところですね」いきなり、その言葉だけが耳に入り、私は愕然とした。

いや、稔の子だとはわかっていたが、こつもはつきりと聞かされ

ると、やはりショックを隠せなかった。多分、私は真っ青になったのだろう。

「ご結婚はまだ？」

先生が聞いてきた。

「はい……」

「産むかどうかは、まだ、わからないですか？」

「……」

何も答えられなかった。後ろで瑞希さんがどんな反応をしているかが、怖かった。

「では、今日は診察だけということ……。会計でお待ちください」

そう言われて、私はふらふらと立ち上がった。さつと後ろから瑞希さんが来て、私の背中に手を回し支えてくれた。

「貧血ですか？」

先生が聞いてきた。

「いえ……。つわりで、気分が悪くて……」

「そうですか。もし産むようでしたら、今はまだ安定期にはいっていませんし、十分気をつけてください」

先生に注意をされ、私は何も答えなかったが、代わりに瑞希さんが、

「はい、わかりました」

と答えていた。

瑞希さんと一緒に、待合室に行き、椅子に座った。

「大丈夫？ 気持ち悪いのは治まった？」

「はい、なんとか……」

「でも、ふらふらしてる。先生が言うように貧血かしら？」

「いえ……。大丈夫です」

私は弱々しくそう答えた。そうだ。心の打撃の方が強いのだ。瑞希さんは、

「会計呼ばれたら、私が行くから、くるみさんはここで、ゆっくりしているのよ」
「と言ってくれた。」

3ヶ月と聞いて、もう、爽太君の子じゃないのは、わかっているだろう。でも、相変わらず、瑞希さんは優しく、私の背中をさすってくれていた。

「さっき、どうして産むって言わなかったの？迷ってるの…？」

瑞希さんが、優しくそう聞いてきた。

「すみません、今、何も考えられなくて…」

「そう…」

「あの…、爽太君には、黙っていてください」

「どうして？はつきりわかったら、話すんじゃないか？」

「私、どう話していいかもわからなくて…」

涙が出そうになった。でも、ぎゅって唇を噛んで、泣くのを我慢した。

「そのまま、伝えたらいいんじゃないかしら」

「駄目です。話せないです」

「でも、爽太、本気で心配してるわよ。ここのことろずっと、くるみさんが調子悪いから」

「そうですよね…」

重苦しいものが、胸にどすんと落ちてきた気がした。

「このまま話さないわけには、いけないと思う」

瑞希さんの声は優しくかったが、目は真剣だった。

「くるみさんにとっても、もしかして辛いかもしれないけど、でも

…」

「……」

「この今という現実を、真正面から受け止めないと」

「……」

今という現実……。そうだ。私は受け止めきれず、死のうとまでした。あの時も現実を受け止められずに逃げていた。

「一人でじゃないのよ。爽太がついてるのよ。私や圭介も……」

「え？」

「爽太、頼りなく見えるかもしれないけど、そんなことないわよ。きちんと向き合って話して。爽太のことを、信じて」

「……」

「二人でなら、乗り越えられる。一人じゃ大変なことも」

「はい……」

涙が出た。そうだった。瑞希さんも、圭介さんの死に直面して、きつと二人でその現実立ち向かったんだ。逃げないで、ちゃんと話します。爽太君にちゃんと話してみます」

私は、泣きながらそう、瑞希さんに言った。

そして、会計を済ませ、瑞希さんはタクシーを呼んでくれて、タクシーで家に帰った。

17 信じる心

家に戻るとリビングに、爽太君がクロと一緒にいた。

「爽太？会社は？」

瑞希さんがそう聞くと、

「ちよっと、抜け出してきた。くるみさんが心配で…。具合悪いのに、どこ行つてたの？」

爽太君までが、顔色が悪かった。相当私のことを心配していたんだろう。爽太君、全部顔に出るからな…。

「病院よ」

瑞希さんが、そう答えた。

「病院？なんだって？風邪？それとも…」

爽太君は、早くに結果が聞きたいようだった。

「くるみさん、私ちよっと、買い物に行つてくるわ。爽太、くるみさんから聞いてね。じゃ」

瑞希さんはそう言うと、買い物袋を下げて、家を出て行った。多分、私と爽太君の二人だけにしてくれたんだろう。

私は、爽太君の横に座った。クロは、爽太君の横にねっころがったままだった。

「まだ、具合悪いの？顔色悪いね」

爽太君が、私の顔を覗き込み、聞いてきた。

「うん…。ちよっと、気持ち悪い」

「大丈夫？薬とか出された？寝てたほうがよくない？」

「うん。薬は何も…」

「そうなの？あ…。それで…、どこが悪いつて？」

「どこも悪くないよ。病気じゃないの」

「え？でも、病院に行つてたんだよね？」

「うん。産婦人科…」

私はそう言ってから、爽太君の反応が怖くなった。

「え？」

爽太君は、しばらく目を真ん丸くして、固まっていた。私は、とにかく、話さなくっちゃと思い、合間もあけず、ひたすら話を続けた。

「気持ちが悪かったのは、つわりなの。今、3ヶ月だって」

「……」

爽太君は、黙ったままだった。私は、爽太君の顔を見るのが怖くて、見ないように視線を違うほうに向けていた。

「赤ちゃんいるってことだね？」

爽太君は、そう確認してきた。

「うん…」

私は、小さな声でそう答えた。

「…。そっか」

爽太君も、小さな声でそうつぶやいた。そして、しばらく黙ってしまった。

私は、我慢の限界が来ていた。これから先、爽太君が何を言うのか、まったく想像も出来ず、ただただ怖かった。怖くて、逃げ出したかった。

「つわりって…、きついんでしょう？」

「うん…」

「あ、お店は？出れるの？」

「わかんない…」

「いつまで、気持ちが悪いの続くの？」

「わかんない…」

「そっか」

爽太君は、また黙ってしまった。

私も何を話していいかわからなくなり、しばらく沈黙が続いた。
爽太君は、何を考えてるの？ ショックだったの？ そりゃ、そうだよ。 爽太君との子じゃないもの。 稔の子だもの…。

「ごめんなさい！」

私は胸が苦しくなり、思わず謝っていた。

「え？！」

爽太君は、すごく驚いた声をあげた。

「何？ 何で謝ってるの？」

「だって…」

私は泣きそうになるのを、必死にこらえた。 爽太君の子じゃないもの…とか、稔の子を今さら…とか、いろんな言葉が頭に浮かんだが、口に出しては言えなかった。

「どうして？」

爽太君は、うつむいている私の顔を覗き込んだ。

「ご、ごめんなさい。 頭真っ白で、説明できない…」

それだけ言って、私はぎゅっと唇を噛んだ。

「……。 ふう…」

爽太君は、頭を掻いて、ため息をついた。

ああ…。 重苦しいため息だ。 どうしよう…。 どんどん私は心が、沈んでいった。

「じゃ…。 じゃあさ、俺が質問するから、答えてくれる？ いろいろと、気になることがあるんだけどさ」

爽太君は、静かにそう言った。

「…うん」

私は、下を向いたまま答えた。

「3ヶ月って言ったよね？ じゃ、俺と会う前のことだよ？ その…、稔さんが相手かな？」

「うん…」

「その…、くるみさん、稔さんに赤ちゃんができたこと、打ち明けるの？」

「言わない。ううん、言えない。だって、稔には梨香がいる…」

「じゃ、もし、もしも稔さんが梨香さんと別れてたら？」

「そんなことない。二人が別れるなんて…」

「わからないよ。可能性はあるでしょ？100パー別れないとは、言い切れないし。もし、もしも別れてたら、くるみさん、稔さんと寄りを戻すの？稔さんと結婚して、その子産むの？」

「そんなの…」

出来るわけない。もう、稔に対しての思いはないのだから、私が好きなのは爽太君だから…。でも、言えない。

「稔さんに、父親になってもらうの？」

私は、頭をぐるぐる横に振った。

「稔には、言わない…」

それだけ言つて、また私は唇を噛んだ。

「じゃ…、なんでごめんなさいなの？なんで謝るのかな？」

「……。だって…」

涙が溢れた。下を向いていたから、私のひざに涙がぼろぼろとこぼれた。

「なんで泣くの？」

爽太君が、それを見て聞いてきた。

「だ、だって…」

それ以上は言葉が出ない。なんて言つていいかもわからない。

「えっと…、大事なこと聞くの忘れてたけど…」

「…え？」

「その子、産むの？」

「……」

私は思わず、顔をあげた。爽太君の顔は真剣だった。今までにな
いものすごく、真剣な顔つきだった。

産むの……？っていうのは、どういう意味なのか……。その子を産む
気なの？稔さんの子なのについていうこと？まさか、産む気でいるの
？っていうこと？

でも、そんなことを爽太君が言うとは思えない。だけど、もし爽
太君が、稔の子なんて嫌だって思っていたとしたら？

「わ、わからない。どうしていいかも……、私……」

「おろすかもしれないってこと？」

少し、爽太君の表情は変わった。暗い、怖い顔つきになった。

「もう、稔とは別れているし……。もう、稔になんの思いもないし……」
それだけ言って、私の目から涙が出た。

「でも、その子には、そんなこと関係ないよね？」

ああ……。爽太君は、産む気があるのかどうかを確認したんだ。ま
さか、産むの？じゃなくて、まさか、おろすの？って。

「でも……。私、もし産んだら、この子を憎んじゃう……」

「え？」

「お母さんのように、私もこの子に、生まれてこなかったら良かつ
たのについて言うかもしれない」

「どうして？」

「どうしてって……。だって、この子がいなかったら幸せになれたの
に……」

「ちょ……、ちょっと待ってよ。なんでその子がいたら、幸せになれ
ないの？」

「だって……」

爽太君が好きで、爽太君のそばにいたいのに、いられないなんて
……。

「だって…、何？」

「……」

「くるみさん、だって何なの？」

爽太君は、怒っていた。顔つきも声も、全部怒っていた。

「そ…、爽太君と、一緒にいられなくなる…。この今の幸せ全部、手放さなきゃならない…」

「え?!なんで?!なんで手放すの?なんで、俺と一緒にいられなくなるわけ?!」

爽太君は、半分あきれているようだった。

「こ、この子、爽太君の子じゃないよ…」

「だから何？」

「だから何って…」

「もう一つ、聞いてもいい?くるみさん」

「…うん」

爽太君は真剣な目で、私を見て聞いてきた。

「俺のこと、愛してる？」

「……」

私は、黙ってうなづいた。もちろんだ。愛してるに決まってる。だからこんなに、苦しんでる。

「じゃ、俺のこと、信じてる？」

「…え？」

「俺が、そんなことしてくるみさんから離れるとでも思ってるの?それって、ずいぶんじゃない？」

「……」

「悪いけど、俺、めちゃくるみさんのこと愛してるよ。お腹の子が俺の子だとか、稔さんの子だとか、そんなの関係ない」

「……」

「俺と出会う前のことだよな？俺と出会って、結ばれたにもかかわらず、稔さんとセックスしたわけじゃないよね？」

「爽太君と出会う前だよ！」

「そうだよな？浮気してできた子じゃないよね？」

「も、もちろん」

「くるみさん、もう稔さんに、未練ないよね？」

「ない…。なんとももう、思ってないよ」

「そうだよな？」

「うん…」

「じゃ、俺のこと好きだよな？」

「…うん」

私の目から涙が出た。爽太君が愛してくてしょうがない。好きだつてことを思うだけでも涙が出る。

「それとも、俺、頼りないかな？」

「え？」

「まだ、22だし、7歳も下だし、その子の父親になるの、俺じゃ頼りないか思ってる？」

「思ってない！そんなこと。思ったこともない」

「本当？」

「ほんとに…」

「……。はあ…」

爽太君は、ため息をついた。

「じゃ、なんでごめんなさいなわけ？なんの問題があるわけ…？」

「だって、爽太君の子じゃないのに、爽太君に父親になってもらうなんて…」

「まだ、言っかな…。ああ、もう…」

爽太君は、ぼりって頭を掻いた。

「じゃ、もし、くるみさんがもう稔さんと一回結婚して、子供も産

んで、別れたとする。子供はくるみさんが引き取って…。そのあとに俺と出会って、恋して、俺がくるみさんの子供もひっくるめて、好きになって、父親になる、くるみさんと結婚するって言ったら?」

「……」

「それとも、どうしていいかわからないから、その子供、殺しちゃう?」

「そんなことするわけない!」

「そうだよ。そんなことできないよね。でも、お腹の子だって、もう生命あるよ。生きてるんだよ?」

「……」

私は、お腹を押さえた。この子さえいなかったらって思って、自分のお腹をたたいたことも、いきなり、後悔し出した。

「それで、俺はくるみさんと一緒にその子を育てる。家庭を持って、3人で暮らす。もしかしたら、くるみさんはまた、赤ちゃんを産むかもしれない。そうしたら、家族は増える」

「うん…」

「ね?それって、自然でしょ?何か間違ってる?たとえば、俺の子じやないとしても、その子もひっくるめて、愛すると思っけど」

「…うん」

「それが、今はまだ生まれてなくて、お腹の中にいる。ただ、それだけのことだよ?なんで、そんなに父親かそうじゃないかをこだわるの?」

「……。怖い」

「何が?」

「私、この子を愛せるかどうか」

「え?」

「私、お母さんみたいにこの子に、生まれてこなければ良かったの

につて言っちゃうかもしれない」

「え？」

爽太君は、また、低い声で聞いてきた。

「この子を憎んだり、恨んだり、幸せになれないのをこの子のせいにしそうで怖い。私のお母さんが私にしたように…」

「…ちよつと、待つてよ」

爽太君は、あきれたっていう感じで話をさえぎった。

「どうして、幸せに、なれないわけ？なんで自分が不幸になるって前提なわけ？」

「え？」

「この子を生んで、幸せになったらいいんじゃないの？それだけのことだよ」

「…幸せに？」

「そうだよ。幸せになることを選択したらいいだけ。なんで、自分が不幸になるって思うかな」

「……」

「それに、それってちよつと酷くない？やっぱ、俺のこと信じてないんじゃないの？」

「え？」

「俺とくるみさんと、この子とで、幸せになるってなんで思えないのかな」

「あ……」

「俺、もう一回言うよ。いい？ちゃんと聞いててよ。めっちゃくるみさんのこと愛してるの。お腹の子も、ひっくるめて、愛してるの。それだけじゃ駄目？」

「…ううん」

「そりゃ、もしかしたら、何か辛いことが起きるかもしれない。この子が、俺と血のつながりが無いって知って、悩んだり、苦しんだ

りすることもあるかもしれないよ。でも、その時には、俺とくるみ
さんで、乗り越えりゃいいことだよ」

「……」

「そうでしょ？一人じゃないんだよ。俺がいるんだよ。二人で乗り
越えたらいいじゃんか」

「…うん」

私は目がうるんできて、爽太君の顔がはつきりと見えなくなった。

「わ…、私、幸せになってもいいの？」

「あつたりまえでしょ」

「私…、そんなに爽太君に愛されてもいいの？」

「は？当たり前じゃん」

「わ、私、この子を生んでもいいの？この子を愛してもいいの？」

「何を当たり前のこと言ってるんだよ？！怒るよ、もう…」

「爽太君のそばにいてもいいの？」

「それも、当たり前です」

「爽太君とずっと、いられるの？爽太君の笑顔を見てられるの？離
れなくてもいいの？私…」

「ああ、もう！」

爽太君は、私のことをぎゅって力強く抱きしめ、

「くるみさんは、愛されべたで、幸せべたなんだ…」

と、優しく言った。

「でもね、愛されてもいいし、幸せになってもいいんだよ。それも
全部当たり前のことだよ」

涙が溢れて止まらなかった。私は爽太君に抱きつき、しゃくりあ
げて泣いた。

爽太君は、優しくずっと、私を抱きしめてくれていた。

しばらくして泣きやんで、爽太君の胸の中に顔をうずめて、爽太

君の心臓の音を聞いていた。

私の中にも、もう一つの鼓動があるんだ……。そう思うと、どうしてその子を消してしまおうなんて思ったのか、自分でもわからなくなつた。

「くるみさん、結婚しようね」

「え？」

思わず、顔を上げて爽太君の顔を見た。

「一応、プロポーズしないと……」

「え？」

「あ、でも、いまいち決まらなかった？今の……」

「……」

爽太君は照れていた。

「……。うん……」

「あ、やっぱ、決まらない？かつこ悪かった？」

「そうじゃなくて……」

「え？」

「プロポーズの返事……」

「あ、そっか……」

爽太君は、少しはにかんで笑った。

「母さん、知ってんだよね？くるみさんの妊娠」

「うん……」

「何か、言つてた？」

「ううん。ただ、爽太君と向き合つて、ちゃんと話して……」

「そう……」

「あ、爽太君のこと、信じてねって言われたんだ。なのに、ごめんね、私……」

「本当だよ。もっと信じてよ。自分の愛してる人でしょ？」

「……。そっだよな」

「幸せになることも、信じてよ。ね？」

「うん…」

私は、笑って爽太君のを見ると、爽太君も嬉しそうに笑った。二人でにこにこしていると、クロが尻尾を振って「ワン」って喜んだ。それまでは、静かにずっと、爽太君の後ろで、寝ていたが、狸寝入りだったのかもしれない。

それからしばらくして、瑞希さんが帰って来た。

「おかえりなさい」

爽太君が、瑞希さんを明るく出迎えた。

「あら…」

瑞希さんは、爽太君の明るい笑顔を見て、一目瞭然と思ったのか、それ以上は何も言わなかった。

「俺、そろそろ会社戻るね。父さんには一応、心配だからくるみさんのこと見てくるとは言っておいたんだけど、さすがにもう戻らないとやばいや」

「そうね。でも昼ごはんくらい食べていったら？それとも、圭介の分も作るから持っていく？」

「うん。そうする」

爽太君は、そう言うのににこしながら、クロの背中をなでた。

「くるみさんは、何か食べれそう？」

「サンドイッチくらいなら…」

「わかったわ。今、作るわね」

瑞希さんは、お店のほうに行った。

「あ、そうだ。店、つわりなくなるまで、出れないでしょ？」

爽太君が聞いてきた。

「うん…。ちよっときついな」

「だよね…。俺がたまに手伝いに来てもいいんだけど…。でも、2ヶ月、つわりが続いたら、その間ずっとつていうのは無理だし

な〜」

と、爽太君は、悩み出した。

「あの…」

「え？」

「さつきも、それで黙って、考え込んでたの？」

「え？さつきって？」

「私が妊娠してるって話した時」

「ああ。うん。つまり辛かったら、店は無理だろうしって、考えてたよ。なんで？」

「ううん。なんでもない…」

なんだ。はじめっから爽太君は、私が稔の子を妊娠したのにたいして、悩んだり、ショックを受けたりしていたわけじゃなかったんだ。ただ、お店のことをどうしようかって、考えてたんだ。

な〜んだ…。ほっとした。私ってどれだけ、爽太君のことを、信じていなかったんだろうか…。自分が情けなくもなった。それと同時に、こんなにも愛されてることに気がつく事ができて、本当に嬉しかった。

「母さんに相談してみる。何ヶ月か手伝ってくれる人がいるかどうか…。あ、でも、赤ちゃん生まれたら、結局店には出れないか…。ねえ？」

「うん…」

「……。赤ちゃんか…。あれ？今3ヶ月なら何月に生まれるの？」

「えっと…。12月かな？年末とかになっちゃうかしら」

「そっか、冬生まれか。そっか〜」

そう言つと、爽太君は、にやついた。

「どうしたの？」

「え？何が？」

「嬉しそうだから」

「あ、言ったでしょ？前に。俺、子供大好きなんだ。なんか、想像しただけでも嬉しくなって…」

「……」

「冬か……。クリスマスあたりかな。あ、でもそれは、誕生日と、クリスマスプレゼントが一緒になったりして、かわいそうか」

「……」

「男の子かな、女の子かな……。くるみさんはどっちだと思う？」

「え？」

「俺はどっちでもいいけど。でも、男の子なら、一緒にあれこれ遊べるよな」

私は爽太君が、本当に嬉しそうでただただ、驚いてて何も返事が出来なくなってた。でも、爽太君はそんなのおかまいなしに、話を続けている。

「名前どうしようかな。冬か……。何がいいかな。俺も、春香も、母さんも春生まれじゃん。冬生まれって家族の中にいなかったよね。あ、父さんは夏、くるみさんも夏生まれでしょ？」

「う、うん」

「なんて名前がいいかな。なにがいいと思う？」

「……。爽太君、気が早い……」

「え？！そう？なんで？嬉しくないの？」

「……」

本当に子供が好きなんだ。そういえば、瑞希さんも、爽太君は子煩悩で、いいお父さんになるって言ってたっけ。

はあ……。なんだか、気が抜けた。力も抜けた。悩んで、悩んで、苦しんだのが馬鹿みたいだ。

「はい、お弁当できたわよ。圭介の分も」

瑞希さんが、二つお弁当を持って、リビングに来た。

「それから……、爽太」

「ん？」

「子供の名前をいいけど、その前に、籍を入れるとか、結婚式を挙げるとか、そういうのがあるでしょ？」

「あ。そうだよ……。でも式、挙げられるの？」

「安定期になったら、つわりも落ち着くだろうし、お腹もまだ目立たなければ、大丈夫よ」

「安定期っていつ？」

爽太君が、瑞希さんに聞いた。

「6ヶ月とかかしら」

「え?!あと3ヶ月しかないじゃん!」

「そうよ」

「まじ?じゃ、急がないと……」

「そうよ。あれこれ、いろんなこと急いでしないと」

「そっか……。わかった。あ、そうだ。店の手伝いしてくれる人も探さない」と

「そうね。求人紙、店の前に貼るわ。それと、誰かいないか、爽太も声かけてみて」

「うん、わかった。じゃ、会社行ってくるよ」

「行つてらっしゃい!」

瑞希さんと、私とで、一緒に爽太君を見送った。クロも尻尾を振つて、玄関まで見送りに行った。

「なんだか、爽太、嬉しそうだったわね」

瑞希さんも、すごく嬉しそうに私に言ってきた。

「はい……」

「ね?だから言ったでしょ?爽太を信じてねって……」

「はい……。本当にそうですね。一人で悩んで、馬鹿みたいでした。

私……」

「ふふ…。さ、本当にこれから忙しくなるわね。あ、でもくるみさんは休んでること。いい？今が大事なとき。先生も言ってたでしょ？」

「はい。無理はしないことですよね…」

「そうよ。お店のほうなら心配しないでいいから。ね？」

「はい…」

瑞希さんは、パソコンの前に座り、

「いろいろと決めていかなきゃね。3ヵ月後に空いてる式場あるかしら？なかったら、レストランでもいいわね」

と、いろいろと調べ出した。

「瑞希さん…」

「ん？なあに？」

「いろいろと、ありがとうございました」

「ええ？何よ。いきなり…。それに、ありがとうございましたっておかしくない？これからいろいろとあるんだから」

「そうですね。じゃあ、これからもよろしく願います」

そう言って、頭を下げた。

「こちらこそ、よろしくね。あ！圭介は、なんと44歳の若さでおいちゃんか…。きゃあ楽しいわね！」

と、無邪気に瑞希さんは笑った。

18 君も天使

その日の夜、7時ころ圭介さんと爽太君が、二人で一緒に会社から帰ってきた。圭介さんは、

「くるみさん！結婚？爽太と結婚？！」

と、帰ってくるなり、大騒ぎをしていた。

「父さん、騒ぎすぎ！」

爽太君が、圭介さんの言葉をさえぎった。

「帰って来る間に、ちよつとその話をしたら、父さんテンションあがっちゃって」

「だって、お前、これが大騒ぎしないですむことかよ？！」

「まあまあ、落ち着いて。結婚の話だけをしたの？爽太」
と、瑞希さんが間に入った。

「え？他にもなんかあんの？」

圭介さんが、目を輝かせた。

「う、うゝん…」

「何？なんだよ？！もったいつけんなよ」

さすがに爽太君は、言いにくいのか、言葉をにこしていた。

「くるみさんね、前に付き合ってた人がいるんですって」

瑞希さんが、二人の夕飯をテーブルに並べながら、話し出した。

「結婚まで考えてたらしいの。ここに来る前に別れたらしいんだけど」

「そうなんだ」

圭介さんは、どうしてそんな話を瑞希さんがしだったのか、わからない様子できょとした顔をしていた。

「瑞希さんのお腹にね。その人の赤ちゃんがいるのよ」
「え？！」

圭介さんが、ものすごく驚いていた。それから、爽太君の顔を見て、爽太君が落ち着いた顔をしているので、圭介さんも冷静さを取り戻していた。

「それで、結婚を決めたのか？ 爽太」

「うん…」

爽太君は、真剣な顔でうなづいた。

「そうか…」

圭介さんも、真剣な表情になっていた。私は、なんて言っていないかわからず、ずっと黙っていた。

「つわりで、今くるみさん、辛いみたい。だから、お店にバイトの子、雇おうと思って。誰かいないかしら」

瑞希さんが、圭介さんにそう聞くと、

「うっ…ん、そうだな…」

と、圭介さんは、少し考えこんだが、

「瑞希、ごめん。今、俺、バイトの子のことなんて、考えられないや。ね、くるみさん、今何ヶ月なの？」

と、私のほうに質問してきた。

「3ヶ月です」

「じゃ、結婚式は早めに挙げないと。今年中に…」

「今年中に、生まれるわよ。多分」

瑞希さんが、圭介さんの言葉をさえぎり、そう言った。

「ええ？！そうか…！そんなに早く」

圭介さんが、のけぞった。

「ひゃーーーー。俺、じいちゃんになるの?!」

「そうよ！圭介44歳で、もうおじいちゃんよ！あははは…」

瑞希さんが大笑いをした。

「瑞希も、おばあちゃんじゃん！」

圭介さんも、大笑いをした。

「ちょ…、父さん、母さん、もっとまじめにさ」

爽太君は、少しいらだった感じで、二人に言った。

「ああ、ごめん。爽太…。式だよな。式…」

「6ヶ月目あたりが、1番安定してていいころだと思うわ」

「あと3ヶ月か。ちょうど夏まつさかりか」

圭介さんはそう言うと、瑞希さんの方を向いた。

「あ、俺らも8月の頭に結婚したんだっけ？瑞希」

「そうよ」

「夏ならけっこう、式場空いてるかもしれないな。それが、レストランで内輪だけの結婚式でもいいけどな。ま、とにかく爽太、夕飯食ってから、考えよう、な？」

と圭介さんは言うと、いただきますと手を合わせて、ばくばく食べ出した。

お店の片付けを手伝って、リビングに戻ってくると、爽太君と圭介さんが、パソコンを開いてあれこれ、話し込んでいた。式場を探しているようだった。

そこに、お風呂からあがった春香ちゃんが、リビングに来た。

「ああ、春香。お前にも言っておかないとな」

「何？」

圭介さんに、ちょっとそこに座れと言われた春香ちゃんは、リビングのクッションの上にどかって座った。

「何…？これから部屋で、やることあるんだけど」

少し春香ちゃんは、投げやりだった。

「爽太がな、くるみさんと結婚することになった」

「……」

春香ちゃんは、しばらく黙ってから、

「ええ…？！いい、いつの間に？け、結婚…？！」

とものすごく大きな声で、驚いていた。

「まあ、落ち着いて、春香」

瑞希さんもお店から、リビングの方に来て、春香ちゃんの横に座った。

「式は8月に挙げようって今、話してたんだ」

「8月?! そんなに早く?!」

「うん。そのころが1番、いいだろうって」

「え?なんでわざわざ、暑い時に?」

春香ちゃんが、不思議そうな顔をした。

「くるみさん、妊娠してて...」

爽太君は、少し言いづらそうに、小声で話した。

「え?!できちゃった婚?!わ、最低!お兄ちゃん!」

「ち、違う...」

爽太君は、しどろもどろになった。

「違うのよ、春香。くるみさんのお腹にね、前付き合ってた、もう別れた彼との子がいてね」

「え?!」

「それで、結婚を爽太が決めたの。ね?」

瑞希さんが、爽太君の方を向いて、そう言った。

「うん...」

爽太君は、視線を下に向けたまま、そう答えた。

「そうなんだ。わく。ごめん、お兄ちゃん。最低って言うのは撤回する」

「ああ、うん...」

まだ、爽太君は、うつむいてて、頭をぼりって掻いた。

「いや、最低どころか、尊敬しちゃう、私」

春香ちゃんは、そう爽太君に言った。

「ま、そういうことだから。今、式場を探してるところだ」

「レストランとかで、ホームパーティみたいなのが、いいんじゃない？」

春香ちゃんも、みんなの輪に入ってきて、あれこれ、相談を始めた。

私はというと、少しみんなよりも、後ろに下がって、4人を見つめていた。しばらく、4人であれこれ話をしていたが、瑞希さんがこっちを向いて、

「結婚式って主役は花嫁なのよ。くるみさんの意見も取り入れないと…。あれ?!」

と、私に声をかけようとして、驚いていた。

「くるみさん、どうしたの？具合悪いの？」

爽太君も、私の顔を見て、驚いて急いで私の横に来た。

「ううん。私、なんか嬉しくて…」

そう、私は泣いていた。

「嬉しくて？」

爽太君が、聞き返した。

「うん。みんなで、真剣に考えててくれて…」

「あつたりまえじゃなか」

圭介さんが、そう言った。

「そうよ。もう、家族同様。なんだか、娘と息子がいつぺんに結婚するみたいな感じよ」

と、瑞希さんが笑って言った。

それから、爽太君は、

「くるみさんは、呼びたい人いる？梨香さんとか、呼ぶ？」
と聞いてきた。

「え？」

「お父さんとお母さんも呼ぶよね？」

「……」

私は、言葉に詰まってしまった。

「父と母は、呼びません」

「え?! なんで?」

4人が揃って、声をあげた。

「呼んでも、こないと思います。父にも、母にも、新しい家族がいるし、二人とも顔を合わせたがらないと思うし……」

「でも、娘の結婚式よ?」

瑞希さんが、ちよつと寂しそうにそう言った。

「……。いいんです」

4人とも、黙ってしまった。

「ね? くるみさん、二人で話がしたいんだけど。俺の部屋に来てくれる?」

爽太君にそう言われて、私は爽太君にくつついて、2階に上がった。

爽太君の部屋に入ると、爽太君が、

「ここに座って」

とベッドに私を座らせた。私の横に爽太君も座って、それから、

「あのさ、これは俺の考えなんだけど……」

と、話をし出した。

「ご両親に、招待状だけは送らない?」

「え?」

「向こうが来るか来ないか、それは向こうの判断に任せて、招待状だけは送ろうよ」

「でも……」

「来て欲しくない理由があるの?」

「招待状を出しても、来てくれなかったら……?」

「それはそれで、いいじゃん」

「え？」

「赤ちゃん生まれたら、写真送ってみたり、赤ちゃん連れて、会いに行ったりすればいいし」

「……」

「万が一、くるみさんの両親が、くるみさんの結婚を祝いたいって思ったらどうするの？」

「そんなこと……」

「そんなことないって、くるみさんが決め付けてるだけだよ」

「……。でも……」

「うーん、そりゃ、来ないかもしれないけどね。でも、来るかもしれないし」

爽太君は、そう言うてから、私の手を握ってきた。

「俺も、実は会っておきたい」

「え？」

「くるみさんのこと生んでくれてありがとうって、言いたいし」

「……」

私は、黙ってうつむいた。その言葉が嬉しかった。でも、それと同時に怖かった。

「呼んで、来てくれない時のことが、きつと私怖いんだ」

「え？」

「すぐく、シヨックを受けそうで……。だったら、呼ばないほうが……」

「来るか、来ないかなんて、その時にならないとわからないじゃんか。今、来なかったらどうしようって心配するのなんて、馬鹿みたいなことだよ」

「え？」

「まだ起きてもないことで悩むのも、来ないって決め付けるのも、おかしい話でしょ？それよりも、今は、できることだけしようよ。」

招待状を送る。来るか来ないかは、こっちが悩んだりすることじゃない。もし、来なかったら、またその時に考えよう」

「うん…」

「あ、暗いね？まだ悩んでる？」

「…ごめん。来なかったら、その時に考えるっていうのも…。きっとショックを受けるだろうなって思ってた」

「うん。そうかもね。でも、その時には、俺にショックだって泣いてもわめいてもいいよ」

「え?!」

「聞くからさ。ね？なんなら一緒にわめいてもいいし」

「ええ?!あはは…。おかしいよ、それ」

「そうそう、そんな感じ」

「え？」

「なんでも、面白くなっちゃうでしょ？これ、父さんと母さんがよくやってる」

「ああ、そういえば、さつきも。おじいちゃんになるとか、おばあちゃんになるとか、笑ってた」

「あの二人には、俺もさすがにかなわないけど…。あの楽天家夫婦は、ほんと、すごいと思うよ」

「うん…」

「招待状は、送ろう。ね？」

「うん…」

私は、魔法でもかかってしまったみたいだった。

「なんだか、不思議」

「え？何が？」

「私、二人のことを憎んでたんだ。もっと、仲が良かったらとか、もっと、親らしくしてくれたらとか、もっと私のことを愛してくれ

たらとか、そんなこと思つて憎んでた」

「うん」

「でも、なんだかね、今は私、両親のことを好きだったんだって思えるの」

「……」

「どんな親でも、親だもんね」

「うん……」

「この子も、私を愛してくれるかな？」

お腹に手を押さえて、私は爽太君に聞いた。

「愛してるから、お母さんに選んだんじゃないの？」

爽太君は、ふつて笑った。

「え？」

「母さんが前に言つてた。子供つて言うのは、親を選んで生まれてくるんだって。だから、私を選んでくれてありがとうって、言われたことあるよ」

「……。じゃ、私も私の両親を選んできたの？」

「うん」

「どうしてかな……。わざわざ、愛してくれない親の元に……」

「愛してもらうために、生まれてきたんじゃないんじゃないの？」

「え？」

「愛するために、生まれたのかもよ」

「……」

「あ、なんかかつこいいこと言いすぎてる？俺……」

爽太君は、照れながら頭を掻いた。

「でも、ちよつと思つちやつたんだよね、俺」

「うん……？」

「五月ちゃん、俺のこと本気で好きになつてくれてたんだろっとな」

て」

「え？」

「でもさ、俺、五月ちゃんのこと、本気になれなかった」

「……」

「好きになつてもらえたのは、嬉しいよ。でも、俺、くるみさんのことを愛して、初めは苦しかったりもしたけど、今は、すげえ幸せなんだよね」

「……」

爽太君の目は、優しくかった。照れながらも、私の目をしっかりと見て、優しさで包み込んでくれていた。

「人に愛されるのも、幸せだろうけど、愛することって、もっと幸せなこともかもしれないって思ったんだよね」

「……」

私は、目頭が熱くなった。本当にそうだ。爽太君を愛してる。そう思うだけで、胸がいっぱいになる。幸せで、優しくて、あったかい気持ちになる。

「人を憎むより、許すっていうのかな……。愛するっていうのかな……。そっちのほうが、何よりも自分が幸せになれると思うよ」

「うん、そうだよね……」

「うん。憎んでる時の心の状態と、愛する時では、全然違うじゃん。だから、俺、あんまり人を嫌いになれないんだよね。苦手な人はいても、嫌ったり、憎んだりってできないんだ……」

「爽太君は、やっぱり、天使だよね」

「は？」

「そういうところが、天使だって思う」

「うっくん」

困った表情をして、爽太君は頭を掻いた。

「瑞希さんが、爽太君は天使だって言ってたけど、この子も天使だ

よね？私にとって」

私は、お腹をさすった。

「うん。もちろん。くるみさんを愛してくれる天使だよ」

爽太君は、にこって笑ってそう言った。

「それにさ、俺が母さんにとっての天使のように、くるみさんも天使なんだよ」

「え？」

「両親にとって、天使なんだ」

「でも、私そんなこと言われたことない。逆に生まれてこなければ良かったって、そう言われ続けてた」

「うん。きつとお母さんが不幸だからだよな」

「え？」

「幸せを選択しないで、不幸になるほう選んじゃったんだ。だから、自分が不幸なのを、誰かのせいにしたいんじゃないのかな」

「……」

「うちの親は、幸せになるほうを選んだんだ。だから、俺も春香も、二人にとって幸せを運んできた天使になった」

「……」

「俺らがね、天使だってことに気づけたんだと思うよ。でも、くるみさんの両親は気づけなかっただけ」

「私が、天使だってことに？」

「そ。それだけ……。本当は天使だよ。くるみさんもね」

「私も……？」

「うん。あ！俺にとってもだよ。わかってる？どんだけくるみさんが俺にとって、大きい存在かわかってるかな？」

「……」

ああ、また目がうるんできた。泣きそうだ。

「あ！鼻真っ赤だ。泣いちゃう？最近泣き虫だよね、くるみさん。」

「だって、だって泣かせるようなことばかり、爽太君言うから…」

「あはは。だって、くるみさん泣くと、可愛いんだもん」

爽太君は、本当に無邪気に笑った。そんな笑顔が天使なんだよ。

そう言うのと、爽太君は、

「そんな泣き顔が、天使なんだよ。くるみさん」

って優しく、言い返してきた。

それから、優しくキスをして、

「あ、これ以上は駄目だよね？やっぱり…」

と笑って言うのと、私のお腹をさすりながら、

「キューピットだね。この子。あ、まさに天使？」

と言った。

「え？」

「だって、この子のおかげで、結婚を決められたしさ」

「あ…、うん。でも…」

「でも？」

「爽太君は、22歳だよ？結婚早すぎると思わない？」

「うん。全然。父さんだって、この年で、結婚して親父になったし」

「でも…」

「でも…、何？」

ちよっと、爽太君は、眉をしかめた。

「爽太君は、夢があつたでしょ？世界の海に行く…。その夢はいいの？」

「え？叶えるよ、いつかは。今すぐじゃないけど」

「いつか？」

「うん。そうだな。この子が大きくなって、一緒に海に潜れるくらいになつてからでもいいな。くるみさんと、俺と、この子で行くつてのは、どう？あ、兄弟ももしかしているかもな」

「みんなで？」

「うん。楽しそうじゃない？」

「うん…」

「もう、でも…って言うのは、無しね？」

「え？」

「先の心配は無しにしようね」

「うん」

爽太君の笑顔につられて、私も笑った。

なんでも、楽しいほうに考えちゃうんだ。すごいな。爽太君マジツクだな。

私は、自分の部屋に戻り、子供の頃の写真を出した。まだ、両親が仲が良く、一緒に動物園に行った写真だ。

私も父も母も、笑っていた。父に、肩車をされて笑っている写真。母とおにぎりを食べながら、笑ってる写真。

どこかで、歯車があわなくなり、家族が不幸のほうに向かってしまった。でも、私はこのころ、幸せだったし、愛されていた。そして、私は父も、母も大好きだった。

「大好きだったんだ…」

そう私は、つぶやいて、涙を流した。両親を大好きだったという、感情をすっかり忘れていたけど、私はやっぱり今でもかわらず、両親が大好きだったんだ。

大好きだから、愛されたいと願い、愛を求めてきた。心の奥にある二人を愛する気持ちは、ずっと変わっていなかったんだ。

私はただ、二人を大好きで、愛しているということだけ、感じてみた。愛して欲しいと求めるのではなく、ただ、二人を愛していると…。

心の中には、優しさと、あったかさが広がった。そして、涙が溢

れて止まらなかった。その涙すら、あつたかった。

ああ、大好きなんだ。愛してるんだ。両親を愛しているという感情が、嬉しかった。そんな感情を私自身が、持っていたことが嬉しかった。

19 招待状

2週間が過ぎた。

昼間に仕事をしてくれるパートの人もすぐに見つかり、3日間、爽太君がれいんどろつぷすに出ていたが、その人が出てくれるようになり、また、爽太君は自分の仕事に戻っていった。

結婚式とパーティは、圭介さんの弟さんの順平さんが、ウエディングプランナーの仕事をしている友人がいるとかで、紹介してもらい、レストランで結婚披露宴をすることにした。

夏の暑い盛りだし、私が妊娠しているということもあり、室内での披露宴になった。

まだ、つわりもあるし、これからお腹も出てくるだろうから、ウエディングドレスは、もう少ししてから、探すことにした。

私と爽太君は、しばらく、結婚してもこの家に住むことにした。子供が生まれても、誰かが赤ちゃんの面倒を見れるように...というのが、理由だが、実は、瑞希さんも圭介さんも、春香ちゃんですら、赤ちゃんの面倒が見たくて、しょうがないようだった。

2階の私の部屋に、セミダブルのベッドを置き、その横にベビーベッドを置くことにした。爽太君の部屋は、爽太君の仕事場でもあり、二人、いや、赤ちゃんが生まれたら3人かな...、3人のリビングにもなる。ソファや、テレビを置き、のんびりできるようにした。しばらく仕事を休んでいたから、爽太君は忙しいだろうに、ベッドや、ソファを買いに行ったり、いろんなところに、車で出向いていた。

大安吉日の日に、爽太君と、籍を入れた。

それから、私と爽太君とで、もう1度産婦人科に行き、そのあと市役所で、母子手帳をもらった。母子手帳に書く私の名前は、「榎

本くるみ」だった。名前を書く時、すぐドキドキした。

式はまだ先だが、籍を入れたので、その週の水曜日の夜、家族だけでお祝いをした。圭介さんと、瑞希さんのご両親も来てくれた。私はまだ、つわりがあつたので、あまり食べることは出来なかったが、みんなにお祝いしてもらい、本当に嬉しかった。

「私たち、ひ孫ができちゃうのね」

「ひいおばあちゃんになるのよ。信じられないわ」

と、圭介さんと瑞希さんのお母さんが、そう言った。

「いや〜、爽太も結婚か。早いな〜。つい、この間圭介が結婚したと思つたらな」

「爽太が生まれたのも、ついこの前の気がしますね。可愛かったですよね」

今度は、お父さん二人が感慨深そうにそう言った。

「圭介と同じ年で結婚して、お父さんになるとはね」

と瑞希さんも、お酒を飲みながら、嬉しそうに言った。

「お前、可愛がりそうだな〜。子供好きだもんな〜」

圭介さんも、ビールを片手に笑いながらそう言った。

みんなが、結婚も出産も喜んでいた。

つい、数ヶ月前には、信じられない光景だった。私は仕事をばりばりしていた。結婚のけの字も考えていなかった。

結婚して幸せになるってことも、考えていなかった。ただ、頑張っって、一人でもたくましく生きていこうって思ってたんだ。

だけど、実際、彼氏も友人も、両親すら離れていき、私は本当にひとりになったら、たくましく生きるなんてとんでもない。死を選ぶしかなかった。

結局、なんだったんだろうか、私のこれまでの人生って…。

お祝いが終わり、片付けをしてお風呂に入ってから、私は部屋に戻った。爽太君は、籍を入れた日から、私と同じ部屋で一緒に寝ていた。

髪を乾かし、ベッドに座つてのんびりしていると、お風呂からあがつた爽太君が、部屋に来た。

「くるみさん、大丈夫？疲れなかった？」

「うん。大丈夫。気分もそんなに悪くないし…。なんか、つわりもだんだんと、おさまってきている気がする」

「そう？良かった」

爽太君は、お風呂上りで暑いからスエットをはき、上半身は裸だった。

私はまだ、爽太君の上半身を見慣れてなくて、目のやり場に困っていた。つていうのも、見とれちゃうからだ。情けないことに、たまに、爽太君に見とれちゃってる。それを悟られないようにしているんだけど…。

「今日は、嬉しかったな」

「え？」

「みんながお祝いしてくれて…」

「うん、ほんとに。でも、ほら、うちの家族ってなんでも、集まっ
て祝うのが好きだからさ」

「そうだよ。仲がいいよね」

「父さんの両親と、母さんの両親が仲がいいのは、父さんが奇跡を
起こして、がん細胞なくして以来みたいだよ」

「え？」

「みんなで、お祝いしたんだって。祝い好きはそれからじゃないの
かな」

「そうなんだ。それからずっと、みんな、仲がいいなんてすごいね」
「うん。そうだね」

「なんか、思っちゃった」

「何を？」

「私の今までの人生って、なんだっただらうって。虚勢張って生きてきた。誰にも負けないように強がって…。なんだっただらう。何の意味があっただらう」

「う……。そうだね…」

爽太君は、しばらく黙って考えてから、

「でも、意味のないことはないと思うよ」

と笑って言った。

「私ね、あの海で爽太君に助けられた時、一回死んだと思う」

「へ？」

「死んで、生まれ変わったんだって思うんだ」

「生まれ変わった？」

「だって、人生が180度くらい、変わったもの」

「そう？」

「うん」

「じゃ、一回死んで、生まれ変わるってことを、体験するために、今まで虚勢張って生きてきたんじゃないの？」

「え？」

「いいじゃん。なんかそういうの。幸せになるための、道のり…みたいで」

「ええ？なんだか、波乱万丈な人生みたい」

「あはは。ドラマになるかな？小説にでもする？っていうか、自叙伝書きちゃう？」

「え……。やだよ…」

と私は、笑って言った。

爽太君は、ごろんと横になると、ベビーベッドの方を見つめた。

「気が早かったかな？もう、ベビーベッド置いちゃったの」

「うん、そうだよね」

二人で、くすくす笑った。

「だけど、いいよね。ベビーベッドがあるって。なんかそれだけで、幸せになるね」

爽太君はそう言うと、私のお腹を優しくなでた。

「生まれてきたら、あそこに寝るんだよ？わかってる？」

赤ちゃんに爽太君は、そうささやいた。

「爽太君」

「え？」

「爽太君は、生まれなかつたら良かったって思ったこと、ある？」

「ないよ。一回もない」

「そうか、やっぱり…」

「なんで？」

「ううん。思ったことあるのになって、ほんと、素朴な疑問」

爽太君の横に私も寝ると、爽太君は腕枕をしてくれた。

「俺、生まれて良かったっていうか、母さんのお腹にはいつて良かったって思ってる」

「え？」

「なんか、俺の存在ってきつと、二人が生きていく力になってると思っただよね」

「二人の…？」

「母さんと父さんのさ…。俺がいたことで、ますます生きるって方を見たと思うんだ。だから、奇跡が起きたんじゃないかな」

「うん、そうだよね」

「だから、俺、ほんと自分でも、すんげえタイミングでこの世にやってきたって思っただよ。そりゃもう、奇跡ってくらいのタイミング」

「うん」

「その辺が、俺の自慢」

「え……？」

「あはは。なんか変な自慢でしょ？でも、まじでそう思ってる。俺が生まれてきたこと、母さんのお腹にはいったこと、これがもう、俺の自慢」

「……」

爽太君は、天井を見ながら、そう言った。その横顔はきらきらしていた。

「だから、生まれなければ良かったなんて、一回も思ったことない。生まれて良かった、この世に来て良かったとしか、考えられない」

「それも、自分のためじゃないんだね」

「え？」

爽太君は、顔をこっちに向けて、私を見た。

「お母さんとお父さんのためでしょ」

爽太君の目を見ながら、私は聞いた。

「うん。だけど、両親の生きるパワーのために生まれたって、嬉しくない？だから、やっぱり、俺のためにもなってるよ」

そんな考え方が、好きだなんて思いながら、爽太君を見つめていた。

「ハ……。クシュ！」

爽太君がいきなり、くしゃみをした。

「あ、やべ……。裸だからか」

そう言つと、爽太君は、もそもそと布団に入り出した。

「もう寝ようよ。疲れたでしょ？はい。くるみさん」

と、爽太君は掛け布団を持ち上げた。

「うん」

私も、布団に潜り込んだ。

爽太君はあつたかい。私はけっこう寒がりで、冷え性だから、お風呂からあがってしばらくすると、足先が冷たくなる。その足を、爽太君の足にくっつけさせてもらう。爽太君の足はあつたかくつて、私の足が冷たいから気持ちがいいらしい。

「くるみさん、おやすみ」

「うん。おやすみなさい」

一緒に布団に入ると、爽太君の方が先に寝る。とても寝つきが早い。その寝顔を見ているのが、大好きだった。

それから、朝起きた時の、まだ寝ぼけている顔も、大きなあくびも可愛いし、寝癖だらけの頭も可愛い。

2階には、トイレの前に洗面所があり、そこでいつも、爽太君は歯を磨き、顔を洗う。2階の洗面所は、ルーフバルコニーにつながっていた。ルーフバルコニーには、ベンチが置いてあり、たまに私は外の風に吹かれながら、そこに座って、のんびりとした。

そこに、座っていると、爽太君が、歯を磨いている姿も見れる。

先に歯を磨き、顔も洗い、私はぼけっとベンチに座って爽太君をこうやって、眺めていることが多い。

「はに？」

爽太君は、はぶらしを口につっこんだまま、聞いてきた。

「はに……？」

私は、そのまま聞き返した。はぶらしを出して、もう1度、爽太君は聞いてきた。

「何？ずつとこつち見てたけど……」

「え？なんでもないよ。ぼくっとしてただけ」

爽太君は、口をゆすぎ、タオルで拭きながら、

「そこにいるの好きだよ。外の風が当たるから？」
って聞いてきた。

「うん。気持ちいい。たまに、潮風の匂いがする」

「ああ、そうだね。するよね」

そう言うてから、爽太君は、顔を洗い出した。髪はまだぼさぼさで、会社に行く寸前でいつも直している。

「は〜。また、しばらく忙しいかな」

「え？そうなの？」

「うん。あ、でも、ちゃんと夜は帰れるようにするけどさ」

「え？うん…」

「あれ？なんか反応薄くない？」

タオルで顔を拭きながら、私の方に爽太君はやってきて、私の横に腰掛けた。

「俺ら、新婚なんだけど…」

「あ！そうだね。そういえば…」

「ええ？何それ。新婚だって忘れてた？もしや」

「ごめん、だって、家にはいつも、瑞希さんや誰かがいるし、あまり前と変わってないし」

「でも、部屋、一緒じゃん。寝る時は二人で寝てるでしょ」

「う、うん。そうだよな」

「なんか、シヨックだな。俺、頑張って早めに帰ってきてるのにな」

「ごめん。爽太君が夜、隣にいてくれるのは、嬉しいよ。でも…」

「え？でも、何？」

「忙しいなら、無理しないでね」

「してないよ。くるみさんが待つてるって思ってたから、すんげえ仕事頑張れて、いつもの倍の速さでこなせてたのに…。っていうか、父さんに、それだけスピーディに仕事できたんだって言われたけど…」

「そうだったの？」

私のために、仕事頑張ったり、早めに帰るようにしてくれてたつてことが、嬉しかったけど、照れくさかった。こんな時には、なんて言ったらいいんだろうか？嬉しいと、素直に？それとも、甘えてみるとか？

「さ、朝ごはん食べに、下に行こう」

「うん」

二人で、いつも一緒に一階に下りる。そうするとたいてい、瑞希さんが笑って、

「仲いいわよね」

と言う。そうすると、爽太君は決まって、頭を掻いてぼそつて言う。「いいじゃん、新婚だし……」

私は爽太君と一緒に、朝ごはんを済ませてから、簡単なお店の手伝いをする。爽太君も会社に行くまで、掃除をしたり、たまにキッチンでの仕込みも手伝っている。

春香ちゃんは、海に行く時間を少し遅らせて、お店の手伝いをしてから、行くようになった。聞くと、私に来るまでは、パートさんが10時にお店に出ていたから、春香ちゃんや、爽太君が交互に手伝うこともあったらしい。

今のパートさんは、9時半に来てくれるので、助かっている。私は、家の中の掃除や、洗濯をしたり、アイロンをかけたりして過ごすことが多い。

「そうそう、招待状頼んでいたのが印刷されて、来てたわよ。送らないとね」

「あ、もう出来たんだ。早いね」

「そりゃ、あと式まで3ヶ月もないのよ。早めにしてもらったのよ」

「そっか……。じゃ、今日帰ったら早速、送るようにするよ。じゃ、そろそろ会社行ってくる」

そう爽太君は言つて、リビングに上がっていった。それと同時に、圭介さんがお店に来た。

「爽太、最近朝、早めに行くのね」

と、瑞希さんが圭介さんに聞いた。

「早めに行つて、早めに終わらせて帰るようにしてるみたい」と、圭介さんは眠そうな目でそう答えた。

「くるみさんは、ご両親に招待状送ることにしたの？」

「はい。爽太君と話して、送るだけ送ろつてことにしました」

「そう……」

瑞希さんは、優しく微笑んだ。

「俺、何着たらいいの？瑞希」

「圭介は、モーニングじゃない？」

「え？！黒とかの？」

「そうそう」

「瑞希は何着るの？」

「お母さんがね、もう私ようにつて紋の入った留袖を用意してくれたのよ」

「留袖？ああ、なんか、黒っぽい着物？」

「そう」

「へえ！瑞希それ着るの？色っぽそうだね！」

圭介さんは、そう言つて喜んだ。

「圭介のモーニングも楽しみね」

「ええ？親父くさくない？他にないのかな……」

「紋付袴でも着る？」

「え？いいの？」

「さあ？どうなのかしら？」

「俺、紋付袴がいいや。じゃ、瑞希、白無垢でどう？」

「あはは。私の結婚式じゃないわよ……」

「いいじゃん、どうせなら、一緒にまた式挙げるって。ダブル結婚式。俺、瑞希の白無垢姿見てないから」

「もう〜。くるみさんが困ってるわよ」

「あ…。ごめんごめん」

「いいえ、二人の会話聞いているのが、私好きで…。本当に仲がいいですね」

「バカッブルってこの前、春香に言われたよ」

と圭介さんは、少しへこんで言った。

「バカッブル？あははは。ぴったりね」

瑞希さんは大笑いをした。

どうやら、やたらめったなことでも、落ち込まない圭介さんは、春香ちゃんの言葉ではへこむようだ。

圭介さんも、ご飯を食べて会社に出かけた。私は少し、お店の掃除をして、それから洗濯物を干しに、2階に上がった。

この前まで、いい天気だったが、最近はずっと天気が多い。梅雨に入ったのだから、しかたがないか。それでも、今朝は雲の合間からお日様が出ることもあり、洗濯物も乾きそうだった。

その日の夜もまた、爽太君は早めに帰り、早速私と二人で、招待状に宛名を丁寧に書き、封をしていった。

「ご両親に、手紙でも添える？」

私が父の名前を書いている時、爽太君は、そう言った。

「ううん。やめとく。なんて書いたらいいか、わからないもの。ただ、招待状に手書きで、来てくださって書いてみる」

「そっか」

爽太君は、そう言うと、私のことをしばらく優しい目で見つめていた。

「何？」

「え？」

「何で、見てたの？」

「あ、なんとなく…」

「ふうん」

「くるみさんだって、たまに俺のこと見てる時あるじゃん」

「え？」

「朝も、ベンチに座って、俺のこと見てるじゃん。あれ、なんで？」

「嫌だった？」

「嫌じゃないけど、なんで見てるのかなって…」

「別に、理由はないよ。ぼくっとしてるだけで」

「ふうん…」

本当は、歯を磨く姿も、顔を洗ってるのも可愛いなって見てるんだけど…。

今まで、朝起きて、自分の顔を洗って化粧をしたら、お店の手伝いに行っちゃって、爽太君のそういう姿を見れなかったんだよね。

「くるみさんのご両親、結婚って聞いてすごいびっくりするんじゃない？」

「うん、でもお母さんには、稔と付き合ってる時にも、結婚するかもって言ってたから」

「え？あ、そうなんだ」

「だけど、相手が、爽太君で驚くかも」

「え？なんで、若造だから？」

「違うよ。若くてめっちゃイケメンだから。お母さんけっこう面食いだし、喜んだりして」

「ええ？ちょ、やめて、そのイケメンって…」

「え？なんで？瑞希さんもよく言ってるよね？爽太君はイケメンだって」

「母さんにそう言われてるから、なんか拒否反応を起こすよ」

「ええ？なんで？！なんで？！」

「俺、そんなにかっこよくないと思うけど、もてないし」

何を言ってるんだか…。五月ちゃんだって、爽太君に惚れてたじゃないか…。

「あゝ、びつくりした。まさか、くるみさんに言われるとは思ってもみなかった」

爽太君は、顔を真っ赤にしていた。

「え？思ってたよ？私」

「え？！」

「口に出しては言わなかったけど」

「あ、そうなんだ」

爽太君は、少し驚いている様子。

じゃ、上半身裸の爽太君に見とれちゃうっていうのも、実は齒磨きする姿や、顔を洗ってる姿が可愛いっていうのも、言ったらきつと、びつくりするだろうな。

招待状の宛名書きを終えて、全部に封をすると、

「じゃ、これ明日郵便局に行って、出してくるね」

と爽太君は、自分の鞆に入れた。

それから、一週間して、私の父からも母からも、返事が届いた。

まず、返事を返してくれたことに感謝したが、やっぱり封を開けるのが怖くて、爽太君が帰って来るのを待つことにした。

その日は、少し遅くに爽太君は、帰ってきた。爽太君が夕飯を食べ終え、お風呂から上がってくるのを待って、一緒に2階に上がった。

部屋に入ってから、

「あのね。二人から返事が来たの」

と言うと、きよんととして、

「二人？」

と聞いてきた。

「私の父と母」

「あ！招待状の？！なんだって？」

爽太君は、顔を紅潮させ、聞いてきた。

「まだ、開けてない…」

「え？」

「怖くって、爽太君に見てもらおうと思って」

と言って、封筒を差し出した。

「そっか…」

爽太君は、はさみを取り出してきて、

「両方開けちゃうよ」

と言ってから、2枚ともさっさと封を開け、中を取り出した。

「えっと、まず、お父さんのほう…。喜んで出席しますって」

「…！」

「じゃ、お母さんのほうね。ご結婚おめでとう、当日は主人と一緒に、出席させていただきますって」

「主人？あ、再婚相手？」

「うん、そうだね、きつと」

私は嬉しくて、涙がどつと溢れた。

「良かったね」

爽太君は、私に優しくそう言った。

「うん。嬉しい。来てくれるんだ」

ボロボロ涙が止まらなかった。しばらく爽太君は、私を優しく抱いてくれた。

「あ、でも、お父さんとお母さん、顔をあわせて大丈夫かな」

「大丈夫だよ。ほら、そういう心配は無しね。先のことは考えない。今できることをしようよ」

「今、できること？」

「そ。今は、来てくれるって喜ぶことと…」

「うん」

それから、ぎゅって私を爽太君は、抱きしめながら、

「こうやって、俺と抱き合うこと！」

と、笑って言った。一緒に喜んでくれる、爽太君が嬉しかった。

結婚式に二人が来るのが嬉しいけど、不安は残った。でも、きっとその日も爽太君は、こうやってそばにいてくれて、私が喜んで、悲しんでも、受け止めててくれるだろう。

そう思うと安心して、今爽太君のぬくもりを感じ、幸せを体全体で感じる事が出来た。

20 結婚式

結婚式がだんだんとせまってきた、着々と準備は整っていった。ウエディングドレスも、爽太君が着る白のタキシードもレンタルした。結局、圭介さんもモーニングをレンタルすることにした。

圭介さんのモーニング姿は、なかなかかっこよかったが、私は爽太君のタキシード姿がめっちゃくちゃかっこよくて、ドキドキしていた。

貸衣装屋さんで、瑞希さんが、
「結婚式まで、爽太には、ウエディングドレス姿、見せないようにしよう」

って言うので、私がウエディングドレスを着ている姿を、爽太君には見せないようにした。

つわりもすっかりなくなり、安定していて、私の体調もすこぶる良好。

レストランでの式の後、母と父には、その日泊まっていってもらおうと、ホテルの予約もした。そして、そのホテルに私と爽太君も、一泊することになっていた。

日にちが近づくにつれ、ドキドキと、不安な気持ちが交差した。それは爽太君にも、伝わっていた。

夜寝る前に、いつも手をつないでくれているが、私の手をぎゅって握って、

「大丈夫だよ」

って、言ってくれる。

式の前日、私は爽太君に聞いてみた。

「なんで、緊張したり、不安なのがわかるの？」

「そりゃ、わかるよ。毎日こうやって、隣にいたら」

と爽太君は、天使のような笑顔でそう言った。その笑顔でまた、私は安心することができる。

「ああ、楽しみだな。くるみさんのウエディングドレス姿」

「え？あ、そうか。着たところ見てないもんね」

「そうだよ。母さんとくるみさん、俺には絶対に見せないって言いつ張って…。ちょこっただけ見せてって言っても、見せてくれなかった」

「だって、瑞希さんが、当日のお楽しみよって言っただもん」

「ちえ〜。俺、待ちきれない」

「待ちきれないっていつても、もう、明日だよ」

「うん、そうだよね。なんか変な感じだね。もう、籍も入れてるし、こつやって一緒に暮らしてるし、でも式って緊張する」

「うん」

「レストランですとはいえ、神父さんも来てくれるしさ」

「うん」

「知ってる？くるみさん」

「え？」

「母さんが言ってた。結婚式の時に、新郎新婦が誓うじゃん」

「病める時も、健やかなる時もっていうあれ？」

「そう。それね、どんな時も、いかなる時も、愛しますって誓うでしょ。あれは、どんなあなたであろうと、すべてまるごと愛します。無償の愛を誓いますってことなんだってさ」

「無償の…？」

「無償ってわかる？」

「漢字からすると、償いが無い」

「うん。俺は、無条件の…と同じかなって思っただ」

「無条件…」

「見返りを求めないし、何か条件付で愛するわけじゃない…」

「……」

「例えばさ、母さんは父さんが病気で、あとわずかで死ぬってわかってても、そんな父さんを愛したじゃん。あれも、無償の愛だよな」

「俺さ……」

「うん……？」

「まじで、誓えるよ」

「え？」

爽太君はそう言つと、私のほうを向き、つないだ私の手にキスをしてから、

「くるみさんの全部が、好きだなんて思うもん」
つて、笑つて言つた。

「え？」

「うまく言えないけど、なんていうのかな」

「うん……」

「このまんま、そのまんま、ここにいくくるみさんが好きなんだよね」

「……」

じつと見つめられ、その優しいまなざしに泣きそうになった。

「こついの、なかなかないつて……」

「え？」

「母さんがね、父さんと会えて良かったつて。ありのまま、そのまを愛せる人になんて、そうそう出会えないから、奇跡だつて言つてたことがあつて……」

「うん、私もその話、聞いたことある」

「ある？」

「うん。でも、出逢うようになった。必然だつたつて言つてた」

「うん。俺もそう思う。くるみさんに出逢えたのは、奇跡だなんて
思えるけど、必然だった。会うようになってたとも思う」

「……」

目頭が熱くなった。

「だからね……」

「うん」

「明日誓うのは、俺の本当の心からの誓いだから」

「……」

爽太君の穏やかな笑顔と、優しい声に私は包まれて、幸せ過ぎて、
涙が溢れてきた。

「こんなに、幸せでいいのかな……」

ぼそつてつぶやくと、爽太君に笑われた。

「あはは……。決まってるじゃん」

幸せべただって言われたっけ。そうかもしれない。でも、今ある
幸せをすべて、ちゃんと受け入れてかみしめて喜ばうって、心から
喜ばうって、私は思っていた。

結婚式の朝が来た。緊張で早くに目が覚めた。爽太君はなぜだか、
ぐうすか寝ていて、

「爽太君、起きて」

と起こすまで、起きなかった。

「ああ……。おはよ……」

と目を覚まして、ぼろろってしていて、大きなあくびをしてから、
「あ……。なかなか寝れなかった」
とつぶやいた。

「え？そうなの？」

「うん……。くるみさん、よく寝てたよね」

「え？」

昨日の、爽太君の優しい言葉で安心しきった私は、そのあとすぐに、ぐうすか寝てしまったようだ。

「寝れなかったの？めずらしくない？寝つきのいい爽太君が…」

「うっくん、それなりに緊張してるかも…。あ、でもくるみさんの寝顔ずっと見れたから、いいけど」

「ええ？」

「たいてい、俺のほうが、先にすぐ寝ちゃうじゃん。寝顔あまり、見れないんだよね。起きた時にはもう、くるみさん起きちゃってるし」

「……」

寝顔を見られていたのが、やけに恥ずかしくなった。

「大丈夫。可愛かったよ。なんか、寝言も言ってたけど」

「え？！私が？！」

「うん。もごもごって…。にやけながら」

「嘘だっ！嘘ついてるんでしょ？」

「ほんとだってば。可愛かったよ」

えっくくくく？！私はそれを聞いて、真っ赤になった。

「あはは。真っ赤になることないのに」

そう爽太君は大笑いをする、部屋を出て、顔を洗いに行った。

私は一足先に、一階に下りた。瑞希さんも圭介さんも、春香ちゃんも起きていた。

「おはよう！よく眠れた？緊張して寝れなかったんじゃない？」

瑞希さんが元気に、聞いてきた。

「いえ、ぐっすり寝れました」

「そう？それは良かった。じゃ、化粧のりもばっちりかな？」

カウンターで朝ごはんを食べた。爽太君も下りてきて、カウンターに座り、ご飯を食べ出した。

「おお〜。爽太、なんか緊張するな〜」

圭介さんが、朝から何度も緊張するを連発していた。

「なんで父さんの方が緊張するの？」

「だって、最後に挨拶しなくちゃならないんだよ。俺…」

「昨日から、緊張しっぱなしよ、圭介は。めずらしく、朝も早くに目が覚めてるし」

「あ〜〜。酒飲んで、酔っ払った勢いで挨拶するかな」

「何言ってるの。お酒は禁止！」

瑞希さんにそう言われて、圭介さんは、

「ええ？ちよつとぐらいいいじゃん！祝いの席だよ！ビール1杯！いや、ワインも一杯」

と、思い切りダダをこねていた。

その横で、爽太君は、ご飯を黙々と食べた。私はといえば、緊張はしているものの、式ではるくに食べれないだろうからと瑞希さんに言われ、ちゃんとご飯を食べるようにした。

リビングに行くと、お化粧をばっちりにして、薄い水色のワンピースを着た春香ちゃんが2階から下りてきた。

「お母さん！髪の毛お団子にして〜」

「はいはい」

「それで、このリボンをくるつと巻いてくれる？」

春香ちゃんは、まっしろのリボンを瑞希さんに渡した。水色のワンピースと、真っ白のリボンは春香ちゃんに似合っていて、とても可愛くて清楚に見えた。

「ああ〜。春香の結婚式だったら俺、出ないかも」

「ええ？！何をお父さん言ってるの？」

春香ちゃんがそれを聞いて、呆れていた。

「圭介、春香の結婚式で泣くわね」

瑞希さんが笑いながら、言った。

「今日も、泣くんじゃないの？ちよつと、おさえ気味で頼むよ、父さん」

爽太君が、横からそう口をはさんできた。

「俺は泣かねえよ。泣くのは瑞希だろ」

「ああ、母さんも泣きそうだな。それから、ばあちゃんたちも…」
「泣きそう、泣きそう！」

春香ちゃんが笑って言った。

その横で、瑞希さんはくすくす笑いながら、

「でも、ここに一人、もう泣うるうるの人がいるわよ」

と、私のことを指差して言った。

「あ…。すみません」

涙を拭きながらそう言うと、

「あ…。くるみさん、もう泣いてたの？式で大丈夫？」

と爽太君が、心配そうに言ってきた。

「うん…。なんとか頑張る。化粧も落ちちゃうもんね」

「メイクさんの人が来てて、ずっといてくれるようだから、直してくれるわよ」

瑞希さんがそう、優しく微笑んで言ってくれた。

瑞希さんは、

「じゃ、私、美容院で髪の毛セットして、着物着せてもらってくるわね」

と、出かけていった。

「さて、俺はレストラン行くまでに、クロの散歩行ってくるよ」

と、圭介さんは、クロを連れて出て行った。

「春香、お前さ、用意するの早すぎなんじゃないの？式は昼からだよ」

「うん。実はこれからデート」

「へ？まさか、海で？」

「うっん、ドライブに連れていってくれるの。そのあと、レストランまで車で送ってくれるって」

「あ…、そ」

爽太君は、呆れ気味にそう言った。

「だって！こんなにおしゃれは、なかなかできないし」

春香ちゃんは一死で、言い訳をしている。可愛いな〜。

「終わってからデートすりゃいいじゃん」

「權は今日も、お店出るって言うから。昼まではバイトの子がいるから、デートできるって」

「あ〜そう。行つてらっしゃい。気をつけてな」

爽太君は、少し呆れ気味に春香ちゃんを見送った。

「さて…。俺らはもうすぐ出なくちゃね。レストランにメイクさん来てくれるんでしょ？」

「うん。でも、爽太君早くにきても暇かもよ？」

「いいよ。俺、早くにウエディングドレス姿見たいもん」

「え〜」

なんだか、見られるのも恥ずかしいような気がしてきた。

私は爽太君と、一泊用の荷物を持ち、車に乗り込んだ。それから、レストランへと向かった。

レストランに着くと、すでにウエディングプランナーの人が来ていて、早速レストラン内で、打ち合わせをした。

それから、私は髪とメイクをしてもらうために別室に移動。そのレストランは、結婚式もよくやるようで、控え室や、着替えやメイクをする部屋もしっかりと、用意されていた。

「今、控え室のほうで、新郎がメイクとヘアをしてもらっています」
「は？え？新郎もメイク？」

「ええ。とはいえ、そんな厚化粧をするわけじゃないですよ〜」。

眉毛整えたり、ひげを添ったり。髪もしっかりとかつこよく、セツトしたりするんですよ。やっぱり新郎もかつこいいほうがいいですよ?」

「そうですね…」

ああ、でも、そういうの爽太君、嫌いかも…。

「さっき、新郎見ましたけど、イケメンですね…。かつこいいですよ。年下ですか?」

メイクさんは、私と同じか上に見えた。

「はい。7つ下です」

「え? 本当? そっか…。いいですよ、年下も。私も年下いいな。って最近思っちゃって…」

メイクさんは、やたらと爽太君のことを褒め出した。そして、

「新郎のご友人とかで、素敵な人いたら紹介してください…」
とまで、言い出す。

「え…。でも、あまりいないかも。あ…。どうかな? 同僚も若かったかな?」

「新郎の同僚ですか? 今日来ます?」

「はい。全員…。と言っても、3人くらいですけど」

「わ…。楽しみだな…。最後まで私いますから。あ、メイクもちゃんと直しますから、安心しててくださいね」

「はい…」

メイクも髪のセットも終わり、いよいよウエディングドレスに手をとおした。大きな姿見がメイク室にあって、それを見ながらメイクさんが、着せてくれた。

「ブーケは、今、作っている最中ですよ。レストランのテーブルにもちゃんと、一つずつ作っていますから。」

「みなさん、ウエディングプランの会社の方ですか?」

「はい、そうです」

「いいですね、こんなお仕事…」

「ええ、楽しいですよ。でも、休日、祭日に入る仕事ですから、それがちょっとね…。普通のサラリーマンの人やOLの友達と遊べないんですよ」

「あ、そっか…」

ちょうどそこに、ドアをノックして、若い女性がブーケを持って現れた。真っ白なブーケは、長く垂れ下がるようになっていて、可愛くくるくと巻いたりボンも花たちと一緒に、長く垂れ下がっていた。

「ウェディングドレスが、少しシンプルなので、シンプルなアレنجにしようかとも思ったんですけど、でも、手で持つと長く垂れ下がって、可愛いんですよ、これ」

手に持たせてもらい、鏡を見た。本当だ。すごく可愛らしい。

「どうですか？」

「素敵です。ありがとうございます」

「気に入ってもらえて良かったです」

そのあとに、小さめのティアラと、ベールをつけた。

「わ…。綺麗です…」

鏡を見ると、別人だった。まるで、どこかのお姫様かと思うほど…。って自分で言わないよね。そんなこと、普通。

いきなり、ドキドキしてきた。爽太君の反応はどうだろうか。

それよりも、メイクして髪を整え、白のタキシードを着た爽太君は、どんなのかな。

そこに、ドアをノックして、瑞希さんが入ってきた。

「あ……。すごい！綺麗！素敵！」

瑞希さんはそう言うってから、大きなため息をついた。

「ほんと、美しいわ……。くるみさん。爽太にもつたいないわね」

「いえ、そんな…」

「写真撮りましょう。写真！」

瑞希さんはそう言うのと、デジカメをバックから出し、ぱちぱちと何枚も写真を撮りだした。

「爽太、もう見たの？」

「…まだです」

「そう…。ああ、これは大変だね。爽太腰抜かすわ」

「ええ？おおげさです…」

私は、笑ってしまった。

トントン…。ドアのノックと共に、黒のパンツスーツをばちつと着こなした女性が入ってきた。

「おはようございます。新婦のお母様ですか？」

「いいえ、新郎の母です」

「あ、すみません。わたくし今日の指揮を取らせてもらいます、榊原といいます。よろしくお願いします」

「はい。こちらこそ、よろしく願いますね」

「えっと…。新婦の準備は整いましたか？新郎の方は整ったので、控え室に案内しますか？」

「はい…」

「控え室のほうに、お母様も一緒にいらしてください。飲み物をご用意してあります」

「はい、ありがとうございます」

私と瑞希さんはメイク室を出て、榊原さんの案内で控え室の方へ移動した。

ああ、いよいよ爽太君とご対面だ。緊張する。

トントン…。榊原さんがドアをノックして、

「失礼します。新婦と新郎のお母様をお連れしました」

といい、ドアを開け広げて、私たちを通してくれた。後ろからメイ

クさんが私のベールや、ウエディングドレスの裾を、ふまないように注意深く持っていてくれた。

「あー！」

真っ白なタキシードを着て、髪型をセットし、眉毛も整ってめちやくちやかっこのいい爽太君が、椅子から立ち上がってこっちを見ていた。

「どう？ 爽太！ くるみさん。綺麗でしょ？」

と瑞希さんが言う。だが、

「え…？」

と言ったとき、爽太君は黙っていた。

あれ？ なんだか反応が薄い？ 私、あまり似合っていないのかな…。とも思ったが、私はかっこのいい爽太君に見とれちゃって、真っ赤になっただけだと思う。いや、目がハート型をしていたか、うつろになっただけか…。

「くるみさん、すげえ綺麗！ 瑞希、デジカメ！ みんなで写真撮ろう。あ、すみません、写真撮ってもらえますか！」

圭介さんが、瑞希さんからデジカメを受け取ると、すぐに榊原さんにデジカメを渡した。

「はい、じゃあ撮りますよ」

爽太君の横には、圭介さんが、私の横には瑞希さんが並び、写真を撮った。

そのあとは、瑞希さんがデジカメを構え、

「はい、二人並んで！」

と、写真を撮り出した。

「ちよつと」。爽太、どこ見てるの？ カメラ見てよ」

「あ、ごめん…」

瑞希さんは、2、3枚撮ると、

「はい。もういいわよ。存分にくるみさんに見とれても」

と笑って言った。

「え?!」

私が爽太君の方を見ると、爽太君は真っ赤になってこっちを見ていた。それから頭を掻いて、

「ああ。なんか、言葉も出なかった」

と、ぼそってつぶやいた。

「ほら、ほとんどくるみさんの方見てる」

今撮ったデジカメの写真を、瑞希さんが見せてくれた。爽太君が私の横で、私の方を見ている写真ばかりだった。

「だ〜っ！見せなくていいから！」

とデジカメを取り上げ、爽太君は真っ赤になった。

「見とれてたでしょう。くるみさん、美しいものね」

「あ…。うん…」

爽太君は、小さな声でうなづいた。

「でも…」

私が口を開くと、爽太君も瑞希さんも、

「え？」

って、私を見た。

「あの…、爽太君もかつこよくて、私見とれちゃった」

そう言くと爽太君は、顔をくしゃくしゃにして、目を細めて笑って、

「俺はいいから…。くるみさんが主役だから…」

と、照れくさそうに言った。どうも、自分のことを褒められたり、かつこいいと言われるのが、苦手らしい。

榊原さんに言われ、みんなで椅子に腰掛け、お茶をもらった。

「俺、のど渴いてたんだ」

と、爽太君は、ぐびっとお茶を飲み干していた。

「あ、しょっぺ…。何これ？」

「桜茶よ。お祝いの席で飲むお茶」

と瑞希さんが、爽太君にそっと、教えてあげていた。

しばらくすると、春香ちゃんも控え室にやってきて、

「う~~~~わ~~~~！！！！くるみさん、綺麗~~~~！！！！」

と大声で、叫んでいた。

「写真、写真、お母さん撮って！あ、写メも撮って權に送る~~~~！！」

「あんなやつに送ることないだろ」

と、すごく小声で圭介さんが言ったが、春香ちゃんに聞こえていたようで、キツて睨まれていた。

トントン…。控え室をノックして、榊原さんが顔を出した。

「新婦のお母様が、いらっしやいました」

「え?!」

ドキン!!私は、心臓が飛び出るかと思った。

ドアが開き、母が入ってきた。そして、私を見るなり、

「くるみ…!!」

と、半分泣き声をあげた。

「お母さん…」

私はその場に立った。

「……。まあ…。すごく綺麗だわ、くるみ…」

母の目は、真っ赤でうるんでいた。私も、思わず泣きそうになったが、我慢した。

「くるみさんのお母様ですね。はじめまして。私、榎本爽太の母です」

と、瑞希さんが母に向かって、会釈をした。

「あ…。はじめまして。くるみの母です」

「このたびは、遠いところを来て頂いて、ありがとうございます。」

爽太の父です」

圭介さんが、いつもとはうつて変わった態度で、母に挨拶をした。しっかりと丁寧にお辞儀もしていた。

「くるみの母です。よろしくお願いします」

母も、深々と頭を下げた。

「くるみ。再婚した今のだんなを呼んでもいいかしら」

「うん…」

ドキドキした。どんな人なのか…。

「あなた…」

と、母は小声で、後ろを向いて呼んだ。母の後ろから現れたのは、少し髪が薄く、背が低くかつぶくのいい男の人だった。そして、

「はじめまして、くるみさん。松井です」

と、すごく優しい笑顔で右手をさし出してきた。握手をすると手のひらから、優しさが溢れてくるような感じがした。

「はじめまして…。あの…」

「はい？」

「すみません。今までずっと、挨拶も何もしてなくって…」

「いや、それはこちらですよ。一回きちんと会いに行かないと、思っていたところでした」

松井さんは、本当に穏やかな、優しい話し方をする。

「こんな時に、こんなこと言うのもおかしいんですけど…」

「え？」

松井さんは、穏やかな表情だったが、隣で母が何を言い出すのかと、不安げな顔をした。

「母を、よろしくお願いします」

そう言っ、私は深々と頭を下げた。

「くるみさん、お母さんのことは心配しなくても、大丈夫ですよ」

と松井さんはまた、優しく微笑んで言ってくれた。母は、ほっとした表情をしたあとに、目をうるませた。そして、黙って私の手を取り、うんうんとうなづいてから、ようやく声を出した。

「ごめんね。くるみ…。ありがとうね。あなたも、幸せになるのよ…」

「うん。お母さん、私すごく今も、幸せだから」

とにこつと微笑むと、母は爽太君の方を向いて、

「くるみを、よろしくお願いします」

と深々と頭を下げた。

「はい」

爽太君はたった一言だけ、そう言ったが、顔はものすごく真剣な表情をしていた。でも、目は真っ赤で泣くのを我慢しているようにも見えた。

母と、松井さんが控え室を出て行った。瑞希さん、圭介さん、春香ちゃんも、

「そろそろ、みんなが来るころだね。レストランの方に行って、出迎えてくるわね」

と、控え室を出て行った。

控え室に、爽太君と私だけが残った。

「くるみさん、良かったね」

爽太君が、にっこりと微笑んでそう言った。

「え？」

「お母さん、くるみさんの結婚喜んでくれてさ。それに、松井さんって人、優しいそうだったね。きつと、お母さん今、幸せだね」

爽太君のその言葉と、優しい微笑で、私は思わず涙が溢れてきてしまった。

「あ！泣いたら化粧取れちゃうよ。はい、ティッシュ！」
と、テーブルにあった小さなティッシュの箱を、渡してくれた。

「あ、これ、父さんが持ってきた……。泣いたらこれで、鼻をかめてさ。鼻水出るほど、泣かないよって言ったんだけど、くるみさんが泣くかもしれないからって」

「ええ？鼻水？」

「あはは。父さん、変だよな」

爽太君は、いつものように、目を細めて笑った。笑って三日月形になった目を見ると、私も思わず笑ってしまう。いつものことだ。そうやって、私の緊張をほぐしてくれる。

21 父

トントン…。

「失礼します。そろそろみなさん揃いましたので、新郎新婦の入場になります。それで…」

榊原さんが、ドアのところでそう言ってから、

「当初は、お二人での入場の予定だったんですが、どうしても、一緒に新婦と腕を組んで入場したいと、申し出があったもので…」

「え?!」

私と爽太君が、同時に聞き返し、

「父さんか？」

と爽太君は小声で言い、わたしは、ふと松井さんの顔が浮かんでいた。

「新婦のお父様の、小野寺さんなんですけど…。いかがいたします?」

「ええ?お父さんが?」

私は、信じられなくて、驚いてしまった。そして、しばらく声を失った。

「いいんじゃない?くるみさん。俺が、神父さんの前で待つてて、くるみさんがお父さんと一緒に腕組んで、入ってくる…。すごいんじゃないの?それ」

爽太君は、私の耳元で、優しくささやいた。

「うん…」

私は、こくつとうなづいた。

「では、新婦のお父様に了解が出たこと、お話してきますね。それから、まず新郎を迎えにきます。そのあと新婦を…。なので、もうしばらくお待ちくださいね」

ドアを閉め、スタスタと榊原さんが歩いていく音がした。

「び、びっくり。びっくりすることばかり。だって、式にすら出てくれるかどうか、わからない感じだったし」

「それは、くるみさんが、勝手に思い込んだだけでしょ？ね？ご両親はくるみさんの結婚、嬉しいんだよ。じゃなきゃ、そんな申し出ししないよ」

「でも……。でも、もうずっとお父さんには会ってないし……。縁だつて切れたかなって思ってたし……」

「だけど、お父さんは、くるみさんのこと、ずっと娘だと思ってたんじゃないの？」

「……」

私は急に緊張してきた。ドキドキして、息苦しくもなってきた。

お父さんと腕を組む。信じられないことだ。顔がこわばった。

「大丈夫。俺が待つてるから」

爽太君は、私の手を取って、優しく微笑んでそう言ってくれた。

「俺のところに、ただ、くるみさんは来たらいいんだよ。ね？そんなに緊張しないで」

「うん……」

それから、爽太君は、優しく頬にキスをしてくれた。

「唇には、誓いの言葉が済んだらね」

って爽太君は、少しおどけて笑ってみせた。おかげで、緊張が薄れていった。

榊原さんと、もう一人、これまた黒のスーツに身を包んだ、若い男性の人が控え室に来て、男性が、

「神父さんがいらっしゃったので、新郎もいらしてください」

と、爽太君を連れて行った。ドアのところで爽太君は、振り返り、
「じゃ、あとでね」

と私に、軽く手を振った。

「優しそうな、素敵な新郎ですね」

と榊原さんが、そう言った。

「はい…。もったないくらいです」

と言うと、

「え？そんなんですか？ラブラブなんですね。愛しちゃってるんですね」

と、笑って言った。

「けっこう控え室にいたり、打ち合わせの時でわかるんですよ。お二人の関係性」

「え？」

「女性が男性を尻にしいてるかなとか、逆に男性の言いなりなのかとか…。すでに喧嘩するカップルもいたりして」

「そうなんですか？」

「でも、お二人はすごく、信頼しあっているのがわかります。新郎は新婦のことを気遣っているのがわかるし、新婦は新郎を頼りにしているのも、わかります」

「でも、私のほうが年上なんです。7つも…」

「ええ…。だけど、それを感じさせないくらい、新郎はしっかりしていますよね」

「はい…」

私は、榊原さんに爽太君のことを褒められて、すごく嬉しくなつた。やっぱり、初めて会った人にすら、爽太君の素晴らしいところ、わかつちやうんだな…って…。

榊原さんがインカムに手を当て、インカムからの声を注意深く聞いた。

「はい。了解です」

そう答えると、

「新婦の入場です。入り口まで案内します」

と、控え室のドアを開けた。ドアの外には、メイクさんが立っていて、私のお化粧を今一度チェックして、ベールを下げ、ドレスの裾を持って、ゆっくりと後ろからついてきた。榊原さんは、

「こちらです。足元氣をつけてくださいね」

と言って、私を誘導してくれた。

さあ、いよいよだ。榊原さんが先に歩くその先に、父が待っていた。

ドアの前で、黒のスーツに、真っ白なネクタイをして、白髪がだいぶ増え、すっかり老けた父が立っていた。

私が横に行くと、榊原さんが私の手を取り、父の左手に添えた。

「歩調は、ゆっくりとお願いします」

と、榊原さんが父にそうささやいた。

「はい」

父は神妙な顔つきで、返事をしてから、私の方を向き、

「くるみ。結婚おめでとう。いきなりこんな申し出をして、悪かったね」

と言った。

「……」

私は何も言えなかった。父の顔はどこか、緊張もしていたが、でもまなざしは優しくかった。

会場の中から、ピアノの音が流れ出し、

「ドアを開けます」

と榊原さんと、もう一人の男性の人が、一緒にドアを開けた。

会場から、わあっという声と共に、拍手がなった。父は、一歩一歩ゆっくりと歩いていた。私も父の歩幅に合わせて、ゆっくりと歩いた。

「くるみさん、綺麗」

と言う声がした。爽太君の親戚の人たちが、みんなでいつせいに写真を撮っていた。

レストランの一番奥まで進むと、一段高くなっていて、そこに、神父さんが聖書を片手に待っていた。そして、その前に、私のことをじっと見つめている、爽太君がいた。

私は、爽太君だけを見た。優しいまなざしで見ている爽太君の瞳だけを見て、歩いていった。

爽太君の前まで来ると、父は私の手を取り、爽太君の手に私の手を預けた。

「くるみを、よろしく頼むよ」

父は、とても小さな声で、爽太君に言った。

「はい」

爽太君も、ささやくように、でも、真剣な顔で答えた。

神父さんが話を始めた。とても短い話ではあるが、感動的な話で、思わず涙が溢れた。そして、誓いの言葉を神父さんが言った。昨日の夜の爽太君の言葉を、私は思い出していた。

爽太君、私もだよ。私も、どんな爽太君も愛してるよ。心でそうつぶやきながら、神父さんの言葉を聞いていた。

「その健やかなる時も、病める時も、喜びの時も、悲しみの時も、富める時も、貧しい時も、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います」

結婚指輪を交換して、爽太君はそれから、私のパールをあげ、そつと唇に優しくキスをしてくれた。

大粒の涙が、頬を伝った。優しく爽太君は、その涙を手で拭ってくれた。

後ろを振り向くと、いつせいにみんなが、拍手をしてくれた。

「おめでとぅ〜〜〜！」

という大きな声を、圭介さんも、春香ちゃんも、瑞希さんの弟さんも言っていた。

そして、結婚パーティが始まった。

爽太君は、始終笑顔。あの三日月型の目で、にこにこしていた。たまに、「あははは…」って顔をくしゃくしゃにして笑い、すごく嬉しそうにしていた。

私も、嬉しかった。時々、爽太君と目が合つと、優しく微笑む。

それに、体調も気遣ってくれて、時々、

「大丈夫？疲れない？」

と、聞いてきてくれた。

「大丈夫」

と返事をする、また、爽太君は笑う。

私たちのテーブルに、変わりばんこにいろんな人が来て、話をしていく。

「爽太、お前、お嫁さんもらつたんだし、赤ちゃんも生まれるんだし、しっかりしろよ」

瑞希さんの、弟さんがそう言う。

「爽太！お前が何で1番に、お嫁さんもらつてんだよ？それもこんな綺麗な人を〜」

爽太君の、同僚の人が言う。

「爽太！結婚早過ぎないか？俺らは、まだまだ独身を楽しむぞ〜」

爽太君の、同級生が言う。そのたびに、爽太君は、嬉しそうに笑って言葉を返していた。

母が松井さんと来て、

「爽太君、本当にくるみをよろしくね」

とまた、言っていた。爽太君は、はいつて大きくうなづいた。

「くるみ。それにしてもかつこいい人、見つけたわね〜！」

母は、どうやらお酒を飲んで、酔っているようだった。

父はというと、ずっと席にいたが、たまに瑞希さんや、圭介さんが話をしに行っていた。気を使ってくれているのかもしれない。

パーティが終わり、ドアのところで、みんなにお花をあげながら、見送った。

「くるみ、あとで話したいから、ホテルのロビーかラウンジで会えないかしら？」

と、母が言ってきた。

「うん。わかった。お母さんたちの部屋番号わかるから、部屋に電話するね」

「うん。待つてるわね」

母はそう言うと、松井さんとレストランを出て行った。

父は、最後に私と爽太君のところに来た。

「くるみ。綺麗だったよ」

父の目がうるんでいた。

「母さんと父さんは、幸せにはなれなかった。でも、くるみは幸せになるんだ。いいね」

「お父さん、今は？」

「え？」

「今は幸せじゃないの？」

「そうだな…。ごくありふれた生活をしているが、それが幸せなのかもしれないな」

「そう…。良かった。本当だったらもつと早くに、その幸せを手にしてたのかもしれないのに。私がいてお母さんと離婚できなかったんでしょ？」

「いや、そうじゃない。踏み切れなかったただけだ。お前のせいじゃ

ない」

父はそう言うと、顔をしかめた。

「すまなかったな。お前には辛い思いしかさせなかったな。父さんも母さんも自分のことしか、考えられなかった」

「……」

父は、手で目を押さえていた。泣いていたのかもしれない。

「安心してください。くるみさんは幸せにします」

爽太君が、そう言った。

「そうだよ。安心して。もうね、私すごく幸せだから、大丈夫。それにね……」

「……なんだ？くるみ」

父は、目を真っ赤にさせて、私を見た。

「来てくれて嬉しかったよ。来てくれないかと思っていたから。ありがとう」

と、私は父に言った。

父は、ぼろぼろと涙を流した。慌ててハンカチをポケットから出し、顔をごしごしと拭くと、

「くるみこそ、ありがとうな。呼んでくれてありがとう。お前の花嫁姿見れて、一緒に歩いて、嬉しかった。父さんのわがまま聞いてくれて、ありがとうな……」

そう言うと、父は、また顔をごしごしと拭いてから、爽太君の方を見て、

「爽太君……、本当に、くるみのことを頼んだよ……」

と、泣くのをこらえていたのか、言葉につまりながらそう言った。「はい……」

爽太君の手をぎゅって両手で握り、そして父は、爽太君にお辞儀をした。それから私の方を向き、

「じゃ、くるみ。父さんはこのまま帰るよ。悪いがホテルはキャン

セルしてくれ。今の家族が待っているからな」
と言い、父はレストランのドアを開けた。

「あ！それから！」

爽太君は、帰りかけた父に向かって話し出した。

「僕は、本当にくるみさんに会えて幸せだと思ってます。だから……」

父は、振り返り、爽太君の方を見た。

「だから、くるみさんをこの世に誕生させてくれて、育ててくれて、感謝してます」

爽太君は、そう言っていると、ぺこっとお辞儀をした。

「……いや、そうじゃない」

父は、その場でまたハンカチを出して、目を押さえながら、

「くるみは、本当は俺らの希望だった。生まれてきた時には、嬉しくて……。母さんは子供が出来ないと言われてたしな……」

初耳だった。

「でも、いつの間にか、そんなことすら、忘れてしまっていた。くるみがいてくれるだけで、幸せだったのにな。生まれてきてくれたことを感謝しているのは、こっちだよ。娘になってくれて良かったって、今日は心底思ったよ。ありがとうな。くるみ……」

父はそう言っていると、深くお辞儀をして、レストランをあとにした。

私はその場で、泣いてしまった。爽太君は、私を抱きかかえてくれていた。

「ね？言ったでしょ？俺」

「え？」

「くるみさんも天使だった。ご両親にとって、天使だった。それをお父さんは、忘れちゃったただけだ。でもね、思い出したでしょ？」

「うん。嬉しかった。ああ、そうだ。私一つ言い忘れてた。いけない！」

私はダッシュで、ドアから出て、駅のほうに父を追いかけて、走った。

「くるみさん！駄目だよ、走っちゃ！」

後ろから大声で、爽太君が叫んだ。少し前を歩いていた父は、その声で振り返った。私は、父の方に急ぎ足で歩きながら、

「お父さん、あのね！」

と、叫んだ。

「え？なんだい？」

父も大きな声で、聞いてきた。

「私、お父さんのこともう恨んだりしてない。私ずっとずっと、お父さんが好きだったから！」

そう叫ぶと父は、大きくうなづきながら、

「ありがとうな！」

と、叫んで答えた。そして泣きながら手を振って、また駅に向かって歩き出していた。

私に追いついた爽太君は、ぼろぼろ涙を流す私の背中に手を回し、

「さ、戻ろうか？」

と、優しく言った。

レストランに戻ると、爽太君は控え室に行った。私はメイク室に行き、ドレスを脱ぎ、着てきた服に着替え、顔も洗い、簡単にメイクをしておいた。

瑞希さんも横で、着物を脱いで、洋服に着替えていた。

「お疲れ様、くるみさん。疲れなかった？大丈夫？」

「はい。大丈夫です」

「あまり、食べていなかったわよね。ホテルのどつかで、爽太と食べる？それとも、まだ、ここの店いられるのかしら。何か出してもらう？」

「いえ…。さっき母とホテルで会う約束をしたから、その時に何か

つまみます」

「あら、そうなの？良かったわね。ゆっくり話してきたらいいわよ。爽太ならほっておいても大丈夫だから」

「はい…」

瑞希さんは私と母のことを喜んでくれたが、私は複雑だった。いたいなんの話だろうか？

着替えが済み、荷物を持ってメイク室を出ると、爽太君が待っていてくれた。

「荷物持つよ。すぐに車でホテルに向かう？」

「うん。そうしようかな」

「部屋で少しゆっくり休もうか？」

「うん」

爽太君は、優しく私を気遣ってくれた。

「じゃ、爽太、私たちはこのまま、帰るからね。ホテルでゆっくりしていらいっしやい」

「うん。今日はサンキュー」

圭介さん、瑞希さん、春香ちゃんに私と爽太君は手を振って、車に乗った。

「お母さんがね、ホテルで会って話がしたいって…。会ってきてもいい？」

「うん、もちろん。じゃ、その間俺、友達と合流しようかな。これからみんなで、カラオケ行ってくって言ってたんだよね」

「うん。そうして。久しぶりだったんでしょ？」

「うん。高校の時の友達だけださ。みんな変わってない…。って言うても、まだ、そう何年も立ってないか」

「独身を楽しむぞって言ってたね。爽太君はいいの？」

「何が？」

「そっいう、独身時代を楽しむ…」

「あははは。何それ？だいたい独身を楽しむって何？」

「え？だから、友達とどこか行ったり、飲みに行ったり…。好きな子とデートしたり…」

「仕事忙しいし、あんまり遊びには行けないからな。それに、好きな子とデートも何も、一緒に暮らしちゃってるし」

「うん。そうだけど…」

「あれ？何？俺にもっと、遊んで欲しいの？え？女遊びとか？」

「え？ち、違うけど…」

「それ、期待しても無理だから。女遊び、もともとそういうの苦手だし」

「だ、だよな。面倒くさいくらいだもんね」

「うん」

「仕事楽しくて、好きなんだもんね」

「うん」

「あ、子供も好きだっけか」

「うん！」

「じゃ、えっと…」

「独身を楽しむタイプじゃないみたい。俺」

「だ、だよな…」

「わかつたらしく、もうそんなこと言わないでね。結婚して、超ハッピーなんだから俺！」

「うん」

爽太君は運転をしながら、横目でちらっと私を見て、手をつないできた。爽太君は、本当に嬉しそうだった。

22 母

ホテルの部屋は、スイートルームが用意されていた。圭介さんが取ってくれたのだが、部屋に入ると、「ご結婚おめでとうございます」のメッセージカードと、花束と、ワインと、フルーツの盛り合わせが入ったバスケットが置いてあった。

「わ。すげえじゃん。夜、ワイン飲もうか。あ、でも、妊娠中は良くないか。持って帰ろうかな。父さん喜ぶな」

「うん。そうして。私、フルーツ食べるよ」

「今、食べない？お腹空いてるでしょ？俺もあまり食べれなくて、実は腹ペコ」

「うん。食べよう。どれ食べる？」

私たちは、しばらくフルーツの美味しさに酔いしれた。

それから、私は、母の部屋に電話をした。一回のコールですぐさま、母が出た。ずっと待っていたんだろっとな。

ラウンジで会う約束をして、電話を切った。

「じゃ、下まで一緒に行こう」

爽太君は、ラウンジまで見送ってくれて、そこからホテルを出て行った。

ラウンジの奥には、もう母が座って待っていた。松井さんは一緒ではなく、母が一人で座っていた。

「ごめんね、くるみ…。結婚式のあとで、疲れているところを」

「うん、大丈夫…」

「何か食べる？サンドイッチかケーキならあるみたいよ」

「あ、じゃ、サンドイッチ頼みたいな」

母は、ウェイターさん呼んで、サンドイッチと、コーヒーを注文してくれたが、

「あ、私は、オレンジジュースにしてください」と、変更してもらった。

「あら？コーヒーが好きなあなたが、めずらしくない？」

母に言われ、私は正直に全部を話そうと思い、話し始めた。

「お腹に赤ちゃんがいるの。今、6ヶ月。だからコーヒーはやめるの」

「え？でもあまり目立たない」

「うん。まだ、そんなには目立ってないかな」

「そう…。爽太君の子が…。だから結婚を？」

「……。赤ちゃんが出来たから、結婚を決めたのは事実だけど、でも、爽太君の子じゃないの」

「え？」

「前に付き合ってた人の子」

「どういうこと？」

「会社辞めたいって電話したよね？仕事失敗したって」

「うん」

「あのあと、江ノ島で爽太君に出逢った。会社を辞めて、爽太君の家…。カフェをしているんだけど、そこで働かせてもらって…。爽太君が好きになって、付き合いようになってから、妊娠していることに気づいた」

「爽太君は知ってるの？その…。お腹の子が自分の子じゃないって」

「知ってるよ。爽太君の家族もみんな。知ってて、受け入れてくれたの。子供が誰の子かなんて関係ない。その子ごと、まるごと愛してるって…」

「……」

「私、ほんというと、怖かったの。お母さんみたいに、私もこの子のこと憎んだり、生まれてこなかったら良かったのになって、言いそうで……」

「ああ…、私はよく、あなたに言ってたものね」

「そんなこと言って、憎むくらいなら、おろそうかって思ってた」
「……」

「でも、爽太君が、一つの命なんだよって。命はかけがえのないものだった」

「それで？」

「それで、爽太君が結婚しよう、その子の父親になるって。幸せになるのを選択しようって…」

「え？」

「不幸になることを選んだら、その子を憎むことになるかもしれないけど、でも、幸せになることを選べば、みんなで幸せになれるって。この子はね、天使なんだって…。私のことも愛してくれるって

…」

「天使？」

「うん。だから生む決心をしたし、結婚も決めた。それに幸せになることも決めた」

「そう…。素敵な人に出会えたのね」

「うん」

「そう。天使…」

母は、そうぼつりとつぶやくと、涙を流した。

「お母さんね、あなたが生まれた時、すぐくお父さんと喜んだわ」

「お父さんも同じこと言ってた。お母さん、子供が出来ないって言われてたの？」

「そうよ。それで、婦人科に通ってね。しばらく不妊治療をしていたけど、お金もすごかかるし、辛いし、やめたのよ。お父さんと子供がいなくても、二人で幸せになろうって言って、それから数ヶ月で妊娠したの。そりゃ、嬉しかったわね」

「なのに…、なんで？どこから歯車合わなくなったの？」

「あなたが、小学校入る前にね、喘息になって毎日大変な時があった。…。そのころお父さんの仕事は忙しくて、帰ってこない日もあって…。入院することもあった。夜中に発作が起きて、病院にお母さんが連れて行って。不安で、怖くて、毎日寝れなかった」

「知らなかった。喘息の気があったのは、知ってたけど、でも小学校上がってから発作も出なかったし」

「そうね。水泳初めて、ずいぶん健康になったわね」

「じゃ、そのころにはもう…」

「お父さんが家に帰るたびに、責めたわ。お母さん、一人でどんなに大変かを。でも、お父さんは自分だって仕事でどんなに大変か、お前にわかるかって…。帰ってこないのは浮気じゃないかって、探偵を雇ったこともある。それがばれて、お父さんものすごく怒ってね」

「え？」

「そのころ、お父さんは浮気なんてしてなかった。本当に仕事が大変だっただけだった。でも、お母さんが疑ってから、そんなに信じられないなら、浮気してやるよって…。そのころからかな。仕事なくても家に帰らない日もあって」

「でも、小学校の頃は、一緒に出かけたり…」

「あなたのためよ。二人で、あなたの前では仲良く見せてた。必死でね」

「……」

「それも限界が来たのね。あなたが、中学生のころ、喧嘩したの見たでしょう？お父さんはくるみの前でやめろって言った。でも、お母さんには限界が来てた。それから、何かっていうと、あなたを責めた…」

母は、ずっとずっと、苦しんでいたのか。原因は私の喘息じゃないか。

「お母さんね、あなたが生まれてこなければ良かったのって言うては、後悔した。自分を責めて責めて…。あなたが喘息で苦しんでいるのを見ても、自分を責めた。自分のせいだって思ってた。そう思えば思うほど、苦しくてね」

「お母さんのせいじゃないのに」

「そうね。でも、弱い体に産んでしまったって責めてた…」

「……」

知らなかった。

「お母さんもね、子供のころ言われてた。お前がいなかったらって…」

「え？おばあちゃんにとってこと？」

「そう。お母さんのお父さんね、あなたにとっておじいちゃん、あなたが生まれる前に死んだって言ってたけど、嘘なの。本当は、浮気して出て行ったのよ。おばあちゃんとお母さんと、小さな妹を残してね」

「……」

「貧しかった。妹は病弱だったし。おばあちゃんはなぜか、妹のことは可愛がってた。妹の世話は全部お母さんがしてて、具合が悪くなると責められて…。なんの役にも立たないって怒られた」

「……」

おばあちゃんは、まだ私が小学校入る前に一回だけ、会ったことがある。でも、もう病気で長くないって時だった。だから、あまりおばあちゃんのことは覚えてないし、知らなかった。

「妹は、9歳の時に風邪をこじらせて、肺炎で死んだの。お母さんはね、その時16歳で、高校行きながらバイトもしてた。おばあちゃんもお母さんも家にいなくて、その間に死んじゃったの…。おばあちゃんは、半狂乱になってお母さんを責めた。あんたが死ねばよ

かったって…。妹の変わりにあんたが死ねばよかったって…。何回も言われた」

「……」

「お母さんね、そう言われるたびに辛くて、絶対に自分の子にはそんなこと言わないって思ってたの。それなのに、言ってるのよ。まったく同じこと。あんたなんか生まれなければ…。そう言ってるから、おばあちゃんの言葉を思い出し、なんで同じことを言って、くるみを苦しませるのかって思ってた」

「同じ思いをして育ってたの？」

「どんなに自分がそう言われて、傷ついていたか、どんなに苦しかったか、誰より自分が一番知っていたのに…。あなたにそう言ってる時、まるでおばあちゃん为载体しているかと思っただこともあるわ」

「……」

「お母さんは、自分が嫌いだね。自分が怖くてね。何度ももう言うのをやめようって思っただかしれない。それに、おばあちゃんのようににはならないって、いくらお父さんが浮気しても、離婚だけはいつもありだった。あなたに貧しい暮らしをさせたくなかったし、また喘息になるのも怖かった。小さな病弱な妹の二の舞だけは避けなかった」

母はそう言くと、涙をこぼした。はらはらと流れるその涙は、頬をつたいテーブルに落ちていった。

それを拭おうともせず、母は、話を続けた。

「お母さん、あなたを不幸にしたいくないって思いながら、一番あなたを苦しめた。あなたを守りたいって思いながらも、一番傷付けた。ごめんなさい」

「……」

母から、ごめんなさいってそんな言葉を聞くと、思ってもみな

かった。

「今は？今は幸せなの？お母さん…」

「今は幸せよ。やっと掴めたの。だから、あなたから電話があった時、壊したくないって思っで、あんな酷いことを言っだ…。あれから、後悔した。何度も電話しようと思っだ。松井さんにその話をしたら、3人で一緒に暮らしたらいいって言っでくれた。今度こそ、あなたと松井さんと幸せになれるって思っだ矢先に、招待状が来たの」

「……」

私は、驚いた。私と一緒に暮らすことを考えてくれたのか…。
「びっくりしたわ。いきなり結婚だもの。でも松井さんが良かったじゃないかって。せつかく招待状が来たのだから、喜んで祝福してこようって」

「いい人と、お母さんも出逢えたんだね」

「あなたもね。爽太君も、爽太君の家族もみんな、優しい人なのね」
「うん。ものすごくあつたかい人たちだよ」

私はそれから、瑞希さんと圭介さんの共に死を乗り越えた話や、爽太君がどんなに愛されて育ったか、れいんどろっぷすの話、春香ちゃんの話、そして何よりも、爽太君がどんなに温かく、優しく、素敵な男性なのかを話した。

「愛してるのね、爽太君を。それに、愛されてるのね」

「うん」

「それが聞けて、本当に良かった」

「あ、爽太君がね、お母さんやお父さんに会っで、私を生んでくれたことに感謝したいって言っだ」

「え？」

「だから、会いたいから、招待状を送ろうっで…。私二人とも来て

くれないと思つて、送るのやめようとしたの。そしたら、もしかしたらご両親は出席したいつて思うかもしれないから、送るだけ送るうって…」

「爽太君がそう、言ってくれたの？」

「うん。それでもし、来てくれなかつたら、それが悲しかつたら、一緒に泣けばいいつて。一緒に悲しいこと、辛いことは、乗り越えりゃいいんだからって…。くるみさん一人じゃない。いつも俺がついているんだよつて言ってくれた」

「そう…」

母は、また涙を流した。そして、ハンカチでそれを拭き、

「いい人に出逢えたのね…」

とまた、つぶやいた。

「だから安心して。お母さんは、お母さんの幸せだけ思えばいいんだから」

「え？」

「もう、私のことで苦しまなくてもいい。私も過去のことは忘れる。ううん、忘れるつていうのは、少し違うかな。私ね、爽太君といで、気がついたの」

「何を…？」

「私は、お父さんのことも、お母さんのことも大好きだったつて」

「……？」

母は目を丸くした。

「だから、愛されたいつて思つてた。でもね、爽太君が、愛されたいつて思わなくてもいいじゃないかって。愛することが、幸せなんじゃないかって…」

「……」

「それを聞いたら、ああ、今でも私は二人のことが、大好きだった

んだって思ってた…。恨んで、憎んで、嫌ってた。でも、心の奥では好きだった。そう気がいたら、幸せな気持ちになれた。だって、私、両親には憎しみの思いしかないって思ってたんだもん。それがちゃんと好きって感情があったことが、なんだか、嬉しくって…」

「くるみ。お母さんは、こんな酷い母親なのよ。あなたに何もしてあげられなかったのよ。憎んでも、恨んでも仕方がないような母親なのよ…」

「でも、私を産んでくれたよ。育ててくれたよ」

「大好きになつてもらうような、そんな資格ない。お母さんはね…」
「私を妊娠した時、喜んだ。私が生まれて嬉しかった…でしょ？」

「そうよ。あのころ本当に」

「じゃあ、いいよ。それ聞いて、嬉しかったよ」

「え？」

「生まれてきて良かったんだって思えたよ」

「くるみ…」

「あ。お母さん、ミスチルのCD聞いてたよね。くるみが入ってるやつ…。ミスチルの歌が好きで、私の名前くるみになったんでしょ？」

「違うわよ。くるみはね、硬くってそうそう割れないから、頑丈で健康な子になれるんじゃないかって、そう思ってたよ。ミスチルの「くるみ」の方があなたが生まれてから、できた曲よ」

「え？ そうなの？」

「お父さんと、ミスチルのくるみを聞いてね、同じ名前だから、愛着のわく歌だねってよく、聞いていただけよ」

「そっか、なんだ…」

「でも、寂しい曲だから。なんだか、くるみも寂しい人生を送ることになるんじゃないかって、聞いてて思ってたわ」

「頑丈で…か。私ずっとくるみの殻のように、頑丈で壊れそうもない殻くっつけて生きてきたな」

「え？」

「爽太君に出逢えなかったら、その殻、脱げなかった」

「そう…」

サンドイッチを食べ終え、ジュースも飲み終わり、私は爽太君が気になりだした。

「私、そろそろ戻るね…」

「くるみ…」

母は、私の手の上にそつと手をのせて、

「生まれてきてくれて、ありがとうね。大好きだって言ってくれて、本当に嬉しかった」

と、涙ぐみながら言った。

「うん…」

私は、微笑んで席を立ち、その場を去った。

部屋に戻ると、爽太君はまだ、帰って来てなかった。友達とのカラオケを、楽しんでいる最中かもしれない。

私は疲れたので、靴を脱ぎ、ごろんとベッドに横になった。そしてお腹に手を当てて、赤ちゃんに話しかけた。

「良かったね、あなたのおばあちゃんにもおじいちゃんにも会えたね。声聞けたね。きつと、生まれてからも会えるよ」

しばらくは爽太君に、母との話を聞いて欲しくて頑張って起きていたが、そのうちに私は眠ってしまったようだ。

23 輪廻

夢を見ていた。夢の中で私は会社にいた。斜め前には稔が座り、私の横で梨香が笑ってて、稔と梨香と私の3人で楽しく話をしていた。

ふと、私は誰かが気になった。

「あれ？そういえば、どこにいったんだろう」

席を立って、廊下に出ると、廊下はなぜか片瀬江ノ島駅のホームになっていた。私は改札を抜け、海へと歩いた。なぜか、絶望感でいっぱいになっていて、重い足を引きずっていた。

さつきまで、3人で楽しく会話をしていたのに、稔のことも梨香のことも、憎く思っていた。

そして、海に着くと、波が荒れてて雨が降りだし、海の水は真っ暗だった。私は、海に向かって歩き出した。足がすごく重たくて、思うように歩けない。

いきなり誰かが私の腕を掴んだ。

「くるみさん……」

私のことを呼ぶ声がする。

「くるみさん……」

だんだんと声が、近くに聞こえてきた。振り返ると、優しい笑顔の爽太君がいた。

「くるみさん」

優しく私のことを呼ぶ……。ああ、そうだった。私には爽太君がいる。私は爽太君に、思い切り抱きついた。

「ぐえ！苦しい！」

爽太君が、優しく微笑んでいるのに、妙な声をあげる。

「くるみさん！起きて！寝ぼけてないですよ。苦しいって……」

「え?!」

私が首に両手で思い切り抱きついてるので、苦しがつている爽太君の顔が、いきなり視界に入ってきた。

「あ、あれ...?」

「もう、何寝ぼけてるの。だいたい夏とはいえ、布団にもはいらず寝てたら風邪引くよ」

「あ...」

ベッドに横になったまま、寝ていたんだ、私。

「俺の夢見てた? いきなり俺の名前呼んで、抱きついて来るんだもん。びつくりしたよ」

「ごめん...」

「いや...、いいけど。俺の夢見てたんなら...」

爽太君は、照れくさそうに頭をぼりつて掻いてから、

「夕飯どうする? お腹空いてる?」

と聞いてきた。

「さつき、サンドイッチ食べたからまだ...。爽太君は?」

「俺もカラオケで、ちよつと食べてきちゃった」

「今何時?」

「6時ちよい過ぎくらい」

「え? じゃ1時間くらい寝てたのかな。私」

「もう、気をつけてよ。お腹冷やしたりしないようにね。ここ冷房けっこうきいてるよ」

「うん。ごめん...」

私はお腹をさすって、お腹の子に謝った。

「じゃ、7時くらいにルームサービス頼まない?」

「ルームサービス?」

「俺、一回してみたかったんだよね」

「うん、いいよ」

「それまでは…、あ、汗かいたし、カラオケボックス煙草臭かったし、俺シャワー浴びてくる」

「うん」

バスルームに爽太君は、入っていった。

ベッドから降りて、私は喉が渴いていたので、お茶を淹れた。冷房で部屋が乾燥してるんだな。

お茶を淹れてると、ふとクローゼットの横の大きな姿見が目に入った。

「うわ！」

綺麗にセットしてあった髪が、寝たからばさばさになっていた。

「うゝゝわゝゝゝ。このばさばさ頭、見られちゃったのかゝゝ」

私は、しばらく落ち込んでしまった。

椅子に腰掛け、お茶をすすって、それから私も、シャワーを浴びる用意をした。

テーブルに、爽太君のためにお茶を用意して、爽太君がシャワーから出てくると、すぐに私もバスルームに入った。

「お茶、爽太君の淹れてあるからね」

と、ドアを閉める前にそう言うのと、

「あ、サンキュ」

と、爽太君は、髪をバスタオルで拭きながら言った。

もう一回、バスルームで鏡を見た。涙で化粧もまったく取れてるし、目は腫れてるし…。すごいブス顔だ。

「あゝゝゝ、こんな顔、見られたゝゝ。それも寝てた時なんて、どんな顔してたんだろう…」

少し情けなくなってきた。

シャワーを浴び、髪を洗い、バスルームの中で髪を乾かし始めた。

「くるみさん、開けてもいい？」

爽太君が、バスルームの外から聞いてきた。
「うん」

バスルームのドアを開けると、

「髪、乾かすよ。部屋にこない？」

と、爽太君が聞いてきた。

「え？」

「ここで立って乾かすの、疲れるでしょ？」

ああ、体を気遣ってくれているのか…。優しいな。と感激しながら、ドライヤーを持って、部屋に移動した。

「椅子に座ってて。俺が乾かすから」

爽太君は、私を椅子に座らせ、私の髪を乾かし始めた。

「母さん、今は父さんの髪を乾かしてあげてるけど、俺がお腹にいたころはよく、父さんに乾かしてもらってたんだって」

「え…、そうなんだ」

「足の爪も切ってもらってたって。お腹大きくなると自分の足の爪、見えないんだってさ」

「え？ほんと？」

「うん。だから、俺もくるみさんの足の爪、自分で切れなくなったら、切ってあげるね」

「うん…」

なんだか、私は恥ずかしくなった。爽太君が優しくすぎて、顔があげられなかった。

しばらく二人で黙っていた。だが、爽太君が聞いてきた。

「お母さんと、どうだった？たくさん話できた？」

「うん」

「良かったね」

「うん…」

爽太君は、優しく私の髪を乾かしてくれていた。髪が乾き、爽太君の髪が濡れていたので、場所を交代して、私が爽太君の髪を乾かした。

「立ってたら、疲れない？」

爽太君が聞いてきた。

「大丈夫」

爽太君のさらさらの真つ黒な綺麗な髪に、触れられるのが嬉しかった。髪が乾いてくると、爽太君のつむじが見えた。つむじは2個あつて、逆の渦を巻いていた。

そのつむじの真ん中を、指で押さえてみた。

「え？何してるの？」

「つむじ、可愛いなつて思つて…」

「つむじ？ああ。俺2個あるでしょ？それも反対の方を向いてるでしょ？」

「うん」

「それで、髪型、決まらないこと多いんだよね…」

「え？でも、可愛いよ。」

そう言つと爽太君は、くるつとこっちを向いて、私の手を掴んだ。
「もう…。可愛いつてのは無しね」

「なんで？あ、じゃ、かつこいい方がいい？」

「それも無し」

「なんで？爽太君は、自分のこと褒められるの苦手だよね」

「う〜ん、だって恥ずかしいじゃん」

「面白い〜。そんなところも可愛いよね」

「だ〜か〜ら」

「あ、ごめんごめん」

「もう、乾いたからいいよ。そろそろルームサービス頼もう、お腹

空いてきた」

「うん」

爽太君は、電話をしてルームサービスを頼んだ。メインデッシュ、サラダ、そしてデザート。しばらくして、それらが運ばれてきて、二人でジュースで乾杯をして、食べ始めた。

食べている時は、爽太君は、美味しそうにもくもくと食べる。私も一緒に美味しさを味わって食べた。

デザートが運ばれてきて、それも食べ終わり、片付けも終わると、爽太君は、

「あゝ腹いっぱい！」

と、ベッドにごろんと横になった。それからベッドに、座りなおし、「お母さんと、どんな話したの？」と聞いてきた。

「あのね…」

私は爽太君の隣に座り、母から聞いたことを全部話した。爽太君は、しばらく黙って、それから私を見て、

「なんか、俺の父さんも、おばあちゃんと似てたんだよね」と話し出した。

「え？」

「性格っていうより、なんだろうね…。癖かな？」

「癖？」

「多分、父さん、おばあちゃん、あ、つまり父さんのお母さん見て、きつと同じようになっただんだと思うけど」

「うん…？」

「辛くても悲しくても、明るくふるまって、絶対、周りに知られないようにする癖」

「え？でも、圭介さんすごく、感情出しているような…」

「母さんと知り合ってからね」

「そうなんだ」

「おばあちゃんも、そういうところあったって。父さんが癌だったって悲しくても、絶対父さんの前で、泣かなかったって。それが返って辛かったらしいけど、父さんには…」

「……。おばあさんは、今でも？」

「ううん、今は涙もろいよ。すぐ泣く。おばあちゃんが言ってた。母さんが、おばあちゃんに言っただって。ありのままを見せた方が、父さんは辛い思いをしないって…。泣きたかったら泣く、辛かったら辛いつて言う。そうしたら、父さんもありのままの自分を出してくれるって。そういうふうにもう母さんから聞いてから、おばあちゃんも、素のままにいるようになったって言ってた」

「……」

「父さんのがん細胞消えたときには、父さん、おばあちゃんと抱き合って、泣いたらしいよ」

「そうだったんだ…」

「あれ？話しずれちゃったね。えっと…。あ、そうそう。何ていうの？例えば、子供のころ、親に虐待されたとするじゃん。自分が親になったら絶対にしないって、そう思っても同じこととしてたり、そういうのって、なぜだかしたりするんだよね。いつの間にか、親のこういうところが嫌だったのに、そっくりになってる…。とか」

「そう、それが怖くて私、子ども産むの躊躇した」

「うん、親から子へと、遺伝って訳じゃなくて、何ていうのかな受け継がれちゃう、輪廻？」

「輪廻って、死んだらまた、生まれ変わる…」

「そうそう。で、また同じこと繰り返してたり、逆に、過去生で叶えられなかったことを、今生でとか、過去生でした罪を、その次に生まれる時償うとか。なんかそんな感じでしょ？輪廻」

「うん」

「それとは別に、親から子、先祖から代々、ぐるぐる回ってる輪廻ってあるんじゃないかなって、話聞いてて思ったんだ」

「……」

「くるみさんのお母さんは、親に責められ生きてきた。辛い思いをして、お母さんは生きてきて、自分の子にはそんな思いはさせたくないと思ってた。でも、同じことをしてしまった。まったく親と同じことを言って、子供を苦しませる。そして苦しんで生きてきたくるみさんも、子供に同じことをしてしまうんじゃないかって、思ってた」

「うん」

「もしかすると、くるみさんのお母さんのお母さん、つまりおばあちゃんも、同じように責められて生きてきたのかもしれないよね」

「…うん」

「多分、愛されて、大事に育てられてたら、子供ものをそんなに憎むようなことはしないと思う」

「うん…」

「もしかすると、くるみさんのおばあちゃんのそのまた、親も。そして、そのまた親も…」

「先祖代々？」

「そう。同じように苦しんでいたかもね」

「じゃ、それが子供にも、そのまた子供にも。子孫ずっと…？」

「うん。どこかでこの輪廻を断ち切らない限り、続いていくかもね。苦しみ背負ったまま」

「どこで?!どこで切ったらいいの?」

「くるみさんじゃないの?それをするのは」

「私?」

「うん。っていつか、もうしたでしょ」

「え？」

「くるみさん、お母さんのこと許したじゃない。それに、愛してるし」

「…？」

「親を憎むのではなくて、愛してるでしょ？生まれて良かったって思ったでしょ？お母さんだって、生んで良かったって思ったし…。これで、ずっと先祖代々から続いてた苦しみは、消えたんじゃない？」

「そうなのかな…」

「そうだよ。そして、くるみさんはもう、自分の子を憎むのではなくて、愛して育てる。そうしたら、くるみさんの子は、自分の子と同じように慈しんで育てるよ。そうしたら、その子もまた…。そうやって、この先は、ずっと自分の子を愛して育てるようになる」

「憎んだり、責めたりしないで？」

「そ…」

「……」

「そうするとね、愛されて育つと、自分のことを愛するようになる。自分を嫌ったり、責めたりしない」

「うん」

「誰かと出会ったら、その人のことも愛して、大事にする」

「うん。爽太君みたいにね」

「そうすると、どうなると思う？」

「え？」

「みんなみんなが、自分も相手も、子供も、みんなみんなを愛するようになるんだよ」

「……。それ、すごいね…」

「うん、すごいでしょ？」

「この子から、ずっと愛が続いていくんだ」

「愛の輪廻。あ、なんか変な言い方だね…」

「……」

愛の…、輪廻…。

「あ、でもね。この子からだけじゃない。先祖の方もだよ」

「え？」

「お母さんはきつと、くるみさんが大好きだって言ったことで、自分を責めた気持ちが癒されたんじゃないかな。そして、自分を嫌い、責めてた心から開放される。そうしたら、もしかして、自分の親のことも許せるかもしれない。くるみさんが、お母さんを許したように。生まれてよかった。生んでくれて嬉しいって感謝したら、くるみさんのおばあちゃんも癒される」

「もう、死んでるよ…？」

「死んでも…。魂って生き続けてるような気がするんだよね、俺」

「うん…。そうかも」

「それで、おばあちゃんの魂が癒されたら、おばあちゃんの親も、そのまた親も、そのまた親も…。で、先祖代々癒される」

「すごい…」

「ね。すごいね」

「爽太君がすごい」

「え？なんで俺？」

「そんな考えができるのが、すごい」

「でも、それを使ったのは、くるみさんだよ？くるみさんがすごいんだよ？わかってる？」

「私？私は何も…」

「そんなことないよ。俺、まじですごいって思うよ。ご両親のことを大好きだって、ちゃんと言えたくるみさん。俺なんか恥ずかしく

て、言ったことないよ。あ、小学校までは言ってたかな」

「言わないでも、通じてるじゃない。私は、言わなくちゃ、親にわかってもらえなかったから」

「……。そっか……。言えて良かったね、くるみさん」

「うん。爽太君のおかげだよ」

「え？俺？何もしてないじゃん」

「そんなことない。爽太君に出逢えたからだよ」

「だから、決まってたんだって、必然だったの。多分さ、苦しみの輪廻を断ち切るためだったんだよ。そんな役、かつて出たんだよ。くるみさんは」

「え？」

「あ、また俺、変なこと言ってる……。でも、なんかそんな気がした」

「じゃ、爽太君だってそうだよ。私と出逢って、愛を教えてくれた。そんな役をかつて出てくれた。だからやっぱり、ありがとうなの」

「うーん、そっか……」

「うん」

ぎゅって、私は爽太君に抱きついた。

「あ、やばいって」

「え？何が？」

「いや……。このシチュエーションで抱きしめられたら、その……」

「だ。大丈夫なのかな？安定期なら大丈夫って、妊娠の本に書いてはあったけど……。どうなのかな？」

「大丈夫だと思う……」

「ほんと？お腹痛いとか、今ない？」

「うん……」

「じゃ、もし痛くなったりしたら、言ってね」

「うん」

爽太君は、優しくキスをしてきた。それから、部屋の明かりを暗くした。

もう、籍は入れてあつて、苗字も変わった。でも、やっぱり結婚式を挙げると、結婚したんだって実感が湧く。

爽太君に、優しく何度もキスをされ、あまりの幸せに私は涙が溢れた。思わず爽太君を、ぎゅって抱きしめていた。

爽太君が言うように、ずっとずっと、愛が子供たちに引き継がれていったらどんなに素敵かな。

子供だけじゃない。親にも、そのまた親にも。そして、周りの人までも愛で、包み込むことが出来たらこの世界は、愛でいっぱいになるね。

世界中が、爽太君の優しさやあたたかいぬくもりのように、愛で満ち溢れているところを想像した。

みんなが、優しいあたたかい笑顔でいる。みんなが、誰のことも憎まず、自分のことも責めない世界。

そんな世界が本当に、創られるんじゃないか……。爽太君の優しさに包まれていると、本気で思えてくる。

爽太君は、私のお腹に手を当てて、そつとつぶやいた。

「くるみさんも、君も、まるごとひつくるめて、愛してるよ……」

そう言つて、お腹にキスをした。優しく、優しく……。

12月24日、夜、赤ちゃんが生まれた。

「すげえ、聖なる夜に生まれちゃったよ」

すぐ横で、ずっと私を励まし、支えてくれてた爽太君は、生まれた瞬間にそう言った。

それから、

「くるみさん、よく頑張ったね」

って言って、そつと私のおでこにキスをした。

赤ちゃんのへその緒を爽太君が切り、赤ちゃんが産湯につかると、一番初めに爽太君が抱っこした。

「すごい可愛い〜〜〜！」

爽太君は、顔をくしゃくしゃにして、目を三日月型にして喜んだ。

「あ、名前、名前！どうする？男の子だよ」

「えっとね…。予定日クリスマス近い日だったし、聖って書いて、ひじりって読むのは、どうかなって思ってたの」

私が言つと、爽太君は、

「榎本聖？あ、なんかカッコいいじゃん」

って言つて、笑った。

「女の子でも、男の子でも、大丈夫かなって…」

「ああ、そうだね。なんだ〜、考えてたの？生まれてきてから、ぴんとくる名前にしようって言うってたのに」

「ごめん…。でも、まさかイブに生まれるとは思ってもみなくて、

イブだったら、まさにぴったりの名前でしょ？」

「うん！決めた！聖にしよう」

そう言つと爽太君は、愛しそうに赤ちゃんに向かって、

「聖…」

って呼んだ。

看護師さんが先に聖を、新生児室に連れて行った。そのあと、車椅子に乗り私は、病室に移動した。爽太君は、ずっとそばにいてくれた。

分娩室を出ると、母と瑞希さんがいた。

「赤ちゃん見たわよ。可愛かった。くるみさんにそっくりね」
と、瑞希さんが言った。

「よく頑張ったわね、くるみ」

お母さんが私の手を、握ってくれた。
「うん、ありがとう」

みんなで病室に行き、しばらく話をして、それから瑞希さんとお母さんは、

「新生児室にもういるかも。見てくるわ」と、嬉しそうに病室を出て行った。

「俺、父さんと春香に、生まれたこと連絡してくるね。多分、母さん舞い上がって、連絡してないと思うから」

爽太君は、そう言うのと、携帯を持って病室を出た。

翌日には、圭介さんも、春香ちゃんも、おじいちゃん、おばあちゃん、みんな総出でお見舞いに来て、かわりばんこに聖を見に行った。病室に戻ると、可愛い可愛いと、みんな目が垂れ下がっていた。ああ、聖は、みんなに愛されてるね……。私もなんだか嬉しくて、胸がいっぱいになった。そして産んで良かったと、心から思った。

私も、爽太君と一緒に聖を見に行った。小さなベッドにすやすや寝ている聖は、本当に可愛かった。

「くるみさん、ほんと赤ちゃんって天使そのものだね」

「うん。みんなね……」

聖の横で寝てる赤ちゃんも、そのまた横で寝てる赤ちゃんも、みんな可愛かった。

「愛を運んできてるんだな〜」

ぼそって私がつぶやくと、爽太君も、

「そうだね」

って、聖を愛しそうに見ながら、つぶやいた。

エピローグ

これから、聖の人生が始まるんだね。

それはきつと、愛でいっぱい的人生になるよ。保障する。だって、もうたくさんの人から愛されてて、生まれたことを祝福されてるもの。

爽太君が、聖を見ながらぽつりと言った。

「誕生日と、クリスマスのプレゼントは、分けてあげるから安心しろよな？あ、そっか。クリスマスはサンタさんがくれるから、親からは誕生日だけでいいのか…」

と、笑ってから、私にウイंकをした。

生まれてきてくれてありがとう。

生まれてきてくれてありがとう。

生まれてきてくれてありがとう…。

私はこれから先、何度でも聖に言うだろう。私が生きている間中、言い続けるだろう。

そして、爽太君にも、何度も何度も言うよ。

大好き、愛してる、あなたに会って良かった。本当に天使だった。

爽太君も、そして、聖も。

そして、私も…。

みんなみんなみんなが、愛を運んでいる天使なんだね。

り
}

ゝ
お
わ

エピソード（後書き）

最後まで、読んでいただき、ありがとうございました。
感想、お待ちしております。

次回は、聖の恋のお話を、書きたいと思います。
また、読んでくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1838i/>

君は天使

2011年7月8日03時29分発行